赤磐市文化財調査報告　第５集

備前国分寺跡２

―第４～６次調査―

２０１１年

岡山県赤磐市教育委員会

1　T32　僧房瓦積基壇　外装Ａ（南西から）

2　T20・23　北門・北面築地周辺（南東から）

序

本書は、岡山県赤磐市馬屋に所在する史跡備前国分寺跡の保存整備のための資料収集を目的として実施した、平成18～20年度の３ヵ年の発掘調査成果を取りまとめたものです。本事業の発掘調査の報告書としては、第２冊目になります。

先に報告書を刊行した平成15～17年度の３ヵ年の調査成果では、金堂や塔などの諸堂宇の規模と構造や寺域の広がりが確認され、この国分寺が「国の華」と称されたにふさわしい内容であったことが明らかになりました。

このたびの調査の成果としては、主要堂宇の周辺や建物の構造などを明らかにすることができ、僧房の規模や基壇外装および回廊の規模について新たな知見が得られました。また、寺域北辺については北面築地と北門の状況を確認することができました。また、僧房北方や回廊外で青銅製品あるいは鉄製品の製作が行われていたこともわかりました。

なお、赤磐市ではこうした発掘調査成果の整理を行って史跡整備の基本設計をまとめ、平成19年度には第Ⅰ期整備（塔地区および中心伽藍地区北部）の実施設計を策定しました。そして、平成21年度からはこの実施設計をもとに塔地区の遺構整備に着手し、平成22年度に同区の整備を完了しております。

これらの成果を収めた本書が文化財の保護・保存のために活用され、また地域の歴史を学ぶ上で広く役立つならば幸いに存じます。

発掘調査ならびに報告書の作成にあたりましては、第二次山陽遺跡整備委員会の先生方、文化庁をはじめ、関係各位ならびに地元の方から多大なご支援とご協力を賜りました。記して厚くお礼を申し上げます。

平成23年２月

赤磐市教育委員会
教育長　土井原　敏郎

例言

1　本書は史跡整備事業に伴う史跡備前国分寺跡の第４～６次調査報告書である。

2　備前国分寺跡は岡山県赤磐市馬屋1048他に所在する。

3　調査は文化庁から国庫補助金（国宝重要文化財等保存整備費補助金）を得て、赤磐市教育委員会が実施した。

4　調査は平成18～20年度の３ヵ年にわたって実施した。
第４次調査は平成18年６月13日から平成18年９月８日まで実施し、288.88㎡を調査した。
第５次調査は平成19年９月５日から平成19年11月５日まで実施し、147.36㎡を調査した。
第６次調査は平成20年９月22日から平成20年12月11日まで実施し、167㎡を調査した。
第１～３次調査の成果については、『備前国分寺跡』（2009・赤磐市文化財調査報告第３集）を参照いただきたい。

5　第４次調査を宇垣匡雅・大熊美穂・有賀祐史、第５次調査を宇垣・大熊・有賀、第６次調査を澤山孝之・有賀・畑地ひとみが担当した。

6　調査にあたっては第二次山陽遺跡整備委員会をはじめ文化庁文化財部記念物課・岡山県教育庁文化財課からご指導およびご助言を得た。

7　本書の執筆は、第１章、第３章第４節３・４・６項、第５章第１節を澤山が、第３章第１～３節、第４章、第５章第２～４節を有賀が、第２章、第３章第４節第１・２・５項を畑地が担当した。
一部を除く遺物の実測は、石田知子が行った。

8　本報告書に掲載した出土遺物・実測図・写真等は赤磐市教育委員会（岡山県赤磐市下市337）に保管している。

凡例

1　本書に用いた高度値は海抜高であり、方位は座標北（平面直角座標第Ⅴ系）である。調査地付近における磁北は西偏７°０’を測る。図５の座標値、報告書抄録に記載した経緯度は世界測地系（平面直角座標第Ⅴ系）に準拠している。その他の図の座標値は、昭和49年度に任意に設定した寺域座標に準拠している。（第３章第１節参照）

2　遺構および遺物の縮尺は各図面に記しているが、基本的には次のとおり統一している。
遺構：1/80　断面：1/80　礎石・柱穴・炉等：1/20・1/30　瓦：1/4　土器：1/3
土製品：1/2　鉄製品：1/3・1/4　銅製品：1/1・1/2　石器・石製品：1/2・1/3

3　掲載した土器のうち中軸線の両側に白抜きのあるものは、小片のため径が不確実なものである。

4　註は、各節ごとにそれぞれの末尾にまとめている。

5　土層断面図の土色は、各調査員の記述に従っている。

6　図２は国土地理院発行の1/50,000地形図「和気」「岡山北部」を複製・加筆したものである。

7　時代・時期区分は一般的な政治史区分に準拠し、文化史区分・世紀を併用している。

8　第１～３次調査成果をまとめた『備前国分寺跡』（2009・赤磐市文化財調査報告第３集）の記載を引用する場合、『備国１』という略称で表記している。また、第１～３次調査の調査区・遺構名称を記述する場合は、『備国１』に掲載された調査区･遺構番号をそのまま用い、その前に「備国１」と表記している。

9　遺構名称に関して､礎石が抜き取られ､根石のみが残る状況の場合でも便宜上礎石と記載している。

10　本文中に使用している建物造営尺は、『備国１』で復元した１尺＝0.297mを用いている。この単位尺の復元については、『備国１』第５章第１節を参照されたい。

11　本書掲載の図中の被熱範囲等に付したトーンは、基本的に以下のとおりに統一している。

盛土・造成土　被熱・焼土面　瓦だまり　地山

目次

序
例言
凡例
目次

第１章　調査の経緯と経過 …… 1

第１節　調査に至る経緯 …… 1
第２節　調査の経過と体制 …… 2

第２章　遺跡の位置と環境 …… 5

第１節　地理的歴史的環境 …… 5

第３章　遺構 …… 9

第１節　遺構の概要 …… 9
第２節　第４次調査 …… 13
第３節　第５次調査 …… 25
第４節　第６次調査 …… 38

第４章　遺物 …… 53

第１節　瓦類 …… 53
第２節　土器類 …… 80
第３節　その他の遺物 …… 94

第５章　総括 …… 97

第１節　伽藍配置の復元 …… 97
第２節　出土土器について …… 105
第３節　寺域内における金属製品生産について …… 107
第４節　礎石石材について …… 111

遺物観察表
新旧遺構名称対照表
図版
報告書抄録
奥付

巻頭図版目次

1　T32　僧房瓦積基壇　外装A（南西から）

2　T20･23　北門・北面築地周辺（南東から）

図目次

図１　位置図 …… 5

図２　周辺遺跡分布図（1/50,000） …… 6

図３　古代遺跡分布図（1/500,000） …… 8

図４　昭和49年度・第１～３次調査
遺構配置図（1/1,600） …… 10

図５　調査区配置図（1/1,600） …… 12

図６　第４次調査区配置図（1/4,000） …… 13

図７　T１（1/80） …… 14

図８　T14（1/80） …… 15

図９　土壙１（1/20） …… 16

図10　T20（1/80） …… 17

図11　P－１～３（1/30） …… 17

図12　礎石１（1/30） …… 19

図13　P－４（1/20） …… 19

図14　T21（1/80） …… 20

図15　T22（1/80） …… 21

図16　礎石３（1/30） …… 22

図17　T23（1/80） …… 23

図18　T24（1/80） …… 24

図19　第５次調査区配置図（1/4,000） …… 25

図20　T25（1/80） …… 26

図21　礎石５（1/30） …… 27

図22　土壙２（1/20） …… 27

図23　土壙３（1/20） …… 27

図24　T26（1/80） …… 28

図25　礎石９（1/30） …… 29

図26　礎石10（1/30） …… 29

図27　土壙６（1/20） …… 30

図28　炉１（1/20） …… 30

図29　P－５（1/20） …… 30

図30　P－６～８（1/20） …… 30

図31　T27（1/80） …… 31

図32　炉２（1/30） …… 31

図33　柱穴列１（1/20） …… 34

図34　柱穴列２（1/20） …… 34

図35　柱穴列３・４（1/20） …… 35

図36　柱穴列５（1/20） …… 35

図37　T28（1/80） …… 36

図38　土壙７（1/30） …… 37

図39　第６次調査区配置図（1/4,000） …… 38

図40　T30（1/160） …… 38

図41　T31（1/80） …… 39

図42　礎石11（1/30） …… 40

図43　土壙８（1/30） …… 41

図44　土壙９（1/20） …… 41

図45　土壙10（1/20） …… 41

図46　土壙11（1/20） …… 41

図47　溝21（1/30） …… 42

図48　T32（1/80） …… 43

図49　礎石12（1/30） …… 44

図50　礎石13（1/30） …… 44

図51　瓦積基壇（1/30） …… 45

図52　瓦積基壇外装材　丸瓦①（1/4） …… 46

図53　瓦積基壇外装材　丸瓦②（1/4） …… 47

図54　瓦積基壇外装材　平瓦①（1/4） …… 48

図55　瓦積基壇外装材　平瓦②（1/4） …… 49

図56　T33（1/80） …… 50

図57　T34（1/80） …… 51

図58　礎石16（1/30） …… 52

図59　軒丸瓦一覧（1/6） …… 54

図60　軒丸瓦１式（1/4） …… 55

図61　刻み（1/3） …… 56

図62　軒丸瓦６・10・21・24・29式（1/4） …… 57

図63　軒平瓦一覧（1/6） …… 59

図64　軒平瓦１Ｂ式①（1/4）……60
図65　軒平瓦１Ｂ式②（1/4）……61
図66　軒平瓦２Ｂ・４・５式・新規の型式
　・赤色顔料付着瓦（1/4）……62
図67　丸瓦①（1/4）……64
図68　丸瓦②（1/4）……65
図69　丸瓦③（1/4）……66
図70　平瓦①（1/4）……67
図71　平瓦②（1/4）……68
図72　平瓦③（1/4）……69
図73　平瓦④（1/4）……70
図74　平瓦⑤（1/4）……72
図75　平瓦⑥（1/4）……73
図76　平瓦⑦（1/4）……74
図77　隅木蓋瓦・隅切瓦（1/4）……75
図78　鬼瓦（1/4）……76
図79　文字瓦（1/4・1/2）……77
図80　塼（1/4）……79
図81　Ｔ１溝１・Ｔ14土壙１出土土器（1/3）……80
図82　Ｔ20溝６出土土器（1/3）……81
図83　Ｔ20溝７・その他の遺構
　・包含層出土土器（1/3）……82
図84　Ｔ21出土土器（1/3）……83
図85　Ｔ23出土土器（1/3）……83
図86　Ｔ26出土土器（1/3）……84
図87　Ｔ27溝14出土土器①（1/3・1/4）……86
図88　Ｔ27溝14出土土器②（1/3）……87
図89　Ｔ27その他の遺構
　・包含層出土土器（1/3）……88
図90　Ｔ28・31出土土器（1/3）……89
図91　Ｔ32・33・34出土土器（1/3）……90
図92　緑釉・灰釉陶器（1/3）……92
図93　白磁・青磁（1/3）……92
図94　中近世の土器・陶磁器（1/3）……92
図95　硯類（1/3）……93
図96　弥生土器（1/3）……93
図97　鍛冶・鋳造関連遺物（1/2・1/3）……94
図98　銅製品・鉄製品（1/2・1/3）……95
図99　石製品（1/2）……96
図100　僧房復元図（1/400）……99
図101　回廊復元図（1/200）……100
図102　北門・北面築地復元図（1/200）……101
図103　金堂復元図（1/200）……103
図104　伽藍配置復元図（1/1,600）……104
図105　鍛冶・鋳銅関連の遺構（1/1,600）……108

表目次

表１　発掘調査一覧……11
表２　軒瓦の出土状況……53
表３　礎石に使用された石材……111
表４　瓦類観察表……113
表５　土器観察表……116
表６　鍛冶・鋳造関連遺物観察表……119
表７　金属製品観察表……119
表８　石製品観察表……119
表９　新旧遺構名称対照表……120

図版目次

図版１　１　遺跡遠景（北が上）
　　２　遺跡全景（南西から）
図版２　１　Ｔ１溝１（南西から）
　　２　Ｔ14全景（南から）
　　３　Ｔ14土壙１土器出土状況（西から）
　　４　Ｔ14溝２断面（東から）
図版３　１　Ｔ20全景（東から）
　　２　Ｔ20溝６（南東から）
　　３　Ｔ20北門礎石１（西から）
　　４　Ｔ20溝６断面（北西から）
　　５　Ｔ23全景（南西から）
図版４　１　Ｔ21全景（南東から）

2　T21溝８断面（南東から）
3　T21礎石２（南から）
図版５　1　T22全景（南西から）
2　T22金堂基壇南西隅（南から）
3　T22金堂礎石３（南から）
図版６　1　T25全景（南東から）
2　T25全景（東から）
3　T25僧房礎石５（南東から）
4　T25僧房礎石６（南から）
図版７　1　T26南半（南東から）
2　T26溝12（北東から）
3　T26僧房礎石９（北西から）
4　T26僧房礎石10（南東から）
5　T26炉１（東から）
図版８　1　T27全景（南東から）
2　T27溝14　柱穴列１・２（南東から）
3　T27炉２（西から）
図版９　1　T28南半（北西から）
2　T28土壙７（南西から）
3　T30全景（東から）
図版10　1　T31Ａ全景（南東から）
2　T31Ａ礎石11（西から）
3　T31Ｂ僧房基壇南端（南から）
4　T31Ａ溝21瓦出土状況（南から）
図版11　1　T32全景（南東から）
2　T32全景（南から）
3　T32瓦積基壇　外装Ｂ（南西から）
図版12　1　T32瓦積基壇　外装Ｂ（南西から）
2　T32瓦積基壇　外装Ｂ（南西から）
3　T32瓦積基壇　外装Ｂ　軒平瓦（南から）
図版13　1　T32瓦積基壇　外装Ａ（南東から）
2　T33全景（東から）
3　T33Ｂ礎石15（東から）
4　T33Ａ礎石14（東から）
図版14　1　T33Ａ瓦類出土状況（東から）
2　T34全景（南東から）
3　T34僧房基壇北西隅（北から）
図版15　1　軒丸瓦１式
2　軒丸瓦１式
3　軒丸瓦６式
4　軒丸瓦10式
5　軒丸瓦21式
6　軒丸瓦24式
7　軒丸瓦29式
8　軒丸瓦丸瓦部先端の刻み
9　軒平瓦2B 式
10　軒平瓦４式
11　軒平瓦５式
12　赤色顔料付着瓦
図版16　1　軒平瓦1B 式
2　軒平瓦1B 式
3　軒平瓦４式
4　軒平瓦（新規の型式）
5　丸瓦
6　丸瓦
7　丸瓦
8　丸瓦
9　丸瓦
図版17　1　平瓦
2　平瓦
3　平瓦
図版18　1　平瓦
2　隅木蓋瓦
3　隅木蓋瓦
4　鬼瓦
5　隅切瓦
図版19　1　文字瓦
2　塼
3　土器
図版20　1　土器
図版21　1　土器
2　緑釉陶器
図版22　1　緑釉陶器
2　灰釉陶器
3　白磁
4　青磁
5　陶硯
6　銅製品
7　鍛冶・鋳造関連遺物

第１章　調査の経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

昭和44年から、遺跡の後背丘陵（東高月丘陵）にあたる当時の旧赤磐郡山陽町下市・河本・岩田・和田・熊崎・鴨前の６地区に計画された県営山陽団地の開発が始まった。この計画地には弥生時代中期後半の用木山遺跡などの集落遺跡や用木古墳群、四辻古墳群、岩田古墳群といった古墳群が所在していたが、一部の遺跡を除いてやむを得ず発掘調査を実施し、記録による保存対応がなされた。

昭和46年に住宅団地への入居が始まり、人口が増加する中で、幼稚園や小学校などの公共施設も整備されていった。そうしたなか、この山陽団地に近接する本遺跡も例外ではなく、住宅需要の増加から寺域想定区域内に次々に宅地開発が計画された。

開発行為から備前国分寺跡を保護する目的で、昭和49年度に岡山県教育委員会が中心となって確認調査を実施したところ、寺域想定区域の地下には比較的良好な形で国分寺の遺構が残存していることが判明した。主要建物として南門・中門・金堂・講堂・僧房・塔が検出され、塔を南東隅に配した、いわゆる国分寺式の伽藍配置をとっていることが確認された。寺域についても、東西600尺、南北ははっきりしないまでも800尺程度内に収まるものと推定された(1)。

この調査結果を受け、旧山陽町は遺跡の保存を図るため、文化庁に対し国指定申請を行い、昭和50年７月19日付け文部省告示第119号で国指定史跡「備前国分寺跡」として指定を受けた。その後、国庫補助金を受けながら史跡地の公有化を進め、平成14年度末までに民有地３筆・神社有地１筆・官有地２筆を残して、史跡地の約９割の買い上げを終了した。

その間、平成８年度には山陽町遺跡整備委員会を立ち上げ、平成８・９年度に本遺跡や備前国分尼寺跡、両宮山古墳を中心とした西高月遺跡群の調査研究、整備活用の指針の協議・検討を行った。その協議成果をまとめた中で、本遺跡は早期の保存活用整備が望まれる整備拠点地区に設定され、整備のための発掘調査の必要性が述べられている(2)。平成13年度には、新たに第二次山陽町遺跡整備委員会を立ち上げ、具体的に備前国分寺跡等の調査計画についてご指導を仰ぎ、整備に向けて動き出した。なお、旧山陽町は平成17年３月７日に旧赤磐郡内の赤坂町、熊山町、および吉井町と合併して赤磐市となり、第二次山陽町遺跡整備委員会は第二次山陽遺跡整備委員会に名称変更した。

全国の国分寺跡の多くが住宅や現国分寺などの既存建物のために遺存状況が良好とはいえない中、備前国分寺跡は寺域全体が比較的良好な状態で残っており、周囲の遺跡群と併せて整備、活用が求められる遺跡といえる。そうした認識を踏まえ、備前国分寺跡整備のための資料を得る目的で、平成15～17年度から３ヵ年にわたって発掘調査を実施することとした。調査内容は、主に主要建物の規模・構造、そして寺域の範囲確認である。この成果については平成20年度に調査報告書を刊行している(3)。

本報告書に該当する平成18～20年度の発掘調査は、平成17年度までの３ヵ年の発掘調査に対する補足的な調査の位置付けであり、詳細把握のできなかった僧房や回廊等を中心に短期間の調査を継続して行った。なお、発掘調査にあたっては、第二次山陽遺跡整備委員会や文化庁文化財部記念物課、岡

山県教育庁文化財課をはじめ、関係各位ならびに地元の方から多くのご指導とご教示をいただいた。

なお、これらの調査成果は随時整理を行って史跡整備の設計に着手した。平成18年度には単市で基本設計(4)を、平成19年度には第Ⅰ期整備（塔地区および中心伽藍地区北部）の施工についての実施設計をそれぞれ策定した。平成21年度からは、通算６ヵ年にわたる調査結果をもとに史跡整備に着手している。ただし、史跡が広範に及ぶため、まず第Ⅰ期整備の中の塔地区の遺構整備を実施し、平成22年度に完了した。

本節は『赤磐市教育委員会2009「備前国分寺跡」赤磐市文化財調査報告第３集』の「第１章調査の経緯と経過」の「１　調査に至る経緯」を基調に一部改変、加筆を行って取りまとめた。

註

（１）備前国分寺跡緊急発掘調査委員会1975『備前国分寺跡緊急発掘調査概報』岡山県埋蔵文化財調査報告10　岡山県教育委員会

（２）山陽町1998『山陽町遺跡保存管理計画書（基本計画）』

（３）赤磐市教育委員会2009『備前国分寺跡』赤磐市文化財調査報告第３集

（４）赤磐市2007『史跡備前国分寺跡整備基本設計書』

第２節　調査の経過と体制

（１）調査および報告書作成の経過

本報告書に収載している備前国分寺跡の調査および報告書作成は、平成18年度に第４次調査および整理作業、平成19年度に第５次調査および整理作業、平成20年度に第６次調査および整理作業、平成21年度に第４～６次調査の全体整理作業、平成22年度に全体編集作業・報告書刊行といった工程で実施した。次にその経過を記す。

平成18年度

平成18年６月13日から９月８日まで第４次調査を実施した。主要伽藍を中心として行った過去３年間の発掘調査の補足的な調査として、主に主要伽藍周辺施設の確認を目的として発掘調査を行った。具体的には、１．北門の位置とその規模・構造、２．僧房に隣接する建物の規模・構造、３．西門の確認、４．昭和49年度に確認している金堂南西隅の再調査による規模の確定、５．第２次調査で塔基壇構築に先立って設けられた溝の西側での確認、６．経蔵あるいは鐘楼の確認などである。

調査成果として北面築地と北門の状況を確認し、僧房東端の建物の状況や金堂の規模・構造を把握した。整理作業は出土遺物の台帳作成、洗浄・注記作業、調査図面・写真の整理作業、実績報告書作成を行った。

平成19年度

平成19年９月５日から11月５日まで第５次調査を実施した。第４次調査に引き続き、主に僧房と寺域内の周辺施設等の補足的な調査であった。具体的には、１．僧房北端の確認、２．僧房西端の確認、３．僧房から北門までの間にある施設の確認、４．鐘楼あるいは経蔵の確認などである。

調査成果として、僧房規模について基壇東側付近は梁行が３間である可能性があることがわかった。

また、基壇土を掘り込んで根石および礎石を据え置いていたことを確認できた。僧房基壇の西端については設定した調査区よりさらに西方に位置することが判明した。また、炉跡の検出や銅滴・炉壁等の出土から、僧房より北方および回廊外で銅製品あるいは鉄製品の製作が行われていたことを確認できた。整理作業は出土遺物の洗浄作業、調査図面・写真の整理作業、実績報告書作成を行った。

平成20年度

平成20年９月22日から12月11日まで第６次調査を実施した。第４・５次調査に引き続き、主に僧房と寺域内の周辺施設等の補足的な調査であった。具体的には、１．僧房の梁行の確認、２．僧房の西端（桁行）の確認、３．回廊の桁行柱間の確認、４．鐘楼あるいは経蔵の確認などである。

調査成果として、僧房規模についてはその西端が確認され、加えて、基壇外装が瓦積で構築されていることが判明した。ただし、基壇外装の東西では瓦の積み方や使用材に差異が認められ、また、南北方向の２条の溝と土壙の前後関係から、基壇の拡張や補修などの改変が想定された。一方、僧房の梁行が基壇西端付近においては２間の可能性が高いことが明らかになり、第５次調査の成果の再検討が必要となった。また、西面回廊の桁行柱間が12尺であると確認できたが、これまでの調査結果と照らし合わすと12尺等間では齟齬をきたすため、小門等の存在などの想定が必要となった。整理作業は出土遺物の台帳作成、洗浄・注記作業、調査図面・写真の整理作業、実績報告書作成を行った。

なお、第６次調査を実施した平成20年度は、調査期間中の平成20年10月４日に「古代の備前地域－赤磐の歴史－」講座の現地研修として発掘現場を公開した。また、同年11月29日には現地説明会を開催して80名の参加を得た。平成21年２月３日から３月１日までの期間は、赤磐市山陽郷土資料館において、備前国分寺跡発掘調査速報展を開催した。

平成21年度

年度を通じて、第４～６次調査の全体整理作業を実施した。遺物整理は抽出と復元作業を行い、順次実測を実施し、浄写を行った。図面整理は遺構実測図をまとめて下図を作成し、順次浄写を行った。また、可能なところから割付作業に着手した。遺構写真は選別して現像した。

平成22年度

年度を通じて、第４～６次調査の全体編集作業を実施した。遺物写真は抽出を行い、適宜撮影を進めた。原稿の執筆や図・表類の作成作業は、編集を勘案しながら割付を調整して順次行った。編集作業終了後、11月に入札・契約・入稿し、校正３回・本機校正１回を経て、２月に報告書を刊行した。

（２）調査および報告書作成の体制

本報告書に収載している備前国分寺跡の調査および報告書作成において、第二次山陽遺跡整備委員会は、平成18年度に４回、平成19年度に３回、平成20～22年度に各年度２回開催され、委員の方々に調査方針・計画や検出遺構の評価などについて検討していただき、多くのご教示とご指導を得た。また、調査に至る協議や調査の進行過程では、文化庁文化財部記念物課、岡山県教育庁文化財課のご指導とご助言を得た。このほか、調査にあたっては地元の方々をはじめ、多くの方々からご協力をいただいた。さらに、本報告書作成の過程で、遺物等について諸氏に分析あるいは同定･鑑定等を依頼し、ご指導を得た。記して御礼申し上げる。次にその体制を記す。なお、職名は該期の最終年度のもののみを挙げている。

第二次山陽遺跡整備委員会

伊藤　晃（元岡山県古代吉備文化財センター参事）平成18～22年度
岡本明郎（日本考古学協会員）平成18～22年度
亀田修一（岡山理科大学総合情報学部教授）平成18～22年度
狩野　久（元岡山大学教授）平成18～22年度
河本　清（元くらしき作陽大学食文化学部教授）平成18～22年度〈平成18年６月～〉
中村　一（京都大学名誉教授）平成18～22年度
則武忠直（赤磐市文化財保護委員会議副議長）平成18～21年度
箱崎和久（独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所）平成18～22年度

指導・助言

○文化庁文化財部記念物課
白崎恵介（文化財調査官）平成18年度
市原富士夫（文化財調査官）平成19～22年度
○岡山県教育庁文化財課
光永真一（総括副参事）平成18～21年度
宇垣匡雅（総括副参事）平成22年度
金田善敬（主任）平成18～21年度

事務局

○赤磐市教育委員会
花田文甫（教育長）平成18～21年度〈～平成21年４月〉
土井原敏郎（教育長）平成21・22年度〈平成21年９月～〉
故倉英教（教育次長）平成18・19年度
藤原洋文（教育次長）平成20・21年度
宮岡秀樹（教育次長）平成22年度
・社会教育課
楢原哲哉（課長）平成18・19年度
奥田智明（課長）平成20～22年度
宇垣匡雅（参事）平成18・19年度（調査・整理担当）
澤山孝之（主幹）平成20～22年度（調査・整理担当）
塩見真康（主査）平成18年度
大熊美穂（主事）平成18・19年度（調査・整理担当）
有賀祐史（主任）平成18～22年度（調査・整理担当）
畑地ひとみ（嘱託）平成20～22年度（調査・整理担当）

遺物鑑定・分析依頼者

高橋照彦（大阪大学大学院文学研究科）緑釉・灰釉陶器・白磁・青磁
白石　純（岡山理科大学自然科学研究所）蛍光Ｘ線分析（鍛冶鋳造関連遺物）
鈴木茂之（岡山大学理学部地球科学科）石材鑑定

協力者

上栫　武（岡山県古代吉備文化財センター）
大橋　泰夫（島根大学）
平井　泰男（岡山県立博物館）
渡部　明夫（三豊市宗吉かわらの里展示館）

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的歴史的環境

（１）地理的環境（図１）

赤磐市は岡山県南東部、沖積平野の北側に位置している。市域は北側の吉備高原から続く赤磐丘陵地が広がり、市域の東側では吉井川が南流し、西端に近接して旭川が南流する。また、市西部には砂川が貫流しており、これらの河川や支流に沿って盆地状の平野が形成され、丘陵と平地が入り組んだ地形となっている。遺跡の多くは河川に沿って広がる平野もしくは平野に面した丘陵の先端に形成されており、備前国分寺跡も砂川中流域沿いの平野上に立地している。

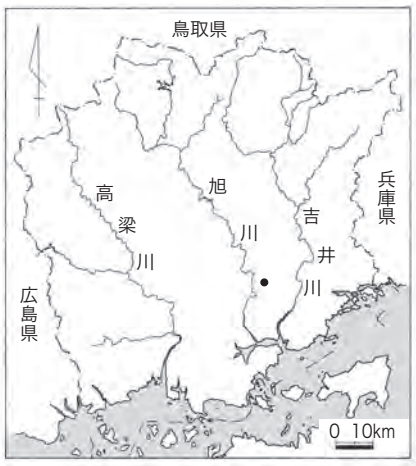


図１　位置図

この赤磐市の南西部に広がる砂川中流域の沖積平野は、東西約5.5km、南北約6.3km を測る。海抜は11～25m、周囲を標高100～300m の山々に囲まれ、東側の丘陵は比較的低い。東には可真の盆地状平地、南には岡山市瀬戸町北西部の盆地状平地、南西には龍ノ口山塊を隔てて旭川下流域東岸平野が広がっている。

（２）歴史的環境（図２・３）

旧石器時代・縄文時代

備前国分寺跡（１）の所在する赤磐市南西部の砂川中流域の沖積平野では、旧石器時代の明確な遺跡は現在確認されていない。

現在確認されている最も古い遺物は、備前国分寺跡で奈良時代以降の包含層から出土した縄文時代草創期の有舌尖頭器である。また、斎富遺跡（２）からは縄文時代後期の土器の他、土壙状の遺構から晩期の土器と軟玉製丸玉が出土した。南方前池遺跡（３）からは堅果類を貯蔵した晩期の貯蔵穴がまとまって検出された。吉原遺跡（４）からは晩期の石棒が出土した。

弥生時代

弥生時代前期の土器は南方前池遺跡のほか、山陽小学校遺跡（５）からも出土しており、集落が沖積平野へと進出・増加していった様子が窺える。

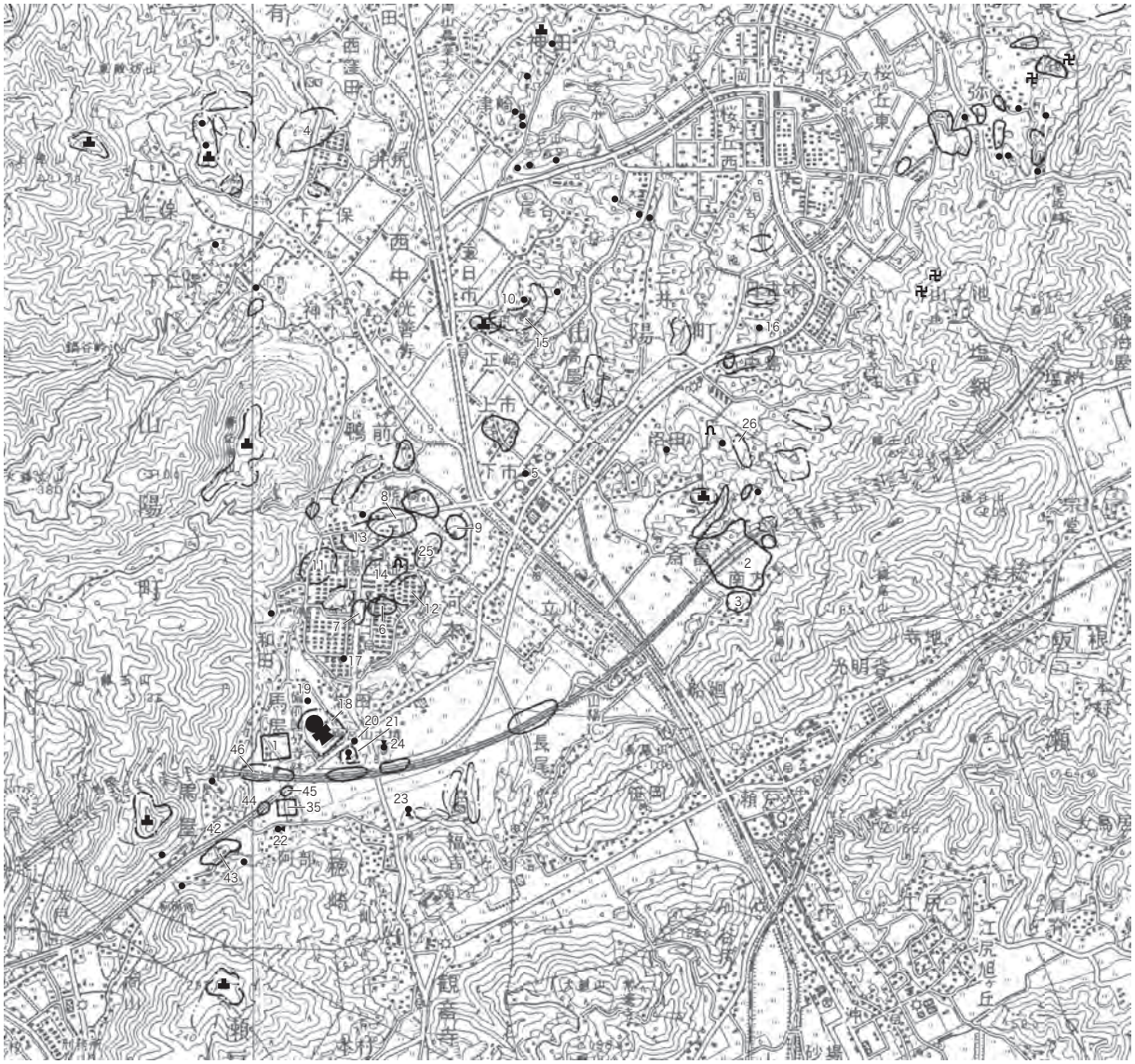
中期以降、数多くの集落が出現したことが確認されており、中期中葉から後期初頭にかけての遺跡は丘陵の尾根や斜面等、比較的高所に立地している遺跡が多い。備前国分寺跡の北東、東高月丘陵に立地する中期後半の集落遺跡では、数多くの竪穴住居支群が確認された用木山遺跡（６）、竪穴住居が検出された惣図遺跡（７）、弥生時代中期から古代にかけて続く門前池遺跡（８）等が挙げられる。

後期の遺跡は中期に対して、谷口や山裾の微高地などに立地する大規模な集落が多い。中期から続く門前池遺跡の他、門前池東方遺跡（９）や弥生時代から中近世にわたる集落跡の斎富遺跡、大量の土器が出土した浦山遺跡（10）等が確認されている。

墳墓も数多く確認されており、中期の墓群である四辻峠遺跡（11）、後期の方形台状墓９基などが検出された愛宕山遺跡（12）、特殊器台･壺を伴う土壙墓群が検出された便木山遺跡（13）等がある。

古墳時代

東高月丘陵上では用木古墳群（14）の出現以後、数多くの古墳が築造された。発掘調査の行われた



1．備前国分寺跡
2．斎富遺跡
3．南方前池遺跡
4．吉原遺跡
5．山陽小学校遺跡
6．用木山遺跡
7．惣図遺跡
8．門前池遺跡
9．門前池東方遺跡
10．浦山遺跡
11．四辻峠遺跡
12．愛宕山遺跡
13．便木山遺跡
14．用木古墳群
15．正崎古墳群
16．中島１号墳
17．岩田３号墳
18．両宮山古墳
19．和田茶臼山古墳
20．正免東古墳
21．森山古墳
22．朱千駄古墳
23．小山古墳
24．廻り山古墳
25．宮山古墳群
26．別所古墳群
35．備前国分尼寺跡
42．高月駅推定地
43．馬屋森向遺跡
44．馬屋出水遺跡
45．馬屋長田遺跡
46．馬屋遺跡

図２　周辺遺跡分布図（1/50,000）

古墳としては正崎４号墳（円墳・13m）（15）や、墳裾を取り巻くように木棺・土壙墓が多数設けられていた中島１号墳（円墳・18m）（16）が挙げられる。中期中葉には岩田3号墳（方墳・21m）（17）が築造され、中期後葉には二重周濠を有する巨大な前方後円墳の両宮山古墳（全長206m）（18）が築造される。両宮山古墳に近接して、二重周濠を有する和田茶臼山古墳（帆立貝形古墳・全長55m）（19）、正免東古墳（円墳？・約25m）（20）、森山古墳（帆立貝形古墳・82m）（21）が築造された。中期末には朱千駄古墳（前方後円墳・85m）（22）、続いて小山古墳（前方後円墳・58m）（23）が築かれ、後期前半には廻り山古墳（前方後円墳・47m）（24）が築かれた。

その他、首長墳とは異なるが、銅鏡、三環鈴、鉄刀、甲冑など様々な副葬品が出土した径約20×16mの円墳の正崎２号墳（15）、宮山４号墳（方墳・19×14m）（25）、別所古墳群（26）などがある。

集落では、門前池遺跡、朝鮮半島系の遺物が多数出土した門前池東方遺跡、斎富遺跡などが挙げられる。

古代以降

備前国庁の位置は現在の岡山市中区国府市場に推定されている（27）。詳細は未調査のため不明だが、周辺には工房を伴う寺院的性格の官衙と考えられる岡山市ハガ遺跡（28）があり、備前国分寺跡で補修に使用した瓦のほか、三彩陶器多口瓶や羊形硯などの極めて特殊な遺物が出土した。

備前国の寺院の中で、創建が飛鳥時代に遡るのが岡山市賞田廃寺（29）である。金堂と東西の塔の基壇が検出されており、塔基壇は壇上積基壇であったことが判明している。

白鳳時代になると、７世紀中頃に瀬戸内市須恵廃寺（30）が建立される。７世紀末創建では、講堂と金堂が南北に並ぶ瀬戸内市服部廃寺（31）、凝灰岩製壇上積基壇とみられる岡山市幡多廃寺（32）などが挙げられる。明確な遺構は検出されていないが、瀬戸内市半田廃寺（33）では、備前国分寺跡軒丸瓦３式に類似した瓦などが出土した。黒本廃寺（34）では複弁八弁蓮華文の川原寺式に類似した軒丸瓦が出土した。川原寺式瓦は壬申の乱で功績をあげた氏族が寺院建立の際に使用を認められた瓦との説があり、服部廃寺、須恵廃寺などでも出土している。この他、門前池遺跡で建物跡と多量の白鳳時代の瓦が確認されており、小規模な寺院があった可能性がある。

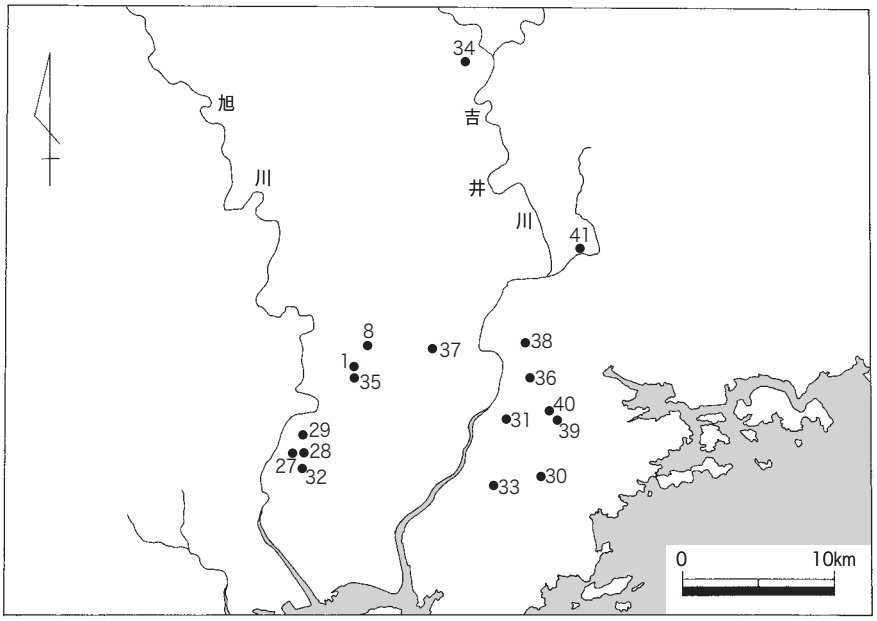
741（天平13）年の聖武天皇の勅命を受けて造営された備前国分寺跡（１）は当時の赤坂郡高月郷に位置している。東西約175m、南北約190mあまりの築地塀に囲まれ、国分寺式伽藍配置をとり、金堂を囲んで中門と講堂を結ぶ回廊は複廊式である。

対をなす備前国分尼寺跡（35）は、備前国分寺跡から古代山陽道を挟んで300mほど南、現在の仁王堂池に位置していたと推定される。本格的な調査はされていないため詳細は不明であるが、備前国分寺創建瓦と同笵の瓦が出土している。

８世紀中葉創建と考えられる備前市香登廃寺（36）では備前国分寺創建の瓦と同笵の瓦が出土している。また、８世紀後半創建と考えられる岡山市妙興廃寺（37）では備前国分寺創建瓦に類似する単弁八弁蓮華文軒丸瓦が出土した。

赤磐市南東部熊山山頂に位置する熊山遺跡（38）は一辺約11.7mの方形基壇を割石で作り、その上に方形３段の石を積んだ石積遺構である。頂部中央に設けられた竪穴から陶製筒形容器や奈良三彩小壺が出土しており、仏教に関わる遺構とみられる。

須恵器生産が盛んであった吉井川東岸の地域では瓦が製作されており、瀬戸内市油杉窯跡群（39）では備前国分寺跡の補修瓦を、瀬戸内市産土池窯跡（40）では服部廃寺の創建瓦を生産していた。また、和気町泉瓦窯跡（41）は、備前国分寺跡軒丸瓦23式・軒平瓦28式を生産していた。



1．備前国分寺跡
8．門前池遺跡
27. 備前国庁推定地
28. ハガ遺跡
29. 賞田廃寺
30. 須恵廃寺
31. 服部廃寺
32. 幡多廃寺
33. 半田廃寺
34. 黒本廃寺
35. 備前国分尼寺跡
36. 香登廃寺
37. 妙興廃寺
38. 熊山遺跡
39. 油杉窯跡群
40. 産土池窯跡
41. 泉瓦窯跡

図３　古代遺跡分布図（1/500,000）

高月駅家推定地（42）に近接する馬屋森向遺跡（43）で平安時代以前の古道と推測される遺構が検出された。平城宮式(6225型式系)の１点を除く軒丸瓦はすべて備前国分寺の創建瓦と同文であった。馬屋出水遺跡（44）・馬屋長田遺跡（45）からは官衙との関係が推定される奈良時代の遺物・遺構が検出されている。奈良時代から室町時代前半を中心とした集落跡の馬屋遺跡（46）からは国分寺創建時の軒平瓦をはじめ多数の同笵瓦が出土しており、国分寺の寺地を区切る可能性がある溝や国分寺と国分尼寺を結ぶとみられる道も検出された。

平安末期に鳥取郷は、在地領主であった葛木氏によって鳥取荘と呼ばれる荘園として開発され、後白河法皇の持仏堂である長講堂領となった。1191（建久２）年の長講堂所領注文によると、鳥取荘には御簾・御座・砂・布・門兵士・移花などが課せられていたことがわかる。

引用・参考文献

池田浩ほか1997「服部廃寺」『長船町埋蔵文化財発掘調査報告書』２

宇垣匡雅1985「須恵廃寺採集の瓦」『西谷遺跡』長船町教育委員会

岡本寛久1980「泉瓦窯・万富東大寺瓦窯跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』37

岡本寛久2006「半田廃寺」『邑久町史考古編』瀬戸内市

草原孝典2004『ハガ遺跡－備前国府関連遺跡の発掘調査報告－』　岡山市教育委員会

田代健二1988「備前市内採集の遺物について」『古代吉備』第10集　古代吉備研究会

矢部秋夫1975「森末妙興廃寺址出土瓦」『瀬戸町史料集』岡山県瀬戸町

赤磐市教育委員会2009『備前国分寺跡』赤磐市文化財調査報告　第３集

岡山市教育委員会1975『幡多廃寺発掘調査報告』

岡山市教育委員会2005『史跡賞田廃寺跡』

長船町1998『長船町史』史料編（上）

熊山町教育委員会1974『熊山遺跡－岡山県赤磐郡熊山町史跡熊山遺跡緊急調査概報－』

第３章　遺構

第１節　遺構の概要

（１）遺跡の立地と現状

備前国分寺跡は、赤磐市南西部の標高100～300mの丘陵に囲まれた盆地状の平野部の西端に位置し、岡山市との境界にある本宮高倉山（標高458m）の南東麓に形成された扇状地の南向き緩斜面に建立されている。東に隣接して古墳時代中期後半の大型前方後円墳である両宮山古墳が築造されており、また周囲には中期後半から後期前半の前方後円墳が集中する。遺跡南には古代山陽道が通過し、備前国分尼寺が所在していたと考えられている。

遺跡は、北東の丘陵上に開発された山陽団地に近接し、昭和40年代以降、寺域想定地内にも宅地開発が計画される中、昭和50年に国の指定を受け保存措置をとったため、現状では寺域内に宅地はなく、棚田状に水田が広がる。寺域は全体として、北西から南東にむかって下降して傾斜している。水田の他は、寺域西辺中央付近に国分寺八幡宮の境内地があり、寺域南東部に平成21年度より開始した史跡保存整備工事により塔基壇の整備がなされている。寺域は、直線の畦畔によく反映されているが、標高の高い寺域北西部、寺域外西部は丘陵の傾斜に沿って水田が区画されている。

（２）既往の調査（図４、表１）

本書は、史跡整備事業に伴う第４～６次調査の成果報告であるが、調査面積は小規模で既往の調査成果をもとに補足的に実施したトレンチ調査が多い。そこで、以下に既往の調査研究で明らかになった内容についてまとめておく。

伽藍配置　国分寺式伽藍配置をとる。南門・中門・金堂・講堂・僧房の主要建物が一直線上に並び、中門と講堂を結ぶ回廊の東へ塔を配置している。寺域を区画する築地塀は南北に長い長方形となり、堂塔を囲繞する。

金堂　回廊内に独立して配置されている。建物は、桁行７間（88尺）×梁行４間（46尺）で、柱間寸法は桁行11・12・14・14・14・12・11尺×梁行11・12・12・11尺と復元される。基壇規模は東西116尺（34.45m）、南北74尺（21.98m）と考えられる。金堂基壇は、基壇構築途中に礎石据え付け掘り方を設けて礎石を置き、さらに周囲に版築を施して完成されていることを確認できた。

創建以来の金堂は平安時代中期に大きく倒壊し、平安時代後期に改修あるいは再建を行っている。改修された建物がいつ廃絶したかははっきりしないが、講堂のように鎌倉時代前半や室町時代に属す瓦が出土しないので、この時期には既に廃絶していたと考えられる。

講堂　講堂には、東西辺の南よりに回廊が取り付く。創建時の建物は、桁行７間（111尺）×梁行４間（54尺）で、基壇規模は東西127尺（37.72m）×南北70尺（20.79m）と復元される。

建物は12世紀半ば～後半に火災に遭い焼失しているが、鎌倉時代前半に再建が始まっている。再建

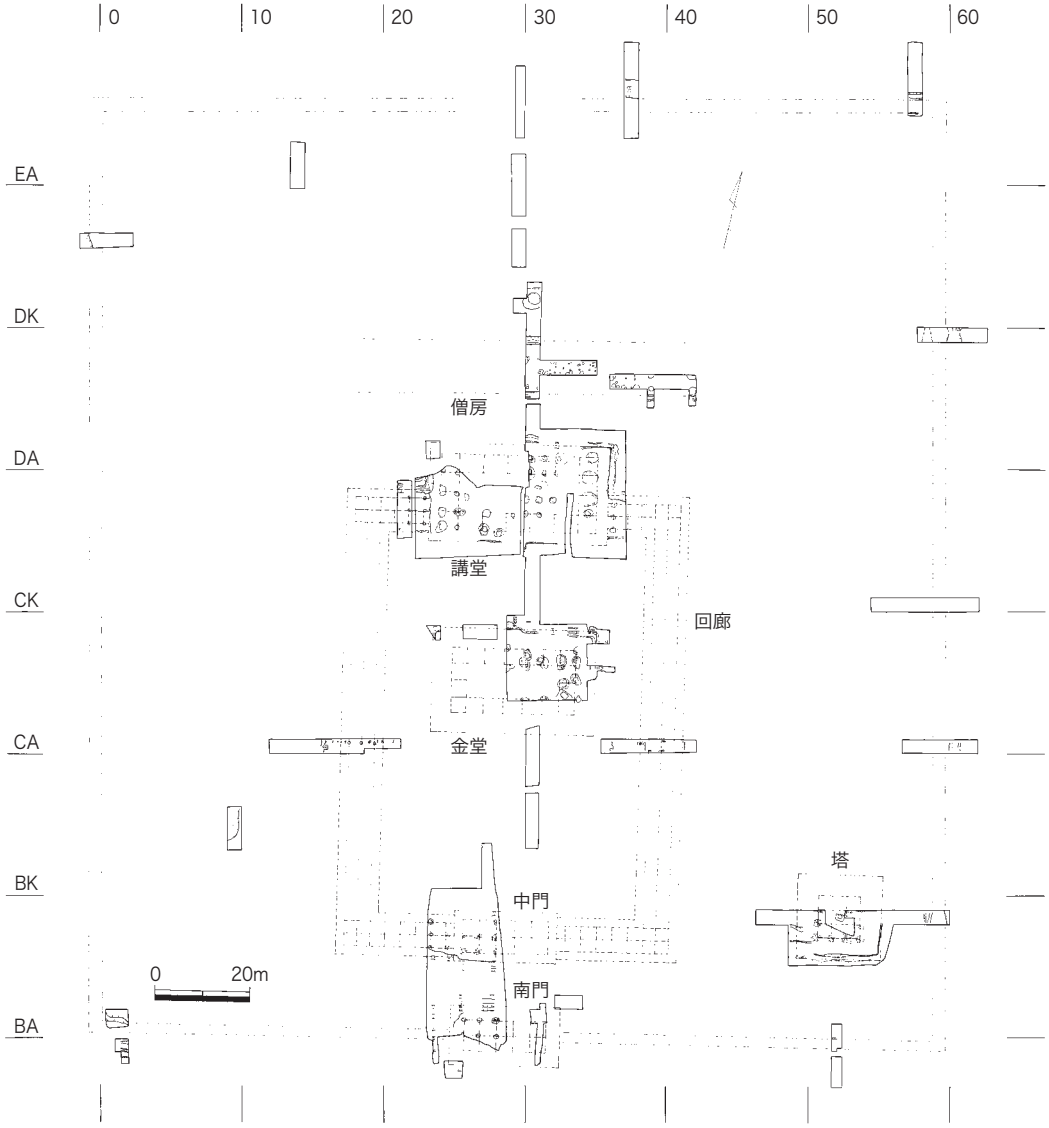


図４　昭和49年度・第１～３次調査　遺構配置図（1/1,600）

された建物は、基壇北東部に桁行５間（53尺）×梁行４間（42尺）もしくは内陣と外陣をもつ桁行５間（53尺）×梁行５間（52尺）の規模と推定される。この建物は16世紀後葉まで改修を受けながら存続していたと考えられ、備前国分寺の伽藍の中で最後まで残った建物の一つである。

中門　規模は、桁行５間（61尺）×梁行２間（24尺）で、柱間寸法は桁行12・12・13・12・12尺×梁行12・12尺と復元される。軒の出は６尺（1.78m）で、基壇規模は東西73尺（21.68m）×南北36尺（10.69m）となる。屋根は単層の切妻造りで五間三戸の門であったと推定される。近世に中門上に池が掘られ、大幅に基壇が削平されてしまっている。

南門　規模は、桁行５間（58尺）×梁行２間（22尺）で、柱間寸法は桁行11・12・12・12・11尺×梁行11・11尺と復元される。軒の出は10尺（2.97m）と推定され、基壇規模は東西78尺（23.17m）×南北42尺（12.47m）となる。屋根は重層の入母屋造りと考えられ、五間三戸の門である。中門よりも基壇規模が大きく、出土した瓦から、講堂と同様に補修を重ねながら維持された堂塔の一つであったと考えられる。

僧房　僧房は不明な点が多くあり、詳細な規模の復元は困難であったが、最低２回の建替えが認めら

れた。創建時の僧房は東西規模の把握ができていないが、基壇南北には雨落ち溝が設けられ、梁行は２間もしくは３間と推定される。建物は創建後９世紀後半頃に廃絶していると考えられ、その後建替えられたと想定される。僧房の最終的な廃絶時期は明確でないが、古代末までは存続していたのではないかと考えられる。

塔　規模は、検出した根石から10尺等間の一辺30尺（8.91m）である。基壇規模は、一辺60尺（17.82m）で、軒の出15尺（4.46m）と復元される。塔の根石に二次的な改変は認められず、心礎上に鎌倉時代の作と考えられる石造七重層塔が立っていることや出土した土器・瓦から、塔は平安時代中期には廃絶し、その後、再建されることはなかったと考えられる。

回廊　複廊式で、中門を発し講堂に取り付く。梁行は９尺（2.67m）等間であり、北面回廊西側および西面回廊は原位置で礎石が遺存する。

表１　発掘調査一覧

調査年度	調査年次	内容（調査区）	調査主体	文献
昭和49（1974）		伽藍把握のための確認調査	備前国分寺跡緊急発掘調査委員会	1
平成15（2003）	1	史跡整備事業に伴う発掘調査　講堂・僧房他	山陽町教育委員会	2
平成16（2004）	2	史跡整備事業に伴う発掘調査　南門・中門・塔他	山陽町教育委員会	2
平成17（2005）	3	史跡整備事業に伴う発掘調査　金堂・回廊他	赤磐市教育委員会	2
平成18（2006）	4	史跡整備事業に伴う発掘調査　僧房・北門他	赤磐市教育委員会	本報告
平成19（2007）	5	史跡整備事業に伴う発掘調査　僧房他	赤磐市教育委員会	本報告
平成20（2008）	6	史跡整備事業に伴う発掘調査　僧房・西面回廊他	赤磐市教育委員会	本報告

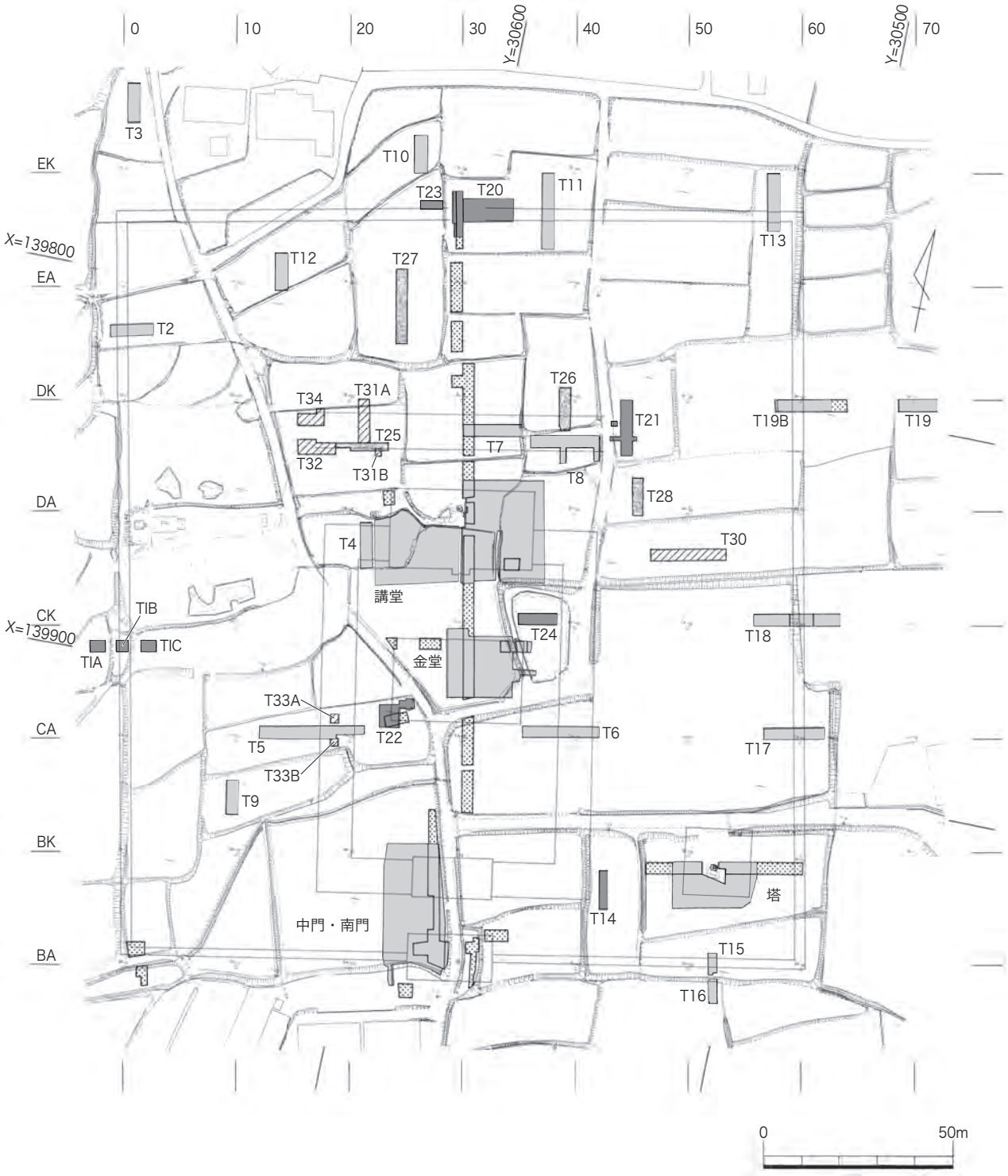
文献　（１）備前国分寺跡緊急発掘調査委員会1975『備前国分寺跡緊急発掘調査概報』岡山県埋蔵文化財調査報告10　岡山県教育委員会
（２）赤磐市教育委員会2009『備前国分寺跡』赤磐市文化財調査報告３

（３）調査区の概要（図５）

調査区は前述した既往の調査成果をもとに設定した。特に第１～３次調査において、調査が不足し基礎的な情報が得られていない地点を中心に設けている。

調査グリッドは、第１～３次調査と同様に昭和49年度調査で設定したものを踏襲している。グリッドは、アルファベット２文字と数字の組み合わせで表記される。寺域南西隅（ＢＡ－０）から南へ60ｍを起点ＡＡ－０とする。Ｘ軸はＡＡラインから北へ３ｍ毎にアルファベット２文字目をＢ・Ｃ・Ｄ…とし、かつ北へ60ｍ毎にアルファベット１文字目をＢ・Ｃ・Ｄ…とする。Ｙ軸は０ラインから東へ３ｍ毎に１・２・３…とする。なお、仮主軸は、30ラインから４ｍ西となる。

１ヵ年毎の調査経過は第１章で述べたとおりである。調査区はＴ１・14・20～28・30～34までの計16本である。なお、番号が抜けている調査区は第１～３次調査で終了報告済みのもので、Ｔ29のみ欠番である。対象とした堂宇は、金堂・僧房・北門・西面回廊が中心で、その他寺域各所を調査した。



昭和49年度調査地点

平成19年度（第５次）調査地点

平成15～17年度（第１～３次）調査地点

平成20年度（第６次）調査地点

平成18年度（第４次）調査地点

図５　調査区配置図（1/1,600）

第２節　第４次調査

（１）概要（図６）

第４次調査では、計７本のトレンチ調査を行った。『備国１』で報告した第１～３次調査において主要な堂塔の調査は終えていたので、補足的な調査となった。

調査目的は、１．金堂南西隅の再調査による規模の確定（T22)、２．西門および北門の確認（Ｔ１・20・23)、３．僧房の東端の状況把握（T21)、４．塔基壇構築に先立って設けられた備国１溝19が西方へ続くかどうかの確認（T14)、５．鐘楼あるいは経蔵の確認（T24）である。調査対象が多岐にわたり、調査区の配置は分散している。適宜、遺構や遺物の検出状況により、調査範囲を限定あるいは拡張した。主要な調査成果は、北門の検出と僧房東端の建物の状況把握である。

図６　第４次調査区配置図（1/4,000）

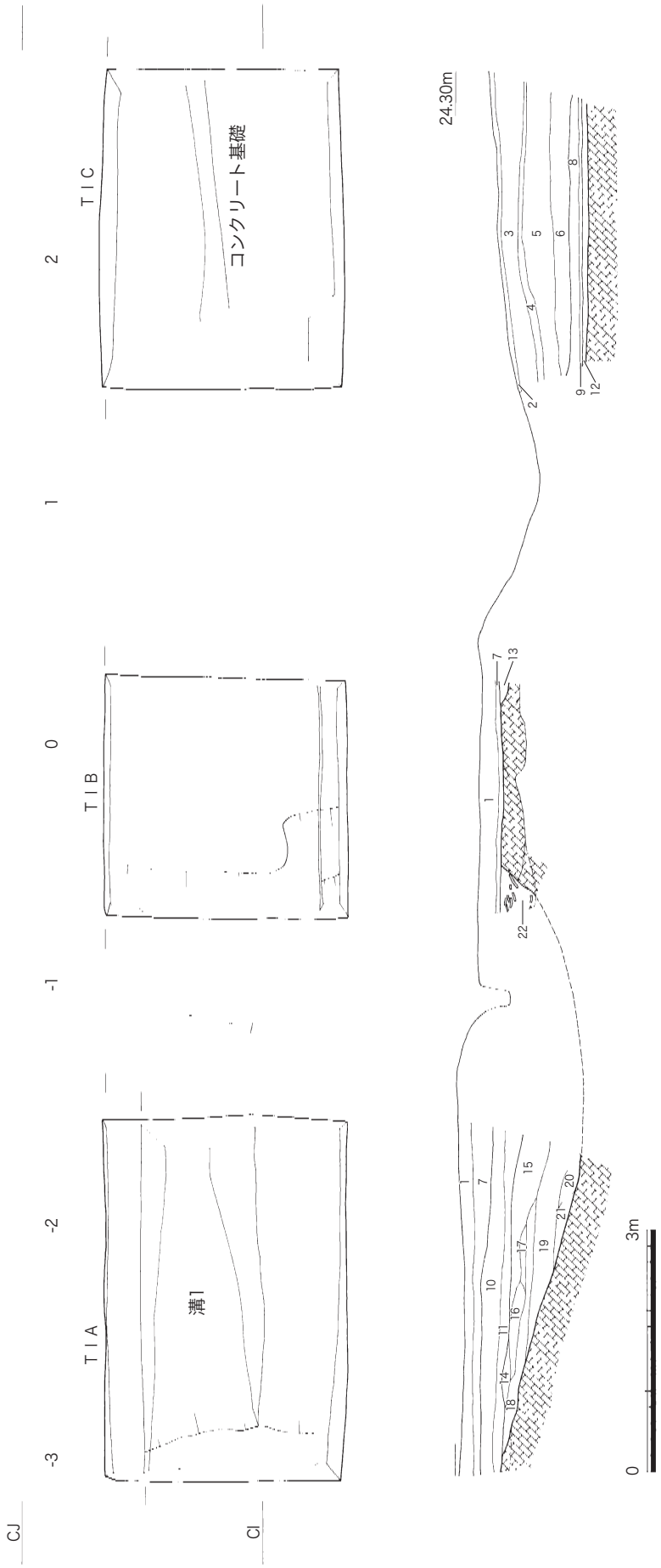
（２）Ｔ１

概要（図７）

寺域の西辺、南西隅から北へ82mの地点に設定した、長さ17.5m、幅３ｍの調査区である。途中２本の用水路を避けたため、３区画に分けて調査し（西からＡ・Ｂ・Ｃと呼ぶ)、調査区の実質の長さは11.5mである。現状でＢの地点に16×４ｍの長方形状の区画が見られ、地形図においても西門の痕跡を残しているのではないかと認められた場所である。未確認であった西門の確認のために調査を行った。

Ｔ１Ｃには、南東部に標高23.4mで建物のコンクリート基礎が認められた。昭和49年撮影の航空写真には、Ｔ１Ｃを設定した国分寺八幡宮南に建物が写っているので、この建物の基礎であり、その後取り壊されたものである。そのため、表土から厚さ約0.6～１ｍの真砂土等の造成（２～６層）は昭和50年以降の造成となる。それより下位で耕作土と床土（８・９層）が認められ、標高22.65mで黄色粘質土の地山に至るので、水田耕作によって深く削平が及んでいた。Ｔ１Ｂは、厚さ30cm の耕作土と床土（１・７層）を除去すると地山となり、西端で地山を切り込んで溝１の肩部と考えられる落ちを検出した。これと対応するように、Ｔ１Ａでは厚さ50cm の耕作土と堆積土（１・７・10・11層）を除去すると、溝１の西肩部と下がりを確認した。

Ｔ１Ａにおいては溝１を調査区全体で検出し、Ｔ１Ｂでは耕作土除去後すぐに地山が現れ、Ｔ１Ｃでは地形が大きく削平されており、調査の主眼である西門の痕跡は確認できなかった。溝１は現状で西辺に見られる直線の畦畔と同様に当初の西面築地線を反映して掘られたものと考えられる。



14～22　溝１埋土

図７　Ｔ１（1/80）

溝１（図７、図版２－１）

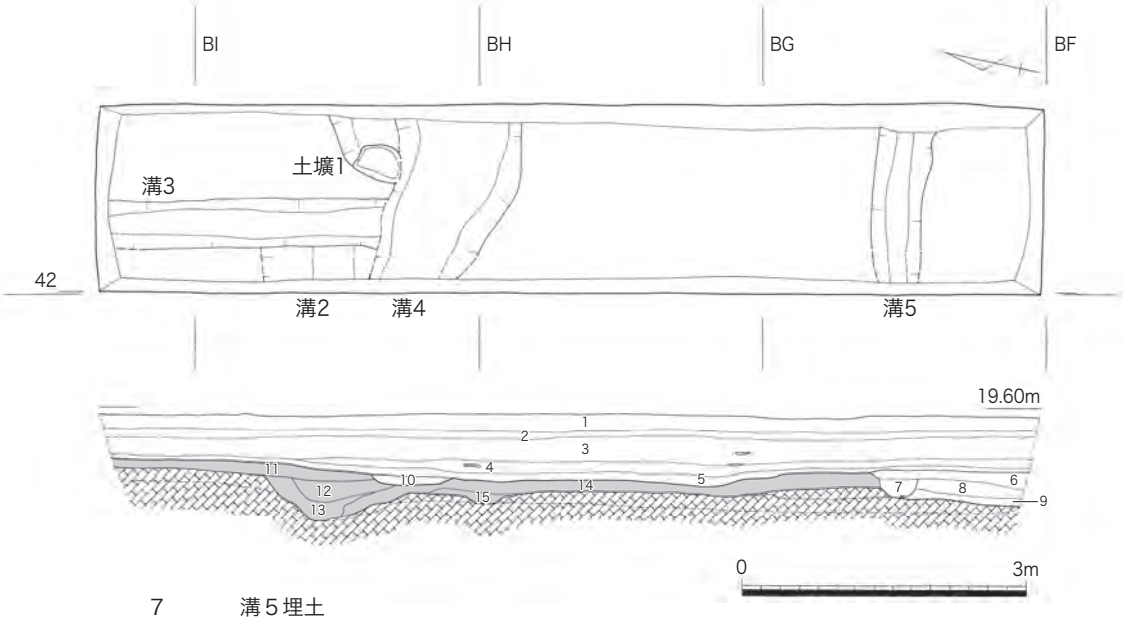
Ｔ１Ａで検出した深さ0.98mの緩やかな断面の南北方向の溝で、幅はＴ１Ｂ西端の落ちを東肩部と考えれば7.3mである。Ｔ１Ｂ西端の落ちは、瓦片の出土が多く、Ｔ１Ａの埋土とは異なり、現用水路の裏込め土の可能性もある。備国１溝26との位置関係から、西面築地の外溝を踏襲した溝であると思われるが、時期は明確でない。

（３）Ｔ14

概要（図８、図版２－２）

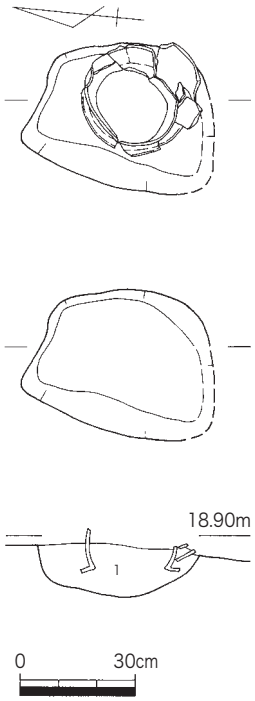
備国１塔調査区において検出した、塔基壇構築以前に掘削された備国１溝19（東西方向）が西方の回廊、中門方向へ延長するのかどうかを確認するために設定した。すなわち、寺院造成に関しての課題を追究する目的で調査を行った。備国１溝19は塔の南側柱下に設けられた東西方向の溝で、基壇に先行する。寺域東西軸と並行するため、基壇を構築する以前の寺院の基盤造成に伴う地割溝の可能性が想定され、西方にある回廊や中門との位置あるいは層位といった関係が注目されるところであった。また、塔は使用された軒瓦も他の堂宇とやや異なっており、造営の時期差をより鮮明とするためにも、この溝の性格を考える必要性があった。

調査区の規模は長さ10m、幅２ｍで、寺域中軸からは東へ40m、回廊南東隅よりやや東である。厚さ47～75cm の水田耕作に関わる土層（１・２層:現水田、３～５層:旧水田）の下位が遺構面であり、寺院の基盤面をなす。遺構は溝４条と土壙１基を検出した。調査区南部の溝５以外は、北半に遺構が集中する。溝２・３・４は寺院造成以前の遺構とみられ、土壙１は溝４を掘削して設けられた地鎮遺構と考えられる。結果として、塔基壇下で確認された備国１溝19は東西方向の溝２とつながる可能性もあるが、はっきりと確定できなかった。なお、地山は標高18.57～18.96mで検出され、北から南にむかって下降する。



7　　溝５埋土
10　　溝４埋土
11～15　基盤造成土（溝２埋土含む）

図８　Ｔ14（1/80）



1　黒褐色粘質土

図９　土壙１（1/20）

土壙１（図８・９、図版２－３）

検出面で長軸51cm、短軸38cm の不整円形の掘り方に土師器の甕110が底部を上に向けた状態で埋置されていた。甕110の時期は奈良時代に属すものと考えられる。内容物は認められなかったが、その特異な状況から地鎮遺構と想定される。

溝２（図８、図版２－４）

検出面での幅1.53m、深さ49cm で東西方向に設けられている。埋土はしまりが強く、出土遺物はなかった。幅3.7mの備国１溝19とは位置的には接続しているとみてよい。一方で、備国１溝19では瓦片の出土が多数あり、遺物の包含状況がまったく異なる。幅がより狭く、底面標高は18.40mと20cm 低い。溝３との切り合い関係から、溝２は寺院造成以前まで遡る可能性が考えられる。したがって、備国１溝19とは同一の溝でないことも考えられる。その場合、塔基壇構築以前の基盤造成のための地割溝と想定していた備国１溝19は、西方へは回廊まで続いておらず、塔周辺で途切れる可能性がある。塔基壇の地業の一部とも考えてもよいかもしれないが判断しかねる。また、塔基壇外南側でも備国１溝19と並行した東西に延びる下がりを確認しているが、これに続くと考えられるような遺構は調査区内で確認されなかった。

溝３（図８）

検出面での幅53cm、深さ19cm の南北方向の溝である。溝４に切られ、それより南方には延びない。前後関係としては溝２より新しい。出土遺物には土師質の土器片が少量認められるが、時期は明確でない。寺院造成以前の溝の可能性がある。

溝４（図８）

最大幅1.89m、深さ10cm の浅い東西方向の溝である。出土遺物には土師質の土器小片が少量認められるが、時期は明確でない。寺院造成以前の溝の可能性がある。

溝５（図８）

調査区南端で検出した最大幅59cm、深さ21cm の東西方向の溝である。

（４）Ｔ20

概要（図10、巻頭図版２、図版３－１）

北門を確認するため、北面築地の外溝である備国１雨落ち溝19を手掛かりに、西方へ延長し、寺域主軸線上付近に設けた調査区である。長さ16m、幅６ｍの規模で、西端２ｍは北へ２ｍ、南へ４ｍ拡張した。西端２ｍ部分は、昭和49年度調査の再確認を行った。

厚さ25cm の耕作土・床土を除去すると、すぐに遺構面に達し、地形は後世の水田耕作により大きく削平を受けている。検出した遺構は、礎石の抜き取り穴１基、溝２条、柱穴４基である。

地山は調査区東半で備国１Ｔ11と同様な礫を多く含む黒灰褐色粘質土で、これを掘削して北面築地外溝と考えられる溝６が設けられている。調査区北西側では地山は黄色系の土層となる。溝６は備国１Ｔ11で検出した築地外溝である雨落ち溝19と接続する。溝６は西方で途切れ、途切れた先約6.5m

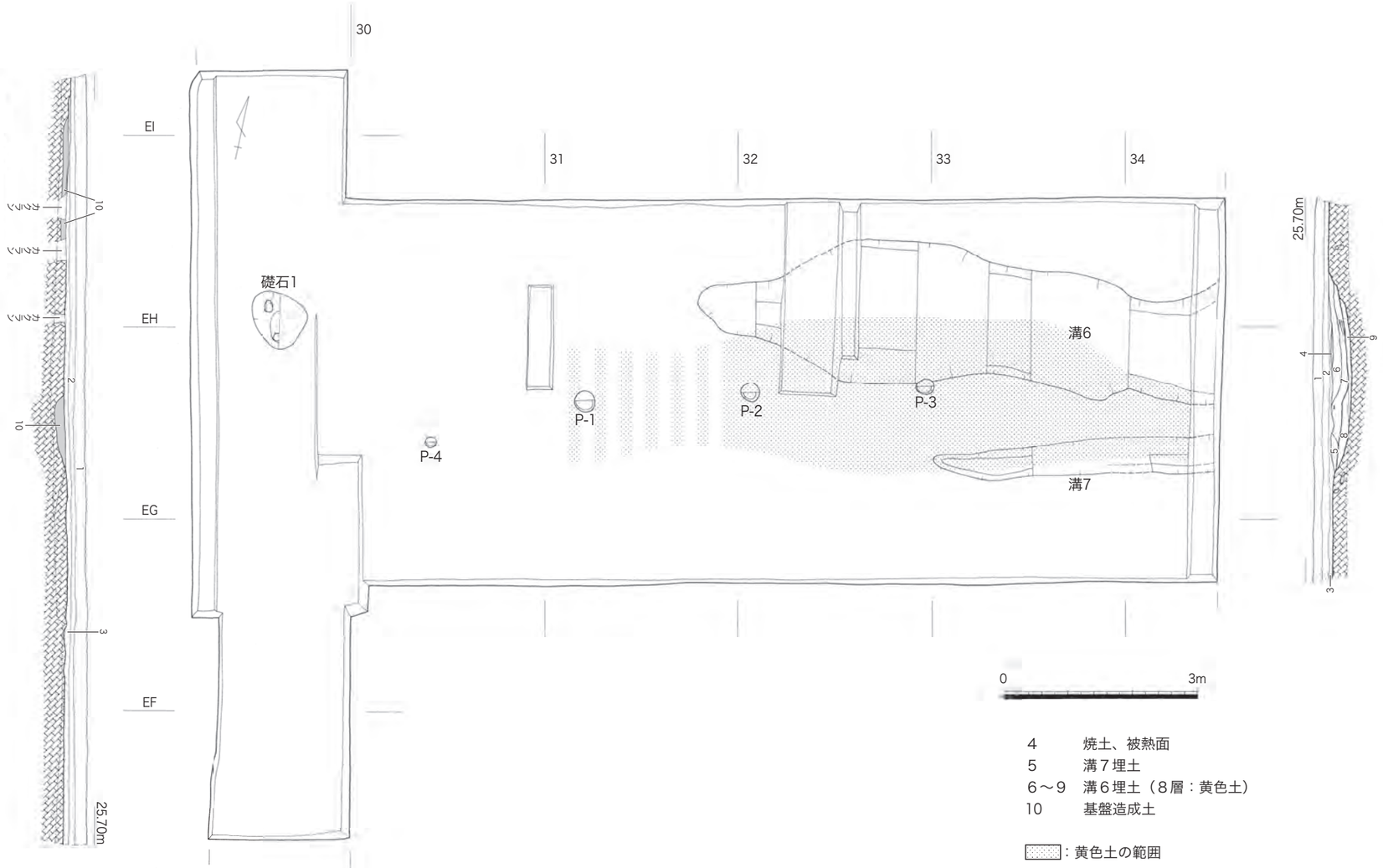


図10　Ｔ20（1/80）

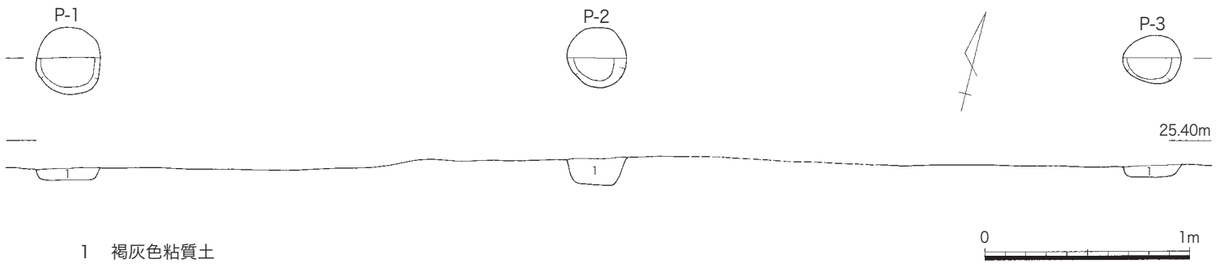
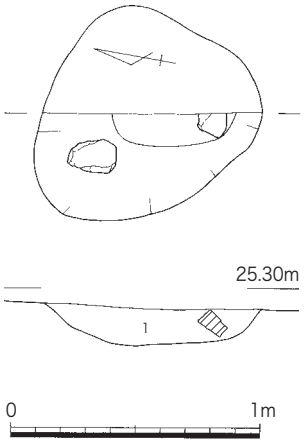


図11　Ｐ－１～３（1/30）

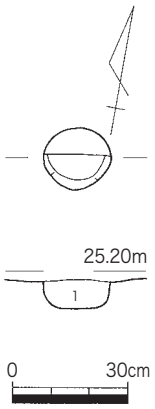
のところで礎石の抜き取り穴（礎石１）１基を検出した。この抜き取り穴は中軸線付近であることから、北門の礎石の一つである可能性が高い。しかし、その他の礎石や基壇の痕跡は確認できず、詳細な構造は不明である。北門は、礎石１の状況から礎石建ちであったとみられる[1]。

また、北面築地塀は既に削平により失われていたが、溝６底面中央付近から南側、調査区東半のほぼ中央で幅1.3～2.4mの黄色土が帯状に東西に延びており、これが北面築地塀から流出した版築土の痕跡ではないかと想定した。



1　灰褐色粘質土

図12　礎石１（1/30）



1　褐灰色粘質土

図13　Ｐ－４（1/20）

礎石１（図10・12、図版３－３）

調査区西端で検出した長軸90cm、短軸76cmを測る礎石の抜き取り穴である。礎石は遺存していないが、30cm大の根石２個を確認した。北面築地外溝の溝６と寺域中軸線との位置関係から、北門の礎石の一つであったと考えられる。この他推定される位置に礎石の痕跡は見つけることができなかったが、後述する黄色土の範囲と溝６の位置関係から、北門の北側柱の礎石と考えられる。

溝６（図10、図版３－２・４）

最大幅2.2m、深さ30cmの東西方向の溝で、埋土には瓦片の他、奈良時代後半に属す須恵器や土師器が多数含まれていた。備国１雨落ち溝19と接続するもので、北面築地外溝とみられる。調査区中央付近で途切れて西方へは続かないので、北門を通用して寺域外へ出られる構造になっていたと考えられる。

埋土は６～９層である。６・７層に上記の遺物を含み、８層は東西に帯状に続く黄色土の堆積である。黄色土の下には、初期の砂質土の堆積層である９層がみられる。

溝７（図10）

溝６の南側に位置する溝で、溝６とほぼ並行している。幅55cm、深さ10cmと浅く遺存し、埋土からは、奈良時代後半に属す須恵器や土師器が出土した。調査区東端で溝６と接する。

Ｐ－１～３（図10・11）

調査区中央付近に東西方向で並ぶ柱穴列である。直径約30cmの円形で、Ｐ－１・２間2.6m、Ｐ－２・３間2.7mを測る。溝６とＰ－３との切り合い関係から、溝６が埋没した後に設けられた柱穴であり、北面築地塀とは直接関係ないものとみられる。

Ｐ－４（図10・13）

直径18cmの円形を呈す。Ｐ－１～３の柱穴と同様の性格と位置づけられる。

帯状の黄色土（図10、巻頭図版２）

溝６の南半から溝７にかけての幅約1.3～2.4mで黄色土の広がりが認められた。黄色土は調査区東端から西にむかって帯状に延びているが、西半では地山との差異が不明瞭となる。断面観察によると、溝６の初期堆積後に、溝６の南斜面側のみに堆積している。北面築地塀自体は削平されてしまっているが、築地塀を構成した黄色の版築土が流出し、かろうじて遺存したものとみられる。よって、この範囲以南に北面築地塀が所在していたことが推定される。

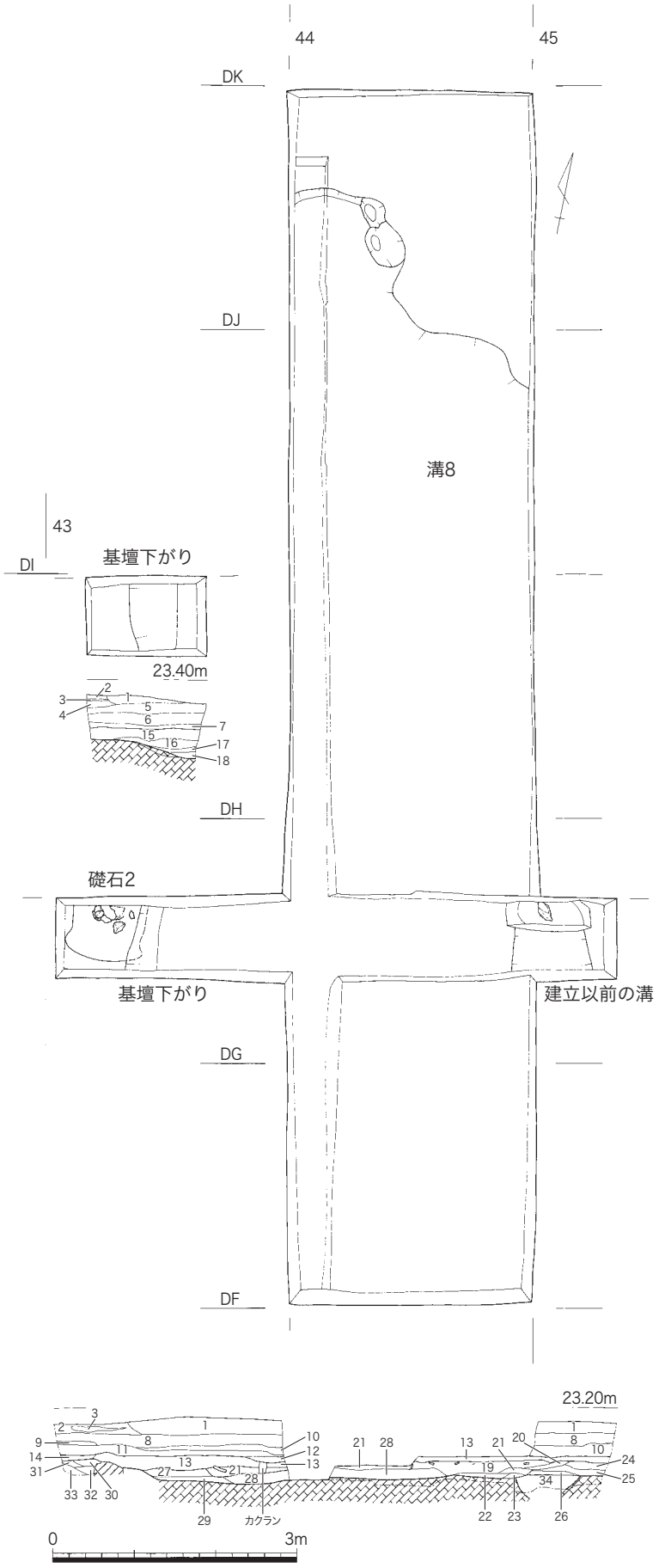


図14　Ｔ21（1/80）

（５）Ｔ21

概要（図14、図版４－１）

僧房東端の状況を詳細に把握するために長さ15m、幅３ｍの南北方向の調査区を設定し調査した。この西側で調査を行った備国１Ｔ８では、同一基壇上に創建時の僧房と考えられる備国１礎石80・85以西の建物と８ｍ以上の間隔を経て東側に備国１礎石86・87の礎石配置を確認していた。この東側の礎石の性格を把握することもこの調査区の目的であった。

水田耕作土（１層）と床土（８層）を除去後、流土を介し、16～29層が溝８の埋土となる。調査区のほぼ全体で、たわみ状の溝８を検出したため、ＤＧラインより北１～２ｍの間の東西調査区と溝８北部以外は掘り下げを停止し、調査の主眼である建物の痕跡を探る目的で、備国１礎石86へむかって調査区を西へ拡張した。礎石の抜き取り穴１基（礎石２）を検出したが、礎石２の東ですぐに遺構面は下がり、溝８となる。溝８の埋土は黒褐色土を基調とし、基盤層も同色を呈していた。34層は基盤層で寺院造成以前の流路の可能性がある。礎石２の北方３ｍにも１×1.5ｍの調査区を設け、礎石の続きを追究したが、礎石

16～29　溝８埋土
30～33　礎石２据え付け掘り方埋土
34　　寺院造成以前の溝埋土

は認められず、遺構面の下がりのみを確認した。

したがって、備国１礎石86・87から東には礎石２が続いたが、いまだ不明な点が多い。そのため、僧房西側を調査したＴ25・31・32・34の成果からの援用や、僧房東部においてもう少し広い面積での調査が必要であると考えられた。

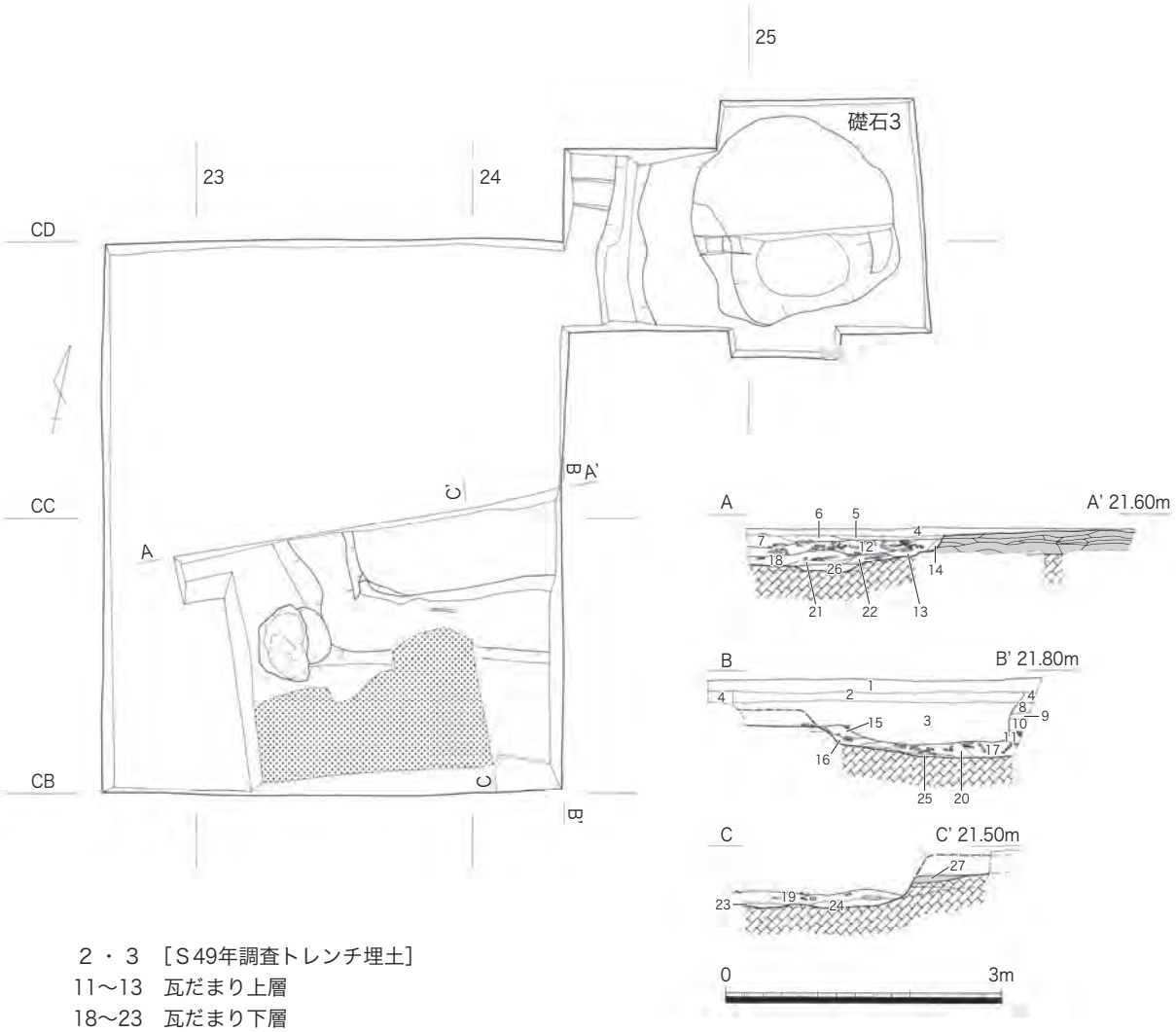
礎石２（図14、図版４－３）

調査区を拡張した地点で検出した根石で、備国１礎石86との間隔は14尺である。検出面で約1.7m以上の据え付け掘り方を確認した。掘り方内の根石の間からは平瓦片が出土している。

溝８（図14、図版４－２）

調査区のほぼ全体で検出した、基壇東側の広く浅い溝である。調査区外に広がる、溝の東・南側の状況は明瞭でない。僧房基壇の雨落ち溝を兼ねるものと想定されるが、溝からは吉備系土師質土器椀**147**～**149**が出土し、また調査区内の包含層から須恵質土器椀**155**も見られるので、時期として古代末～中世前期までの遺物が認められる。

（６）Ｔ22



２・３　［Ｓ49年調査トレンチ埋土］
11～13　瓦だまり上層
18～23　瓦だまり下層
26　　初期流土
27　　基壇土

図15　Ｔ22（1/80）

概要（図15、図版５－１、２）

金堂については、『備国１』で北東部を含む約３分の１を面的に調査しており、礎石の配置などから桁行７間（11・12・14・14・14・12・11尺）×梁行４間（11・12・12・11尺）の建物を想定した。さらに南西隅の礎石の状況を確認することによって詳細な規模や構造を把握する目的で、基壇南西隅に５×６ｍの調査区を設定し掘り下げを行った。調査途上で調査区南西部と北部は水田耕作土の除去までで止め、南東部の昭和49年度調査のトレンチを再発掘した。

基壇南西隅を検出し、周囲には瓦だまりが認められた。昭和49年度調査と同様に雨落ち溝内に礎石１基が遺存していたが、その機能はわからない。金堂基壇は、上部は大きく削平を受けているが、高さ約37cm が残存している。掘り込み地業は認められず、標高21.1～21.2ｍまでは地山を削り出し、それより上位は２～10cm 程度の薄層で版築がなされていた。以前の調査成果と同様に、基壇外装の痕跡は認められず、雨落ち溝の埋土ははじめに土師器小片を含む褐色系の砂質土（18～23層）が堆積し、その上層（11～13層）に瓦だまりが形成されている。

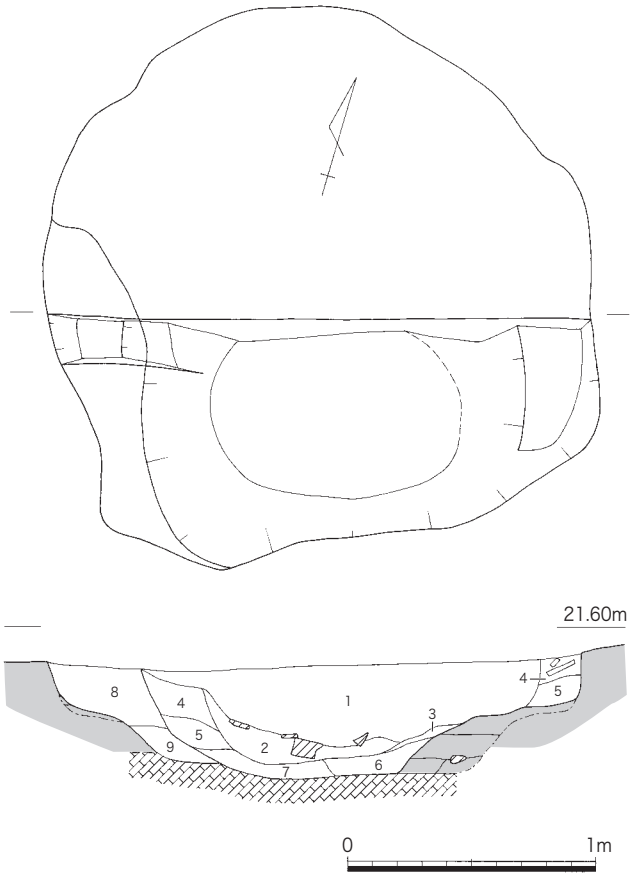
また、建物の南西隅の側柱の配置を確認するために、調査区北東隅を拡張した。結果、一部重複する礎石の抜き取り穴と据え付け掘り方（礎石３）を検出した。礎石３からの基壇の出は、14尺（4.16m）と考えられる。

礎石３（図15･16、図版５－３）

金堂の南西隅廂の側柱にあたる。礎石および根石は遺存していなかったが、礎石抜き取り穴と据え付け掘り方を検出した。

礎石の据え付け掘り方は、南西隅に残っており、大半が抜き取り穴で壊されている。抜き取り穴は直径約2.2ｍの不整円形で、埋土に石材や瓦片などを含んでいる。

礎石の据え付け掘り方は基壇版築層を掘削して設けられており、この据え付け方法は備国１金堂調査区においても確認している通りであろう。



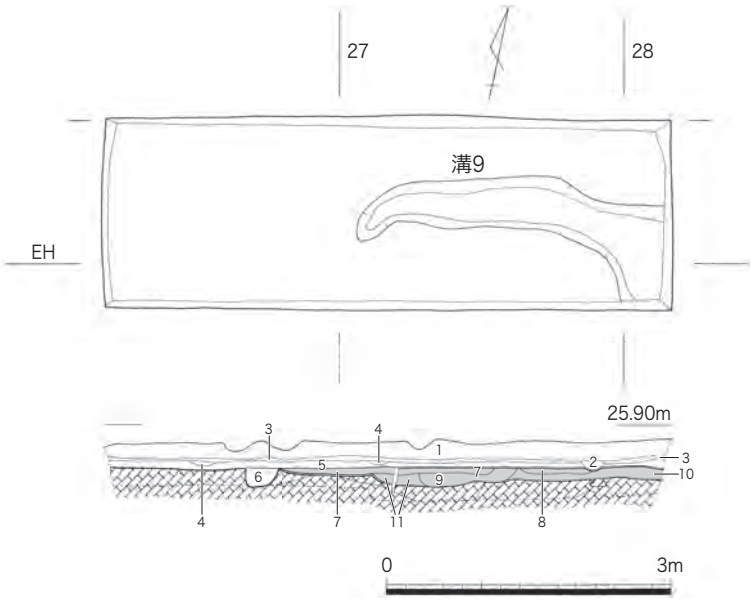
1　暗褐灰色粘質土［抜き取り穴埋土］
　（黄褐色粘質土塊・青灰色砂質土混）
2　青灰色粘土［抜き取り穴埋土］
3　暗黄褐色粘質土［抜き取り穴埋土］
4　黄褐色粘質土［抜き取り穴埋土］
5　暗黄褐色粘質土［抜き取り穴埋土］
6　暗褐色粘質土［抜き取り穴埋土］
7　明黄色微砂質土［抜き取り穴埋土］
8　黄褐色粘質土［据え付け掘り方埋土］
9　暗黄灰色粘質土［据え付け掘り方埋土］

図16　礎石３（1/30）

（７）Ｔ23

概要（図17、巻頭図版２、図版３－５）

Ｔ20において検出した北門の礎石と考えられる礎石１の西方で、北門を構成する他の礎石や基壇を確認するために設定した。調査区の規模は長さ６ｍ、幅２ｍで、水田どうしの境にある用水路と畦畔を壊さないように設けたため、Ｔ20西端とＴ23東端は３ｍの間隔がある。



７～11　基盤造成土

図17　Ｔ23（1/80）

現水田耕作土・床土（１・３層）、旧水田層（５層）を除去すると、標高25.45ｍで明黄褐色の地山もしくは基盤造成面と考えられる面に達する。検出した遺構は溝９のみで、想定された北門礎石の痕跡は確認されなかった。Ｔ20礎石１の検出面が標高25.24ｍであるので、寺域中軸付近から原地形そのものが高くなっていくとみられる。これは、Ｔ23北や西の一段高い水田で調査した備国１Ｔ10・12の地山面の標高が高いのと合致する。また、昭和49年度の復元主軸に対し寺域中軸線（主要伽藍造営軸）の振れはN- 1°48′49″-Eと算出されているので、北で東に振れることを考慮すれば、北門の遺構はＴ20西半が中心となるものと考えられ、より西方のＴ23では遺構が確認されなかったと思われる。

溝９（図17）

調査区東半で検出した深さ約９cmの浅い溝である。埋土は灰色粘質土で北門に伴わないと判断され、後世に掘削されたものであると考えられる。

（８）Ｔ24

概要（図18）

回廊内、金堂・講堂間の東側に設定した長さ10ｍ、幅３ｍの調査区である。中門と講堂を結ぶ回廊をもつ寺院の場合、回廊内で金堂・講堂間の東西に鐘楼あるいは経蔵が所在する事例があることから[(2)]、鐘楼・経蔵の確認のために調査を行った。

約70cmの水田耕作土・客土（１～５層）を除去すると、調査区西部において標高21.45ｍ前後で瓦だまりが検出され始めた。これらは、金堂外周の備国１雨落ち溝１にみられた瓦だまりの標高や状況と同じであり、この範囲まで瓦の堆積が広がっていることがわかった。そのため、調査区全体での掘り下げを止め、北壁に幅60cmのサブトレンチを設定し、中央と東端の２ヵ所で地山まで掘り下げを行ったところ、標高約21.0ｍで黄褐色の地山面を検出した。この標高は、金堂北東隅の雨落ち溝１の外側の標高とほぼ同一であり、回廊内の空間がほぼ平坦な整地面となっていたものと考えられる。したがって、調査区内には鐘楼あるいは経蔵に関わる遺構は所在しないと思われる。

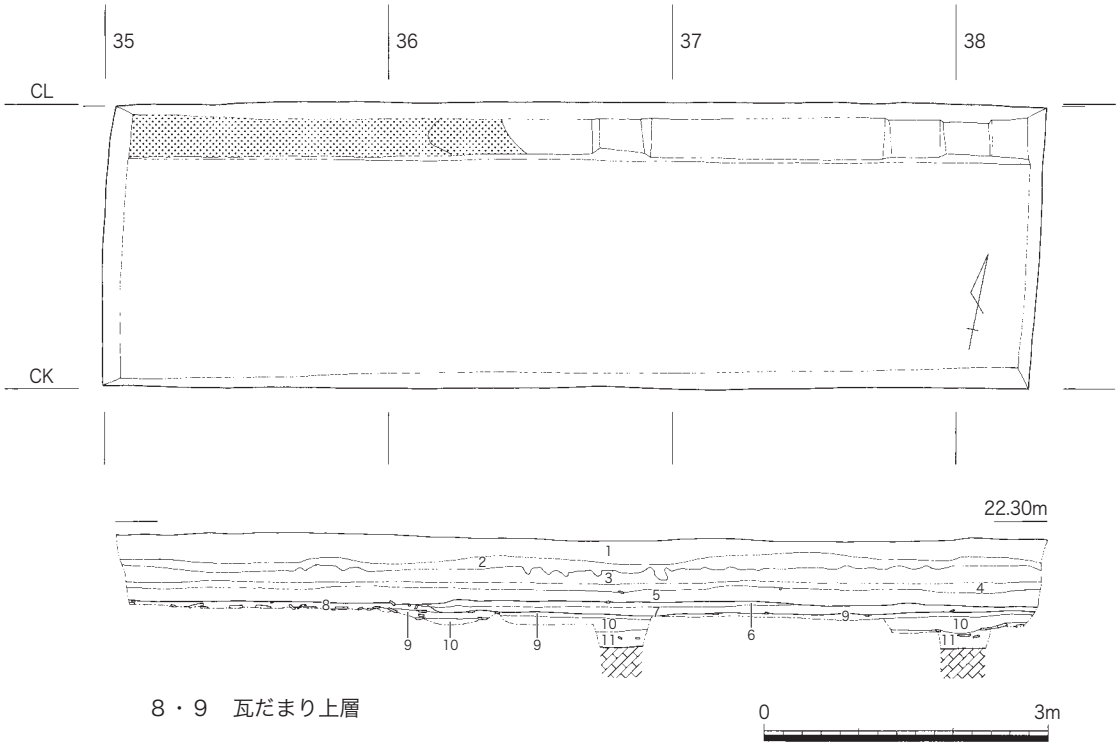


図18　Ｔ24（1/80）

註

（１）国分寺跡、国分尼寺跡で北門を確認している例は少ないが、阿波国分尼寺跡では桁行３間（11･12･11尺）×梁行２間（11・11尺）の三間一戸の門が検出されている（徳島県教育委員会1972）。礎石１や溝６付近の地形の状況からは、北門は本遺跡で確認している南門と中門のような桁行５間×梁行２間の大規模なものでなく、桁行３間×梁行２間以下の規模を想定してよいと考えられる。

（２）紀伊国分寺跡、三河国分尼寺跡、相模国分尼寺跡で、回廊内に鐘楼･経蔵が建てられている。一般的には、回廊外の講堂・僧房間の東西に所在するため、この位置については第５次調査Ｔ28で調査を行った（第３章第３節参照）。

引用・参考文献

徳島県教育委員会1972『阿波国分尼寺遺跡（第２次）緊急発掘調査概報』

第３節　第５次調査

（１）概要（図19）

第５次調査では、計４本のトレンチ調査を行った。僧房以北を調査対象とし、主に僧房と寺域内の諸施設の確認に努めた。具体的な調査目的は、１．僧房の西、北端の確認（Ｔ25･26）、２．僧房から北門までの区域にある施設の確認（Ｔ27）、３.鐘楼あるいは経蔵の確認（Ｔ28）であった。

調査成果として、僧房についてはその梁行が３間である可能性が生じたことや基壇がＴ25より西方へ続くことなどが判明し、次年度へ調査課題を残すこととなった。また、各所から鍛冶炉等の検出や鍛冶・鋳造関連遺物が出土し、僧房より北方および回廊外でも青銅製品や鉄製品の製作が行われていたことが判明し、寺院内工房の様子が明らかになり始めた[1]。

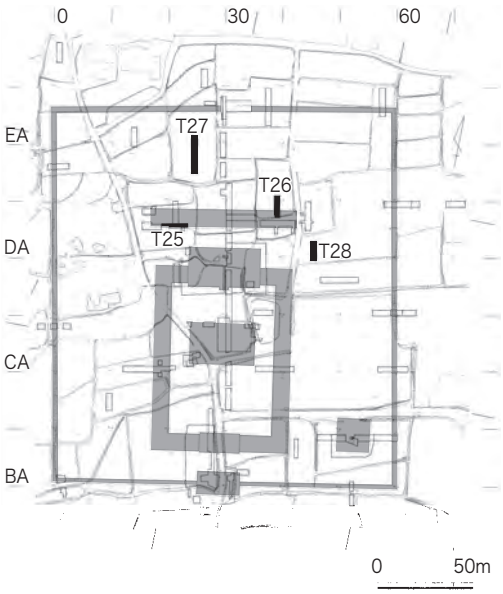


図19　第５次調査区配置図（1/4,000）

（２）Ｔ25

概要（図20、図版６－１・２）

僧房の西端を確認するために設定した長さ10m、幅２mの調査区である。これまで僧房西端の状況は未確認で調査は主に寺域主軸より東側に集中していた。備国１Ｔ８で想定された創建時の僧房と考えられる備国１礎石80・85を寺域中軸で折り返した地点を僧房西端と推定して掘り下げを行った。調査の途中で、僧房西端が調査区よりさらに西に想定されたため、長さ４m、幅１mで調査区を西へ拡張した。

厚さ30～40cm の耕作土と流土（１～４・８・９層）を除去すると、上部が削平された状態で僧房基壇が検出された。遺構は礎石の抜き取り穴５基、基壇の南辺上端、土壙２基、溝１条を確認した。図示していないが、調査区東西を横断して後世に現代の暗渠が設けられており、基壇と礎石抜き取り穴の一部が削平されていた。礎石４～８は建物の南側柱の礎石抜き取り穴で、10尺（2.97m）等間隔で並び調査区内で桁行４間分を確認した。しかし､礎石８以西も基壇が途切れずに続くことが判明し、さらに西へ調査区を延長する必要性が生じた。これについては、第６次調査Ｔ32において後述する。また、第５章で総括するが、Ｔ25礎石４～８の桁行と備国１礎石Ｔ７・Ｔ８で想定した10尺等間隔の桁行は合致している。

基壇土の断ち割りは行っていないが､基壇は黄色の地山を削り出して構築しているものとみられる。また、礎石抜き取り穴より一回り大きな幅で、礎石据え付け掘り方を検出した。特筆すべき遺物として、基壇南辺の斜面で、リング状の銅製品**333**が出土している。

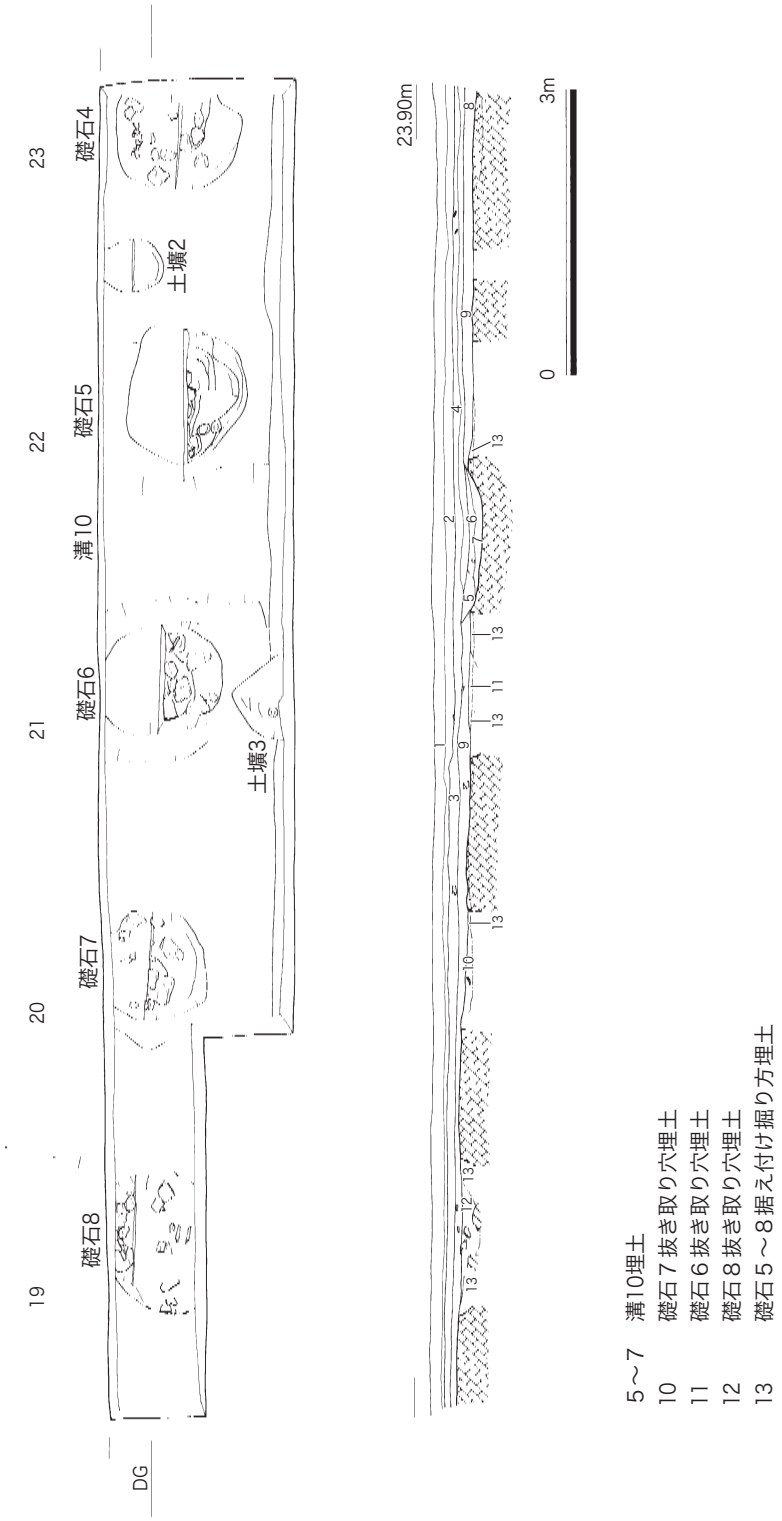


図20　Ｔ25（1/80）

この他の溝10と土壙２・３は僧房には直接関係のない遺構である。

礎石４～８（図20・21、図版６－３・４）

僧房建物の南側柱の礎石の抜き取り穴である。長軸約1.4m、短軸約1.1mを測る不整円形を呈し、埋土には瓦や土器、浮いた根石が含まれる。基本的に抜き取り穴の半裁に止めたが、礎石５のみ据え付け掘り方の南東４分の１を掘り下げ、礎石・根石の据え付け方法を確認した。礎石５は個別に図示している（図21）。

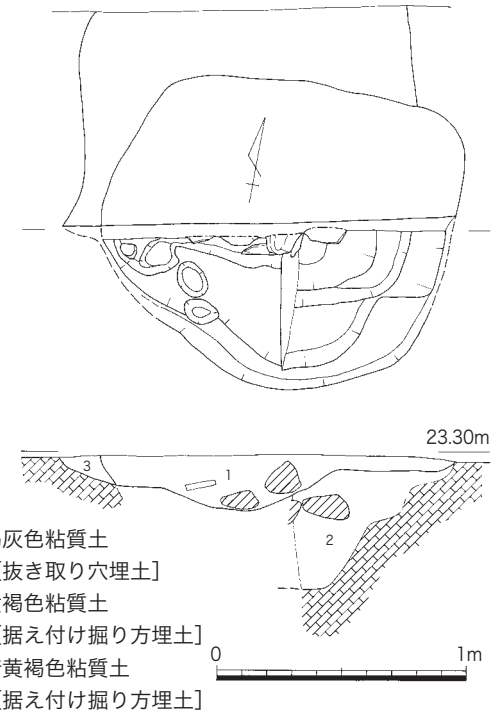


図21　礎石５（1/30）

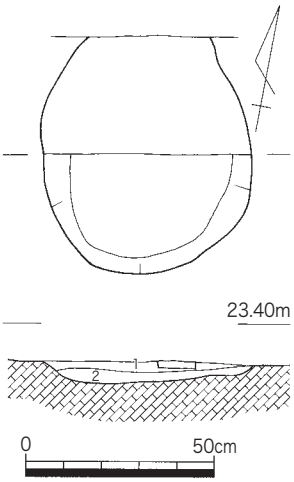


図22　土壙２（1/20）

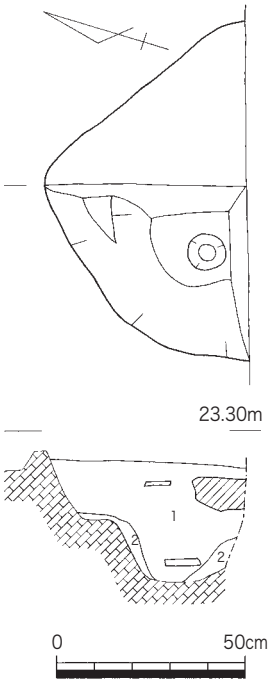


図23　土壙３（1/20）

また、現代暗渠で削平された部分や抜き取り穴を半裁した部分で据え付け掘り方を検出できたところがある。掘り方は幅が約1.6ｍで北にむかって延びているようにみえた。礎石５の据え付け掘り方は、検出面からの深さ52cm を測り、掘り方埋土は地山に由来する黄褐色土で15～20cm 大の根石を含み込んでいる。

礎石４～８の柱間は等間隔で10尺（2.97ｍ）を測る。この柱間寸法は、備国１Ｔ７・８で想定した桁行柱間と同じであり、創建時の僧房建物とみてよい。

土壙２（図20・22）

礎石４・５の間で検出した長軸63cm 以上、短軸55cm、深さ６cm の楕円形状の土壙である。埋土下層には炭粒が堆積していた。時期は明確でないが、僧房に直接伴うものではないと考えられる。

土壙３（図20・23）

礎石６の南、基壇南辺を掘削して設けられた土壙である。調査区南壁際で検出したため、全形は確認していないが、方形に近い形状となる可能性がある。長軸90cm、短軸52cm 以上、深さ35cm を測る。北側は二段掘りになっている。基壇南辺を掘削しているので僧房基壇が失われた後に設けられたものである。

溝10（図20）

礎石５と６の間で検出した、幅1.72ｍ、深さ23cm の南北方向の溝である。埋土は５～７層で、すべての層で炭粒を多く含んでいた。基壇上に堆積した流土上から掘られており、基壇上部が削平された後に設けられたものである。したがって、僧房に伴わない。

（３）Ｔ26

概要（図24、図版７－１）

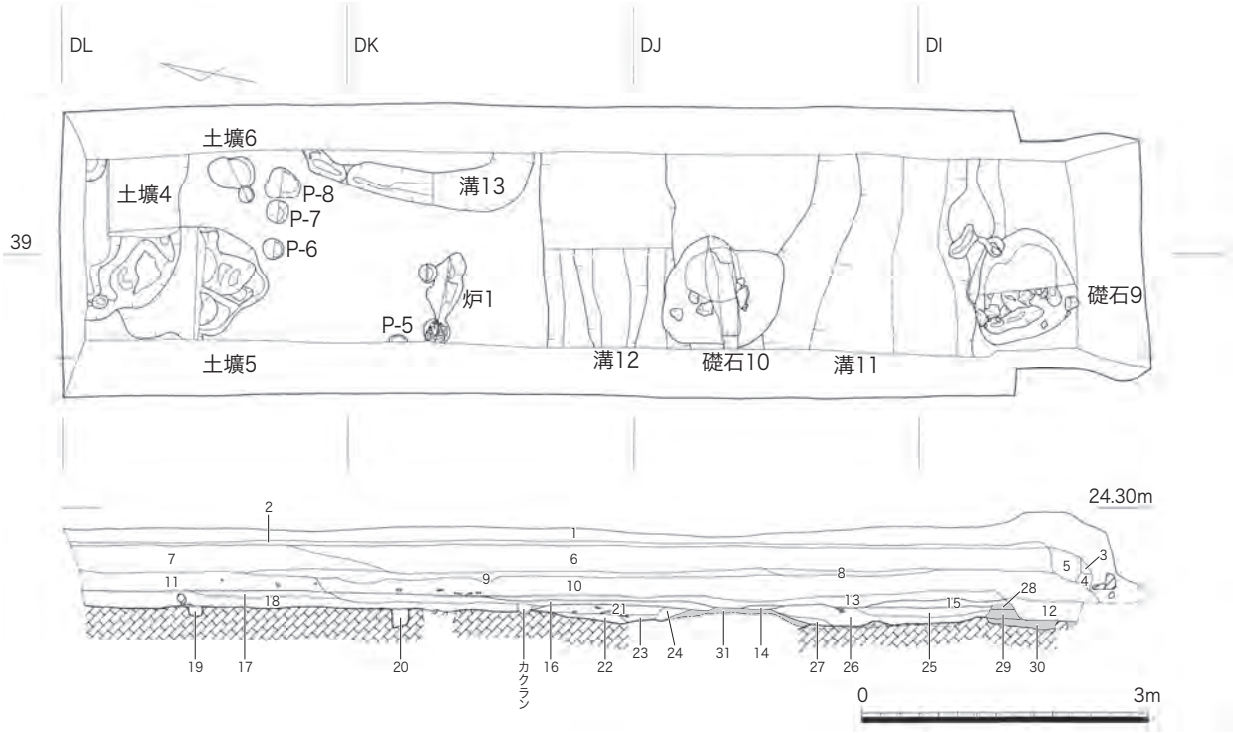
僧房の北端を確認するために設定した長さ10m、幅３mの調査区である。備国１Ｔ８礎石80・85と梁方向が合う位置に設け、最終的には調査区南端を拡張したため、長さ11.4mとなった。

厚さ約20cm の耕作土・床土（１・２層）、厚さ約50cm の客土（６～12層）を除去後に、流土（13～18層）がみられる。流土下が遺構面で、僧房礎石の抜き取り穴２基、溝３条、土壙３基、柱穴４基、炉１基を検出した。溝11・12はいずれも東西方向の溝で、僧房基壇北端を限る雨落ち溝になる可能性がある。同様に、この調査区においては、礎石９と礎石10を梁方向に２基検出した。後述のように、礎石10は当初には礎石の痕跡とは認識せず掘り下げており、調査途中礎石の可能性が高いと考えられた遺構で、僧房の梁行については不確実な部分が多い。礎石10を僧房北側柱の礎石と考えると梁行３間、雨落ち溝は溝12、礎石９を北側柱の礎石と考えれば梁行２間、雨落ち溝は溝11と想定される。僧房の梁行、基壇北端については、さらに別地点での確認が必要となり、第６次調査Ｔ31を設定して僧房西部の梁行の状況確認を行っている（第３章第４節参照）。

溝12より北側、つまり僧房基壇の外側で、時期は明確でないが、鍛冶炉と考えられる炉１を検出したので、寺院内の金属製品の生産がこの周辺で行われていたことが明らかとなった。

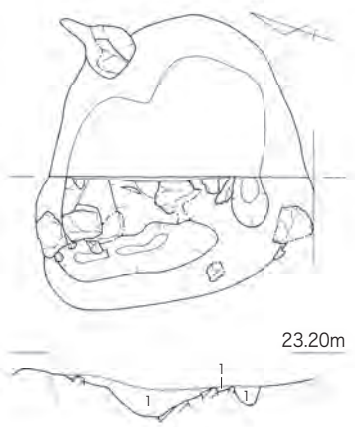
礎石９（図24・25、図版７－３）

礎石は既に抜き取られており、抜き取り穴と据え付け掘り方が残る。据え付け掘り方には15cm 大の根石が認められる。検出面において、抜き取り穴は長軸1.05m、短軸80cm で、据え付け掘り方は



19	土壙５埋土	25	溝11上層埋土
20	Ｐ－５埋土	26・27	溝11下層埋土
21～24	溝12埋土	28～31	基壇土

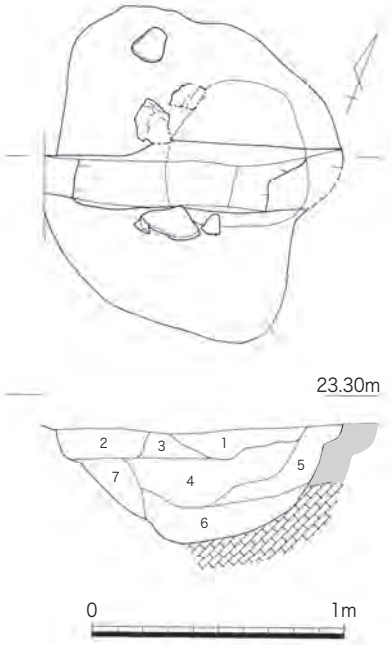
図24　Ｔ26（1/80）



1　褐灰色粘質土
［抜き取り穴埋土］

0　50cm

図25　礎石９（1/30）



1　褐灰色粘質土［抜き取り穴埋土］
2　褐灰色礫混層［据え付け掘り方埋土］
3　暗灰黄色粘質土［据え付け掘り方埋土］
4　黒褐色粘質土（礫含む）
　［据え付け掘り方埋土］
5　黒褐色粘質土［据え付け掘り方埋土］
6　黒褐色粘質土（礫多く含む）
　［据え付け掘り方埋土］
7　暗灰黄色粘質土［据え付け掘り方埋土］

図26　礎石10（1/30）

長軸1.27m、短軸1.06mを測る。梁行南側の備国１礎石80との柱間寸法は10尺（2.97m）で、僧房を構成する礎石となる。

礎石10（図24・26、図版７－４）

調査当初、抜き取り穴のみを土壙として認識し掘り下げていた遺構である。周囲の精査により、長軸1.42m、短軸1.20mの据え付け掘り方とみられる範囲を確認し、15～25cm大の根石状の礫が認められることから、礎石の痕跡と判断した。礎石10を含めると、僧房の梁行は３間で、礎石９との柱間は10尺（2.97m）と想定される。なお、基盤層と据え付け掘り方埋土は区別が難しく礎石の痕跡と誤認している可能性はある。

溝11（図24）

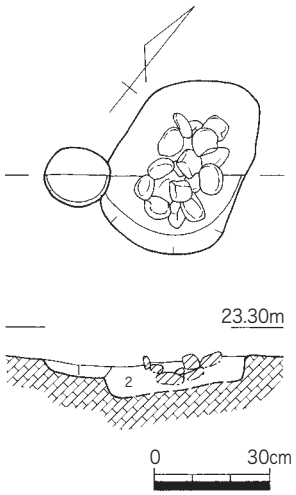
調査区南部、礎石９・10間で検出した東西方向の溝である。幅は2.20mと広く、深さは16cmとかなり浅い。埋土は25～27層で、26層は礫を多く含む土層で、特筆すべき遺物として緑釉陶器の皿**286**が出土した。

溝12（図24、図版７－２）

調査区のほぼ中央、礎石10の北側で確認した東西方向の溝である。幅は1.62mで瓦片をよく含む。遺物の出土や埋土の状況は、溝11とかなり異なる。礎石10が僧房北側柱の礎石と想定すると、この溝が僧房基壇北側の雨落ち溝といえよう。昭和49年度確認調査で検出した1.5～1.7mを測る僧房北雨落ち溝（備国１雨落ち溝15）と東西方向でつながる位置であり、ほぼ規模も類似しているので、同一の溝と考えられる。

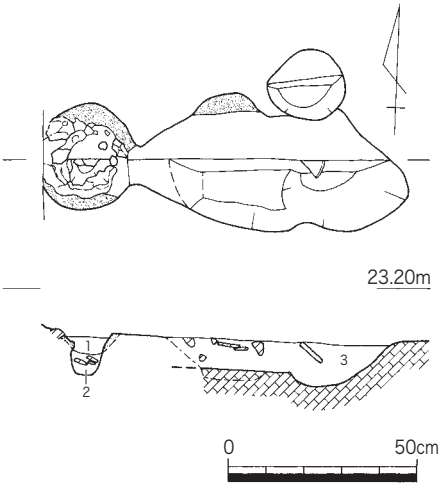
溝13（図24）

溝12の北側で検出した幅35cmの溝である。調査区東方へ続くようであるが、性格ははっきりしない。埋土中の遺物の状況は溝12と似通っており、同時期の可能性がある。



1　灰黄褐色粘質土
2　にぶい黄褐色粘質土

図27　土壙６（1/20）



1　黒褐色粘質土
2　黒色粘質土
3　灰黄褐色粘質土

図28　炉１（1/20）

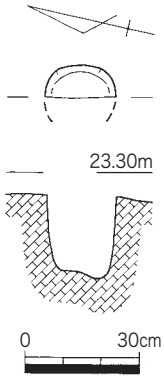


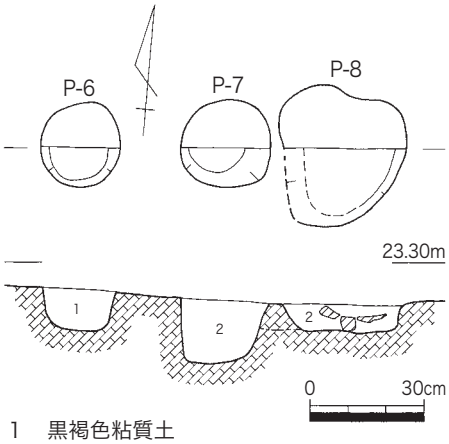
図29　Ｐ－５（1/20）

土壙４・５（図24）

調査区北端で検出した、不整形な浅い土壙である。底面は凸凹ではっきりしない。土壙４からは土師器の杯Ａ165・166や皿167が出土した。

土壙６（図24・27）

長軸46cm、短軸33cmの楕円形状を呈する土壙で、７cm程度の円礫を充填している。備国１講堂基壇北東隅付近で確認されたＰ－10も同様な遺構であったが、どのような性格の遺構か不明である。



1　黒褐色粘質土
2　黒褐色粘質土（炭含む）

図30　Ｐ－６～８（1/20）

炉１（図24・28、図版７－５）

調査区中央部、溝12より北側で確認した炉である。直径28cm、深さ12cmの円形ピットとそれに連なる長軸約70cm、深さ12cmの長楕円形の土壙からなる。周囲は被熱して赤色化している。円形ピットは壁面が硬化して黒灰色を呈しており、直接的な鍛冶関係遺物の出土はないが、鍛冶炉として使用されていたと考えられる。時期は明確でない。

Ｐ－５～８（図24・29・30）

調査区北半で検出した柱穴である。Ｐ－５～７は直径が18～24cmの円形を呈し、Ｐ－８は長軸37cmを測る不整円形である。

（４）Ｔ27

概要（図31、図版８－１）

僧房から北門までの南北約50mの区域にどういった施設が存在するのか確認するため、寺域主軸から西へ11mの地点に長さ20m、幅３mの南北に長い調査区を設けて調査した。この区域におけるこれまでの調査では、昭和49年度確認調査で僧房の北側９mで室町時代の井戸状ピット１基、備国１Ｔ11

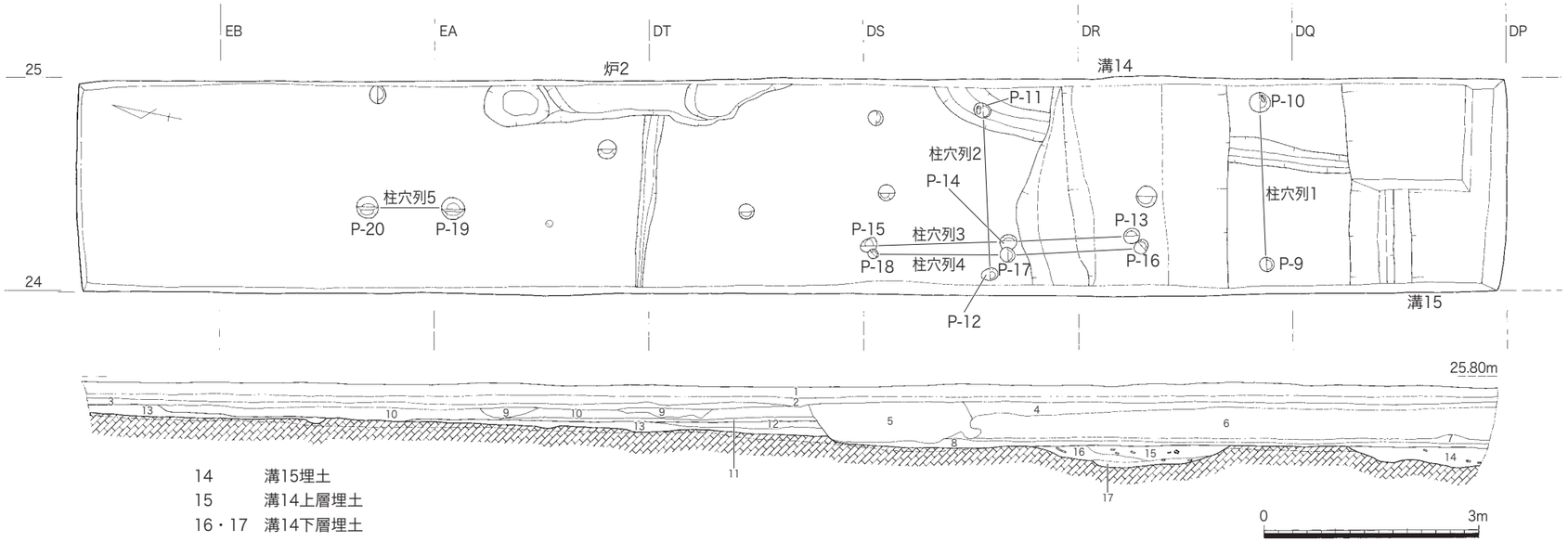


図31　Ｔ27（1/80）

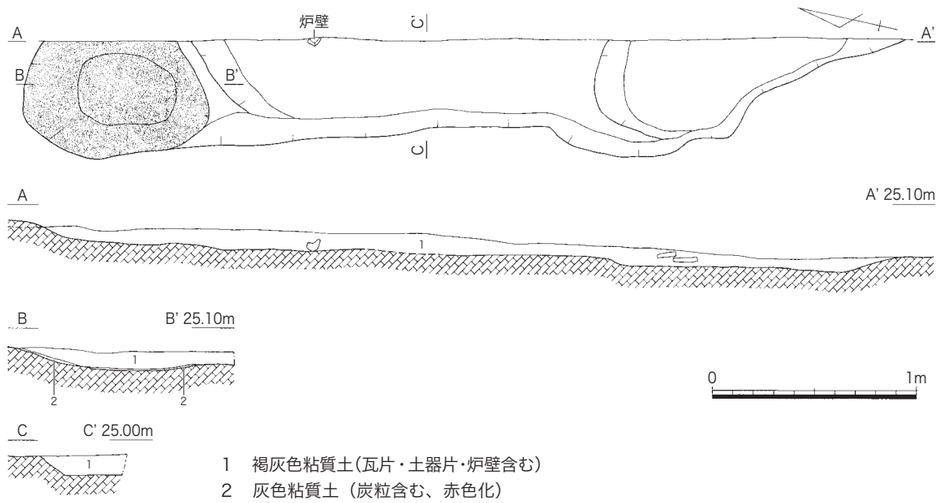


図32　炉２（1/30）

の北面築地より内側でカマド１基、Ｔ26の僧房すぐ北側で炉１基を確認しているのみで、その他は明らかになっていない。北面築地内側のカマドの性格は不明であるが、鍛冶や鋳造といった生産活動以外の火を用いた作業を伴ったようであり、僧房すぐ北側の炉は鍛冶作業が想定される。このように、儀式などを執り行う金堂を中心とした空間とは異なった寺院の維持運営に関わる施設などの存在が考えられる。

厚さ約25cm の現水田耕作土・床土（１～３層）を除去すると、調査区北端から南へ10.5ｍまで（調査区北半）は旧水田・床土層（10・11層）がみられ、その下に厚さ15cm ほどの遺物包含層（13層）が存在し、標高25.0～25.28ｍで黄色粘質土の地山が検出される。それより南側の調査区南半は、50cm の厚い客土（４～６層）の下に、北半とは別の旧水田・床土層（７・８層）があり、標高24.83ｍで地山に達する。調査区の北半と南半には、棚田状に水田２枚があって、最終的に南半に客土を入れ現在の水田１枚にしている。北半には地山上に遺物を包含する13層が形成されているが、南半では旧水田の造成でその包含層と遺構面上部が削平されていることがわかる。

検出した主要な遺構は、溝２条、柱穴列５列、炉１基である。溝14・15はともに東西方向で奈良時代後半～平安時代前半を中心として機能していたと考えられる溝である。羽口や鍛冶滓が埋土中に含まれることから、至近での鍛冶作業が想定される。狭い範囲の調査であり、これらの溝が単なる排水のためか、区画のために設けられたものかは判断しかねる。また、炉２は鋳銅に関係する炉と想定され、寺域北部での銅製品生産が明らかとなった。柱穴列は掘立柱建物となる可能性があるもので、溝14・15が埋没後の平安時代後半以降に属すと考えられる。

溝14（図31、図版８－２）

調査区南端から北へ４～７ｍのところで検出した東西方向の溝である。検出面での幅2.42～2.96ｍ、深さ30cm を測り、北側の肩はやや湾曲し膨らんでいる。遺存状況はよく、調査区範囲外の東西にも延長すると思われる。断面形は緩やかなＵ字形で、埋土の15～17層からは、須恵器・土師器・瓦などが出土した。出土遺物の時期は、奈良時代後半から平安時代前半までが中心である。溝の北斜面に貼りついた状態で須恵器の甕**192**・**193**と平瓦**70**が検出された。また、羽口**319**や鍛冶滓**322**・**323**が出土しており、付近での鍛冶作業が想定される。

溝15（図31）

調査区の南端で検出した東西方向の溝で、北側の肩部は検出したが、南側は調査区外にあると思われる。幅は1.83ｍ以上で、検出面での深さは31cm を測り、底面には弱い凹凸が認められる。溝14と並行して設けられており、その間は約1.7ｍ離れている。出土遺物は須恵器・土師器・瓦で、鍛冶滓**324**も出土している。

炉２（図31・32、図版８－３）

調査区中央やや北側で、東壁にかかって検出した。北側に長さ88cm の円形に掘り窪めた炉床が認められ、全面が被熱し赤色化していた。円形の炉から南へ長さ約6.5ｍの範囲は土壙状に浅く掘り込まれており、その埋土は炭粒や炉壁などを含んでいた。蛍光Ｘ線分析の数値によると、出土した炉壁**326**・**327**は銅の比率が一定程度あり、Ｔ27の包含層からは銅滴**325**が出土していること、また炉床が比較的大きいことなどから、銅製品生産に関する炉の可能性が想定される。出土遺物に須恵器や土師器の小片、瓦片があったが図化できず、時期は明確でない。

西側には、炉２に取り付くように幅10～28cm の東西方向の浅い溝が認められた。また、周辺を取

り囲むように直径20～25cm 程度の柱穴が４～５基あるが、規則的には配置されていない。これらの埋土は炉２のものと同様であったが、どのような機能を持っているのかは不明である。約1.4m西に、直径10cm 程度の被熱面が１ヵ所あった。

柱穴列１・２（図31・33・34、図版８－２）

柱穴列１は、調査区南部の溝14・15間で検出したＰ－９とＰ－10からなり、その心々距離は2.28mを測る。柱穴列２は、溝14の北側で検出したＰ－11とＰ－12からなり、その心々距離は2.29mである。柱穴列１・２は東西に並ぶ柱穴の間隔がほぼ同じで、溝14を挟んで南北に並ぶＰ－９・12間、Ｐ－10・11間も3.87mと同じ間隔である。したがって、この２列の柱穴列で一つの掘立柱建物となる可能性がある。その場合、調査区の東西にも柱穴列が延びて並ぶとみられる。なお、Ｐ－10・11にはそれぞれ長さ10cm の礫が埋土中に入っており、柱の裏込めに使用されたものかもしれない。須恵器小片や土師器小片が出土しているが、図化できない。この柱穴列の時期は明確でないが、Ｐ－９の埋土からは吉備系土師質土器椀と思われる口縁部小片が出土しており、柱穴列５と同様に、大きく平安時代後半以降と捉えておく。

柱穴列３・４（図31・35）

柱穴列３はＰ－13～15で、柱穴列４はＰ－16～18で構成され、それぞれ南北に３基の柱穴が並ぶ。柱穴列４は柱穴列３と同じ配置で建て直されたものである。柱穴の直径は約20cm を測る。それぞれの心々距離を示すと、柱穴列３のＰ－13・14間が1.75m、Ｐ－14・15間が1.95m、柱穴列４のＰ－16・

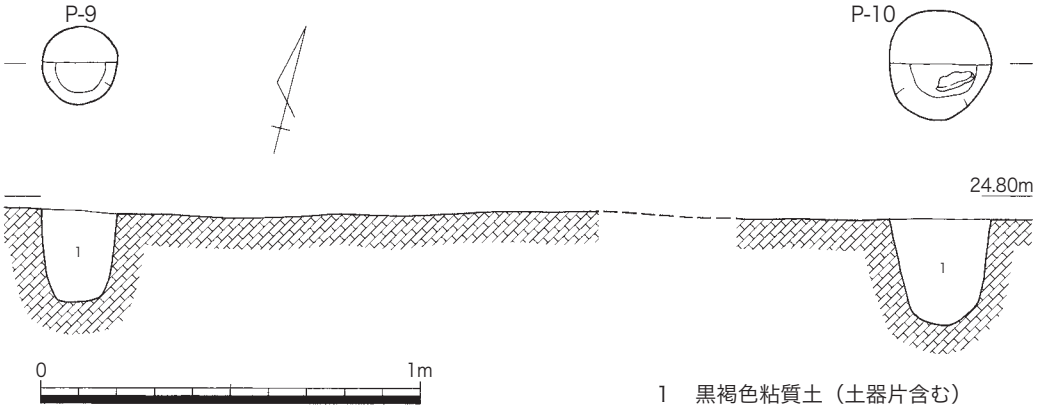


図33　柱穴列１（1/20）

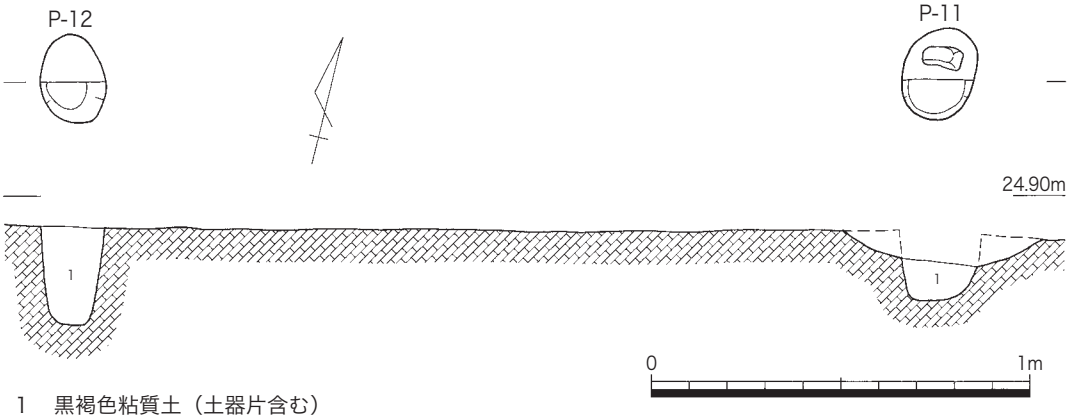
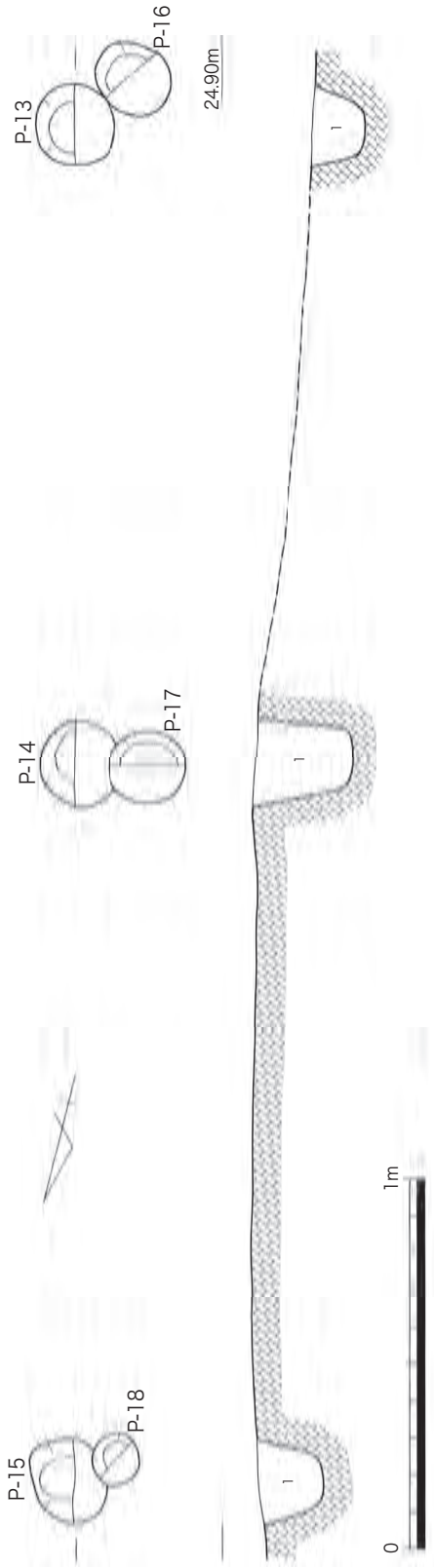
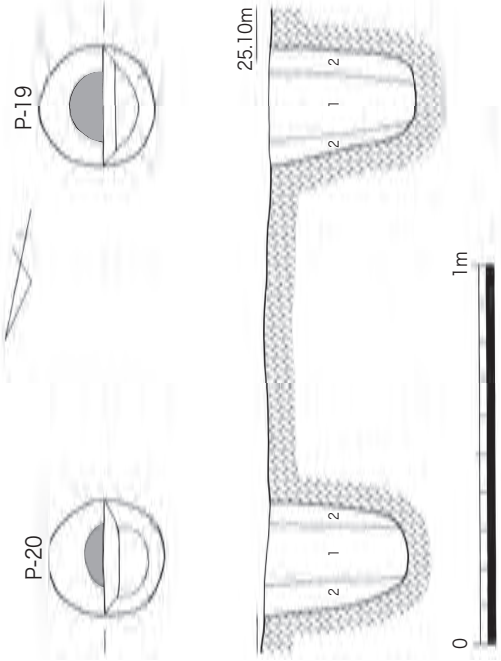


図34　柱穴列２（1/20）



1　褐灰色粘質土（土器片含む）

図35　柱穴列３・４（1/20）



1　褐灰色粘質土（土器片含む）［柱痕跡］
2　黄灰褐色粘質土（土器含む）

図36　柱穴列５（1/20）

17間が1.87m、Ｐ－17・18間が1.88mである。Ｐ－13・16と溝14の切り合い関係によれば、溝14がある程度埋没した後に柱穴列が設けられたとみられることから、出土遺物からの時期判定は困難であるが、時期は大きく平安時代後半以降と想定しておく。柱穴列は掘立柱建物の梁行と考えられ、調査区外に桁行が延びるとみられる。遺物には土師器小片があるが、図化していない。

柱穴列５（図31・36）

調査区北部で検出した柱穴列で、南北方向に並ぶＰ－19とＰ－20から構成される。直径約30cm で、中央に直径18cm 程度の柱痕跡が残る。検出面からの深さは38cm で、底面標高24.68～24.70mである。また、心々距離は1.2mを測るが、そのほかに並ぶような柱穴は見当たらなかった。Ｐ－19からは、11世紀後半～12世紀に属す白磁碗**295**口縁部片と土師器皿**227**が出土しているので、時期は平安時代後半以降と考えられる。

（５）Ｔ28

概要（図37、図版９－１）

回廊外の講堂・僧房間の東側において鐘楼あるいは経蔵の所在を確認するため、長さ10m、幅３ｍの南北方向の調査区を設定し調査した。回廊内の金堂・講堂間の東側を調査したＴ24では、鐘楼あるいは経蔵は確認できなかったため、伽藍内で想定されるＴ28の位置に調査区を設けた。

現水田耕作土と床土（１・２層）を除去すると、調査区北半は旧水田耕作土（５層）、南半は客土（３・４層）を介して旧水田耕作土（７層）となる。調査区中央付近を境に、旧水田層は南北２枚が段差をもって所在していたようである。調査区北半は５層直下が地山、南半は薄い包含層を除去すると地山で、地山の検出標高は22.08～22.33mである。南半の方が地山の削平度合いが大きい。地山は、黒褐色を呈し、３～５cm 大の礫を大量に含んでいる。地山はＴ21などの寺域東部の調査区で検出し

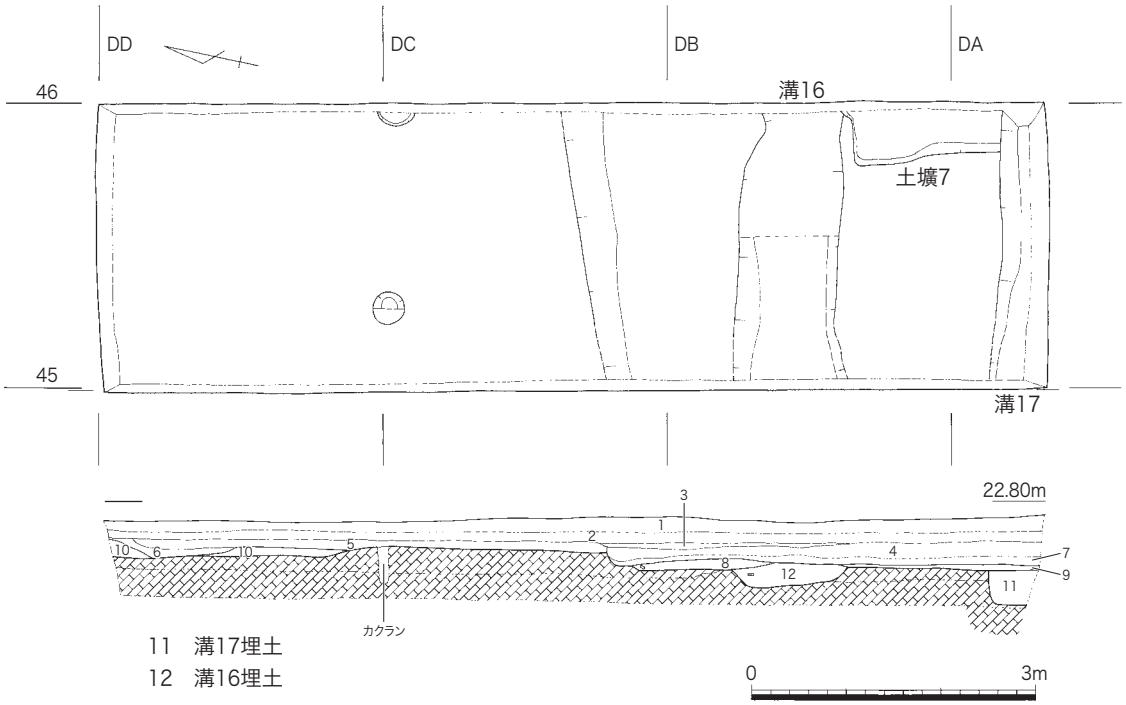
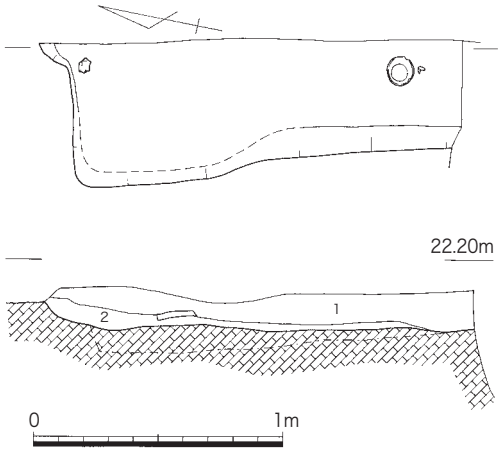


図37　Ｔ28（1/80）

たものと類似しており、寺域東部は谷状地形に堆積した層が基盤となっているとみられる。

検出した主要な遺構は、土壙１基、溝２条で、調査区南半部に集中する。溝16・17はいずれも東西方向の溝であるが、西へ延長した備国１講堂調査区内に同一のものと考えられる溝は確認されていない。土壙７は、鋳銅関連遺物の出土や炭層が認められ、青銅製品の鋳造等に関わる遺構と考えられる。また、溝17から坩堝が、遺構に伴っていないが調査区からは羽口**320・321**の出土が認められ、付近で金属製品の鍛冶・鋳造が行われていたことが想定される。調査区北半で、約２ｍの間隔で並んだ柱穴２基を検出したが、性格は不明である。



1　暗褐色粘質土（土器片・炭粒含む）
2　暗褐色粘質土（炭大量に含む）

図38　土壙７（1/30）

結果として、調査目的であった鐘楼あるいは経蔵に関する遺構は検出できなかったが、回廊外の講堂・僧房間の東側、つまり寺域東部の区域において、寺院の維持運営に関わるような金属製品の生産活動が行われていることが明らかとなった。

土壙７（図37・38、図版９－２）

調査区南東隅、溝16と溝17の間で検出した土壙である。南北はそれぞれ溝16と溝17に切られているので、両溝より古く位置づけられる。東側は調査区外で、南側は溝17で削平されているため、正確な形態は不明であるが、北西隅の形状から方形に近い形を想定できる。規模は、長さ1.69ｍ以上、幅58cm 以上を測る。埋土には炭粒を多く含み、特に２層は大量に炭粒を含んだ層であった。

出土遺物として、鋳銅関連遺物の**328・329**、ほぼ完形の須恵器杯Ａ**237**、瓦片などがある。出土遺物や炭層の存在から、至近に青銅製品の鋳造遺構があり、関連した遺物等が廃棄された可能性がある。

溝16（図37）

調査区南部で検出した東西方向の溝である。幅1.22ｍ、検出面からの深さ23cm を測り、地山を掘削して設けられている。出土遺物には瓦片、土師器などがある。切り合い関係では、土壙７より新しい。

溝17（図37）

調査区南端で検出した東西方向の溝である。北肩を確認したのみで、溝の大半は調査区外にある。検出面からの深さは36cm で、土壙７を切って設けられている。断面形はＵ字形で、斜面は垂直に近い。出土遺物には瓦片、須恵器、土師器などがある。また、坩堝**330**や銅粒が出土しており、土壙７との関係からも付近で銅製品の鋳造が行われていた可能性が高い。

註

（１）詳細は第５章第３節を参照。寺院中心部では、北・西面回廊上で鍛冶炉と考えられる炉６基（備国１炉１～６）を検出している。また、東面築地東側（備国１Ｔ17）において青銅製品鋳造に伴う遺物が多数出土している。

第４節　第６次調査

（１）概要（図39）

第６次調査では、５ヵ所計７本のトレンチ調査を行った。調査の目的は１．未確認施設の有無の確認（T30）、２．僧房西端部と規模の確認（T31・32･34）、３．西面回廊桁行柱間の確認（T33）である。

調査の結果、僧房では礎石４基、溝、被熱土壙、ピットを検出し、僧房梁行が２間の可能性があることが判明した。基壇南西側では瓦積基壇外装を検出し、今まで不明であった基壇外装を一部ではあるが確認できた。

西面回廊では礎石２基と被熱面を検出した。備国１Ｔ５で検出した礎石と併せると、この部分の桁行柱間は12尺と想定できた。

なお、鐘楼や経蔵等の施設は確認できず、T30の範囲は寺域内の空閑地であったと考えられる。

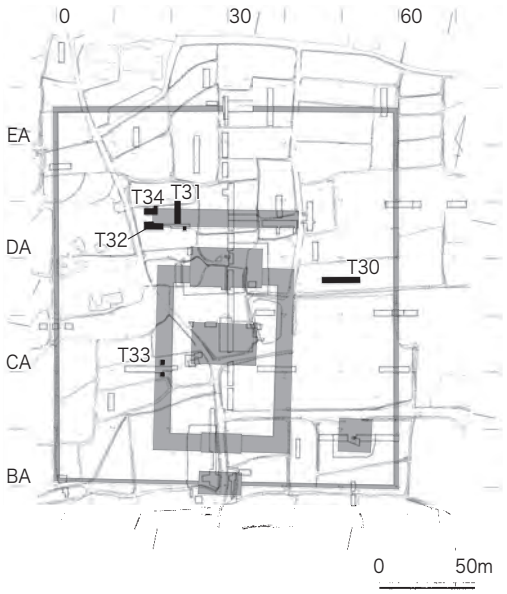


図39　第６次調査区配置図（1/4,000）

（２）T30

概要（図40、図版９－３）

寺域内諸施設の所在の確認を目的に、寺域内東部、講堂の東側に設けた長さ20m、幅３mの調査区である。耕作土・旧耕作土の１～３層、遺物を包含する４・５層を除去後、標高21.5～21.7mで礫を多く含む黒褐色礫層の地山を検出した。遺構は確認できず、T30南西のT24の地山上面が21.0m前後であることを考慮し、T30付近は削平ではなく、寺域内の空閑地であったと考えられる。

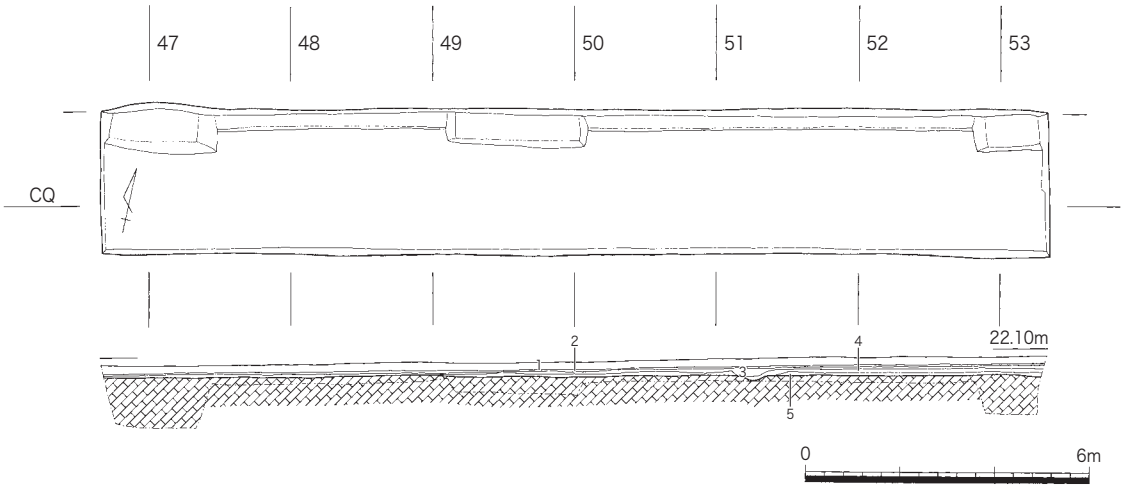
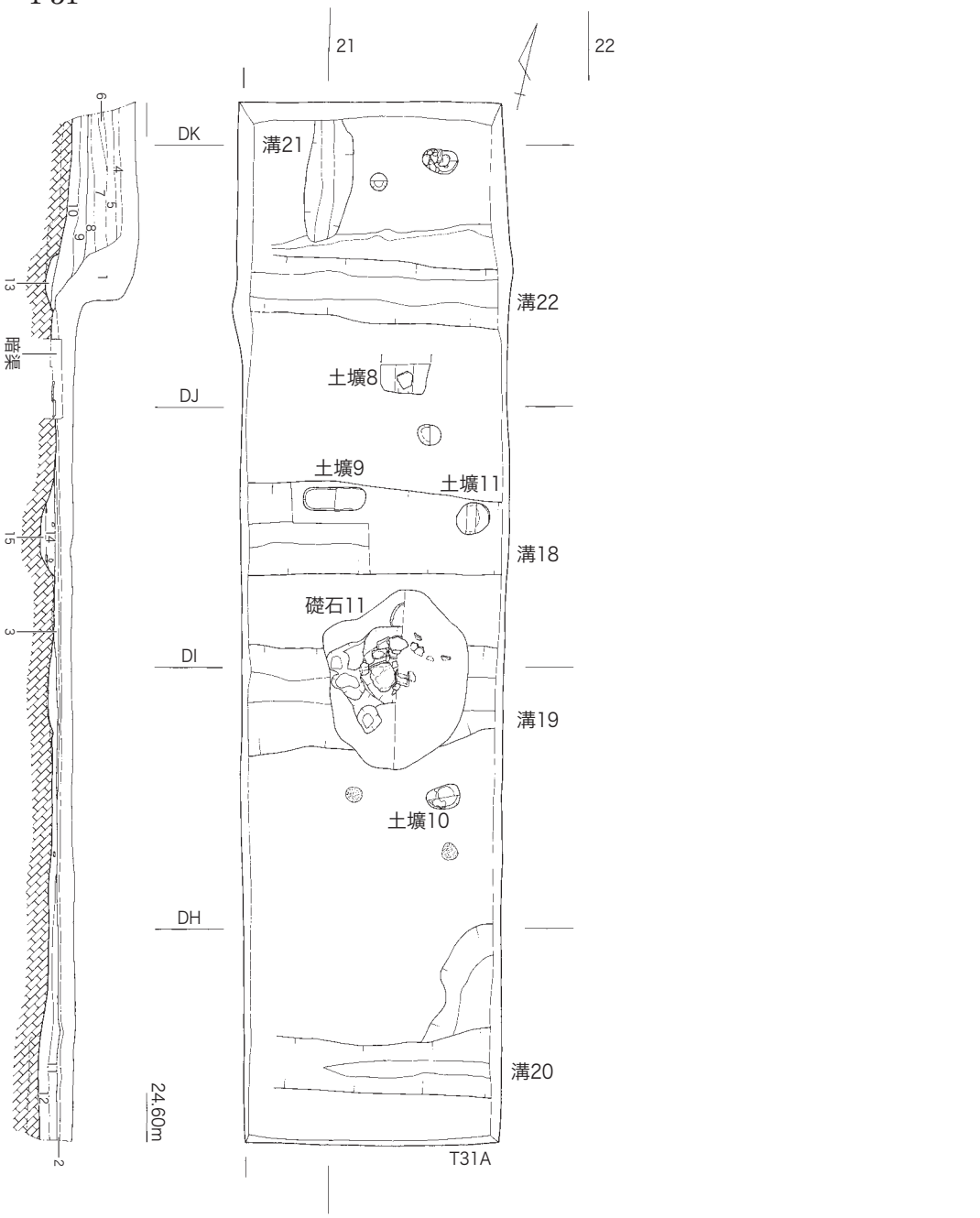


図40　T30（1/160）

（３）Ｔ31



Ｔ31Ａ西壁

12　　溝19・20埋土
13　　溝22埋土
14・15　溝18埋土

Ｔ31Ｂ東壁

1　　［Ｔ25埋土］
7・8　溝23上層埋土
9　　溝23下層埋土

図41　Ｔ31（1/80）

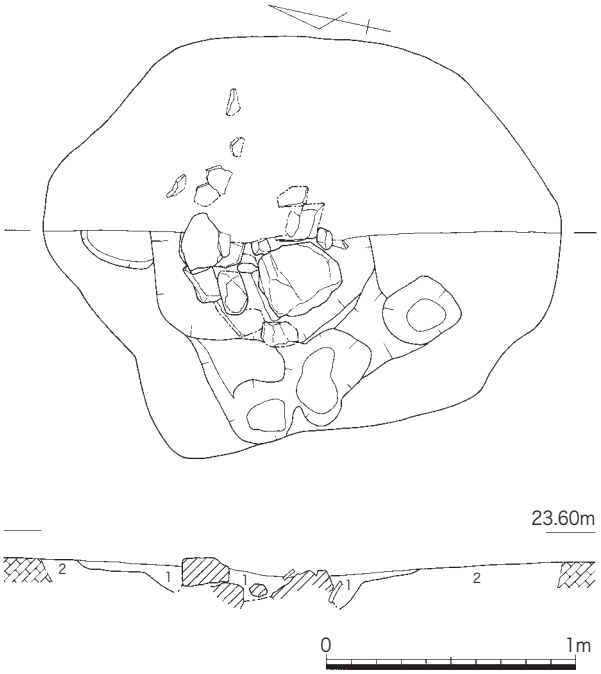
概要（図41、図版10－１・３）

Ｔ31はＴ25の礎石６を手がかりに、僧房基壇の北端ならびに建物の梁行を確認するために設定した。特に、Ｔ26の礎石10の調査成果から僧房建物の梁行が３間である可能性も想定されていたため、遺構検出には留意した。Ｔ31Ａの規模は長さ12m、幅３ｍである。調査前の状況をみると、ＤＫラインから南約1.8mには東西方向に高さ約60cm の石垣が設けられ、その南北で棚田が作られていた。厚さ20cm 程度の現代水田関連土層にあたる調査区西壁断面図の１～４層を除去すると、調査区中央では標高23.50m前後で黄色粘質土の地山が確認された。

一方、調査区北側では５・６層の現代水田の造成土、７・８層の旧水田関連土層、９・10層の旧水田の造成土などの堆積が認められた。特に９・10層には、主に僧房で使用されたと思われる土器や瓦片が多く包含されていた。地山は南側にむかい緩く下がっており、標高23.5～23.7m前後で確認された。なお、分層し得ていないが、10層の下位には旧表土層が存在している。調査区南側では地山は南側にむかい緩く下がっており、標高23.35～23.50m前後で確認された。狭小な調査区のため、ここでは溝20と判断した11・12層などは旧表土層の可能性がある。

調査成果として、礎石11の抜き取り穴１基と東西方向の溝18～20・22・23、南北方向の溝21の６条、土壙８～11の４基のほか、被熱面２ヵ所、柱穴２基を確認した。ただし、土壙８の報告で触れるが、僧房建物の梁行が３間であることを実証する、礎石あるいはその抜き取り穴は確認できなかった。

また、土壙９～11をはじめ、礎石11の南側には２ヵ所の被熱面が検出されており、溝18との切り合い関係から、僧房建物の廃絶以降にこのあたりは何らかの生産活動の場所となったようである。ただし、作業空間は想定できるものの、遺構の形状も多様であり、特定の生産物が想定できない。なお、後述するＴ32で検出した瓦積の基壇外装が、基壇の東方にも遺存していることを確認するために、Ｔ25に南接する長さ２ｍ、幅1.5mのＴ31Ｂを追加設定して調査を行ったが、東西方向の溝23を検出したのみで、外装の痕跡は認められなかった。



1　暗灰褐色土（炭粒・土器・瓦含む）［抜き取り穴埋土］
2　黄灰色粘質土［据え付け掘り方埋土］

図42　礎石11（1/30）

礎石11（図41・42、図版10－２）

調査区中央付近で検出した。礎石は存在しなかったが、抜き取り穴と据え付け掘り方、根石を確認した。現段階では僧房建物の北壁を構成したと思われ、この礎石の心々で南20尺の位置にＴ25の礎石６を検出しており、僧房建物の梁行は２間であると想定している。遺物は須恵器杯片**250**などが出土した。

土壙８（図41・43）

Ｔ31Ａ北側で検出した。先述した石垣の南側に設けられた東西方向に延びる現代暗渠と切り合い関係を有するため、北側は削平されている。平面は隅丸方形を呈すると

思われ、長さは45cm を測る。断面形は平底からほぼ直立する壁面をもち、深さは28cm 以上である。形態から柱穴の可能性は考えられるが、礎石の抜き取り穴とは見ることができない。

仮にＴ26の礎石10の調査成果から僧房建物の梁行が３間であるならば、礎石11の位置からみて、この土壙周辺に礎石あるいはその抜き取り穴が存在すると思われる。しかし、暗渠による影響を考慮しても、この土壙以外に遺構が確認されないことから、現段階では梁行３間の可能性は検討を要する。

土壙９（図41・44）

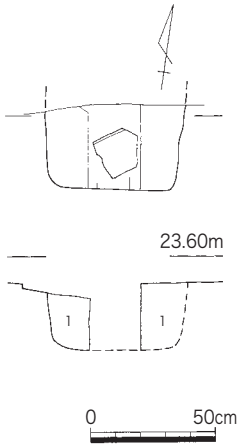
Ｔ31Ａ中央付近で確認した。検出状況から溝18の埋没後に掘削された遺構で、僧房建物の廃絶後のものであろう。平面は隅丸長方形を呈しており、長さ73cm、幅26cm を測る。断面形は平底から外方に開く壁面をもち、深さは現状で４cm である。壁面には被熱痕跡が確認され、埋土には炭が多く含まれていた。遺物は図化し得るものは認められなかった。

土壙10（図41・45）

Ｔ31Ａ中央付近で確認した。先述した礎石11の抜き取り穴の南東20cm に位置していることから、僧房建物の廃絶後に掘削された遺構であろう。平面形は長楕円形であり、長径38cm、短径28cm を測る。断面形は内湾する壁面を有し、深さは現状で12cm 以上である。検出面ではほぼ円形を呈する被熱面が検出され、２層からは炭粒、焼土などが認められた。土壙中央には15cm 程度の石が見られるが、断面観察から２層堆積以前には存在していたと思われる。遺物は図化し得るものはなかった。

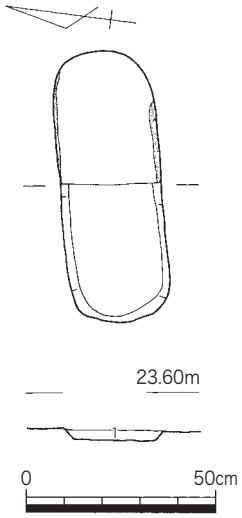
土壙11（図41・46）

Ｔ31Ａ中央付近で確認した。先述した土壙９の東1.1mに位置しており、検出状況から溝18の埋没後に掘削された遺構で、僧房建物の廃絶後のものであろう。平面形はほぼ円形であり、長径40cm、短径35cm を測る。断面形は平底から外方に開く壁面をもち、深さは現状で５cm である。検出面の中央で炭、焼土、また壁面に沿って炭が認



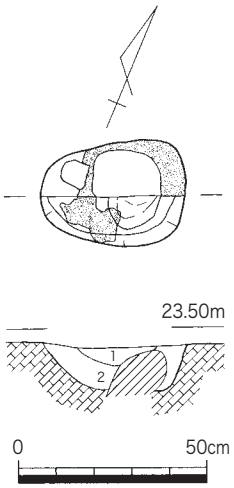
1　暗褐黄色弱粘性砂質土（炭粒多く含む）

図43　土壙８（1/30）



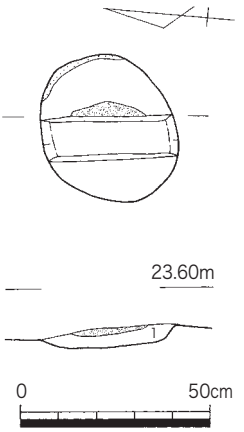
1　炭混黄灰色粘質土（炭多く含む）

図44　土壙９（1/20）



1　黄灰色土
2　灰褐色土（炭粒・焼土含む）

図45　土壙10（1/20）



1　黄褐色砂質土（炭・焼土含む）

図46　土壙11（1/20）

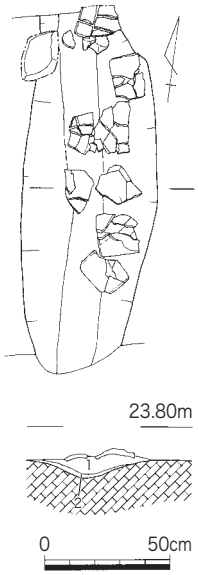


図47　溝21（1/30）

められた。遺物は図化し得るものは認められなかった。

溝18（図41）

Ｔ31Ａ中央付近で確認した。水流方向は西から東と思われる。断面形は平底から緩く外湾気味に立ち上がる壁面をもち、上端幅85～105cm、下端幅25cm、深さは約15cm を測り、底面海抜高は23.35m前後である。埋土は地山崩壊土と思われ、硬くしまっている。現段階では、僧房基壇北側の雨落ち溝、兼寺域を巡っていた排水路と想定している。遺物は須恵器杯蓋**251・252**などが出土した。

溝19（図41）

Ｔ31Ａ中央付近で確認した。水流方向は判然としない。礎石11の抜き取り穴と切り合い関係をもつが後出である。断面形は平底から緩く外湾気味に立ち上がる壁面をもち、上端幅91～126cm、下端幅25～34cm、深さは約10cm を測り、底面海抜高は23.4m前後である。埋土は暗灰褐色粘質土である。現段階では、僧房建物廃絶後の排水路と想定している。遺物は図化し得るものは認められなかった。

溝20（図41）

Ｔ31Ａ南側で確認した。水流方向は判然としない。断面形は平底から緩く外方に開く壁面をもち、上端幅60～82cm、下端幅14～20cm、深さは約10cm を測り、底面海抜高は23.3m前後である。南側肩口は不明瞭であり、埋土の11・12層は旧表土層の可能性もある。

溝21（図41・47、図版10－４）

Ｔ31Ａ北側で確認した。水流方向は北から南と思われる。断面形は緩いＵ字形を呈する壁面をもち、上端幅34～56cm、下端幅12～16cm である。深さは現状で約10cm を測り、底面海抜高は23.6mである。炭を含む１層上面には、やや大形の軒丸瓦**31**や丸瓦２片、平瓦４片が出土した。現段階では、僧房建物廃絶後の排水路と想定している。

溝22（図41）

Ｔ31Ａの北側で確認した。水流方向は西から東と思われる。断面形は緩いＵ字形を呈し、上端幅80cm、下端幅30cm を測る。深さは14cm を測り、底面海抜高は23.45mである。推定される10層下位の旧表土層から切り込まれていると思われ、僧房建物廃絶後の排水路と想定している。

溝23（図41、図版10－３）

Ｔ31Ｂで検出した。水流方向は西から東と思われる。断面形は平底から緩く外湾気味に立ち上がる壁面をもち、上端幅120cm、下端幅40cm、深さは約40cm を測り、底面海抜高は22.8m前後である。調査区東壁断面図の７・８層には瓦片や炭粒が多く認められた。瓦積の基壇外装の痕跡は確認できなかった。現段階では、僧房基壇南側の雨落ち溝、兼寺域を巡っていた排水路と想定している。遺物は須恵器平瓶片**254**などが出土した。

（４）Ｔ32

概要（図48、巻頭図版１、図版11－１・２）

Ｔ32は僧房西端の状況を確認するため、Ｔ25と東接する位置に設定した。規模は長さ10m、幅は西

辺４ｍ、東辺３ｍである。

厚さ20cm 程度の現代水田関連土層にあたる調査区Ａ－Ａ′ 断面図の１・２層を除去すると、厚さ10cm 程度の３・４層が認められた。ただし、この層上面では遺構が確認されないため、この２層は基壇盛土ではなく、この調査区周辺の開田後に伴う堆積層と考えられる。３・４層を除去すると、礎石の抜き取り穴や溝などが検出された。この面は標高23.45m前後で小礫を含む淡灰黄色粘質土の地山が確認されたことから、深い削平が及んでいたようである。なお、調査区の南・東側には現代暗渠が敷設されており、その大半が消失している状況であった。

調査成果として、礎石12・13の抜き取り穴２基とその西方には南北方向の溝25・26の２条を検出した。また、礎石13以西に礎石が続かないため、礎石13が僧房建物の南西隅と判断した。一方、僧房基壇の南端には、先述した現代暗渠で傷んでいる状態で、整然とは言えないものの平瓦や丸瓦を使用して外装を施していることが判明した。この瓦積基壇は、調査区の東半と西半で積み方が異なっており、西半は基壇の補修あるいは拡張の痕跡がうかがえ、土壙12との関係を考慮すると、設置の時期や目的の違いが想起される。遺構に伴わない遺物として、土師器、須恵器、転用硯、灰釉陶器、青磁、備前焼、瓦片、鉄器小片などが出土している。

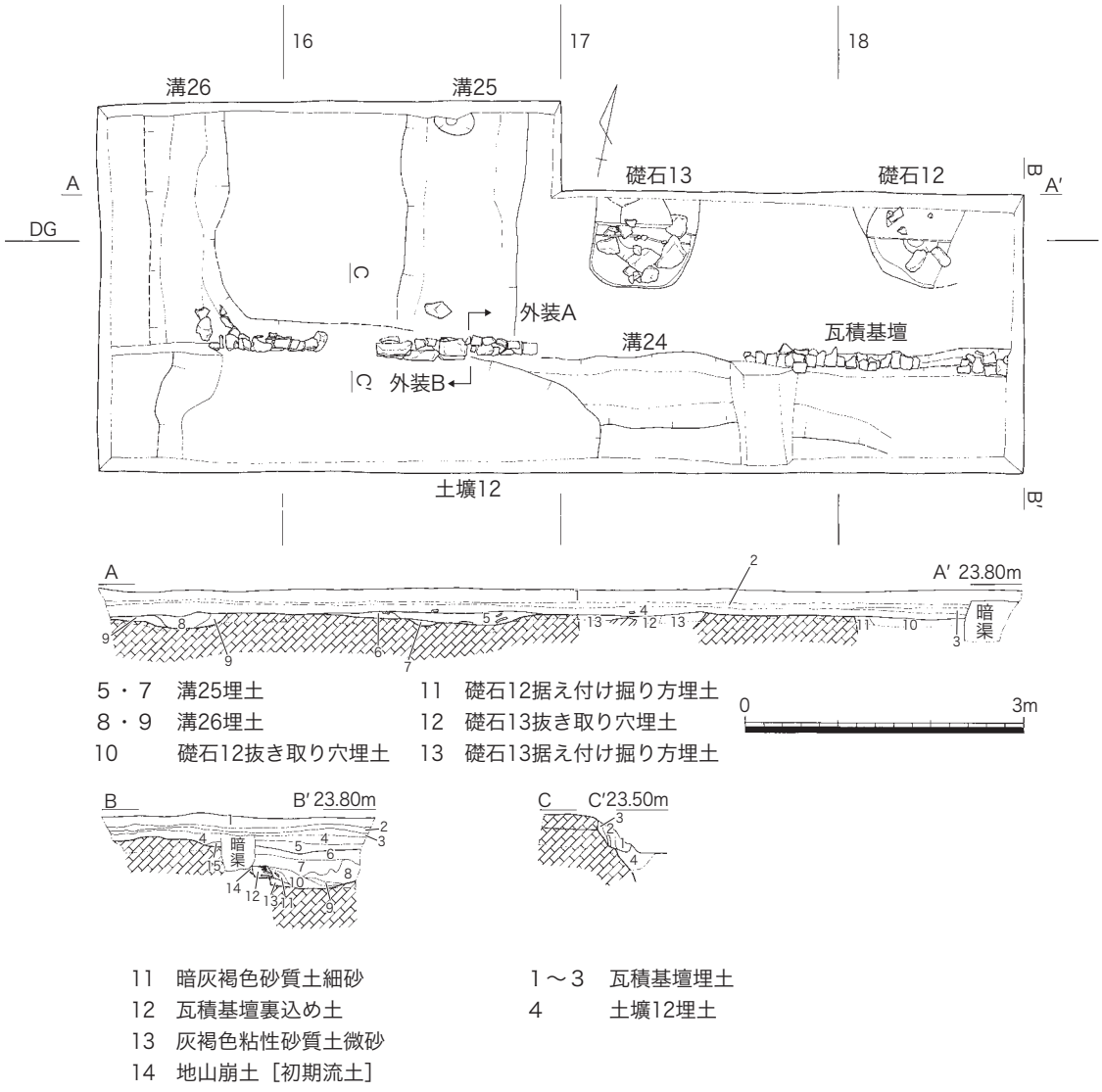
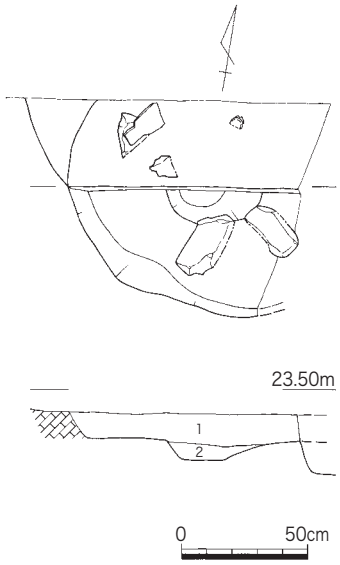
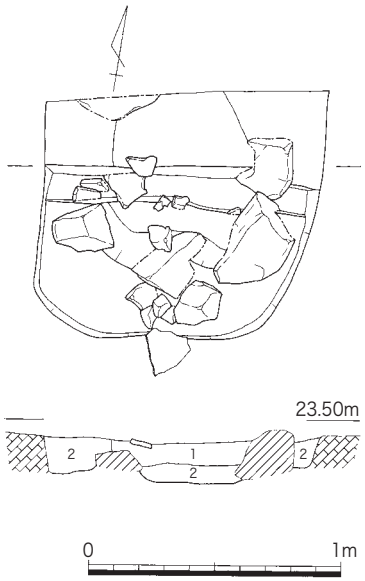


図48　Ｔ32（1/80）



1　暗褐色粘質土（炭粒・土器・瓦含む）
　［抜き取り穴埋土］
2　黒褐色粘質土（炭粒まれに含む）
　［抜き取り穴埋土］

図49　礎石12（1/30）



1　黒褐色粘質土（炭粒・瓦含む）
　［抜き取り穴埋土］
2　灰色混黄褐色粘質土（炭粒含む）
　［据え付け掘り方埋土］

図50　礎石13（1/30）

礎石12（図48・49）

調査区北東側で検出した。礎石は存在しなかったが、抜き取り穴と据え付け掘り方、根石を確認した。現段階では、心々で10尺等間に位置するＴ25の礎石４～８などに設けられた柱材を受けて、僧房建物の南壁を構成していたと思われる。遺物は図化し得るものは認められなかった。

礎石13（図48・50）

調査区中央北側で検出した。礎石は存在しなかったが、抜き取り穴と据え付け掘り方、根石を確認した。現段階では、この礎石は僧房建物の南西隅にあたると考えられ、礎石12との心々間は10尺である。遺物は須恵器杯片**255**などが出土した。

瓦積基壇（図48・51～55、図版11－３、12－１～３、13－１）

調査区の南側で検出した。僧房基壇の南側にあたる位置で確認したが、その大半以上は現代暗渠による削平を受けている状況で１～３段程度の残存であった。僧房基壇の西・北側辺ではその痕跡を認めることはできなかった。ここでは後述する溝24の東半にあたる肩口付近で認められたものを外装Ａ、土壙12の肩口にあたる付近で認められたものを外装Ｂと呼称して説明を行う。

外装Ａはほぼ同じ形状内の破砕した平瓦や丸瓦を小口あるいは縦方向に向けて、前面をそろえて積まれており、削り出された地山側面に沿って裏込め土を挟み込むように重ねながら、横積みに置かれていた。ここでは軒瓦や塼、道具瓦の類などの使用は認められていない。平瓦と丸瓦の使用比率は約２：１であり、図化し得た瓦の平均値をみると、平瓦が長さ15.6cm、幅12.9cm、丸瓦が長さ16.5cm、幅9.7cm である。丸瓦は玉縁部や両側端部をもつものが見られず、できるだけ平滑な素材を選別したことが窺える。

使用された瓦を見ると、丸瓦**１～９**や平瓦**10～20**などが認められるが、いずれも凸面縄目、凹面布目の成形痕を残すものであり、凸面格子目の成形痕を残すものはないようである。このことから、外装Ａの築造時期が僧房の創建期の可能性もあるが、使用された瓦が僧房はじめ他堂塔からの二次転用とも推測できるので確定しえない。なお、溝24の西半にあたる肩口付近も、本来は外装Ａが存在したと思われるが、削平が地山まで達していたために確認できなかった。

一方、外装Ｂは溝24の西側延長上に位置するものの、使用材は平瓦**97**、軒平瓦片**44**・**49**、隅木蓋瓦片**93**・**94**、隅切瓦片**95**、塼片**108**や大きな石材などで積み重ねられ、構造も乱積みに近いものであることから、外装Ａ・Ｂの両者は明らかに差異があるといえる。

また、外装Ａは状況から僧房の基壇外装である可能性が高いが、外装Ｂは僧房に伴う溝25を遮蔽し、溝26を導水するように積まれている。このことから、外装Ｂは外装Ａより後出であり、僧房廃棄後または補修・改修に伴う敷設であったと思われる。また、外装Ｂの裏込め土と土壙12の関係から、これらが一体的に機能していた可能性があり、土壙12の肩口などの土留めの役割をもっていたとも考えられる。以上のことから、狭義の意味で僧房の瓦積基壇は外装Ａのみと考えた方がよいと思われる。

土壙12（図48）

調査区の南西側で確認した。調査区の関係上、完掘できなかったため詳細は不明であるが、平面形は長楕円形と思われ、直径は4.7ｍ以上を測る。断面形は内湾する壁面を有し、深さは現状で50cm 以上である。現代暗渠の削平により直接的な切り合い関係の現認が難しいが、溝24・25より後出であり、溝26とほぼ同時期と判断している。また、瓦積基壇の西半（外装Ｂ）とも同時期と思われる。現段階では、僧房廃絶後に掘削された溝26からの排水を調節するために設けられた貯水機能をもつ施設であった可能性もある。遺物は土師器杯片**262**・**263**などが出土した。

溝24（図48）

調査区の南側で確認したが、その大半以上が現代暗渠による削平を受けていた。水流方向は西から東と思われる。断面形は平底から緩く外湾気味に立ち上がる壁面をもち、上端幅80cm、下端幅40cm、深さは約20cm を測り、底面海抜高は23.0ｍ前後である。調査区Ｂ－Ｂ′ 断面図の11層は、溝埋土のうち崩落した瓦積基壇の堆積層にあたる。遺物は須恵器壺片**256**、土師器杯片**257**、灰釉陶器、

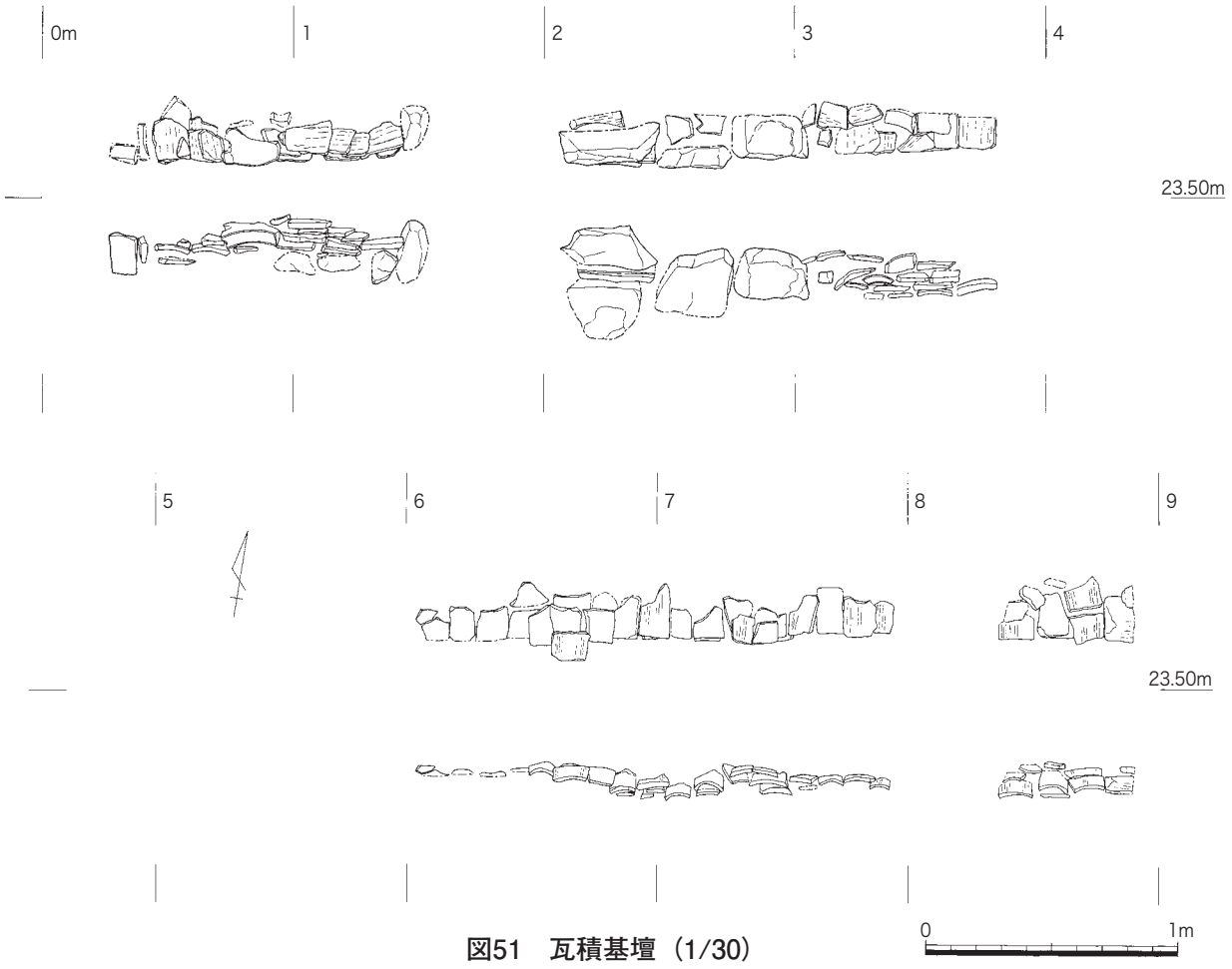


図51　瓦積基壇（1/30）

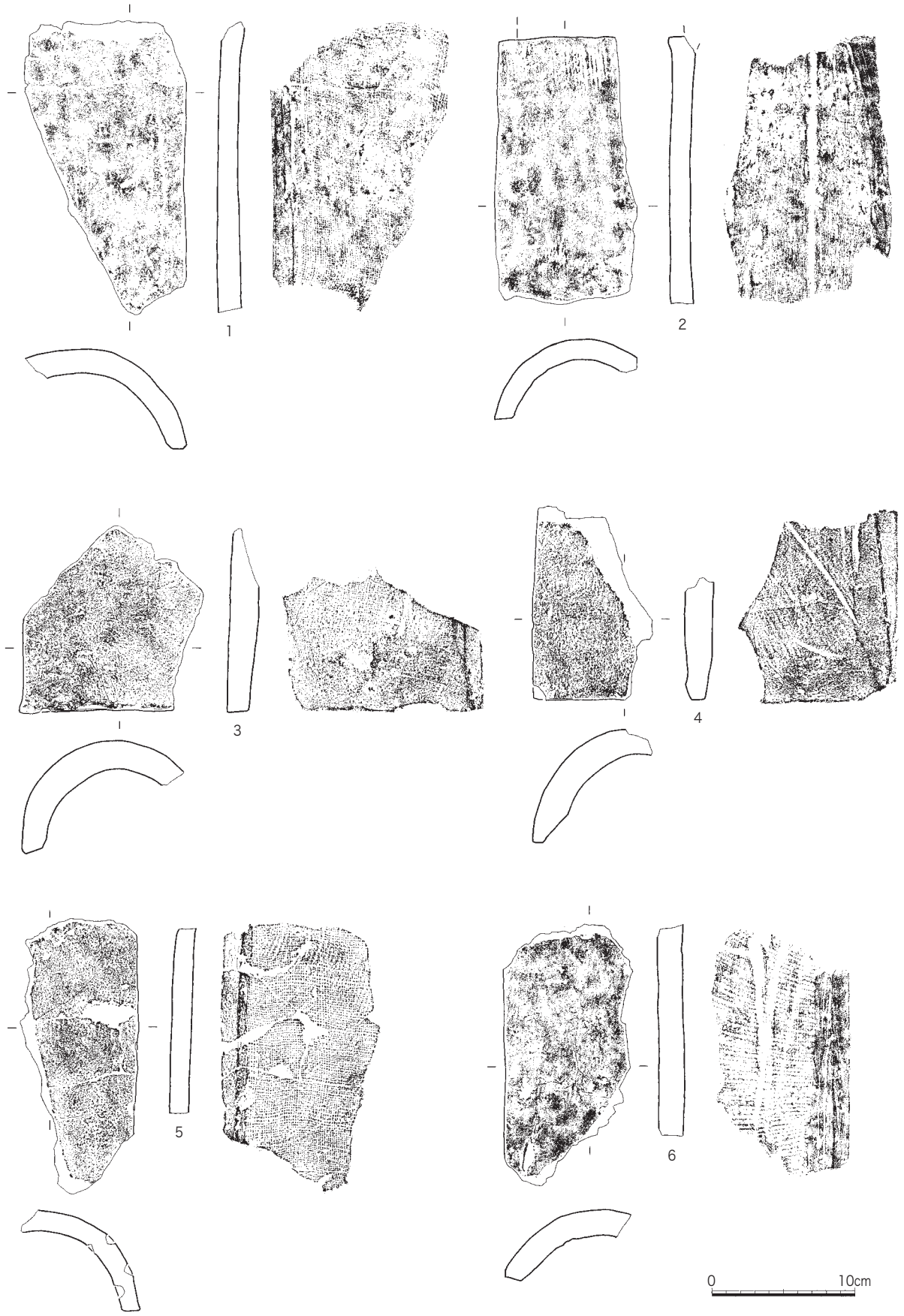


図52　瓦積基壇外装材　丸瓦①（1/4）

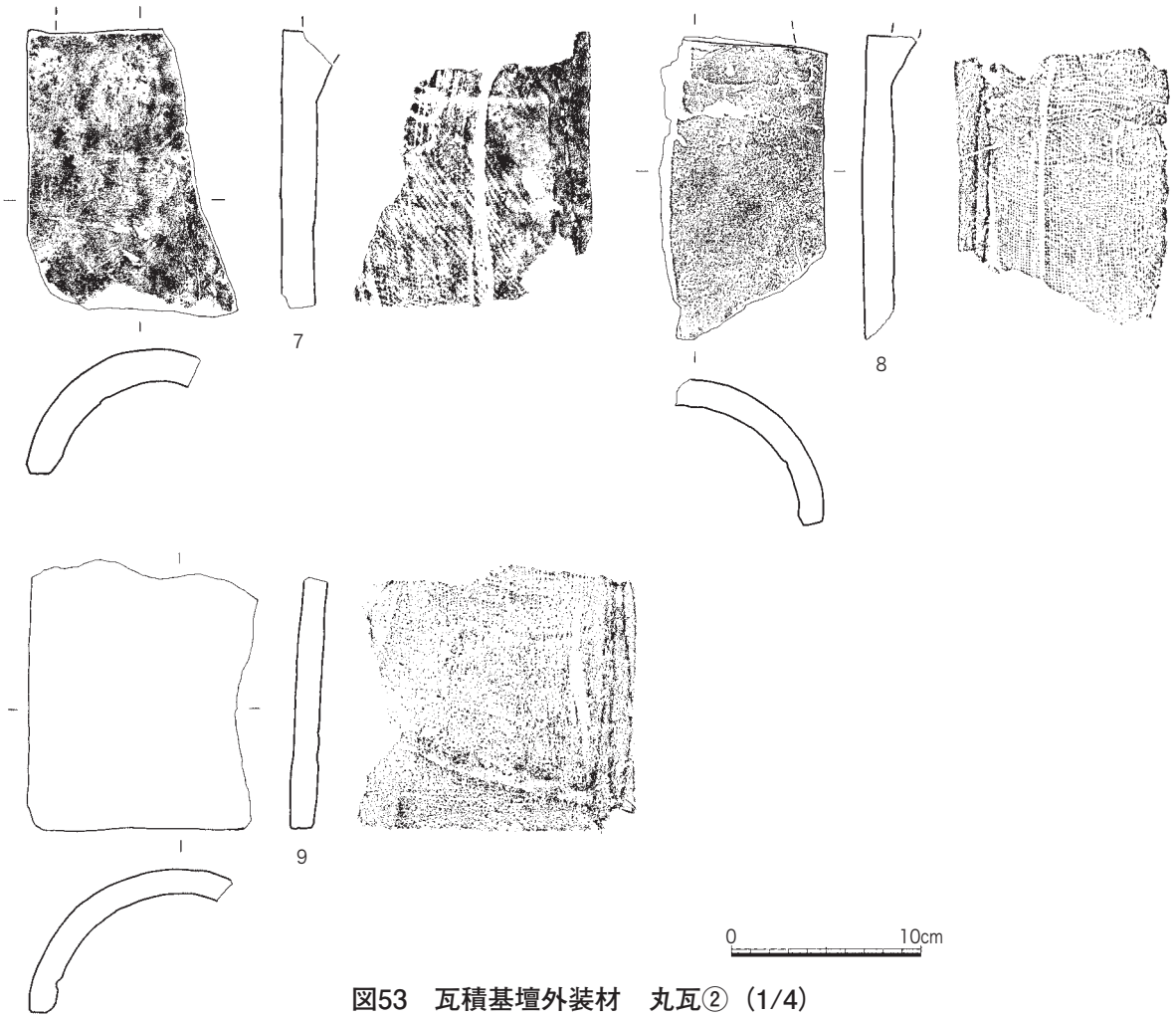


図53　瓦積基壇外装材　丸瓦②（1/4）

軒平瓦片**47**・**48**、塼片**106**などが出土した。

溝25（図48）

調査区中央付近で検出した。水流方向は北から南と思われ、土壙12と切り合い関係を有するが、先述した溝24とつながるものと思われる。断面形は平底から広く外方に立ち上がる壁面をもち、上端幅約1.4m、下端幅約80cm を測る。深さは約15cm、底面海抜高は23.3m前後である。埋土は暗褐灰色粘質土であり、礫や炭粒を含む。現段階では、僧房基壇の西側を矩形に取り囲み、南北の雨落ち溝とつながる排水路で、寺域内を巡っていた排水路にもつながっていた可能性もある。遺物は須恵器杯蓋片**258**・壺片**259**、土師器杯片**260**・杯蓋片**261**、平瓦片**71**・**80**などが出土した。

溝26（図48）

調査区西側で検出した。水流方向は北から南と思われ、現代暗渠の削平により現認が難しいが、瓦積基壇の西半（外装Ｂ）の築造工程から、先述した土壙12に取り付いていたと思われる。断面形はＵ字形の底部から外方に立ち上がる壁面をもち、上端幅約96cm、下端幅約40cm を測る。深さは約15cm であり、底面海抜高は23.3m前後である埋土は灰褐色粘質土であり、わずかに礫や炭粒を含む。現段階では、僧房廃絶後に寺域内を巡っていた排水路と想定している。なお、僧房廃絶の前後の時期差はあるものの、並行となる位置関係に設けられていることから、溝25とは基本的に同一機能を有していたと思われる。遺物は軒平瓦片**46**、平瓦片**84**や鉄滓が出土している。

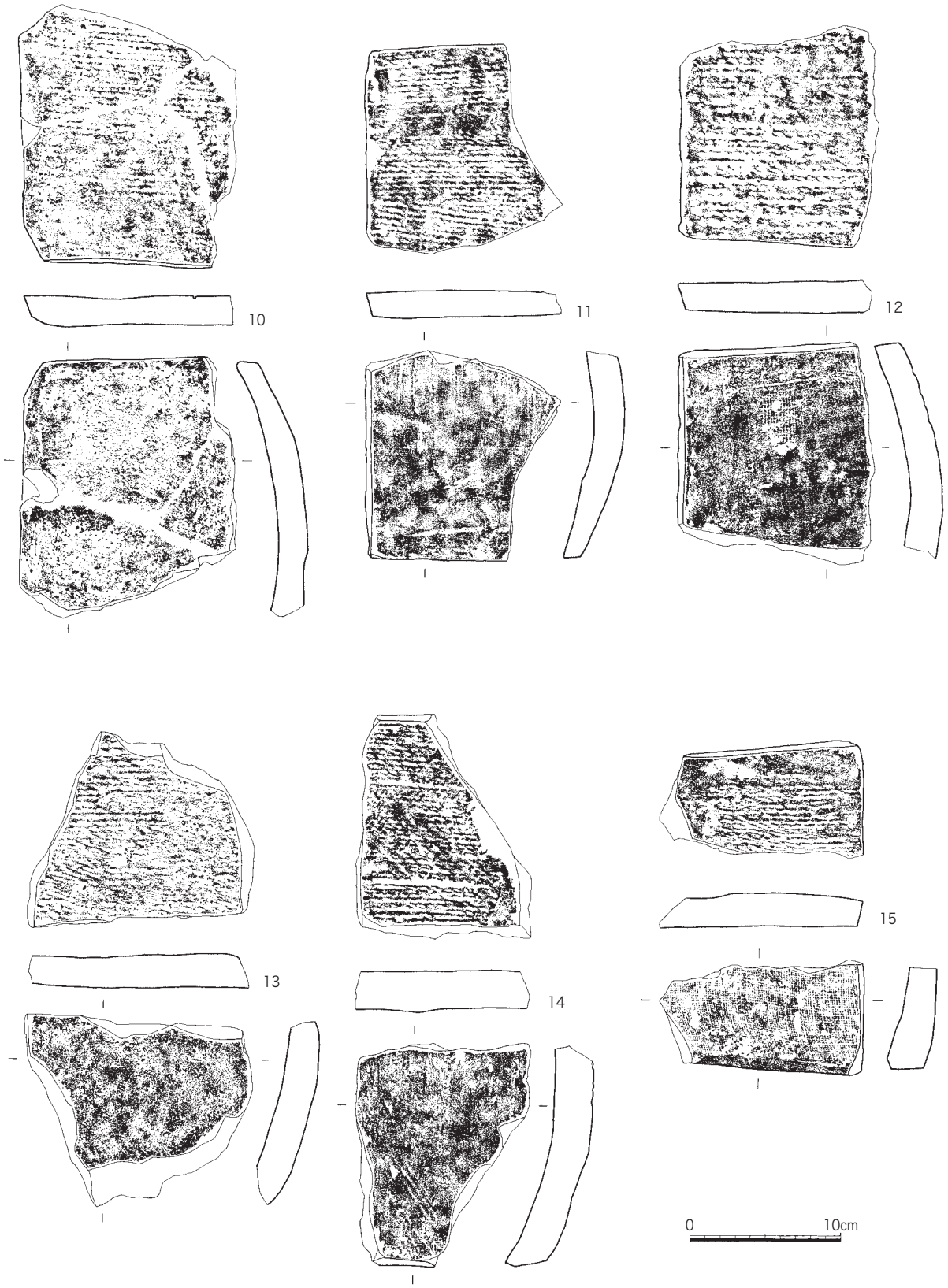


図54　瓦積基壇外装材　平瓦①（1/4）

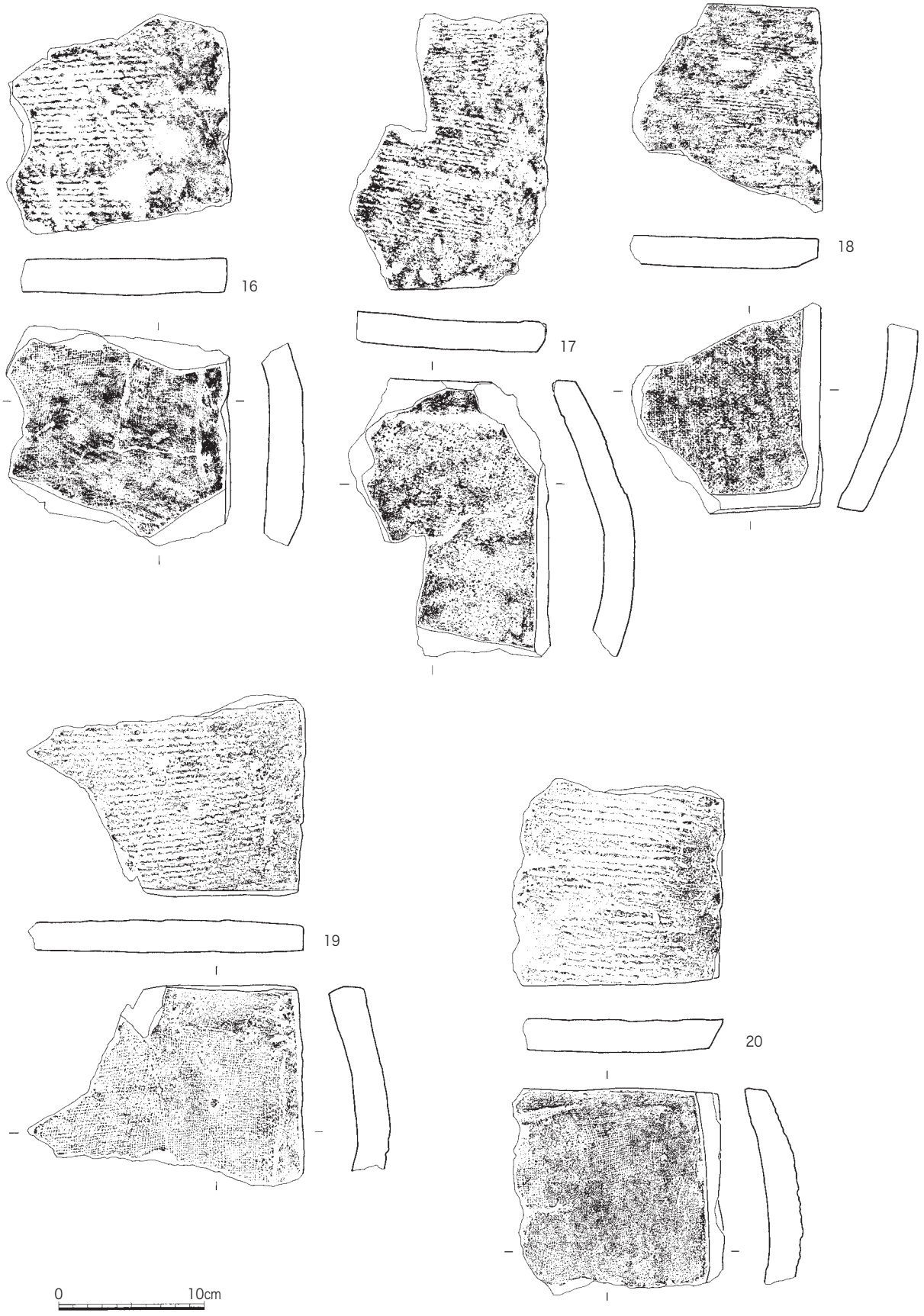


図55　瓦積基壇外装材　平瓦②（1/4）

（５）Ｔ33

概要（図56、図版13－２、14－１）

西面回廊は備国１Ｔ５で梁行を確認しており、今回は桁行柱間の確認を目的として設定した。調査区は2.5×２ｍのＴ33Ａと、その４ｍ南側に設定した２ｍ四方のＴ33Ｂの２本である。

耕作土・旧耕作土等を除くと、暗褐灰色の10層上面と基壇直上で瓦の堆積を確認した。遺構の遺存状況は良好で、礎石２基が原位置で残存していた。調査区東側には被熱痕跡と炉３を検出した。Ｔ33Ａ南東の下がり埋土は瓦を含む暗黄褐色の層で、上には10層が堆積しており、廃絶後早い段階に基壇盛土が一部流出したものと考える。

基壇は地山削り出しだが、南東にむかって下がる地形のため、Ｔ33Ａ南東部・Ｔ33Ｂで５～10cm程度の黄灰褐色の盛土が施されていた。

回廊はこれまでの調査で複廊式であることが確認されており、礎石14周辺の基壇直上で塼数点が出土したことから、中央の間仕切りの地覆座として塼を用いた可能性がある。さらに、礎石14据え付け掘り方の北端部分が、北へ延びる幅30cm 程の帯ような形状をしており、断定はできないが地覆の据え付け痕跡の可能性がある。なお、これまでの調査と併せた回廊の考察は第５章で行う。

基壇直上に堆積した瓦類や塼のうち図化したものは、丸瓦**61**･**63**･**64**、平瓦**68**･**69**・**72**～**75**･**81**～**83**･**88**･**90**、鬼瓦**96**、塼**104**・**105**・**107**、土師器杯**271**･**272**である。平瓦は凸面縄目叩きの平瓦が主体であるが、補修用の凸面格子目叩きの瓦も認められた。また、瓦に混じって出土した土師器杯**271**から、この瓦の堆積は平安時代後期頃と考えられる。これらから『備国１』で報告されている北面回廊や講堂が焼失した平安時代末に近い段階で西面回廊も倒壊した可能性を考えてよい。

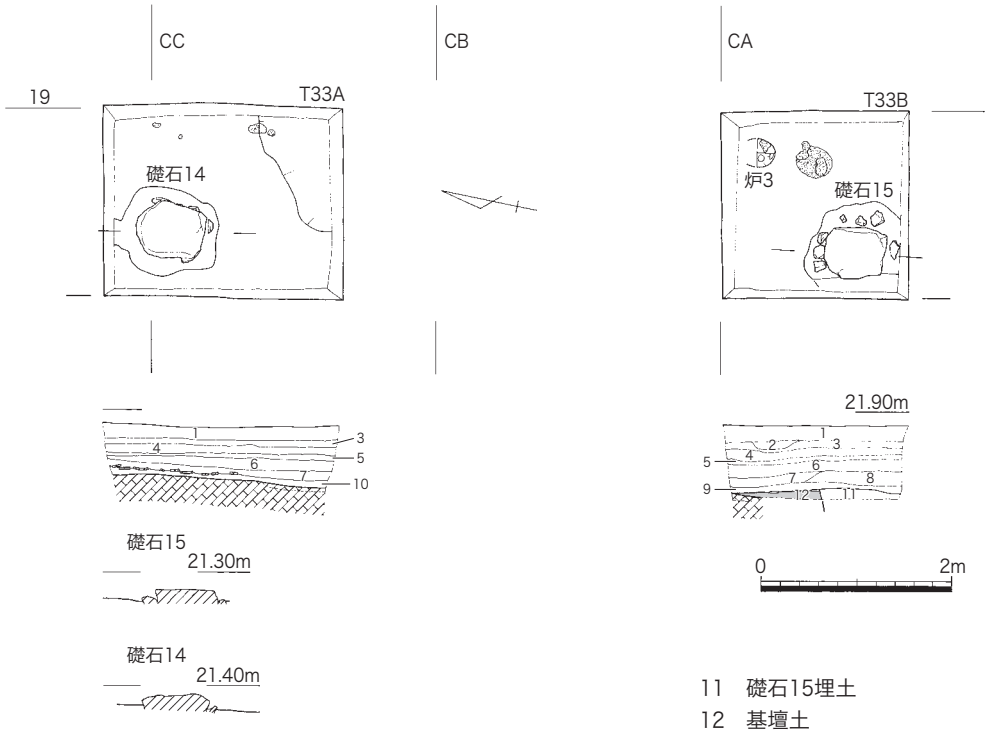


図56　Ｔ33（1/80）

礎石14・15（図56、図版13－３・４）

礎石14は長軸72cm ×短軸60cm、礎石15は長軸63cm ×短軸54cm、断ち割りを行っていないので高さは不明だが13cm 以上で、上面が平らな自然石である。石材鑑定によって流紋岩と判明した。礎石の周囲に直径0.9～1.1m程度の楕円形の据え付け掘り方上面を検出している。回廊棟通り南北に並ぶ礎石14、備国１礎石50、礎石15の桁行の柱間寸法は12尺（3.56m）と判明した。

炉３（図56）

基壇上面から掘り込まれた被熱土壙で、検出面で長径29cm、短径は現存23cm、深さ６cm を測る。埋土上層は被熱を受けた黒灰色混黄色粘質土で炭粒を含み、下層は暗灰黄色粘質土である。被熱は南側へ広がっており、備国１炉６と関連する鍛冶炉であろう。遺物は出土していない。

（６）Ｔ34

概要（図57、図版14－２・３）

Ｔ34はＴ31で僧房基壇の北側で検出された溝18と、Ｔ32で僧房基壇の西側で検出された南北方向の溝26・25の状況を把握するため、および僧房基壇の北西端を確認するために設定した。規模は長さ７m、幅は西辺３m、東辺4.5mである。

厚さ15cm 程度の現代水田関連土層にあたる調査区南壁断面図の１・２層を除去すると、標高23.6m前後で灰色混橙色粘質土の地山が確認されたことから、この調査区周辺は開田による深い削平が及んでいたようである。調査の結果、溝18とつながる溝28、溝25とつながる溝27、溝26とつながる溝29と僧房建物の北西隅と想定される礎石16の抜き取り穴、小柱穴などを検出した。

なお、この調査区内では、僧房建物の梁行が３間であることを実証する礎石の抜き取り穴が確認できなかったことから、Ｔ31の調査結果も勘案すると、礎石４～13・16で構成される僧房建物は梁行２間であったと考えられる。しかし、これ以東にも続くと想定される建物すべての規模が、梁行２間であったかどうかは現段階では判然としない。

礎石16（図57・58）

調査区南東側で検出した。礎石は存在しなかったが、抜き取り穴と据え付け掘り方、根石を確認

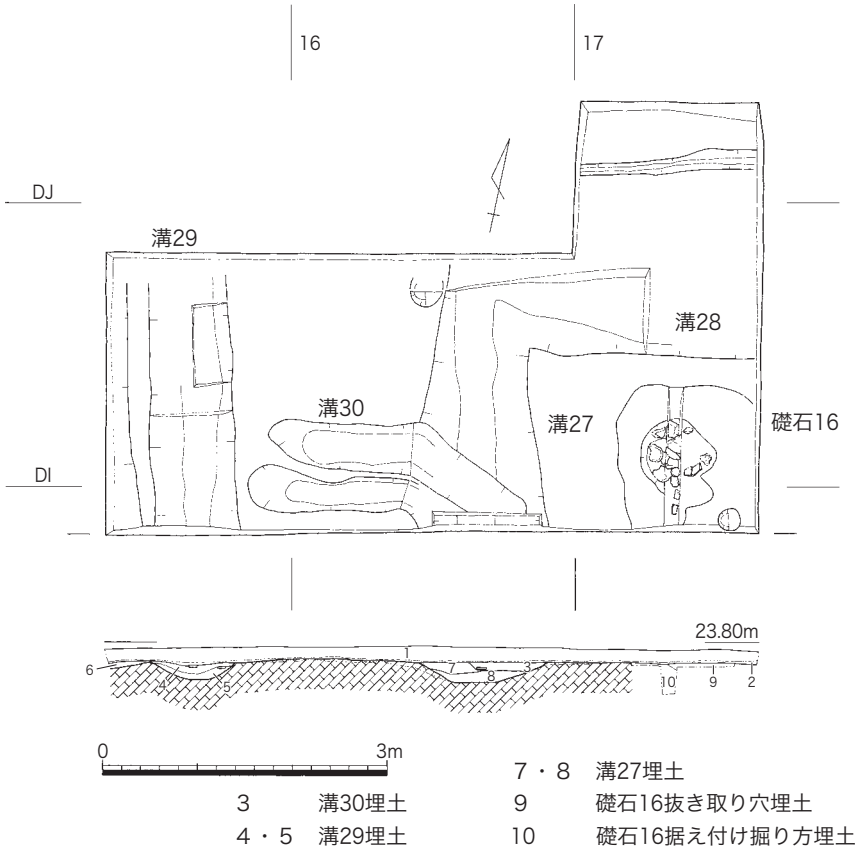
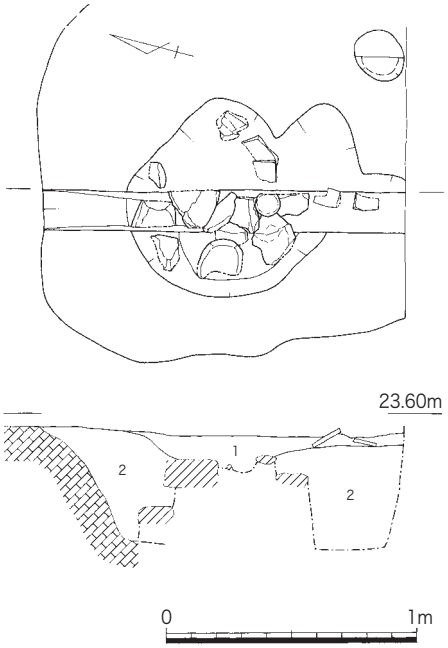


図57　Ｔ34（1/80）



1　暗灰褐色粘質土（瓦・土器・炭粒含む）［抜き取り穴埋土］
2　黄褐色強粘質土［据え付け掘り方埋土］

図58　礎石16（1/30）

した。現段階では、この礎石は僧房建物の北西隅にあたると考えられ、心々で20尺南に位置するＴ32の礎石13で僧房建物の西壁を構成していたと思われる。遺物は須恵器甕から転用された硯**315**などが出土した。

溝27（図57）

調査区中央付近で検出した。水流方向は北から南と思われ、Ｔ32の溝25とつながる。断面形は平底から広く外方に立ち上がる壁面をもち、上端幅約1.0～1.2m、下端幅約40cm を測る。深さは約10～20cm、底面海抜高は23.4m前後であり、溝掘削時わずかに北側が高かった状況を示している可能性を示している。埋土は灰褐色系の粘性をもつ埋土であり、礫を含む。これは溝25の埋土と類似する。

現段階では、僧房基壇の南北側に設けられた雨落ち溝をつなぐ排水路で、寺域内を巡っていた排水路にもつながっていた可能性もある。遺物は須恵器杯蓋片**273**、土師器杯蓋片**274**・杯片**275**、灰釉陶器片や流紋岩の砥石**338**などが出土した。

溝28（図57）

調査区北東側で確認した。水流方向は西から東と思われ、Ｔ31の溝18とつながる。断面形は平底から緩く外湾気味に立ち上がる壁面をもち、深さは約15cm、底面海抜高は23.4m前後である。埋土は地山の崩壊土と思われる黄褐色粘質土である。僧房基壇の周囲を画していたと推測される溝27と切り合い関係を有するが、土層は異質である。遺物は須恵器杯蓋片**276**などわずかに出土している。現段階では、僧房基壇北側に設けられた雨落ち溝、兼寺域内を巡っていた排水路と想定している。

溝29（図57）

調査区西側で検出した。水流方向は北から南と思われ、Ｔ32の溝26とつながる。断面形はＵ字形の底部から外方に立ち上がる壁面をもち、上端幅約90cm、下端幅約40cm を測る。深さは約15cm であり、底面海抜高は23.4m前後である。埋土は褐色系の粘性をもつ埋土であり、炭粒を含む。これは溝26の埋土と類似する。現段階では、寺域内を巡っていた排水路と想定している。

遺物は土師器椀片**277**、須恵器壺片**278**・皿片**279**、灰釉陶器片やほぼ完形品である丸瓦**58**、暗白濁色を呈するチャート製の小円石**340**などが出土している。

溝30（図57）

調査区中央南側付近で確認し、溝27と切り合い関係がある。水流方向は西から湾曲しながら南東と思われる。断面形は平底から外方に立ち上がる壁面をもち、現状で上端幅約１m、下端幅約70cm を測る。本来は並行する２条の溝の可能性もあるが、削平のためか深さも９cm程度しか残存しておらず、判然としない。遺物は須恵器杯蓋片**280**・**281**、壺片**282**、緑釉陶器片**291**などの出土がみられるものの、遺構自体は僧房と直接関係しないと思われる。

第４章　遺物

第１節　瓦類

第４～６次調査では、整理コンテナで94箱分の出土遺物があり、その大半が瓦類である。種別としては、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・隅木蓋瓦・隅切瓦・鬼瓦・塼が出土した。凹面に文字が刻まれた平瓦も確認している。軒瓦の型式分類は、『備国１』に準じており（図59・63参照）、瓦当が残存するものはすべて収載した。丸瓦・平瓦は、形状・規格がよく判るもの、あるいは叩きなど製作技法が明瞭なものを取り扱っている。

（１）軒丸瓦

『備国１』では創建期から中世に属す29型式を設定しており、図59にその一覧を示している。そのうち第４～６次調査では、軒丸瓦１・６・10・21・24・29式の合計６型式が出土した。出土地点は表２に掲載したが、１式はほぼ全域にわたって確認されている。

軒丸瓦１式（図60・61、図版15－１・２・８）

単弁八弁蓮華文軒丸瓦。第１～３次調査においてもすべての堂塔から出土した、軒丸瓦の中で最多数を占める創建期の瓦である。第４～６次調査でも出土した軒丸瓦の中で一番多く、瓦当が残存するものは11点である。

色調は**23**が灰白色、**27**が須恵質の灰色を呈し、**24**など淡黄や灰黄色を呈するものも多い。**21**・**22**の表面は炭素を吸着し灰色を呈している。**21**･**22**･**26**～**28**とも丸瓦接合部で剥離しており、**27**の接合面には丸瓦部の布目圧痕が明瞭に残っている。丸瓦接合式によって製作されていることが明らかである。

内区の中房は径約2.5cm の円形で膨らみ、間弁は水滴形である。外区内縁には二重の圏線が巡る。瓦当の復元径は残存状況がよい**22**で約18.0cm を測る。 **21**・**22**は、瓦当側面の周縁端面から約1.0cm に明瞭に笵型の痕跡が残る。瓦当裏面の調整は、**23**・**27**のように上部に指頭押圧が認められ、下部

表２　軒瓦の出土状況

単位：点

型式		僧房					回廊	金堂	築地		その他		
		T21	T25	T26	T31	T32	T33	T22	T 1	T20	T14	T27	T28
軒丸瓦	1	1	1		3	1	1		1		1	1	1
	6										1		
	10			1									
	21									1			
	24							1					
	29					1							
軒平瓦	1B					6	1						
	2B							1					
	4			1		1							
	5			2									
	新規						1						

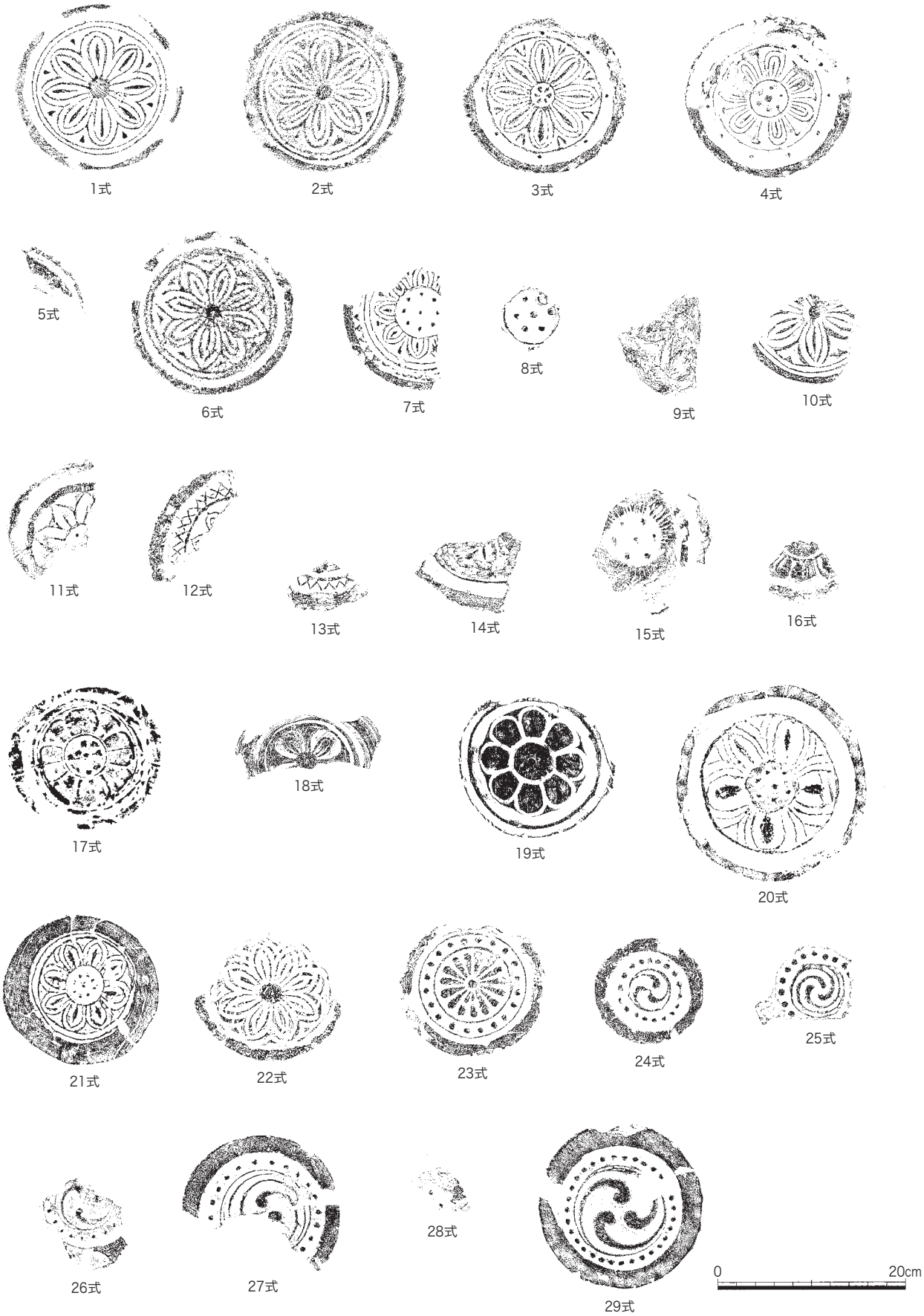

1式
2式
3式
4式
5式
6式
7式
8式
9式
10式
11式
12式
13式
14式
15式
16式
17式
18式
19式
20式
21式
22式
23式
24式
25式
26式
27式
28式
29式
0
20cm

図59　軒丸瓦一覧（1/6）

図60　軒丸瓦１式（1/4）

はナデのものと、21・22のように下部にナデもしくはケズリを施すものがある。

瓦当側面下端には、22・23で直径約９mmの２つの円形圧痕が認められたが、すべてに施されているわけではない。

『備国１』で検討されているとおり、軒丸瓦１式には丸瓦部の先端に刻みをもつ資料がかなり確認されている。軒丸瓦１式以外の型式でも、丸瓦部に刻みを施すものがあるため、１式以外のものを含む可能性があるが、ここで、刻みのある資料についてみておきたい。刻みは、尖ったヘラ状のもので施され、凸面のみ（31～34・37）あるいは凹凸両面にみられるもの（35・36）がある。

31は丸瓦部と瓦当上端の接合状況がよくわかる資料で軒丸瓦１式である。丸瓦部凸面の先端には、大きめの斜格子の刻みがなされ、瓦当部と接合するための粘土を貼り付けている。刻みはほぼ丸瓦の

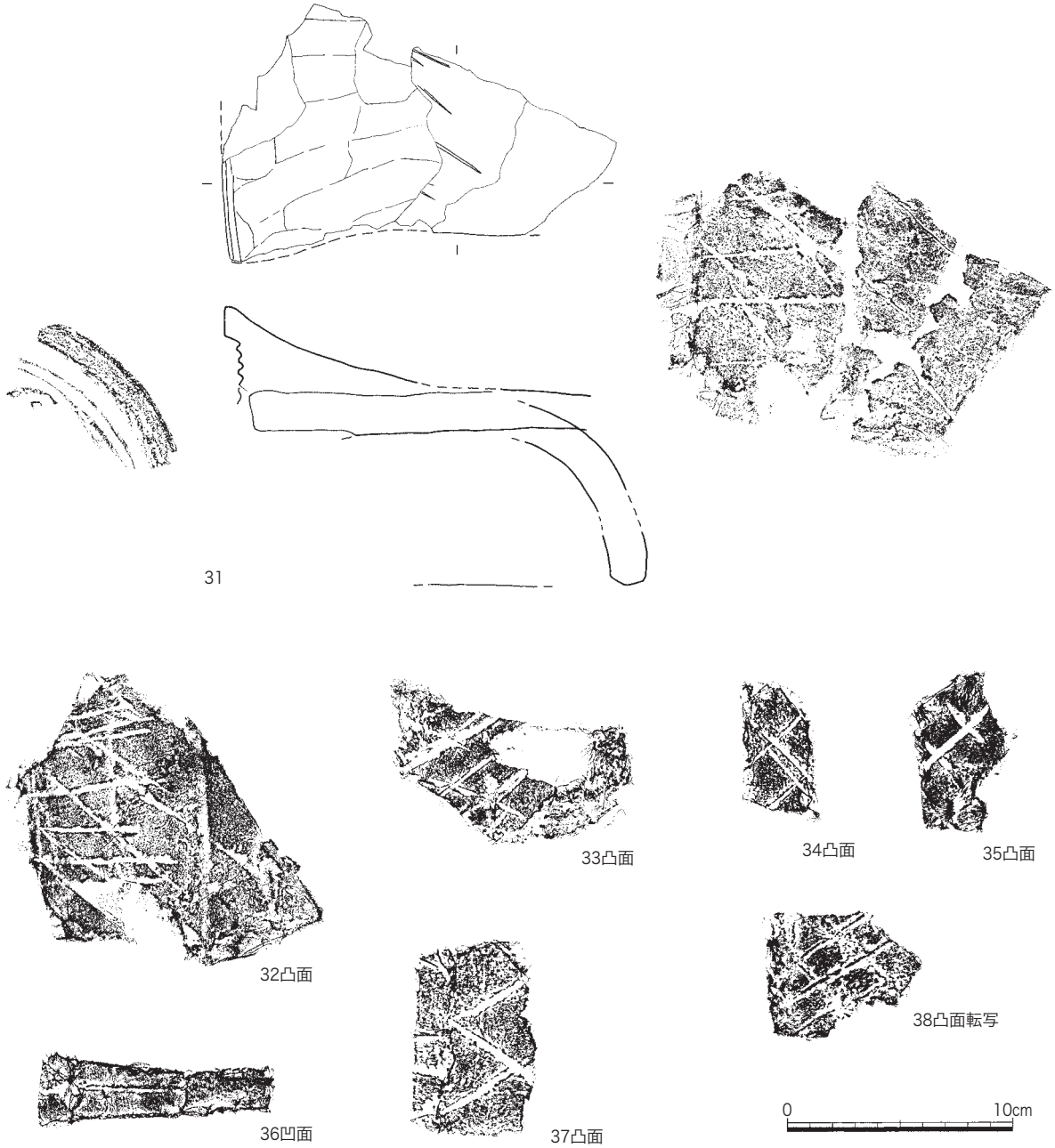


図61　刻み（1/3）

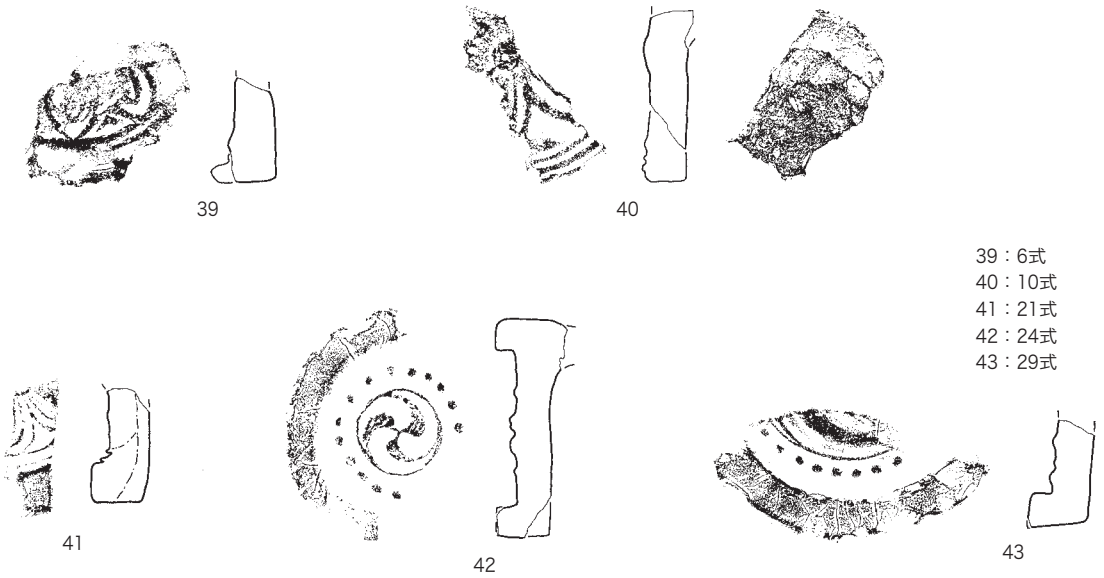


図62　軒丸瓦６・10・21・24・29式（1/4）

軸線に平行に施された沈線の後に左下がりの斜線を施している。刻みの範囲は丸瓦部端面から10.5cmまで認められる。また、瓦当側面上端から丸瓦部上半には、縦方向のケズリが施されている。**32**も、丸瓦の軸線にほぼ平行な沈線の後に左下がりの斜線を施しているが、沈線どうしの間隔が狭い所などもあり、やや雑な施文である。**33**は斜格子であるが施文の順序はやや不明瞭である。**34**は右下がりの斜線の後に左下がりの斜線を施している。**35**は、凹凸両面とも左下がりの斜線の後に右下がりの斜線を引いている。**36**は凹凸両面とも平行の刻みで、凹面は約１cm、凸面は2.5～3.0cmの間隔で施されている。刻みは１cmと深く刻まれているため、刻みのラインで剥離している。**37**は太くはっきりとした施文で、均整のとれた格子である。右下がりの斜線の後に左下がりの斜線を施している。**38**は接合部が剥離した破片に丸瓦部凸面の刻みが転写されたものである。

31以外は瓦当が残っておらず型式は不明であるが、『備国１』のとおり軒丸瓦１式がその多数を占めると思われ、その刻みはバリエーションに富んでおり、それぞれが製作する工人の違いを反映しているものと考えられる。

軒丸瓦６式（図62－39、図版15－3）

39は、瓦当の５分の１程度の破片であり、表面の剥落が激しく、瓦当文様は明確でないが、単弁八弁蓮華文の軒丸瓦６式である。軒丸瓦１・２式と混同しやすい。

蓮弁の先端が外区内縁の二重の圏線に接し、間弁は明瞭でないが、三角形を呈している。瓦当裏面はナデ調整である。また、『備国１』でも６式の最大の特徴として挙げられているとおり、色調が橙色を呈し、軟質の焼成で器表の剥落が著しい。

出土はＴ14からである。『備国１』において塔調査区が分布の中心になることが指摘されており、このたびも塔に近い調査区からの出土であるため、主に塔に使用された瓦である可能性が高い。

軒丸瓦10式（図62－40、図版15－４）

40は瓦当の８分の１程度の破片であるが、軒丸瓦10式と認められる。『備国１』の第１～３次調査では出土せず、昭和49年度確認調査で１点出土していた型式で、瓦当文様の全形は単弁六弁蓮華文と

なる。

中房が径1.5cm、復元径が14.0cm と小さい。また、僅かに残存している外区外縁の周縁は、内縁の圏線より低く、幅はかなり狭い。残存する三角形の間弁から、左の蓮弁に棒状に線が延びて→形になっており、笵傷と認められる。瓦当裏面の調整はナデで、色調は橙色である。

軒丸瓦21式（図62－41、図版15－５）

41は軒丸瓦21式の破片で、瓦当文様の全形は単弁八弁蓮華文である。中房の外側の圏線から蓮弁、外区が残る。『備国１』において、製作技法からａ・ｂ２種類に区分されている型式で、**41**は瓦当裏面がナデ調整で幅広の周縁をもつ、丸瓦接合式の21ｂ式である。なお、今回の調査では出土していない21a 式は、一本作りである。

蓮弁外側の圏線と周縁内側の圏線、そして周縁は、階段状に外側にむかって高くなる。破面には、瓦当に詰めた粘土接合痕が認められる。色調は灰白色を呈する。

軒丸瓦24式（図62－42、図版15－６）

42は、三巴文の周囲に18個の珠文を配する軒丸瓦である。瓦質の焼成で表面灰色を呈し、中世に属す。瓦当復元径は11.4cm で、小型である。巴文の先端は接続する。左下の２個の珠文から外区の周縁にむかって比較的大きな笵傷が認められる。瓦当裏面はナデにより調整が施されている。

Ｔ22の礎石３の抜き取り穴から出土しているが、講堂から流入したものと考えられる。

軒丸瓦29式（図62－43、図版15－７）

43は、三巴文の周囲に珠文を配する。焼成は瓦質で灰白色を呈し、中世に属す軒丸瓦である。瓦当裏面および側面は丁寧にナデを施している。Ｔ32の現代暗渠から出土しているが、『備国１』で述べられているとおり再建された講堂に使用された軒丸瓦である。

（２）軒平瓦

軒平瓦は『備国１』において創建期から中世までに34型式が設定されており、図63にその一覧を示している。そのうち、第４～６次調査では１Ｂ・２Ｂ・４・５式とこれまで確認されていなかった新規の型式を含めた合計５型式が出土した。出土地点は表２のとおりで、１Ｂ式が７点で最も多く、他は１～２点のみの出土である。

軒平瓦１Ｂ式（図64・65、図版16－１・２）

均整唐草文軒平瓦で、第１～３次調査においても出土点数が他の型式より圧倒的に多く、軒丸瓦１式と組み合う創建瓦である。**44**～**49**までが僧房に関わるＴ32からの出土で、**50**は西面回廊を調査したＴ33から出土した。なお、**44**と**49**は僧房基壇外装Ｂにおいて外装材として使用されていたものである。

45・**50**の瓦当面には明瞭に笵の木目が水平方向にみられる。**46**の凹面右端や**47**の凹面左端と側面上部の周縁は製作時のケズリ調整によって削り取られてしまっている。

凸面は縄目叩きで、**45**のみ瓦当付近はタテ方向のナデが施されている。凹面は布目が残り、瓦当付近はヨコ方向のケズリあるいはナデが認められる。**46**・**49**には糸切り痕が残り、側面は上下２段で削られ、「く」字状になる。

50は灰白色を呈すが、他は黄褐色系の色調を呈する。

軒平瓦２Ｂ式（図66－51、図版15－９）

51はかなり肉厚な破片で、中心飾りより右側の唐草文が認められる。瓦当面の下側は剥離してし

1A式
1B式
2A式
2B式
3式
4式
5式
6式
7式
8式
9式
10式
11式
12式
13式
14式
15式
16式
17式
18式
19式
20式
21式
22式
23式
24式
25式
26式
27式
28式
29式
30式
31式
32式
33式
34式
0
20cm

図63　軒平瓦一覧（1/6）

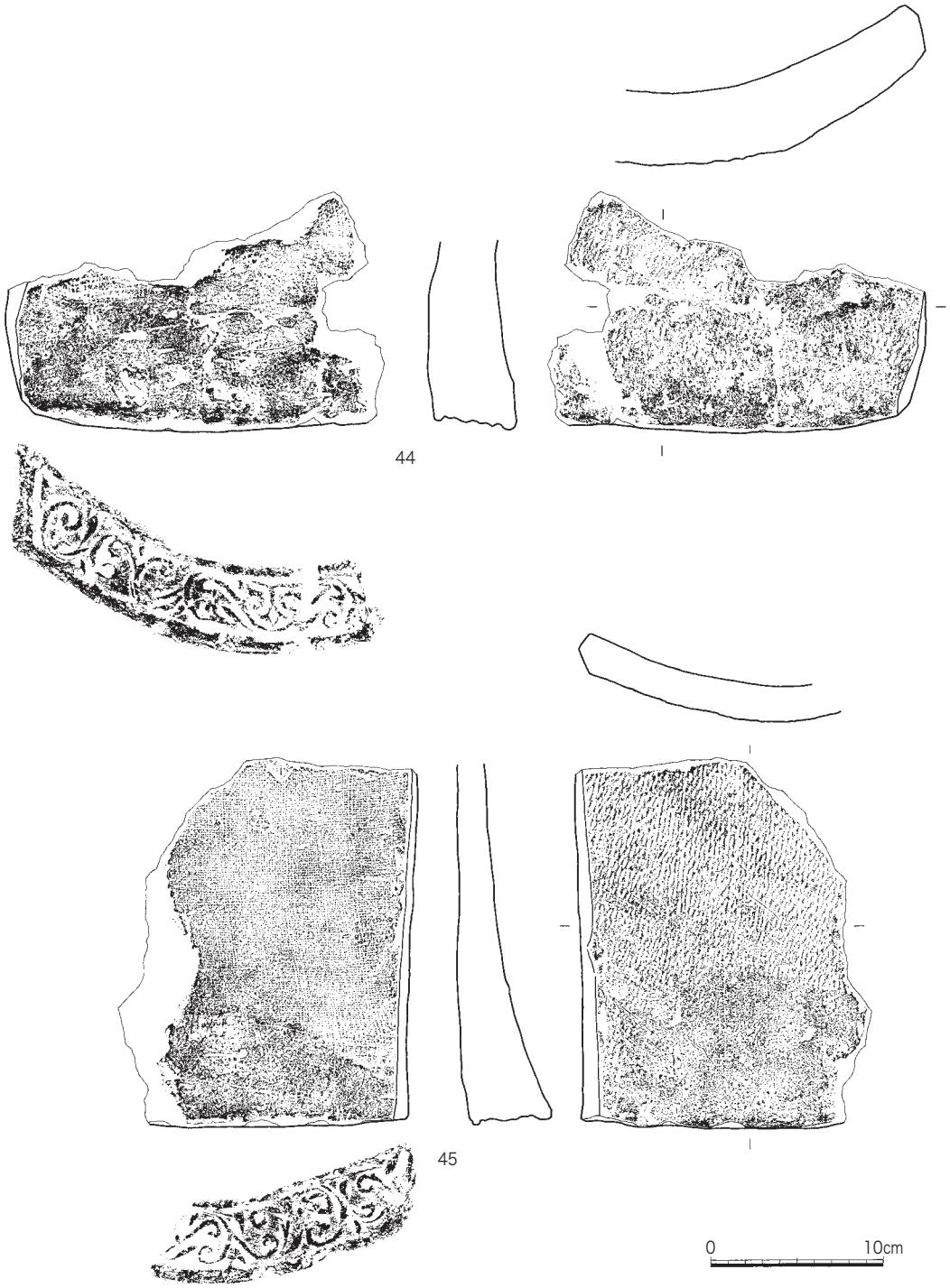


図64　軒平瓦１Ｂ式①（1/4）

まっている。均整唐草文軒平瓦であるが、中心飾りが左に偏り左右対称にならない瓦当文である。『備国１』においても指摘されているとおり、周縁や唐草文の表面、すなわち瓦当の高い部分に平行の条線が認められる。乾燥しきらないうちに、瓦当面を下にして置いたため、下に敷かれた植物などの圧痕が付いたものと考えられる。色調は灰白色を呈する。Ｔ22礎石３の抜き取り穴から出土した。

軒平瓦４式（図66－52・53、図版15－10、16－３）

52が中心飾りより左側、**53**が右側の破片で、両方とも瓦当上部が剥離している。均整唐草文軒平

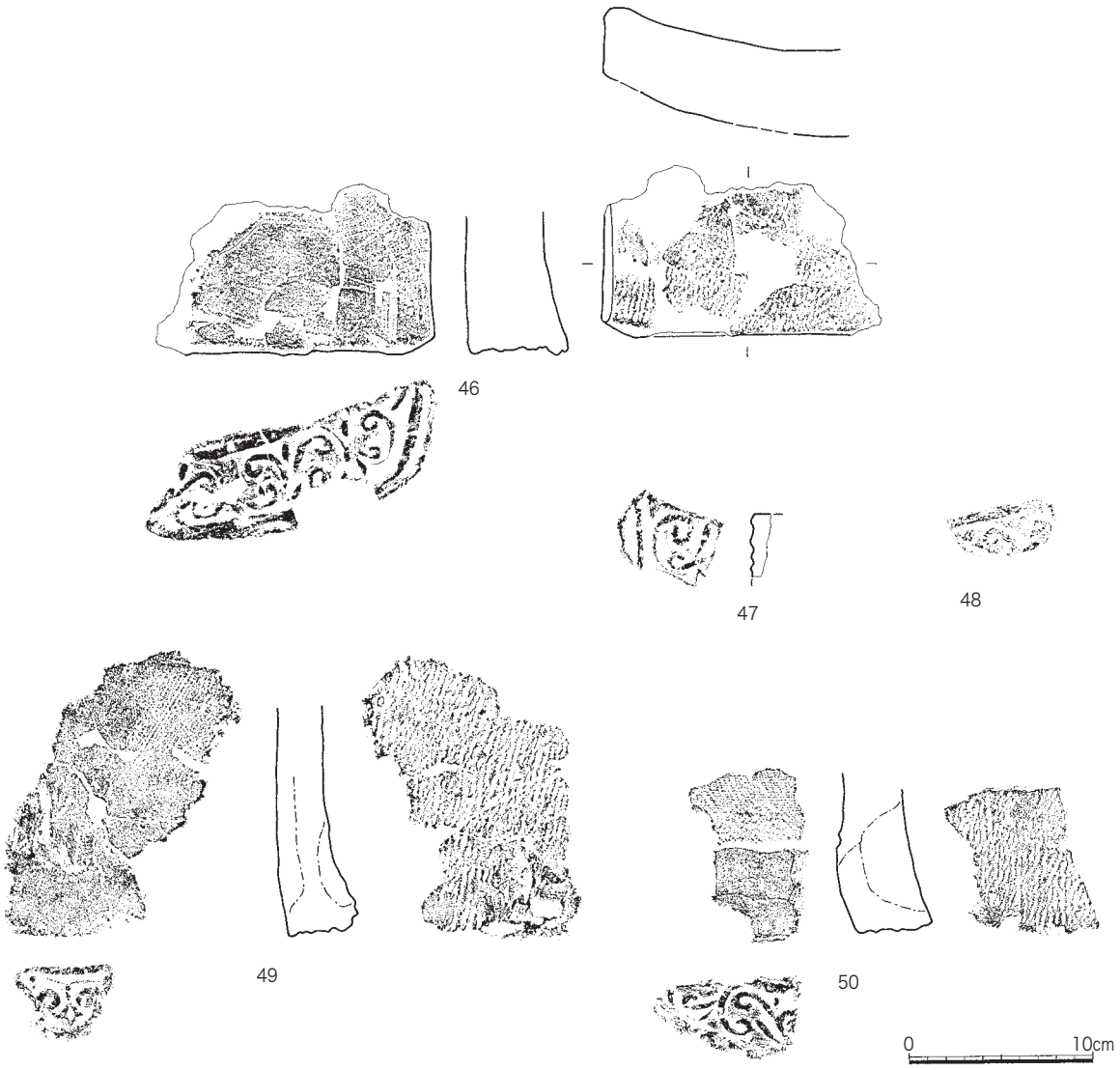


図65　軒平瓦１Ｂ式②（1/4）

瓦で、外区の珠文と主葉からのびる支葉が特徴的な瓦当文である。

『備国１』で報告されているとおり、形状および調整からＡ・Ｂの２種類に区分される。**52**は瓦当文様がシャープで、外区の珠文と周縁がみられ、瓦当近くの凸面はナデで４Ａ式と考えられる。一方、**53**は本来外区にある珠文および周縁が欠落し、瓦当付近の凸面に糸切り痕が顕著に残ることから、４Ｂ式の可能性がある。いずれも凸面は瓦当面から４～５cmのところで破損しているため、顎が形成されているかどうか不明であり、側面も残っていないため、脇区が切り取られているかどうかわからない。

色調は、灰黄～浅黄橙色を呈し、**52**がＴ32、**53**がＴ26からの出土である。

軒平瓦５式（図66－54・55、図版15－11）

54・55とも瓦当面の破片であるが、偏向唐草文軒平瓦の５式である。浅黄橙色を呈する。いずれもＴ26からの出土である。

新規の型式（図66－56、図版16－４）

56は瓦当の右端のみしか残っていないが、『備国１』を含めてこれまで知られていない型式の唐草文軒平瓦である。Ｔ33の西面回廊上の瓦だまりから出土した。

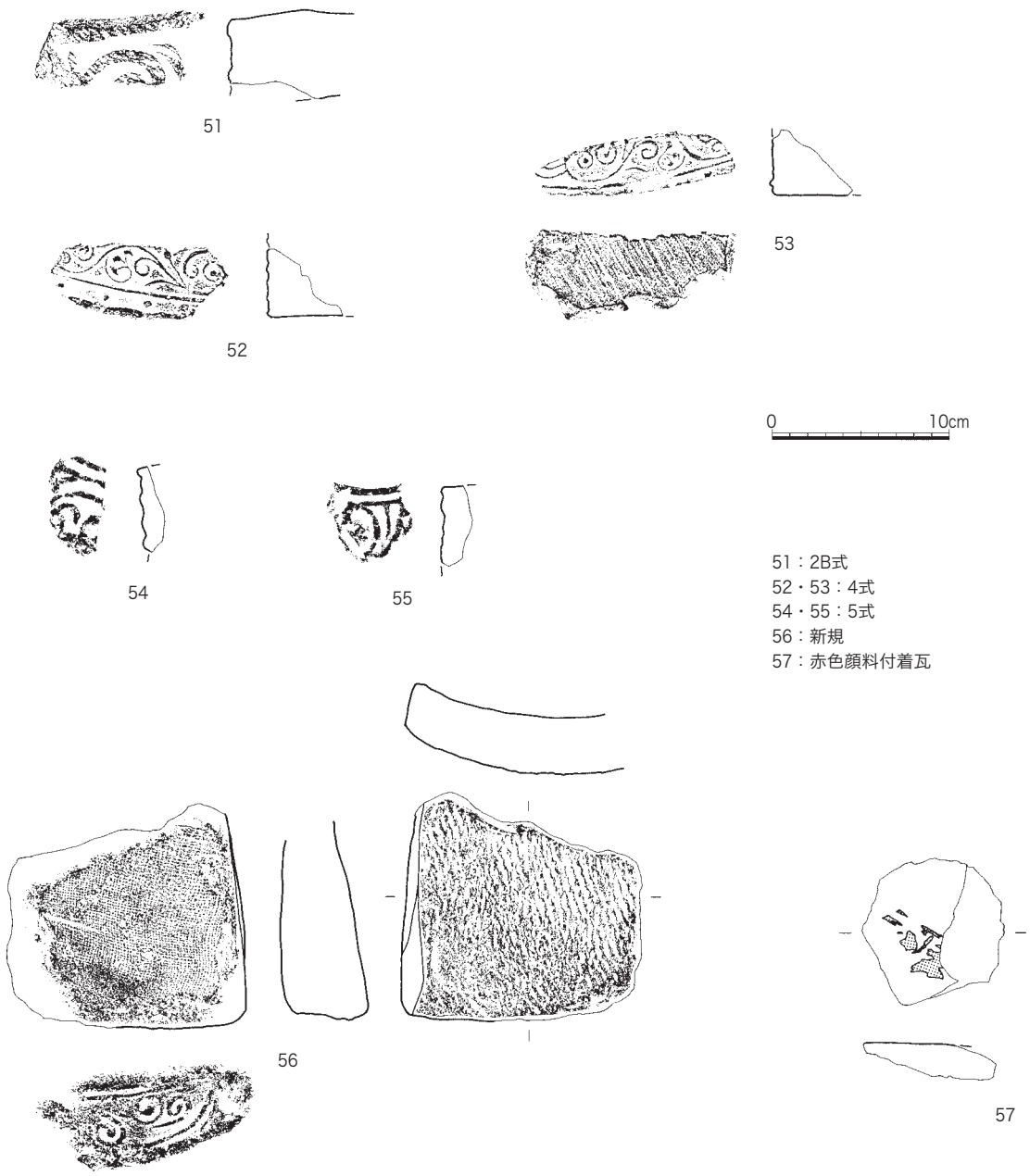


図66　軒平瓦２Ｂ・４・５式・新規の型式・赤色顔料付着瓦（1/4）

遺存状況はよくないが界線は２本あり、右端から唐草文の上向き２、下向き１が確認できる。凸面は縄目叩き、凹面には布目が残り、側面はケズリ後ナデ調整がなされている。凸面の側面付近はケズリが施され、凹面の瓦当付近はナデが認められる。灰色を呈している。補修瓦の一型式とみられる。

赤色顔料の付着した瓦（図66－57、図版15－12）

57は、凸面部分の破片であるが、赤色顔料が付着している。赤色顔料がみられる面は、ケズリ後にナデ調整されており、平瓦部の狭端側にむかって縄目叩きが認められる。第４～６次調査において赤色顔料が付着した軒平瓦はこの１点のみの出土であるが、第１～３次調査では軒平瓦２Ｂ式にそういった資料が比較的多く確認されており、凸面の調整からも赤色顔料の付着した破片**57**は軒平瓦２Ｂ式とみてよいのではないかと考えられる。

（３）丸瓦

『備国１』で丸瓦は、創建期の玉縁式、金堂上層瓦だまりに伴う丸瓦部と玉縁部の段差が小さな玉縁式、金堂上層瓦だまりに伴う行基式、中世に属す各種の型式が報告されている。第４～６次調査では、創建期の玉縁式、丸瓦部と玉縁部の段差が小さな玉縁式、中世に属す瓦質の丸瓦を確認している。破片が多く、形状がよくわかる資料は少ない。

創建期の玉縁式（図67～69－64・65、図版16－５～７）

58～**65**は創建期のものと考えられる玉縁式の丸瓦である。

58は、Ｔ34溝29から完形で出土した。全長は35.4cm で玉縁部長さ5.9cm、筒部長さ29.5cm を測る。筒部の幅は下端側で15.2cm、玉縁側で14.0cm である。

凸面は縄目叩きの後、ヨコナデが施されており、ほとんど縄目叩きは残っていない。凹面全体に布目が認められる。凹面の玉縁部上端から筒部中程の側端部にむかって粘土板の合わせ目の痕跡が確認でき、内型に玉縁部と筒部同時に粘土板を巻き付けて製作したことがわかる。半裁後、裁断面とその内側にケズリを施し面取りとしている。色調は青灰色を呈し、須恵質の焼成である。**58**は規模、調整とも創建時に使用された丸瓦の典型的な資料といえる。

59と**60**は、玉縁部から筒部上半の状況が窺える資料である。玉縁部長さは**58**よりやや長く**59**が6.6cm、**60**が6.8cm を測る。筒部の玉縁側の幅が、**59**で13.5cm、**60**で14.4cm である。凸面、凹面の調整は**58**と同様である。**60**には、凹面に布目の他、糸切り痕も確認される。

61は玉縁部の長さが短く3.6cm で、筒部玉縁側の幅も12.7cm と小振りであるが、各種調整は他のものと共通する。Ｔ33の西面回廊上の瓦だまりから出土した。

62～**64**は筒部下半の資料で、凹面下端に布目を消すように幅２cm 強のケズリがみられる。**62**の凸面には縄目叩きとナデを施した後に、横方向の条線がみられる。また、**63**は筒部がゆがみ、かなり変形している。**64**・**65**は凹面に糸切り痕が明瞭に残る。

丸瓦部と玉縁部の段差が小さい玉縁式（図69－66、図版16－８）

66は玉縁部と丸瓦部の段差が残る破片である。段差は小さく、筒部から玉縁部へ垂直でなく斜面として延びる。筒部の玉縁部との接続部は、断面三角形を呈する。凸面は横方向のナデが施され、凹面には糸切り痕が残る。厚さは1.4cm と非常に薄い。明青灰色の色調で、須恵質の焼成である。

Ｔ22の昭和49年度トレンチ埋土の掘り上げ中に出土した。『備国１』では金堂上層瓦だまりに伴う丸瓦として報告されており、金堂の屋根瓦補修に関わるものと考えられる。第１～３次調査で出土した、この型式の玉縁部凸面には「天」の刻印がみられる。**66**は玉縁部が完全に残っていないので、刻印があるかどうかは不明である。

中世の丸瓦（図69－67、図版16－９）

67は瓦質で表面は炭素を吸着して黒色を呈する。Ｔ24からの出土で、北に位置する再建された講堂に葺かれたものである。凹面の側端側の面取りは2.5～3.0cm の幅広で、端部は丸くおさめる。下端も斜面状にナデ調整される。凸面は縄目叩きの後に縦方向の丁寧なナデ調整がなされる。

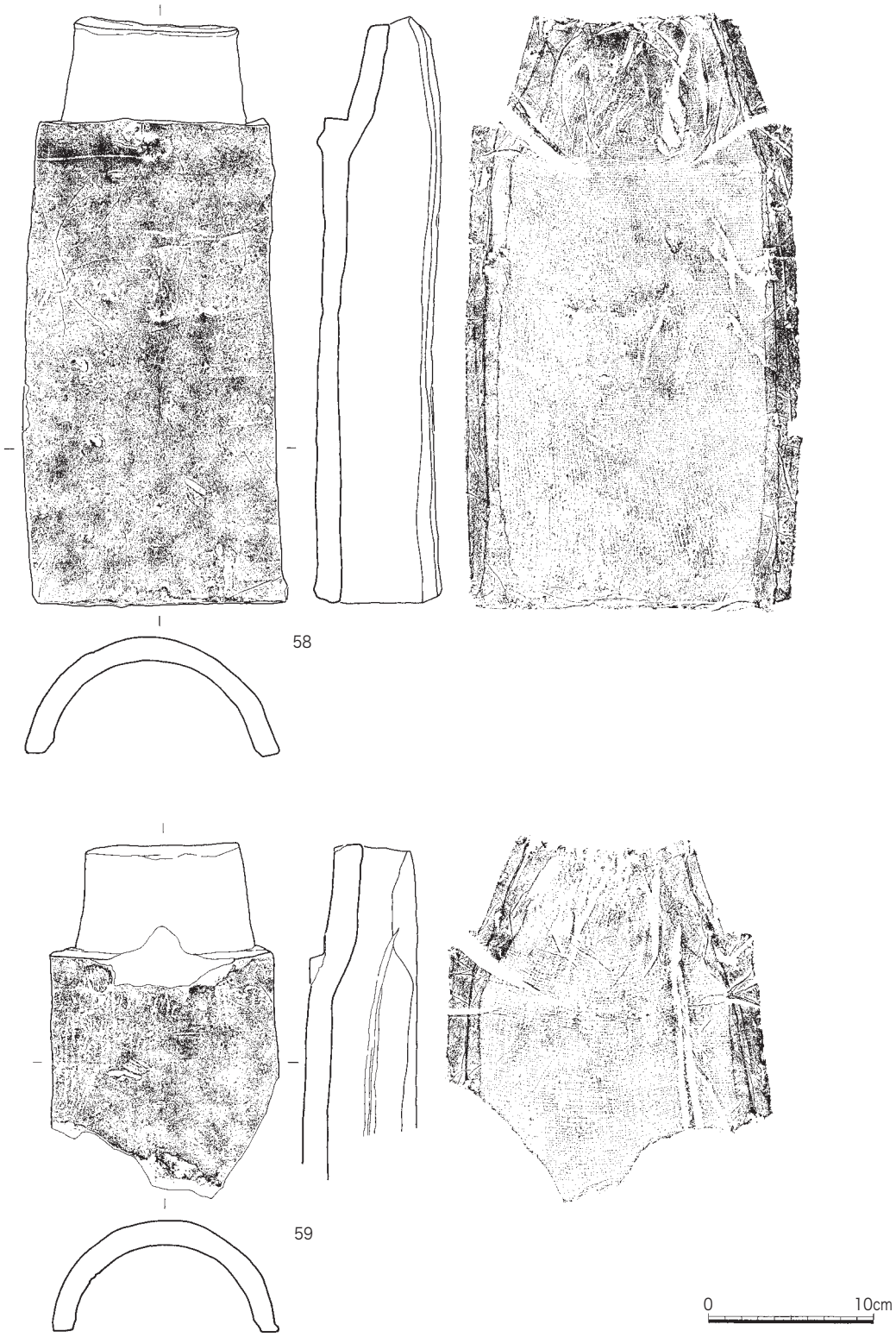


図67　丸瓦①（1/4）

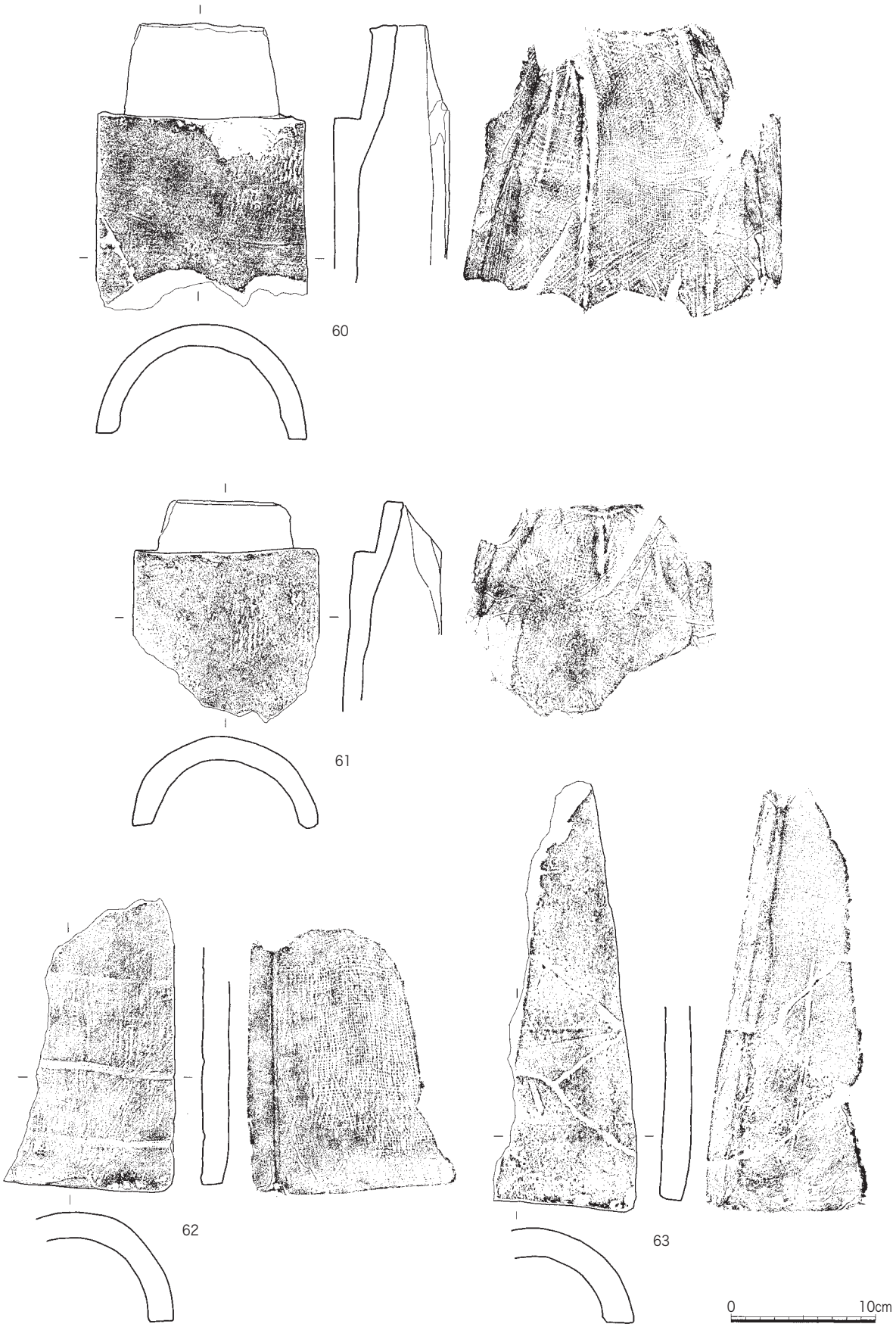


図68　丸瓦②（1/4）

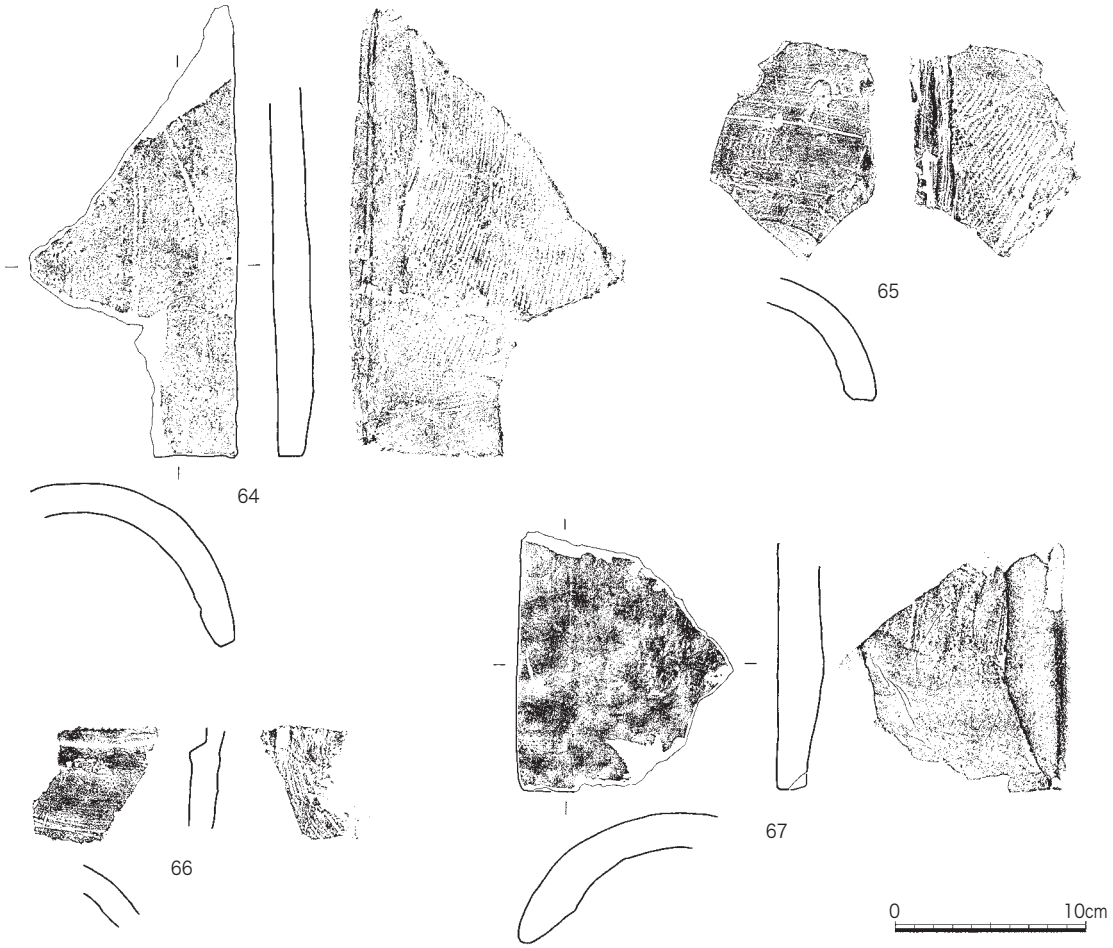


図69　丸瓦③（1/4）

（４）平瓦

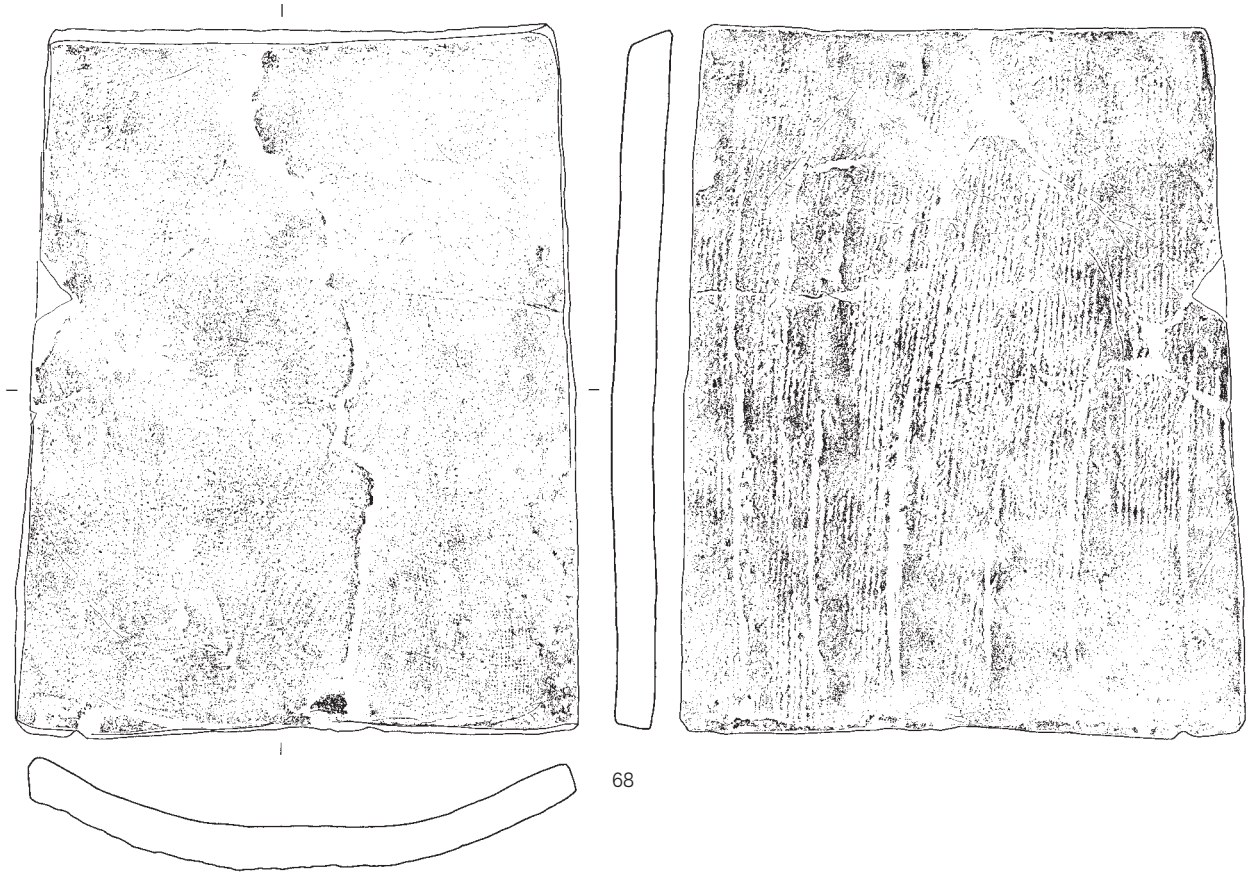
『備国１』では、凸面調整から創建期の縄目叩きをはじめ、補修用の格子叩き・平行叩きや金堂上層瓦だまりに伴う平瓦、中世に属すナデ調整の平瓦などに分類されている。第４～６次調査においては、凸面の調整から縄目叩き、格子叩き９種類、未調整、ナデ調整に分類できる平瓦が出土した。

凸面縄目叩き調整（図70～73、図版17－１～２）

平瓦の中で最も出土数が多く、創建期の平瓦である。T33の西面回廊上の瓦だまりを中心に完形品や準完形品が出土している。**68**は完形品で長さ36.9cm、狭端幅26.8cm、広端幅29.7cm を測る。他に図示した準完形品も含めると、法量は長さ34.6～37.8cm、狭端幅24.2～26.8cm、広端幅27.2～29.7cm の範囲に入る。

模骨痕はなく曲率が弱いことや、**68**・**73**～**75**に布端の圧痕が狭端あるいは広端にくっきりと認められることなどから、一枚作りで製作されたとみられる。狭端と広端の端面および両側端部の側面は、基本的にケズリ後ナデ調整である。**70**の広端には、乾燥時に下に敷かれた植物などの圧痕が条線として残っており、広端部未調整の資料もある。

凸面の縄目叩きはすべて縦方向である。縄目は基本的に１cm あたり２～３本の密度でみられる。**68**・**69**・**75**で確認できるように、叩きは狭端側と広端側に二分して行われている。叩きの回数は、



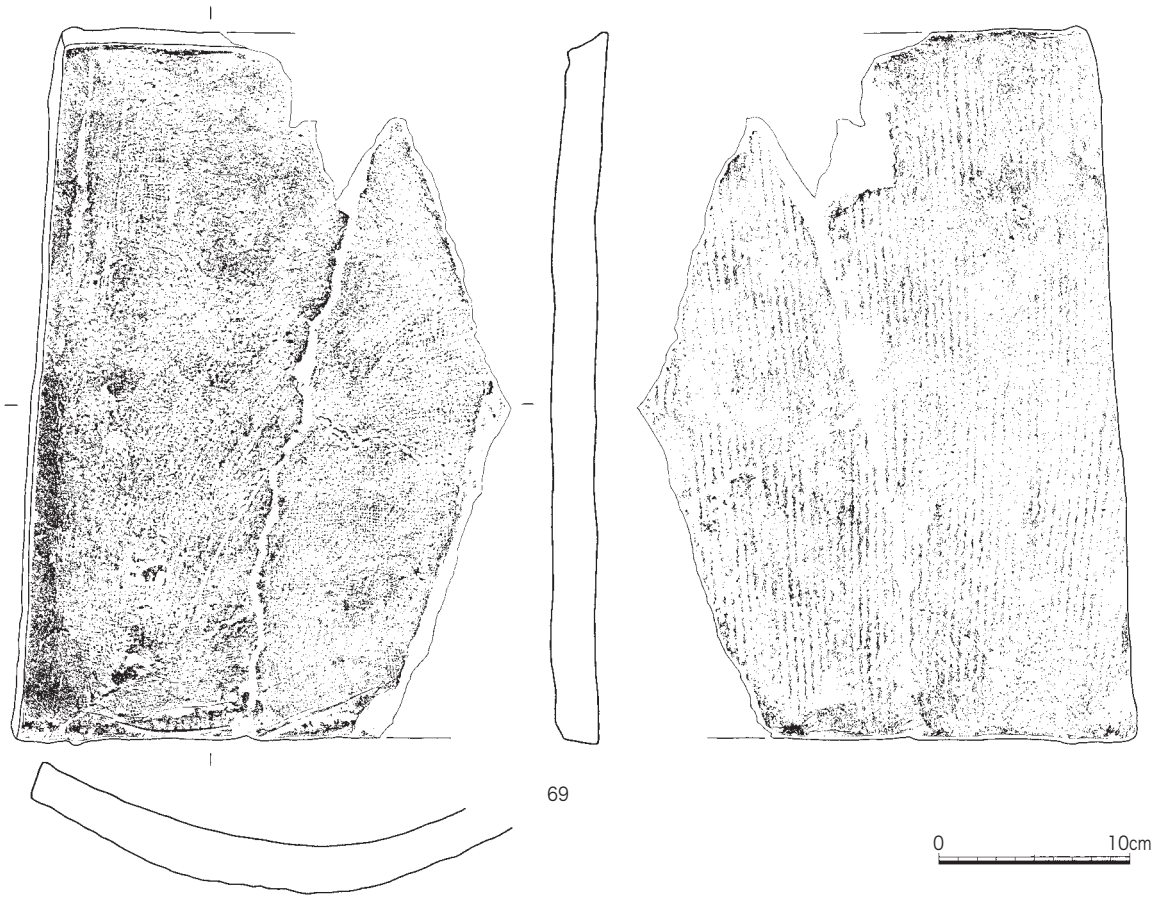


図70　平瓦①（1/4）

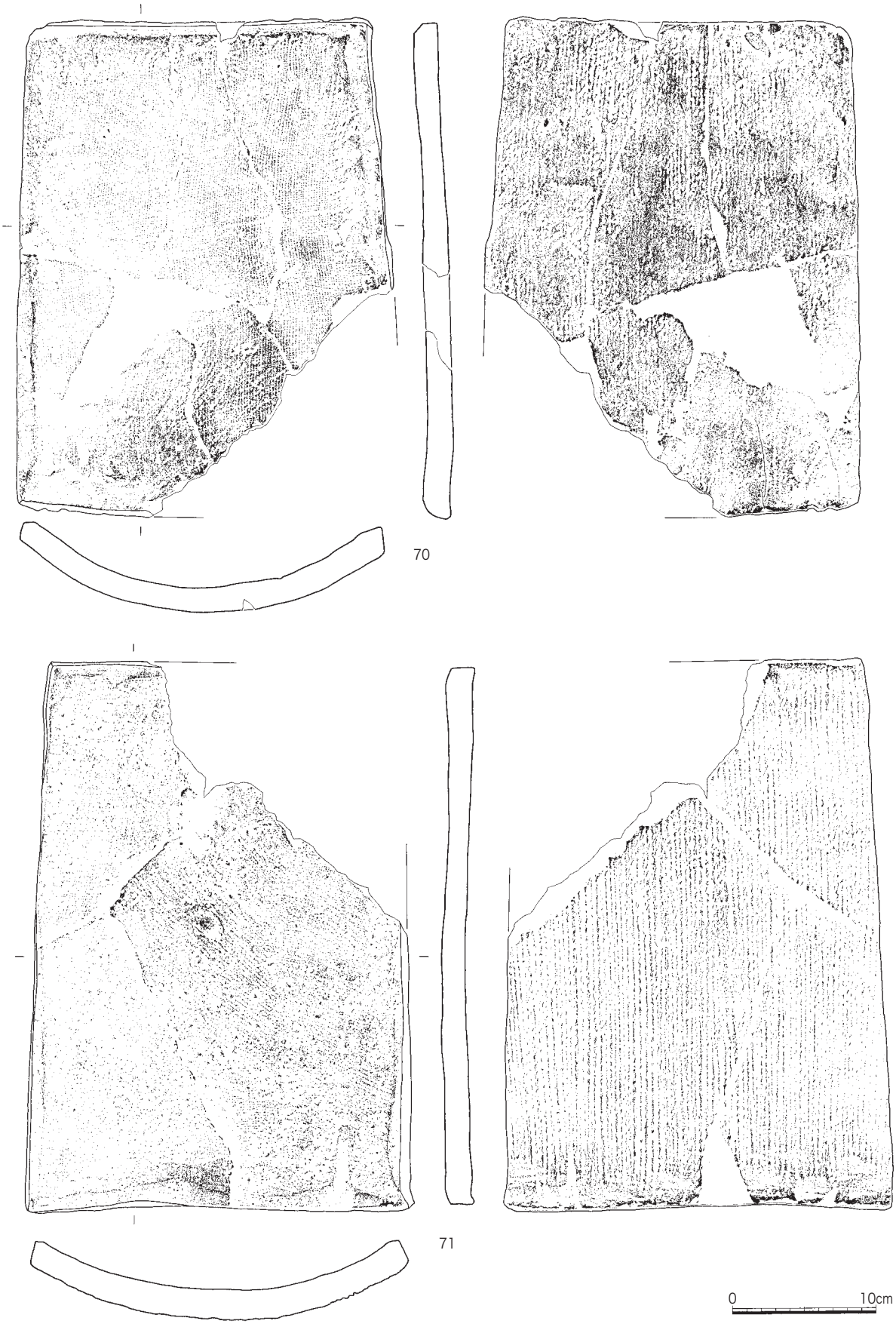


図71　平瓦②（1/4）

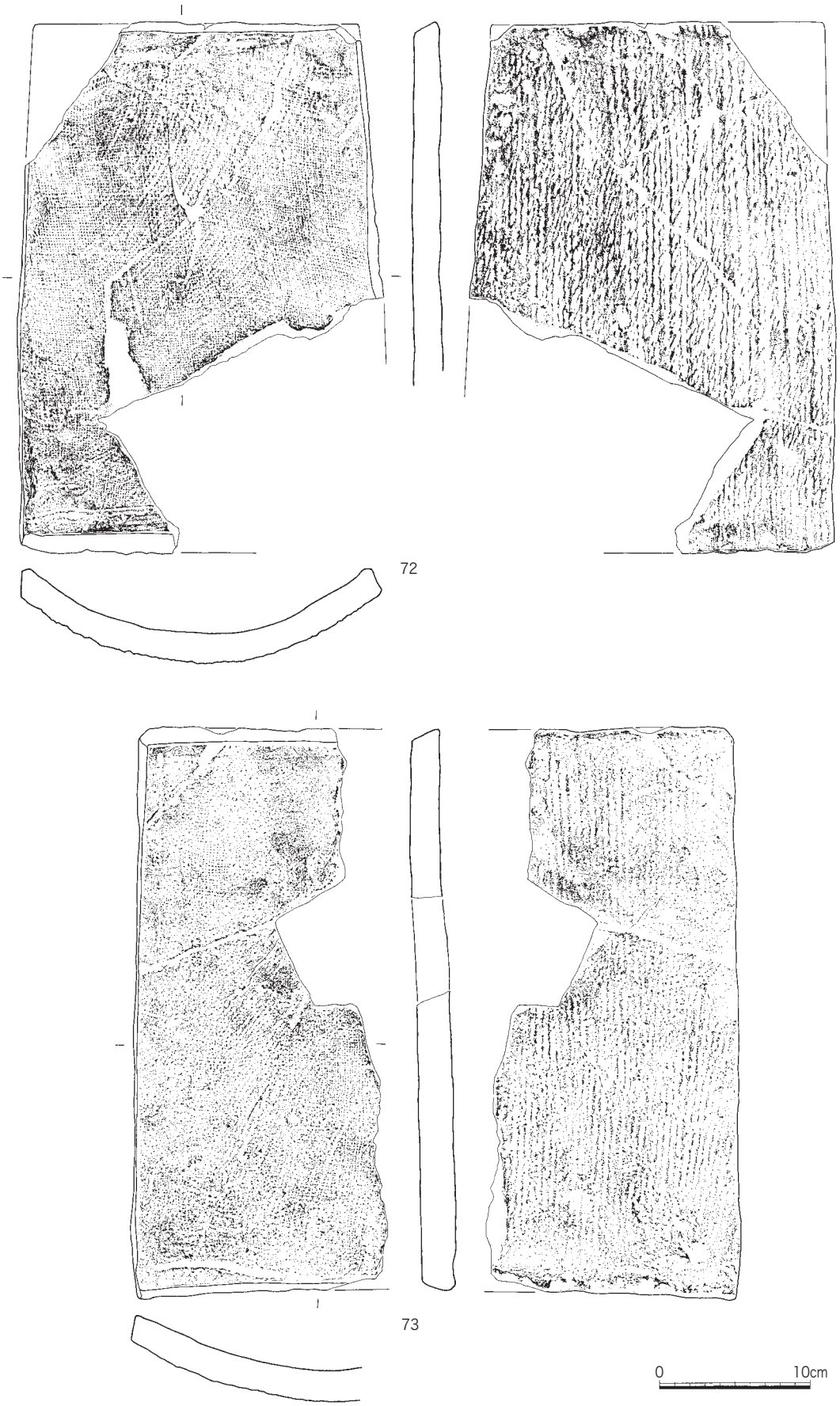
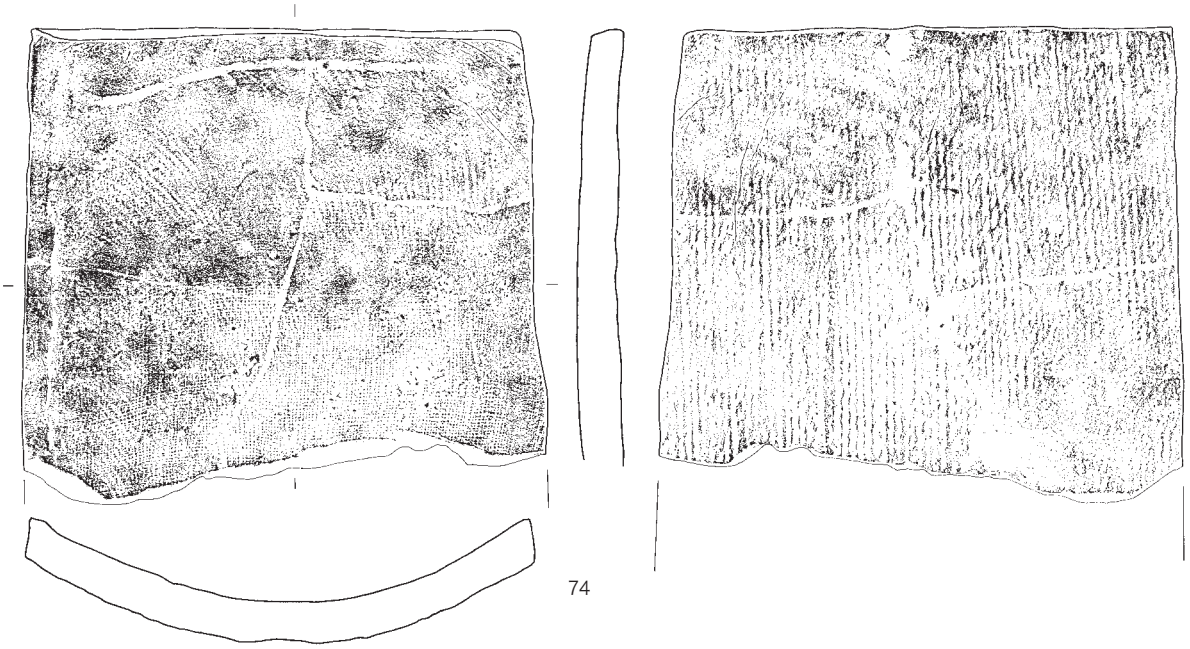
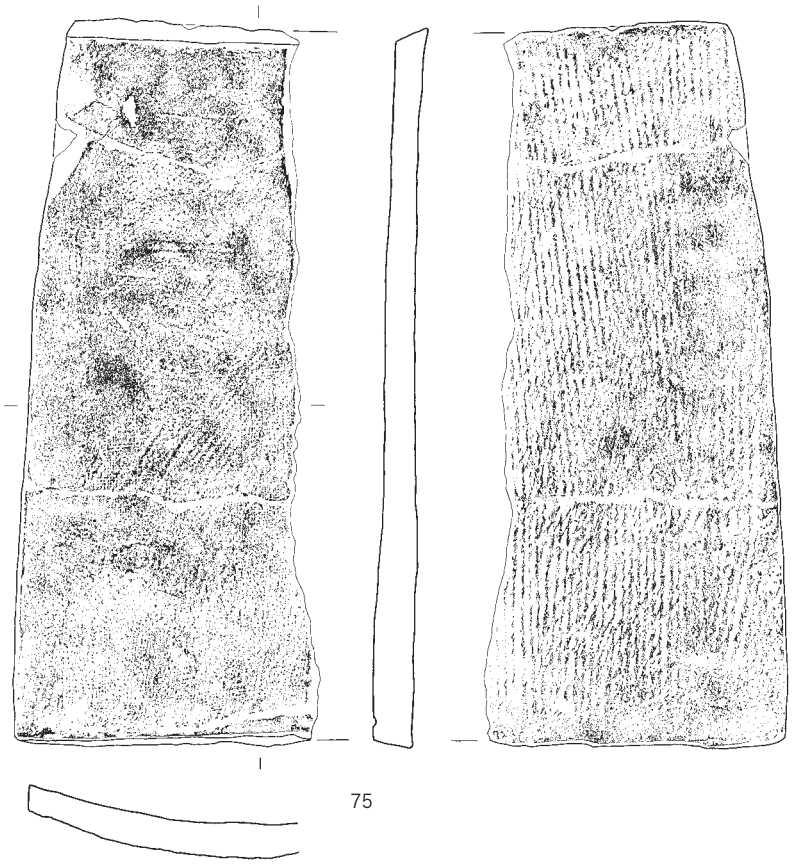


図72　平瓦③（1/4）





0　10cm

図73　平瓦④（1/4）

68で７回確認できる。

凹面には布目と糸切り痕が残り、75は中央から狭端にむかって布目を消すようにナデ調整がなされている。71の中央付近には指頭の痕跡がみられる。凹面の端部調整にはいくつかのパターンがみられ、両側端はほぼすべての個体で、ケズリあるいはケズリ後ナデが施されている。加えて、71・72のように凹面の狭端と広端両方にケズリあるいはケズリ後ナデの調整を施すもの、70・73・75のように狭端のみケズリ後ナデの調整を行うものがある。

凸面格子叩き調整（図74～76－88・89、図版17－３、18－１）

凸面格子叩き調整の平瓦は、格子の規格・形状から９種類に区分できる。分類はアルファベットの大文字とし、『備国１』の分類（アルファベット小文字）とは区別し、同種のものは（　）で併記することとする。前述の縄目叩き調整の平瓦が創建時のものであり、格子叩き調整のものは補修瓦と考えられる。

Ａ　76・77は縦方向で縦1.5～1.7cm、横７mm の格子叩き調整である。いずれもＴ28から出土した。色調は灰白色を呈する。凹面は77が布目後未調整、76が布目をヨコナデで消している。

Ｂ　78も縦方向の格子であるが、縦1.2cm、横６mm とＡより一回り小さい。格子の表出は深く、はっきりとしている。凹面には布目が残り、色調は灰色を呈する。Ｔ22の礎石３の抜き取り穴からの出土である。

Ｃ　79は９mm 方形の格子である。凹面には布目が残り、端部は面取りしている。色調は黄灰色である。Ｔ32の現代暗渠から出土した。

Ｄ　80・81は横方向の格子で、横1.2～1.5cm、縦1.0cm である。叩きによって段差が生じているのが特徴的で、81は横方向へ6.5～8.0cm の幅で動かされている。

凹面には布目と糸切り痕が残り、端部はケズリ後ナデで調整しており、凹面の調整は創建期の縄目叩き調整の平瓦に近い。80はＴ32の溝25、81はＴ33の西面回廊上瓦だまりから出土した。色調は浅黄～淡黄色である。

Ｅ（ｅ）　82・83は縦方向の格子で、格子の軸はやや斜めである。格子は縦2.5cm、横1.5cm で、叩き板の木目が格子の軸に直交して認められる。凹面には布目が残り、82は広端側か狭端側かは不明であるが、広くヨコナデが施されている。凹面端部の調整は、側端部側は幅５mm 程度で細くナデを行っている。色調は灰白色を呈し、側面や広端、狭端面はケズリ後丁寧にナデを施している。いずれもＴ33の西面回廊上瓦だまりから出土した。

Ｆ（ｆ）　84～86は横方向の格子目で、横2.0～2.5cm、縦1.5cm である。Ｄと同様に、叩き板の動きによって段差が生じている。凹面には布目が残り、84・86には糸切り痕が認められる。凹面の端部調整は、側端部および、広端もしくは狭端のどちらか不明であるが、一方にケズリ後ナデの調整を施す。84は淡黄色、85は橙色、86は灰白色を呈し、85はやや軟質の焼成である。84はＴ32溝26、85はＴ25礎石６の抜き取り穴、86はＴ28から出土した。

Ｇ（ｉ）　87は、縦5.0cm を測る縦方向の格子で、端から7.5cm のところに叩きで生じた段差がある。また、凸面には離れ砂がみられる。凹面はヨコナデ調整で、端部はケズリの後にナデが施されている。Ｔ32からの出土で、灰色を呈する。

Ｈ　88は凸面がかなり磨耗して状態はよくないが、大きな横方向の格子目である。幅は23.4cm を測る。軟質の焼成のため、凹面の調整も不明瞭である。Ｔ33西面回廊上の瓦だまりから出土した。『備国１』158と同種とみられる。

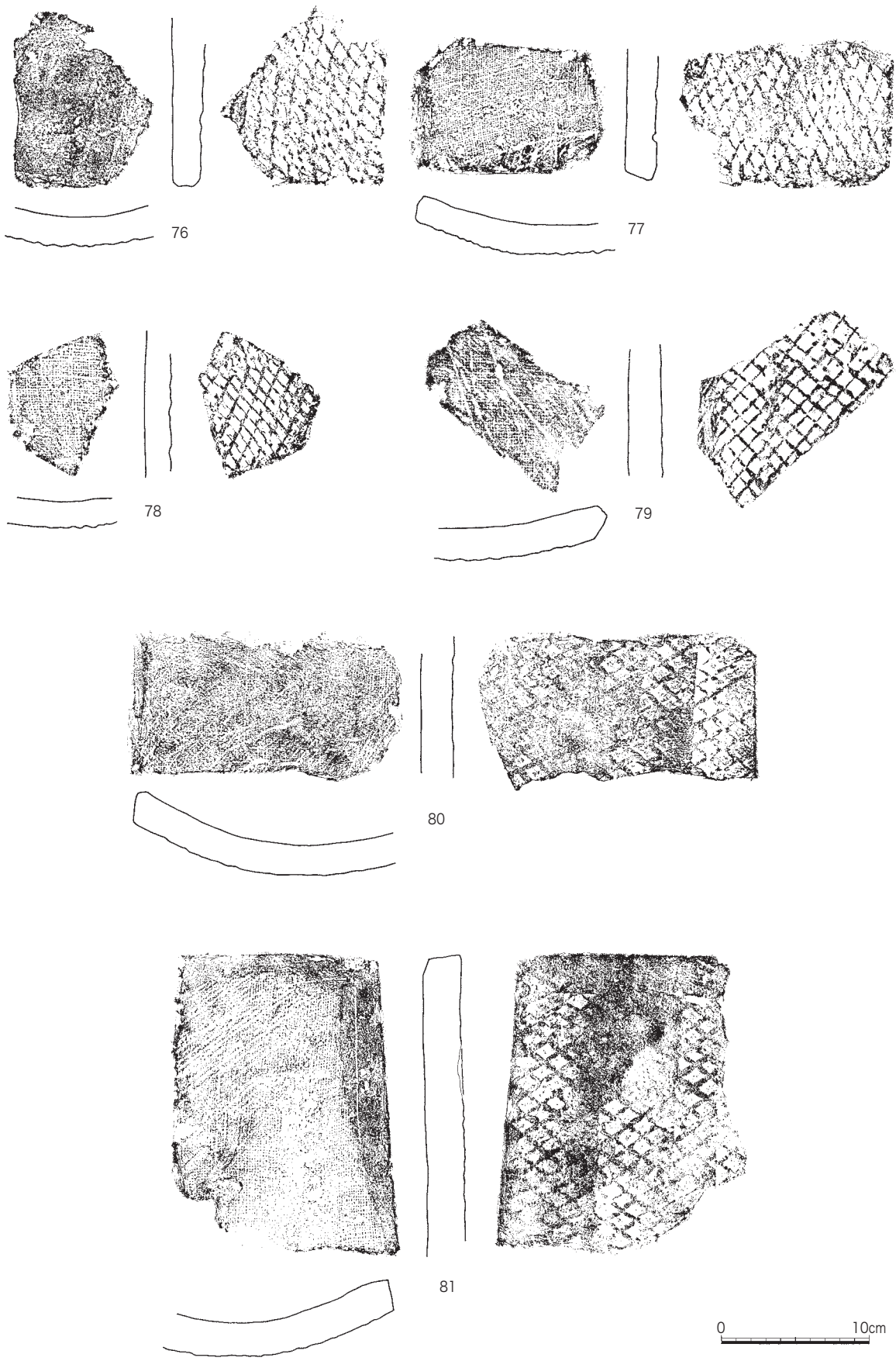


図74　平瓦⑤（1/4）

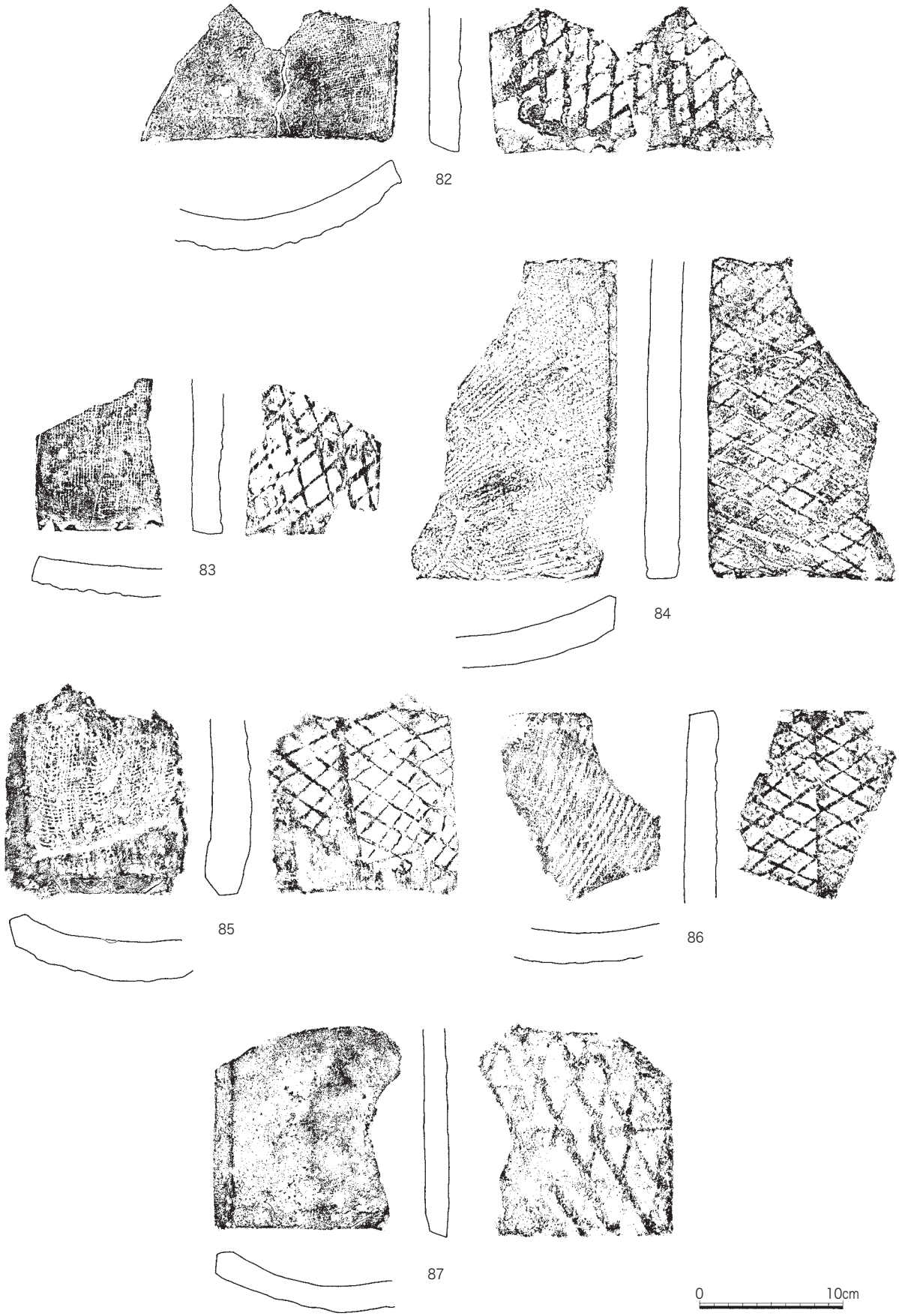


図75　平瓦⑥（1/4）

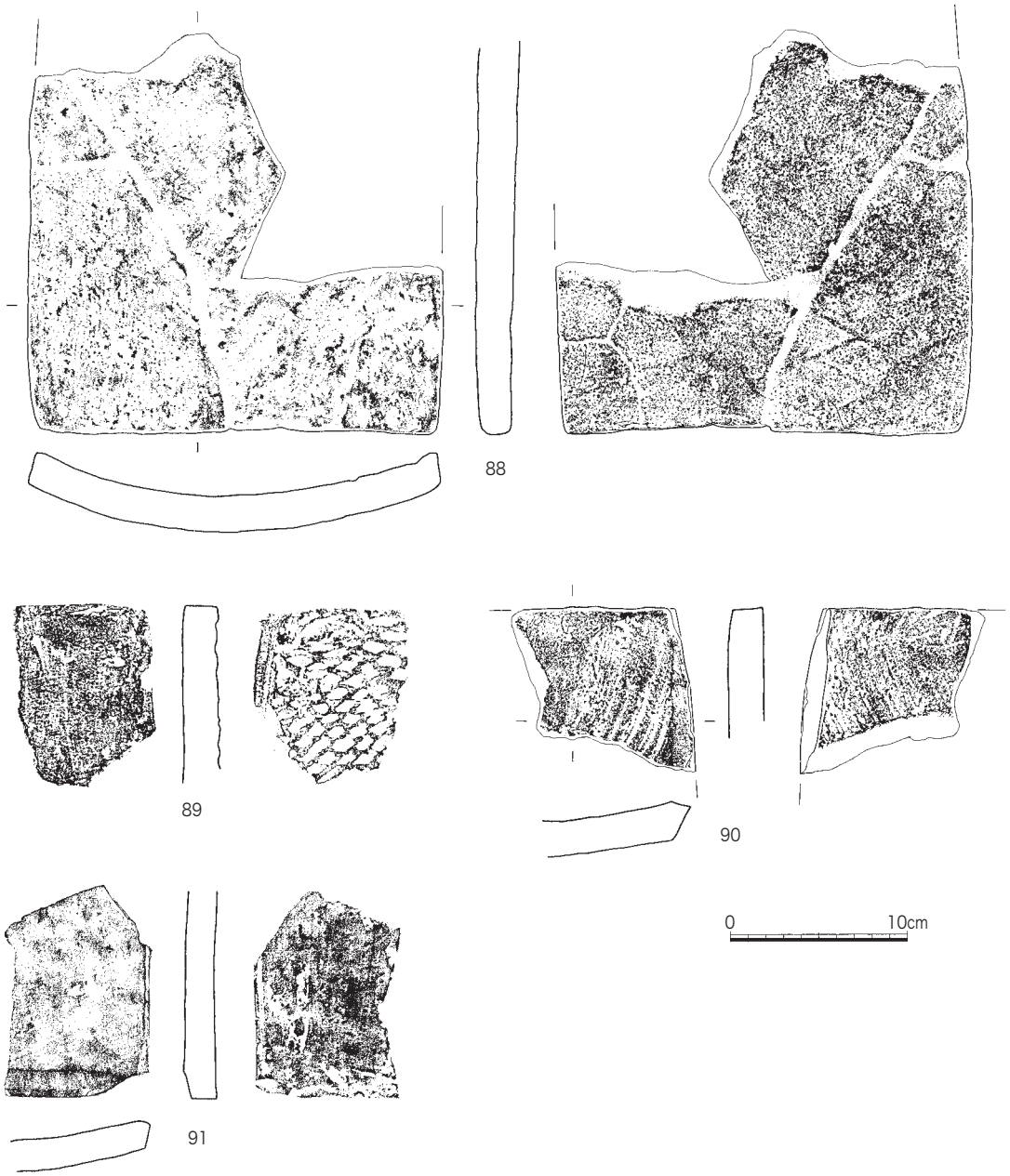


図76　平瓦⑦（1/4）

Ⅰ　**89**は横方向でやや斜めの細かな格子である。側面はケズリを施し、ナデは行っていない。凹面は布目を縦方向のナデで消している。Ｔ33西面回廊上の瓦だまりから出土した。

凸面未調整（図76－90、図版18－１）

90はＴ33西面回廊上の瓦だまりから出土したもので、凸面が未調整で糸切り痕が残る。凹面にも糸切り痕が残り、布目は認められない。凹面端部の調整は、側端部側にケズリ後ナデが施されている。

凸面ナデ調整（図76－91、図版18－１）

91は、『備国１』256と同種で中世に属す平瓦である。青灰色で、瓦質の焼成である。凸面は縦方向のナデ、凹面は横方向のナデで調整される。凹面端部の側端部側はやや丸味帯び、広端側は斜面状になる。Ｔ28からの出土であるが、『備国１』で報告されているように、再建された講堂に葺かれた平瓦と考えられる。

（５）道具瓦

道具瓦として、隅木蓋瓦３点、隅切瓦と鬼瓦各１点が出土した。

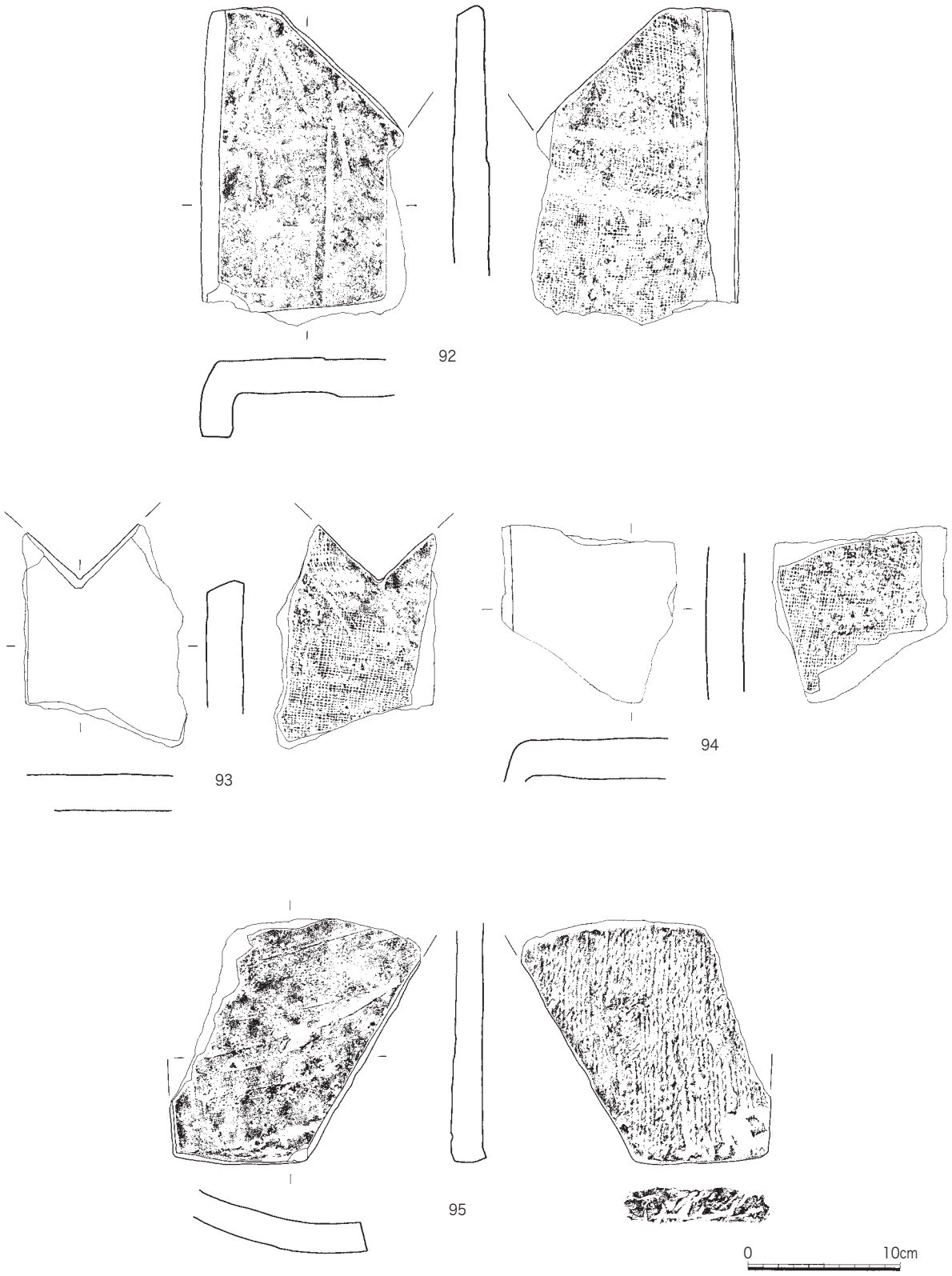


図77　隅木蓋瓦・隅切瓦（1/4）

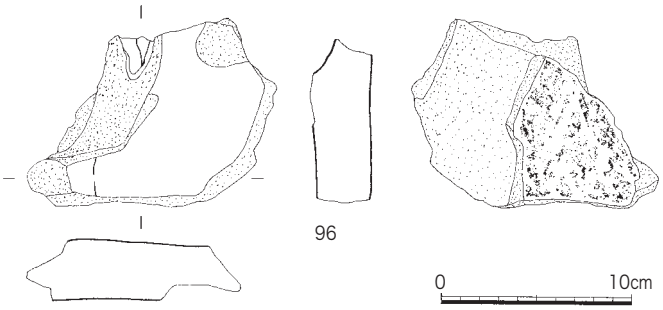


図78　鬼瓦（1/4）

隅木蓋瓦（図77－92～94、図版18－２・３）

屋根の隅木の先端を覆う瓦で、**93・94**はＴ32の僧房基壇外装Ｂにおいて外装材として、二次的に使用されていたものであり、本来の使用場所はわからない。**92**は外装Ｂの前面に設けられた現代暗渠からの出土であるが、同様にもとは外装材として転用されていたものと考えられる。

箱形でなく、隅木上面を覆う蓋形を呈する。上面から正面と左右両側面に5.0cm（裏面2.9cm）垂下し、正面とは反対側に三角形の切り込みが入れられている。最大厚は2.6cm である。

92の上面は無文の叩きが認められ、すべての個体で裏面に布目の圧痕が残る。色調は浅黄色を呈する。

これまでの調査では、『備国１』41の塔調査区出土の隅木蓋瓦１点が知られており、形状・規格・焼成が同一で、**92**～**94**の隅木蓋瓦も創建期・奈良時代のものとみられる。

隅切瓦（図77－95、図版18－５）

95は平瓦の隅を焼成前に切り取ったもので、寄棟造や入り母屋造の降り棟や隅棟に使用された瓦である。凸面は縄目叩きで、凹面は布目が残り、上から横方向のナデを施している。端面には条線が残り、乾燥時に下に置かれたものの痕跡がみられる。色調は灰色を呈する。調整から創建期・奈良時代のものであるが、二次的にＴ32の僧房基壇外装Ｂにおいて外装材として使用されていた。

鬼瓦（図78、図版18－４）

96は、Ｔ33の西面回廊上瓦だまりから出土したもので、鬼面を表現したものではないかと考えられる。表面は平滑で、舌状をした凹みの中央に歯牙のような突出があり、下顎辺りの破片かもしれない。粘土塊の貼り付け痕跡が残り、表面は炭素を吸着し灰色を呈している。

（６）文字瓦（図 79、図版 19 － 1）

備前国分寺跡からは、文字が記された瓦が出土している。『備国１』の資料を含めて、丸瓦部と玉縁部の段差が小さい玉縁式丸瓦の玉縁部にみられる「天」の押印文字瓦以外は、瓦に直接文字を刻んだヘラ書き文字瓦である。ヘラ書き文字は、創建期の凸面縄目叩き調整の平瓦の凹面に刻まれており、『備国１』274のように文字列で刻まれたものと、文字１字のみが刻まれたものの２種類が確認されている。第４～６次調査で出土した文字瓦は後者で、創建期・奈良時代の平瓦の凹面に文字１字が刻まれている。

文字１字の場合、『備国１』第４章第２節で述べられているとおり、これまでの調査で一・二・三・四・八・十・上・｜・○・ｒの10種類の文字が確認されているが、今回の調査ではこれ以外の文字は

確認されず、そのうちの上・｜・一・八の４種類が出土した。

97は、凹面広端側に「上」が刻まれた平瓦である。側面から３分の１程度が割れた状態で、Ｔ32の僧房基壇外装Ｂの外装材として使用されていた。凸面は縄目叩きで、狭端側と広端側に二分して叩きを行っていることがよくわかる。凹面は糸切り痕と布目が残るが、全面にわたって横方向のナデが施されている。「上」の筆順は縦棒と長い横棒は接しておらず、その順序はわからないが、縦棒の

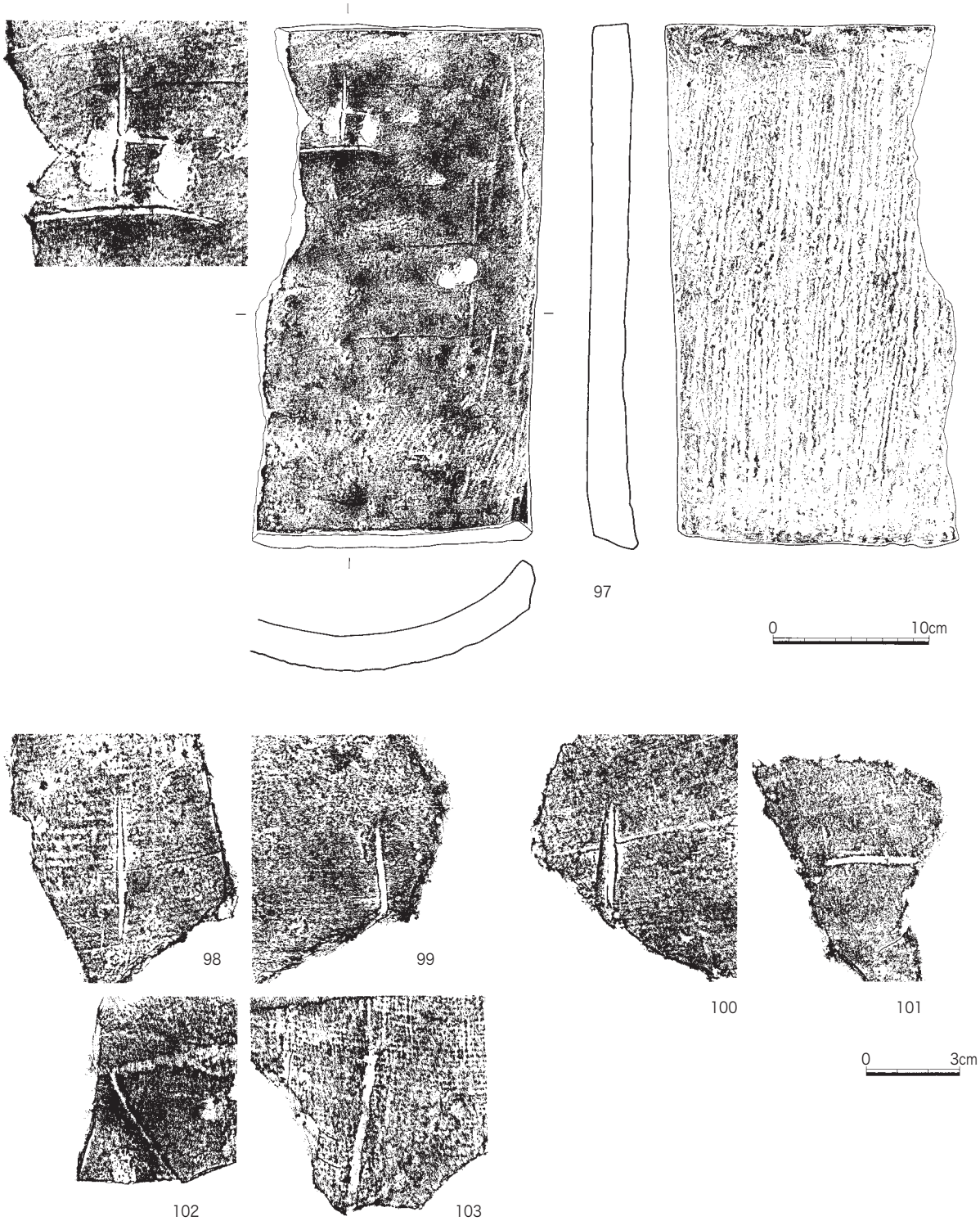


図79　文字瓦（1/4・1/2）

後に短い横棒を刻んでいる。『備国１』では「上」の筆跡から５細別しているが、そのうちのＤとしているものにあたると考えられる。

98～100は、「｜」が刻まれた平瓦である。103も「｜」の可能性がある。98・99は、Ｔ22の昭和49年度確認調査トレンチ埋土から、100は金堂礎石３の抜き取り穴から出土した。

101は、「一」でＴ22の昭和49年度確認調査トレンチ埋土から出土したものである。

102は、「八」が刻まれた平瓦で、右側部分が明瞭に残る。Ｔ21から出土した。

（７）塼（図 80、図版 19 － 2）

塼は５点が出土した。104・105・107はＴ33の西面回廊上、106はＴ32の僧房南側の溝24、108は僧房瓦積基壇外装Ｂから出土した。僧房出土のものは二次的な使用が想定される。

104はほぼ完形品で、長さ27.5cm、幅22.1cm、厚さ5.5cm の規格である。105は長さ27.6cm、残存幅21.1cm、厚さ5.1cm を測り、106・107はともに厚さ5.0cm である。104～107は浅黄～橙色を呈し、やや軟質の焼成である。108は厚さ5.8cm で、灰白色を呈する。104・105の長さがほぼ同一であることや色調・胎土・焼成も共通することから、104のサイズが塼の規格として製作されていたものとみられる。表面はナデによって平滑に仕上げられている。

出土傾向としては、複廊の棟通り部分にあたる場所を調査したＴ33で、ほぼ完形品の塼が１点含まれ、かつ３点がまとまって狭い範囲内から出土したことから、遺構としては確認していないものの、塼が棟通り柱筋に地覆材として設置されていた可能性が想定される。第１～３次調査で破片12点、今回調査でも５点と量的には少なく、上述のように回廊棟通り柱筋の地覆など特定箇所で使用されたのではないかと考えられる。時期としては、創建期・奈良時代の塼と推測される。

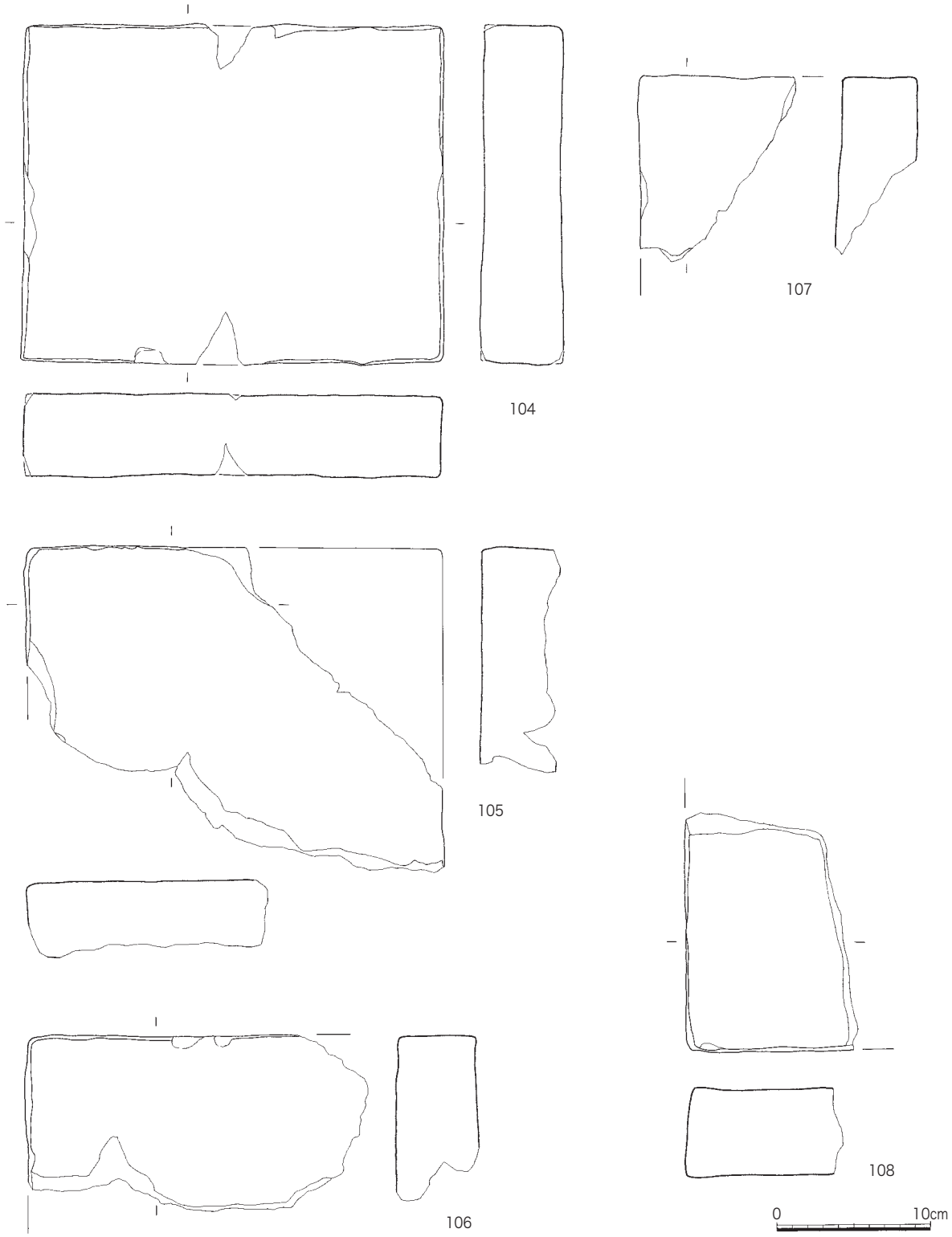


図80　塼（1/4）

第２節　土器類

土器類は、施釉陶器、輸入陶磁器、中・近世に属するもの、弥生土器などを除いて、遺構や調査区ごとに記載する。なお、杯については有高台のものを杯Ｂ、無高台のものを杯Ａとし、法量を示す指標として、器高／口径×100を「径高指数」として表記する。また、杯Ｂ蓋の口縁部付近の形状が、縁部が屈曲して段をなし、端部が下方へ折れるものをＡ形態、縁部が屈曲せず、頂部からの丸味を有したまま、端部が下方へ折れるものをＢ形態として区分する。

Ｔ１溝１出土土器（図81－109、図版19－３）

溝１からは須恵器の杯Ｂ**109**が出土した。その他、土師器や須恵器の小片が出土したが図示できなかった。**109**は復元口径19.8cm、底径13.0cm、器高5.7cm を測り、径高指数は28.8である。高台は逆台形を呈している。**109**の時期は８世紀中葉～後葉に属する。

Ｔ14土壙１出土土器（図81－110、図版20－１）

110は、土壙１から出土した土師器の甕である。底部を上に向けた状態で埋置されていたものである。底部が一部欠損している他は遺存しており、口径24.8cm、残存器高は22.4cm を測る。胴部外面はハケ調整、胴部内面には指オサエがみられる。口縁端部は外側をやや拡張した形状である。時期は８世紀に属すものと考えられる。

Ｔ20溝６出土土器（図82、図版19－３・20－１）

溝６は北面築地外溝と考えられる溝で、須恵器**111**～**124**や土師器**125**～**129**が出土した。土器の時期は８世紀中葉～後葉と推定されるものである。

111～**117**は杯Ｂ蓋で、**111**・**112**がＡ形態、**116**・**117**がＢ形態を呈し、両者が混在している。復元口径は**111**・**112**が14.0～14.4cm、**113**が16.4cm を測る。

118～**122**は杯Ｂである。**119**は口径14.4cm、底径10.5cm、器高3.6cm を測り、径高指数は25.0である。青灰色で硬質な焼成で、長方形の高台が付く。**120**は口径14.0cm、底径10.0cm、器高4.0cm、

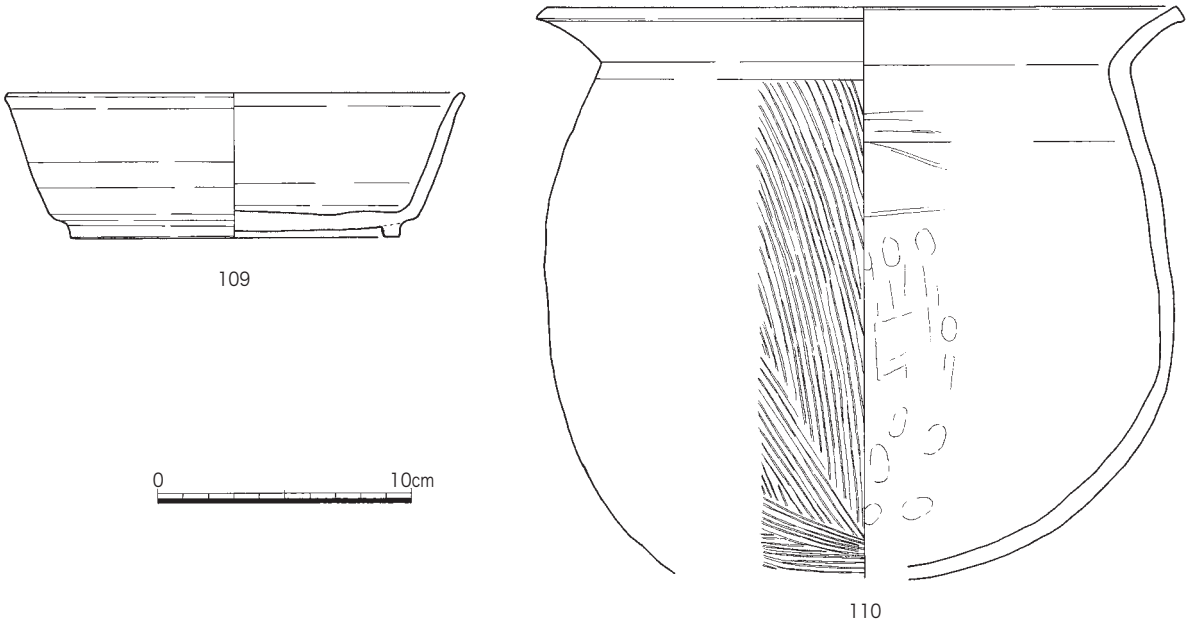


図81　Ｔ１溝１・Ｔ14土壙１出土土器（1/3）

径高指数は28.6で、灰白色を呈し、やや軟質の焼成である。**121**は口縁部が欠損しているが、底径12.4cm とやや大型である。高台は逆台形で、端面は凹形である。**122**は器高6.1cm を測る大形の杯Ｂである。

123･**124**は盤で**123**は灰白色、**124**は白色を呈する。**123**は器高5.8cm で口縁端部はほぼ平坦である。貼り付け把手が剥落した痕跡が残る。

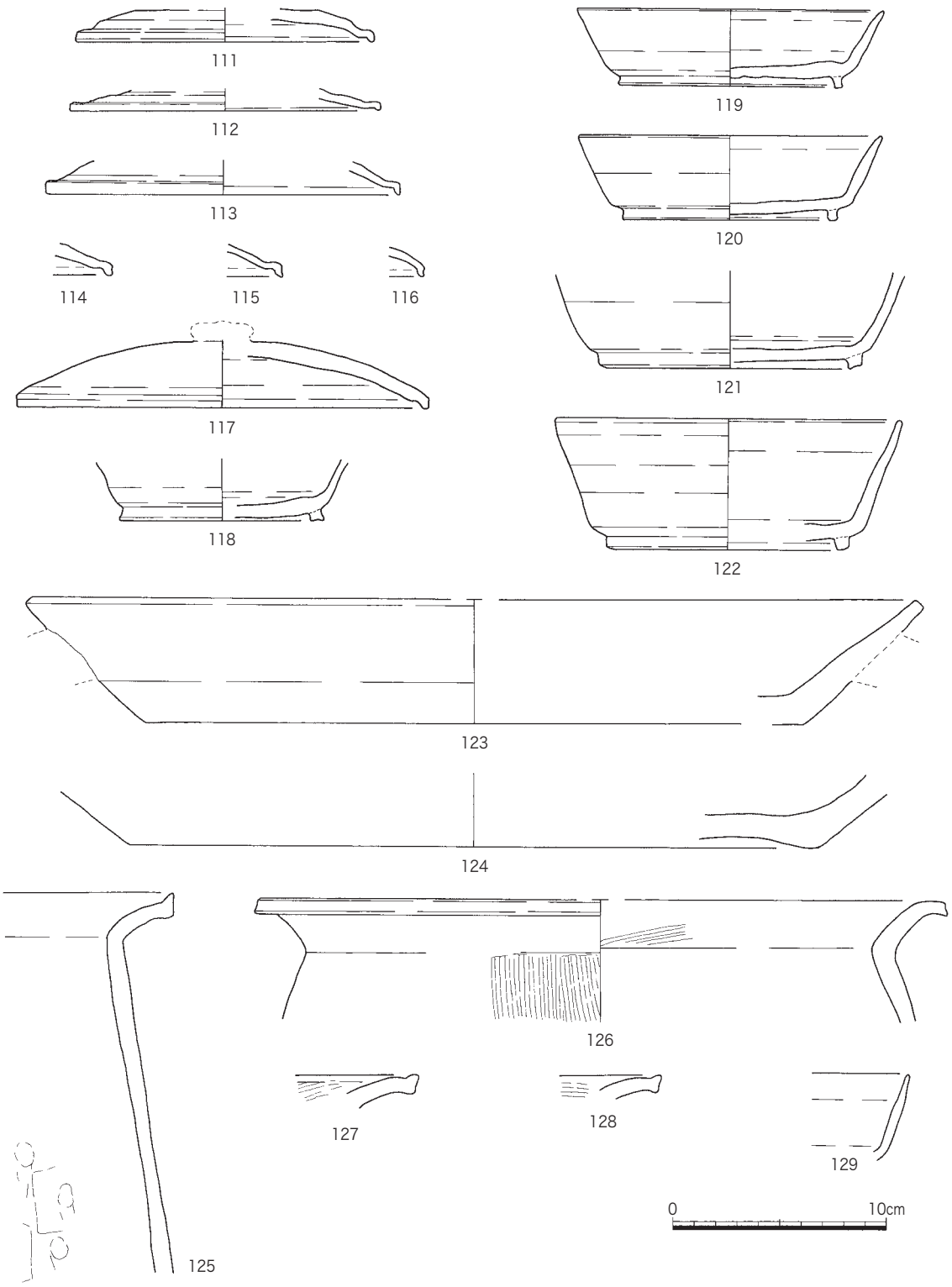


図82　Ｔ20溝６出土土器（1/3）

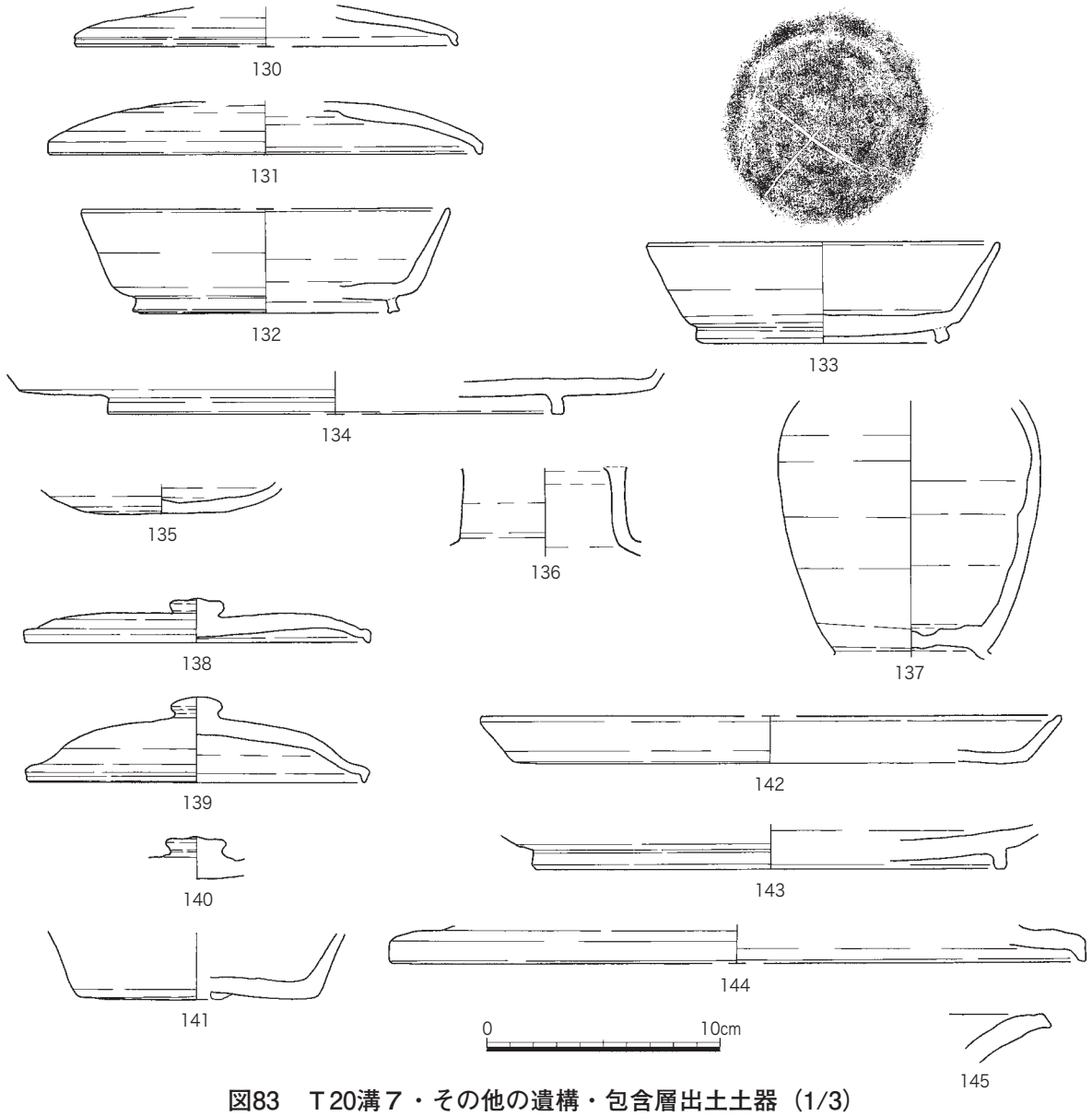


図83　Ｔ20溝７・その他の遺構・包含層出土土器（1/3）

125～**128**は甕で、**129**は杯の口縁～体部片である。**125**は胴部外面にハケ調整、胴部内面下部に指オサエがみられ、口縁端部は上方に拡張している。**126**は胴部外面にハケ、口縁端部は外面下方へのびる。**127**・**128**は口縁部片であるが、内面には横方向のハケ調整がみられ、端部が上方に拡張する。

Ｔ20溝７出土土器（図83－130～137、図版19－３・20－１）

溝７からは須恵器**130**～**137**が出土した。土器の時期は８世紀中葉～後葉と考えられるものである。

130・**131**は杯Ｂ蓋で、Ｂ形態を呈する。**131**の口径は18.4cm である。

132・**133**は杯Ｂである。**132**は、復元口径15.6cm、器高4.4cm を測り、径高指数は28.2である。長方形の高台が体部から底部への屈曲部から比較的離れて設けられている。**133**は、口径15.0cm、器高4.4cm、径高指数29.3である。底部内面ナデの後にヘラガキがみられる。**134**は皿Ｂで灰白色を呈する。**135**は器種が不明であるが、外面を回転ヘラケズリしている。**136**は貼り付け面で剥離しているが、脚部と考えられる。器種は不明である。**137**は高台の付く壺である。残存器高は11.0cm で、内面は丁寧なナデが施されている。

Ｔ20その他の遺構・包含層出土土器（図83－138～145、図版20－１）

Ｔ20では溝６・７以外から、須恵器**138**～**144**、土師器**145**が出土しており、土器の時期は８世紀中葉～後葉と考えられる。

138～**140**は杯Ｂ蓋である。**138**・**139**はともにＡ形態を呈し、口縁が弱く段をもって、端部が下方へ折れる。つまみは**138**・**140**が擬宝珠形で中央が突出した形状、**139**は円形碁石形であり、**138**・**139**が直径2.2～2.3cm、**140**は直径2.6cm とやや大きい。**141**は杯Ａで、底部外面は回転ヘラ切り未調整である。灰白色を呈し、焼成はよくない。**142**は皿で、器高2.0cm を測る。口縁端部内面に段がある。**143**は高台の付く皿Ｂで、**144**は大型の蓋の可能性がある。**145**は甕の口縁部片で、口縁端部がやや外面下方に拡張している。

Ｔ21出土土器（図84、図版20－１）

Ｔ21からは多数の土師器や須恵器などが出土したが、小片が多く、図化し得る土器は多くない。

溝８から、土師器の杯Ａ**146**、吉備系土師質土器椀**147**～**149**が出土した。**146**は口径10.6cm、器高2.6cm を測り、底部からやや外反して口縁部に向かう。**149**は口縁端部が肥厚する。

その他、遺構に伴わないが包含層から、土師器の皿**150**、吉備系土師質土器椀**151**～**154**、須恵質土器椀**155**～**157**、須恵器の平瓶**158**が出土している。**150**は復元口径8.2cm、器高1.3cm を測る。**155**は、復元口径14.8cm、器高5.1cm で底部糸切りである。口縁部付近には重ね焼き痕跡が残る。いわゆる備

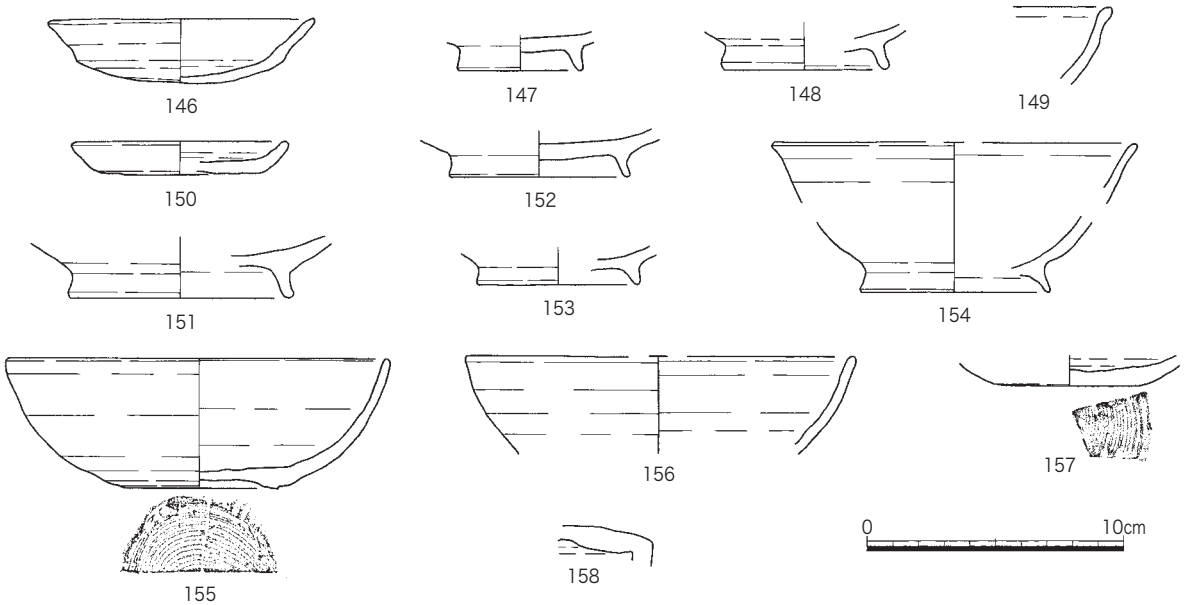


図84　Ｔ21出土土器（1/3）

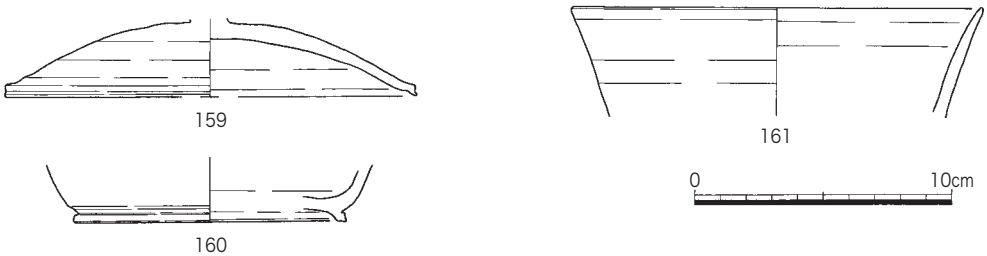


図85　Ｔ23出土土器（1/3）

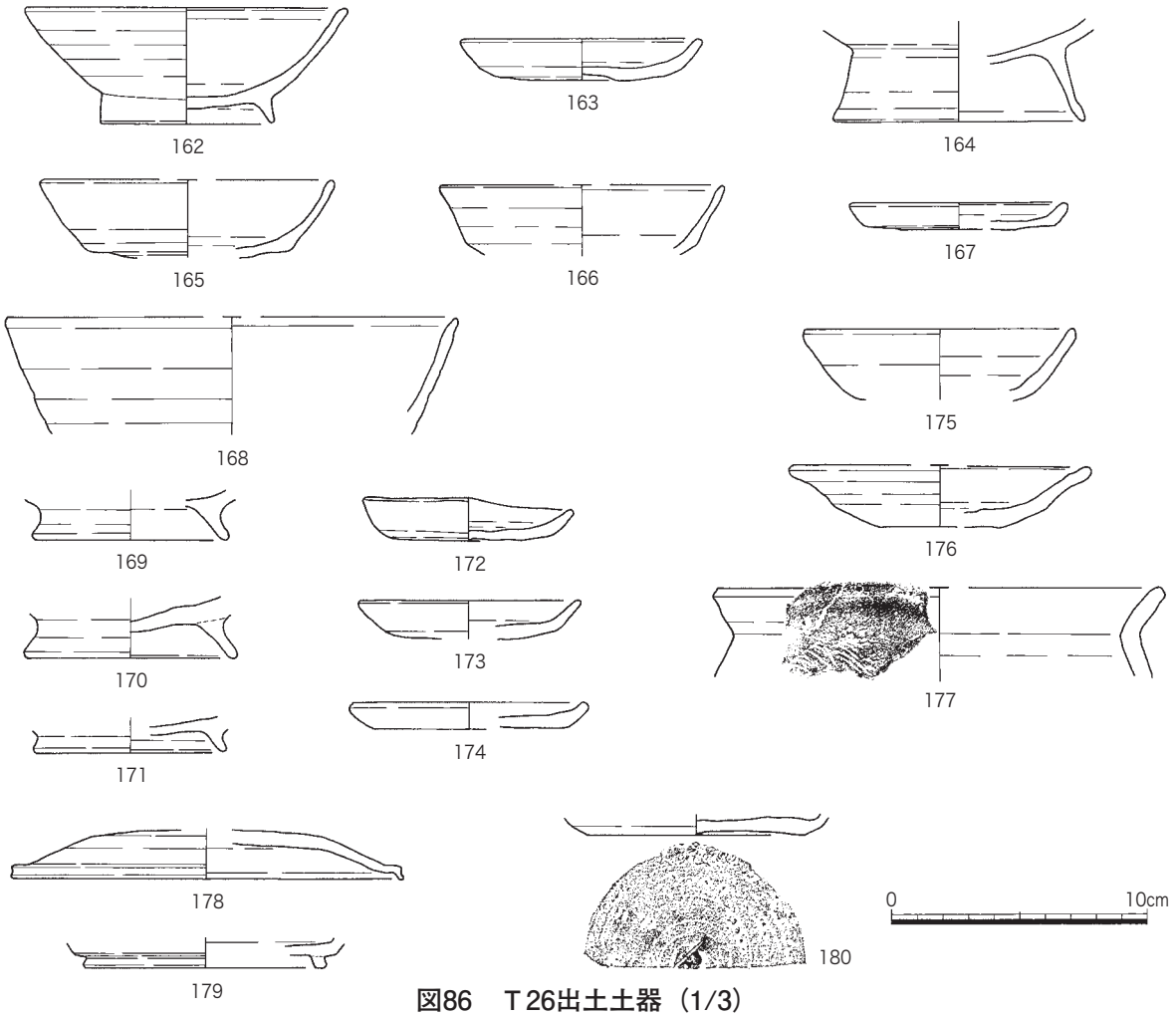


図86　Ｔ26出土土器（1/3）

前焼椀で、時期は13世紀前半と考えられる。**157**も同様に底部糸切りである。

溝８をはじめＴ21の土器類には、古代末～中世までの遺物が含まれる。

Ｔ23出土土器（図85）

Ｔ23包含層からは須恵器**159**～**161**が出土した。他にも土師器･須恵器片があったが､図化できなかった。**159**は杯Ｂ蓋であるが、つまみは欠損している。Ｂ形態を呈し、復元口径は16.0cm である。**160**は杯Ｂで、**161**は杯の口縁～体部片とみられる。

Ｔ26出土土器（図86、図版20－１）

Ｔ26からは遺構に伴うものとして、土師器**162**～**167**が出土した。

椀**162**は礎石９の抜き取り穴・据え付け掘り方の北側、溝11の南側で削平された僧房基壇直上から出土した。口径12.4cm、底径6.6cm、器高4.5cm を測る。皿**163**は礎石10の抜き取り穴から出土したもので、口径9.2cm、器高1.6cm を測る。底部には指頭押圧が施される。高い高台の付く椀**164**は溝12から出土したもので、高台端部は外湾する。杯Ａ**165**・**166**および皿**167**は土壙４から出土した。**166**は内外面とも丹塗りの痕跡がみられ、**167**は口径8.3cm、器高1.1cm を測る。

土師器**168**～**177**、須恵器**178**～**180**は、遺構に伴わない包含層出土である。

168～**171**は椀、**172**～**174**は皿、**175**・**176**は杯、**177**は甕である。**172**は口径8.4cm、器高1.7cm で底部に板目の圧痕が残る。**177**の口縁部外面には煤が付着し､胴部外面にハケ状の調整が認められる。

178は杯Ｂ蓋で、つまみは欠損している。復元口径は15.4cm、Ａ形態を呈する。179は杯Ｂ、180は底部ヘラ切りで中央に直線のヘラガキが残る杯Ａとみられる。

Ｔ27溝14出土土器（図87・88、図版20－１、21－１）

溝14の出土土器は須恵器181～194、土師器195～212からなる。

須恵器は、181～185が杯Ｂ蓋、186・190・191が杯Ｂ、187が皿、188・189が杯Ａ、192～194が甕である。181は、中央がやや突出した擬宝珠形で直径2.4cm のつまみをもつ。183はＡ形態を呈し、天井部はかなり低平である。

187は口縁端部が外側にやや拡張しており、残存器高は1.3cm である。188は口径13.2cm、底径8.2cm、器高4.1cm、径高指数31.1で、色調は灰白色を呈し、口縁部付近には重ね焼きの痕跡が明瞭に残る。内外面とも口縁～体部は丁寧なナデ、底部はヘラ切りによる。189も灰白色を呈する杯であるが、体部がかなり外側に開く。

190･191ともに杯Ｂと考えられ、191の残存器高は7.3cm を測る。いずれも底部はヘラ切り未調整で、体部はナデが施されている。192・193は同一個体と考えられる甕の口縁部と胴部で、溝の北斜面に張り付いて出土した。口縁端部は内側にやや拡張している。胴部外面は細かな格子叩き、内面は同心円文のあて具痕跡が残る。194は甕の胴部片で、外面は格子叩き、内面は同心円文のあて具痕跡がみられる。

土師器は195～198が杯Ａ、199～203が皿、204～206が高台付き椀、209～212が甕である。207･208は精製の土器であるが器種は不明である。195・196は口径12.2cm、器高3.1～3.2cm である。195の底部には周縁ヘラ切りが残る。197は復元口径11.6cm、器高3.2cm を測り、198には外面に丹塗りがみられる。

皿は口縁部が外半し、内外面に丹塗りがみられるものが多い。199は復元口径11.4cm、器高1.1cm で、口縁部は外側に屈曲する。内外面とも丹塗りされている。200は口径13.3cm、器高1.6cm で、口縁部は外反する。底部には指頭押圧がみられ、内外面に丹塗りがある。201は復元口径14.8cm、器高1.8cm、口縁部は外反し、内外面に丹塗りが施されている。202は口径13.6cm、器高1.5cm で、口縁部は他より弱いが外湾する。内外面に丹塗り痕跡がある。203は丹塗りは認められないが、口径15.6cm、器高1.5cm を測る。内面には丁寧なナデがみられ、外面に底部から体部にかけてヘラケズリを施している。皿は、199・202の内面口縁部から底部にかけて煤で黒変している状況から、灯明皿として使用されていたと考えられる。

204～206は高台付きの椀であるが、204は口径16.8cm、器高6.4cm を測る。口縁端部は内側に少し屈曲する。205の外面には丹塗りが認められる。207は、口縁部が「く」の字状に屈曲し、端部は外側にのびる。内外面とも丁寧にナデられ、壺の口縁部片の可能性がある。208は内外面ともナデがみられるもので、鉢状である。甕は、胴部外面・口縁部内面にハケ調整が認められる。

Ｔ27その他の遺構・包含層出土土器（図89、図版21－１）

213～217は溝15から出土したものである。須恵器の杯Ｂ蓋213・214、托状の椀215、甕の胴部片216、土師器の椀217が出土した。215は貼り付けの受け部が取り付き、その下に高台が付く。216は外面に平行叩き、内面に同心円文のあて具痕跡が残る。

その他、須恵器杯Ｂ蓋218・219、杯Ｂ220～222、皿Ｂと考えられる223、土師器の高台付き椀224、土師器の皿225～227、吉備系土師質土器椀228、土師器の甕229が出土した。皿226は口径10.4cm、器高1.7cm で口縁部は外反する。

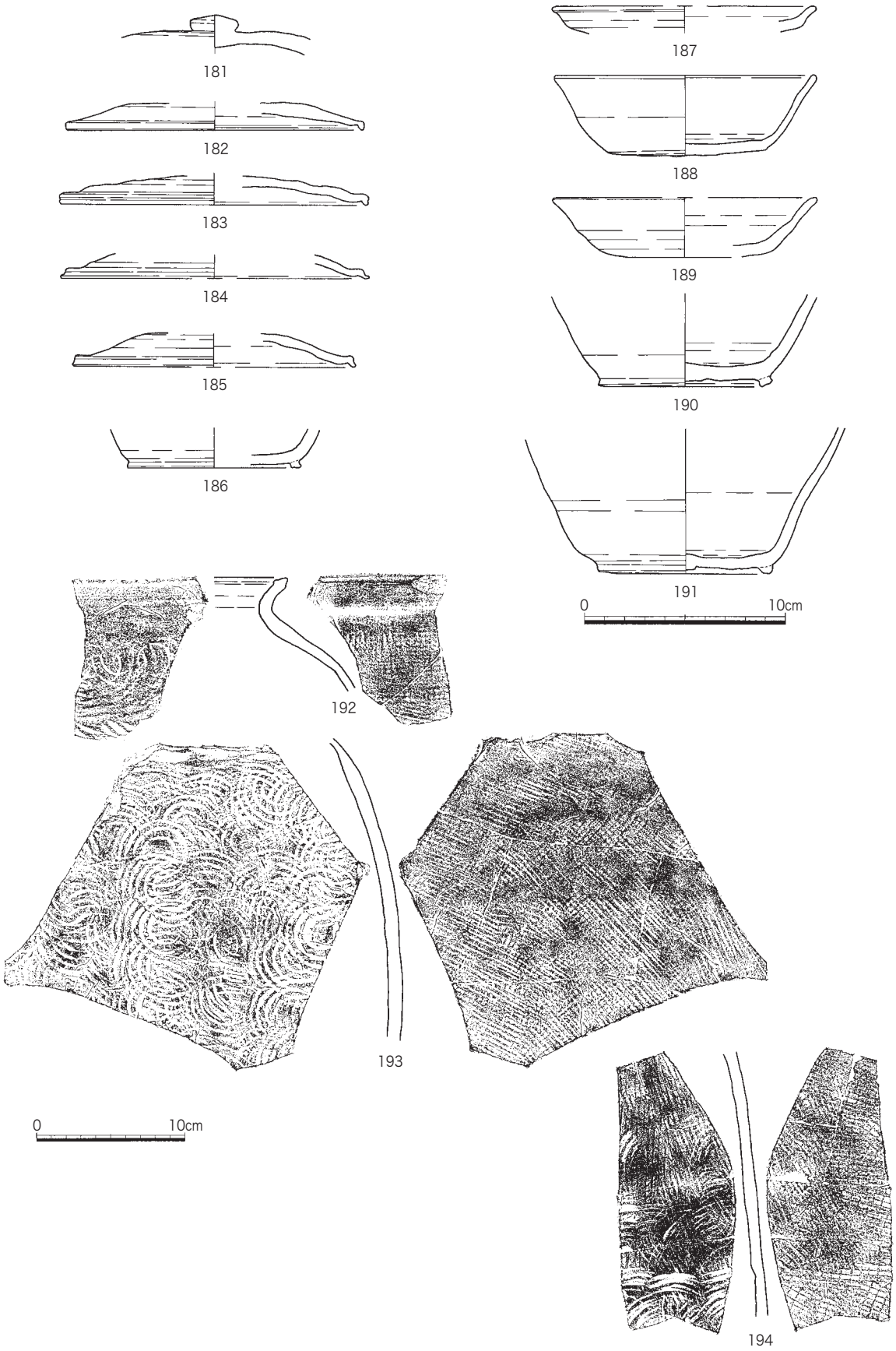


図87　Ｔ27溝14出土土器①（1/3・1/4）

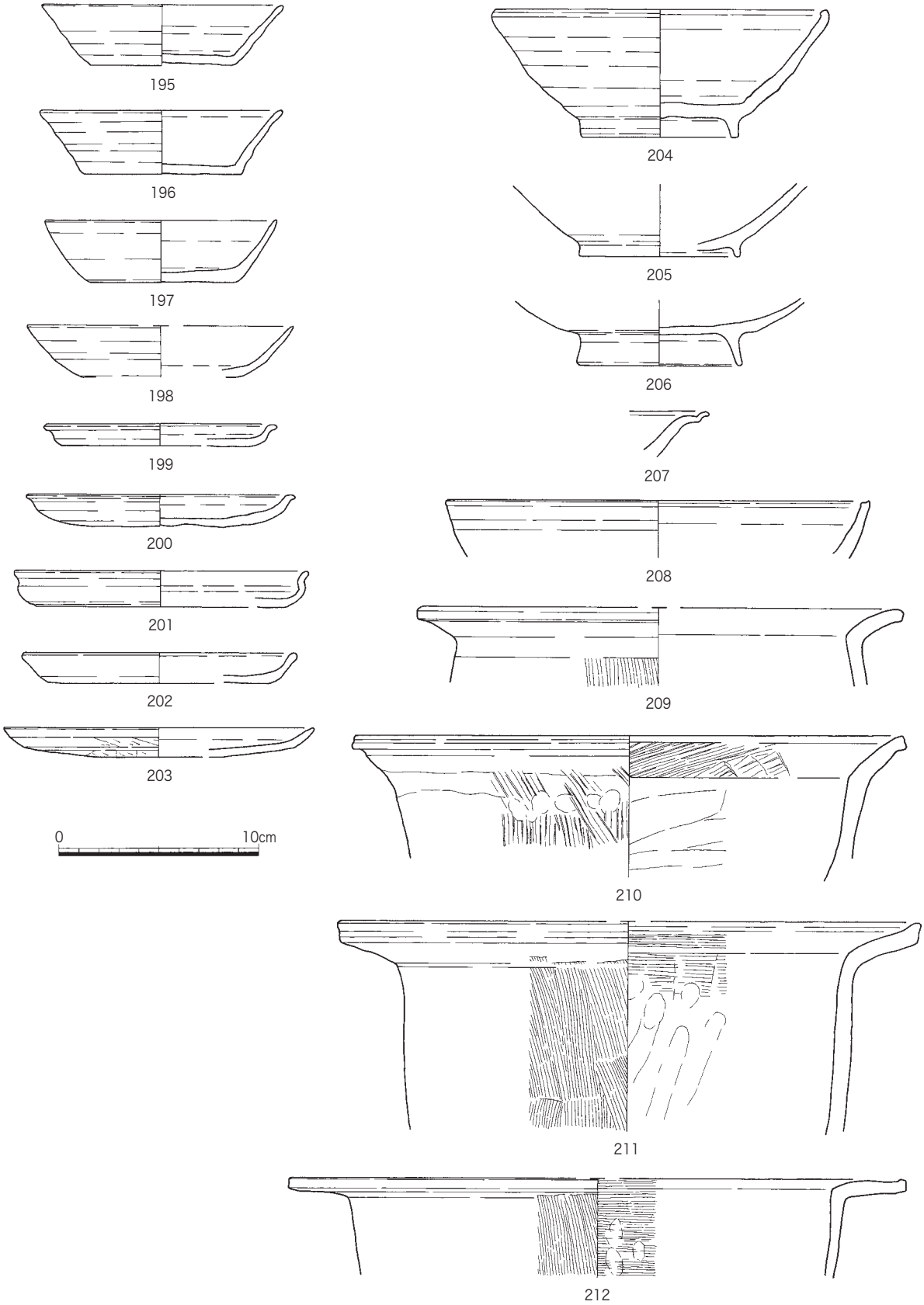


図88　Ｔ27溝14出土土器②（1/3）

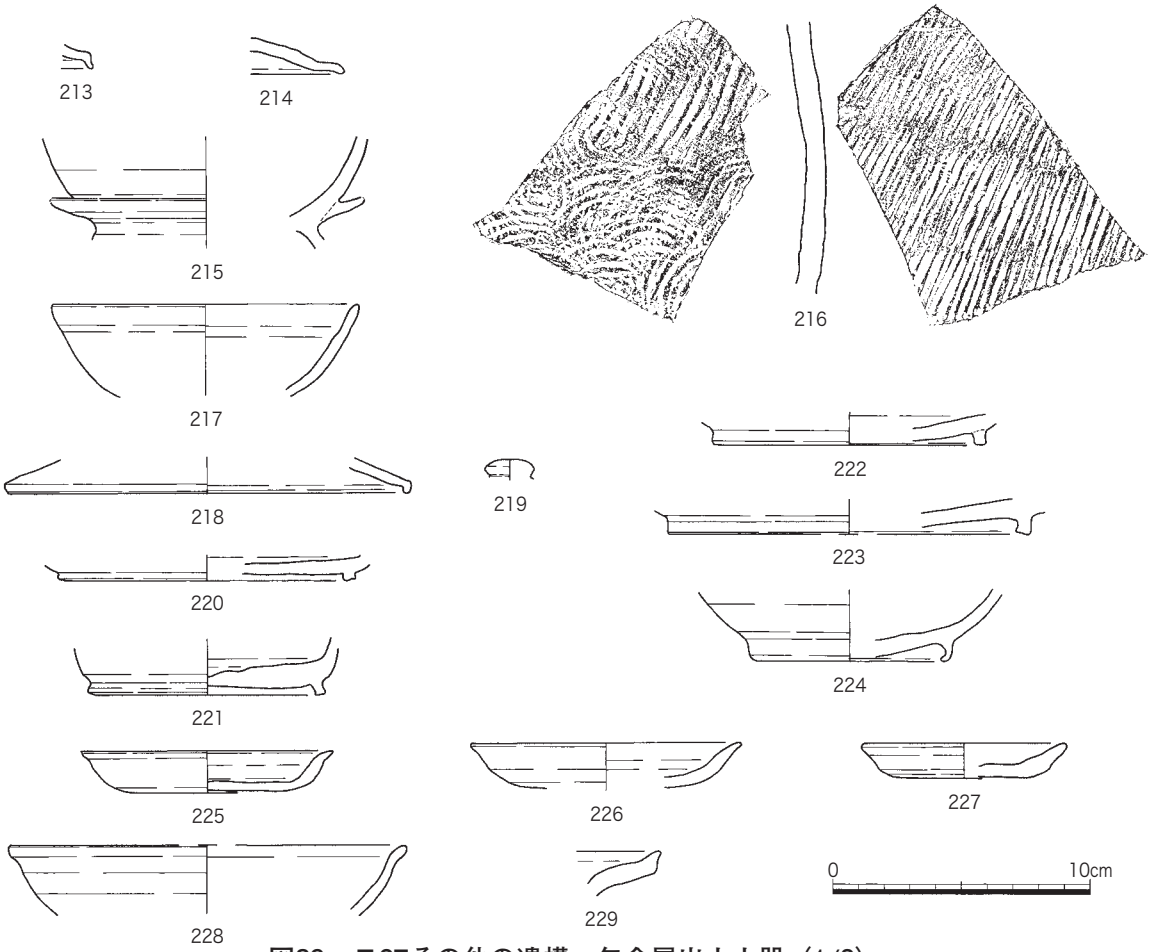


図89　Ｔ27その他の遺構・包含層出土土器（1/3）

Ｔ28出土土器（図90－230～249、図版21－１）

遺構に伴うものとして溝16から**230**・**231**が、溝17から**232**～**236**が、土壙７から**237**が出土した。

土師器の杯Ａ**230**は復元口径12.4cm、器高2.7cm を測り、橙色で薄手の作りである。**231**は高台付きの椀と思われる。

232・**233**は土師器の皿で、**232**は復元口径11.6cm、器高1.4cm で、外反する口縁部をもつ。内外面とも丹塗りされている。**233**は口径16.4cm、器高2.0cm で、口縁部がやや外反する。杯Ｂ蓋**234**は、天井部が平らで、つまみの付かないものである。復元口径は12.8cm を測る。時期は９世紀代である。杯Ｂ**235**、杯**236**がみられた。

土壙７から出土した須恵器の杯Ａ**237**は、焼成が甘く、器表がかなり磨耗している。口縁端部の遺存状況がよくないが、底部は完存している。底部はヘラ切り未調整である。口径は10.8cm、底径7.0cm、器高3.2cm を測る。径高指数は29.6である。

包含層からは、須恵器**238**～**246**、土師器**247**～**249**が出土した。

須恵器の杯Ｂ蓋**238**～**241**は、**239**・**241**は口縁端部がやや短く下がる程度である。**242**は体部と底部がはっきりとした稜をもち、皿の形状を呈する。皿**243**は、口縁端部が平坦である。**244**の杯Ｂは、体部と底部の屈曲部に逆台形の高台が取り付くもので、８世紀末～９世紀前半に属すと考えられる。**245**は壺の口縁部と考えられる。**246**は平瓶のふさぎ口（閉塞部）の破片である。

土師器の甕**247**は、口縁端部が内外に拡張し、外面に縦方向の、内面に横方向のハケ調整が施され

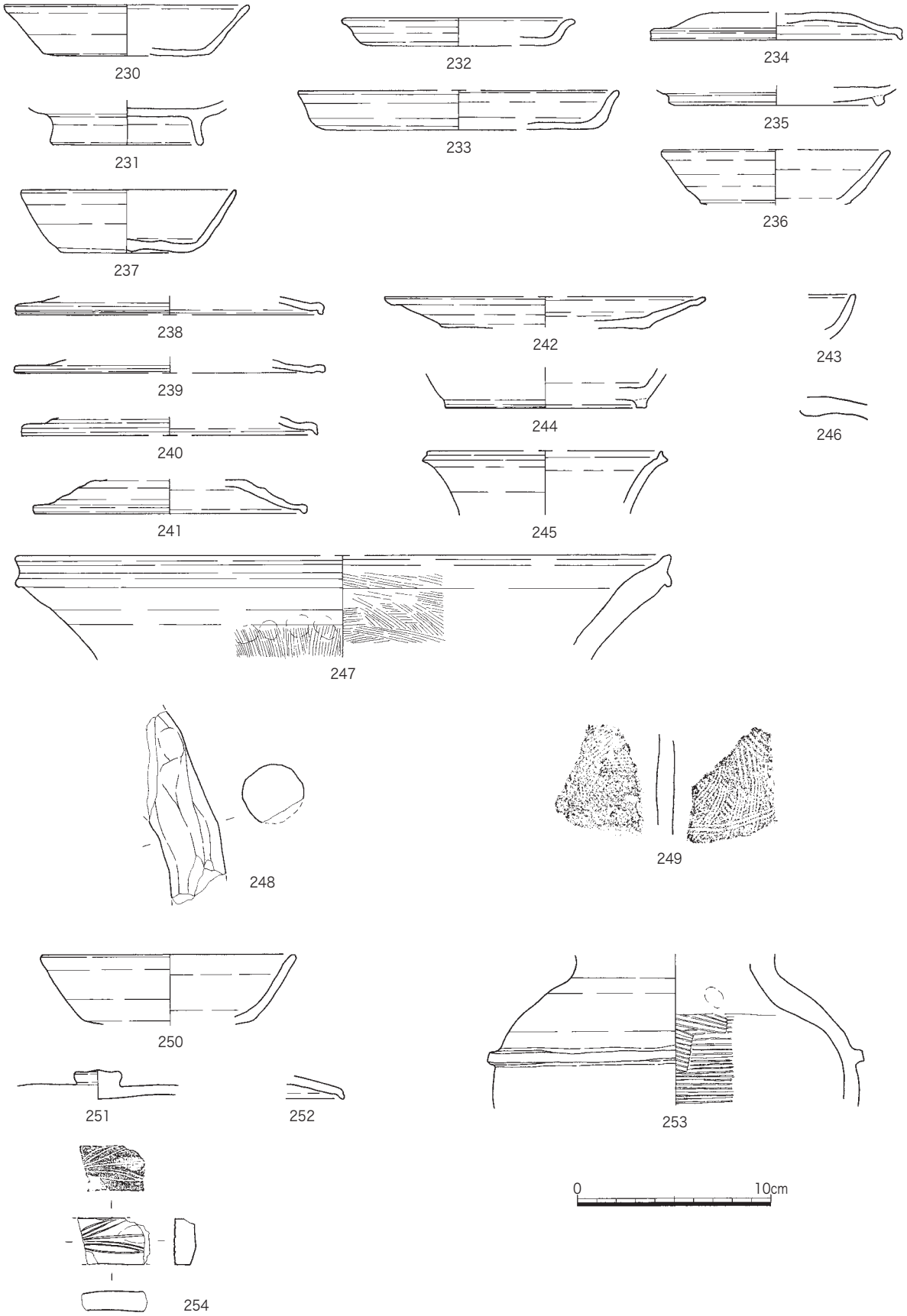


図90　Ｔ28・31出土土器（1/3）

ている。**248**は鍋の脚部片で、**249**は内外面にハケメが認められる破片である。

Ｔ31出土土器（図90－250～254、図版21－１）

250は礎石11の抜き取り穴から出土した須恵器の杯Ａで、口径13.0cm、器高3.5cm を測る。須恵器の杯Ｂ蓋**251**・**252**は溝18から出土したもので、**251**のつまみは中央が突出する擬宝珠形で直径2.4cm を測る。**252**はＢ形態を呈する。**253**は須恵器の壺で肩部に断面台形の突帯が付く。溝23からは、須恵器の平瓶の把手と考えられる破片**254**に、櫛書きで木の葉文様が描かれている。もう一方の面には、鎬状に稜が入る。

Ｔ32出土土器（図91－255～270、図版21－１）

礎石13の抜き取り穴からは須恵器の杯Ｂ**255**、溝24からは須恵器の壺**256**、土師器の杯Ａ**257**、溝25からは須恵器の杯Ｂ蓋**258**、壺**259**、土師器の杯Ａ**260**、杯Ｂ蓋**261**が出土した。壺については**256**が平底で、**259**が外側に張り出す貼り付け高台である。**260**は底部片で、ヘラ切りの痕跡が残る。**261**はＡ形態で、内外面とも丹塗りされている。

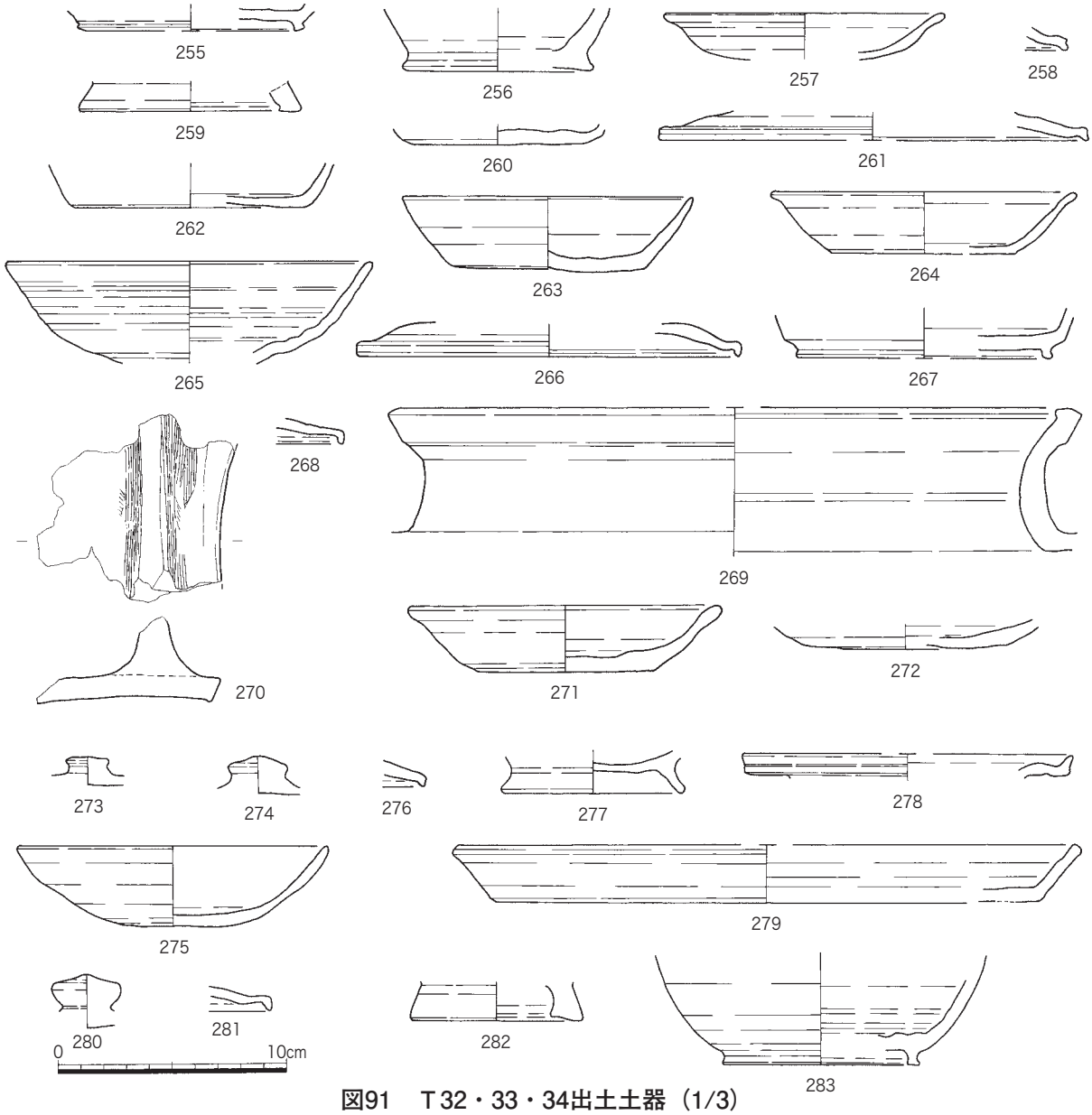


図91　Ｔ32・33・34出土土器（1/3）

土壙12上層からは、土師器の杯Ａ**262**・**263**が出土した。**262**は底部ヘラ切り、**263**は口径12.6cm、器高3.2cm を測り、底部はヘラ切りである。

その他遺構に伴わない土器として、土師器**264**・**270**、須恵質土器椀**265**、須恵器**266**～**269**が出土した。杯Ａ**264**は復元口径13.0cm、器高2.7cm で、外面に丹塗りの痕跡が残る。口縁部は外湾する。須恵質土器椀**265**は復元口径15.4cm で器表はロクロナデによる。杯Ｂ蓋**266**はＡ形態を呈し、焼け膨れしている。**267**は杯Ｂ、**268**は杯Ｂ蓋である。**269**は甕の口縁～頸部片で器表は丁寧なナデで仕上げられている。肩部内面にはあて具痕跡が残る。口縁部と頸部の境に段差をもち、口縁端部は平坦でなくやや丸味を帯びて、内面に拡張し、段が付く。**270**はカマドである。

Ｔ33出土土器（図91－271・272、図版21－１）

西面回廊上の瓦だまりで出土した土師器杯Ａ**271**・**272**である。**271**は口径13.2cm、器高2.9cm を測り、肉厚である。底部はヘラ切りである。時期は11～12世紀に属すると思われる。

Ｔ34出土土器（図91－273～283、図版21－１）

遺構出土の土器として、溝27から**273**～**275**、溝28から**276**、溝29から**277**～**279**、溝30から**280**～**282**が出土した。

杯Ｂ蓋**273**・**274**は**273**が須恵器で、**274**が土師器である。つまみは**273**が直径1.9cm と小形、扁平で、**274**が直径2.6cm で中心が突出する形態をとる。土師器の杯Ａ**275**は口径13.6cm、器高3.5cm を測る。**276**はＢ形態を呈す須恵器の杯Ｂ蓋である。**277**は土師器の高台付き椀、**278**は須恵器の壺の口縁部と考えられる。**279**は須恵器の皿で、高台が剥離している可能性が高い。口縁端部は平坦に近い。

280・**281**は須恵器の杯Ｂ蓋で、**280**のつまみは直径3.0cm で中央が突出する。**282**は壺の貼り付け高台部で、外面に自然釉が付着している。高台底面は使用によって磨耗している。

遺構に伴わないものとして、須恵器の壺**283**が出土している。

緑釉・灰釉陶器（図92、図版21－２、22－１・２）

緑釉陶器は図化できた**284**～**291**の８点を含めて、計13点が出土した。Ｔ21・26・31・34の僧房関係の調査区から出土した。産地の内訳は、京都産７点、近江産３点、長門産と推定されるもの２点、京都あるいは東海産１点である。

椀**284**は底部片で高台が剥離している。素地は軟陶で浅黄橙色を呈し、長門産と推定される。時期は９世紀に属する。椀**285**は素地硬陶で10世紀の京都産に比定される。輪花皿**286**は素地軟陶で輪高台が付く。口径15.0cm、器高2.9cm で９世紀後半に属し、京都産である。出土位置はＴ26溝11の上部である。素地硬陶で有段輪高台が付く椀**287**は近江産と推定される。時期は10世紀後半と考えられる。**288**～**290**は椀もしくは皿の口縁部小片で、**288**・**290**が京都産で時期は９世紀後半である。**289**は近江産で時期は10世紀に比定される。**291**は素地軟陶で、微かに浅緑の釉が付着する。京都あるいは東海産と考えられ、手付瓶もしくは小型の平瓶の把手の可能性がある。Ｔ34の溝30から出土した。

292～**294**は、灰釉陶器である。椀**292**は底部片で、三日月状の高台が雑に貼り付けられている。時期は10世紀前半と考えられる。**293**・**294**は段皿で、内面のみ施釉される。**293**が９世紀、**294**は黒笹14型式で９世紀前半に属する。出土位置は、**292**～**294**がそれぞれＴ21・26・28の包含層である。

白磁・青磁（図93、図版22－３・４）

295～**299**は白磁碗である。**295**はＴ27の柱穴列５Ｐ－19から出土したもので、口縁部玉縁で碗Ⅳ類である。遺構には伴わないが同じくＴ27から出土した**296**も口縁部が玉縁で、碗Ⅳ類である。**295**・

296の時期は11世紀後半～12世紀と考えられる。297・298はＴ21包含層から出土した。297は11世紀後半、298は碗Ⅱ類とみられ、11世紀後半～12世紀前半に属する。299の口縁部は小さな玉縁であるが、295～298とは違い、純白に近く明るい色調を呈する。華北系の碗Ⅰ類と考えられる。時期は、９世紀～10世紀である。図示した白磁の他に、小片２点が出土している。

300～302は龍泉窯系の青磁碗である。300は内面劃花文がみられる体部片で、12世紀後半に属する。Ｔ30の包含層から出土した。301には鎬蓮弁文、302には蓮弁文が認められ、時期は13世紀前半である。301はＴ31包含層、302はＴ32現代暗渠より出土した。図示した青磁の他に、13世紀代と考えられる龍泉窯系の青磁小片２点が出土している。

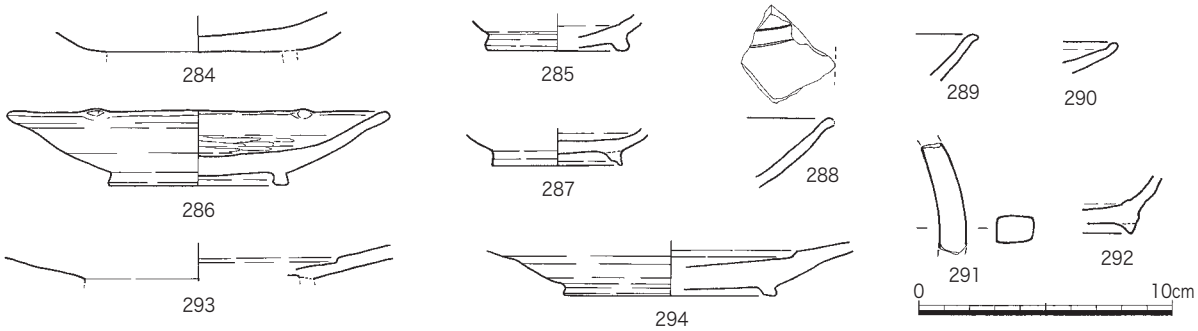


図92　緑釉・灰釉陶器（1/3）

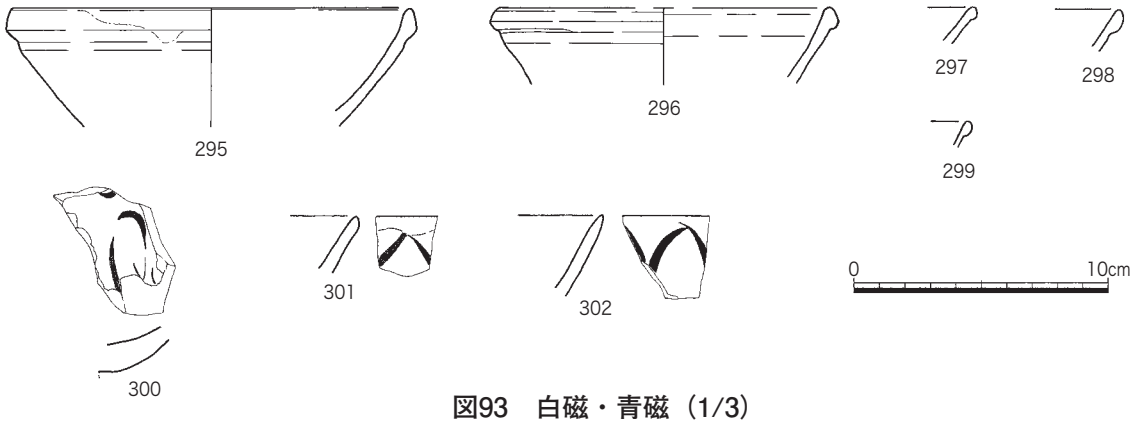


図93　白磁・青磁（1/3）

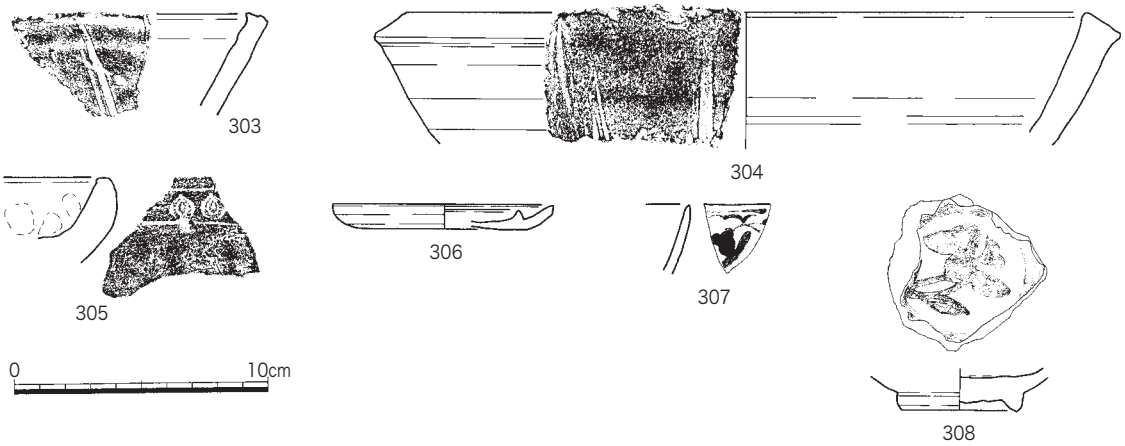


図94　中近世の土器・陶磁器（1/3）

中近世の土器・陶磁器（図94）

これまでに掲載していない中近世に属する土器・陶磁器をここで報告する。

303はＴ20の床土層から出土した、須恵質土器の擂鉢と考えられる口縁部片である。色調は灰白色を呈し、口縁端部は内面側に拡張する。内面にはオロシメが認められる。**304**・**306**は備前焼である。擂鉢**304**は、口縁端部が平坦で14世紀のものである。**306**は灯明皿である。**305**は瓦質の火鉢で体部外面に２条の沈線に挟まれてスタンプ文が施されている。**307**は染付である。

硯類（図95、図版22－５）

陶硯**309**を除いて、**310**～**315**は須恵器の転用硯のため、土器類に含めて硯について記載する。

309は風字硯で、脚部が付く。側面はケズリ、側面端部はケズリ後ナデが施されている。Ｔ26溝12から出土した。

310～**313**は杯Ｂ蓋、**314**・**315**は甕の転用硯で、使用により磨耗している。**310**は角をとり、隅丸方形に整形している。**314**は内面の同心円文叩きがほぼ消えるほど磨耗している。**311**はＴ27溝14、**312**はＴ27溝15、**315**はＴ34礎石16の抜き取り穴から出土した。

弥生土器（図96）

316～**318**は弥生土器である。**316**は高杯の脚部で弥生時代後期前葉に属すもので、Ｔ20溝６から出土した。**317**は器表の磨耗が激しいが器台片と考えられ、Ｔ14溝４から出土した。**318**は壺の口縁部と考えられる。**316**・**318**は、基盤層となる国分寺建立以前の堆積層に包含された土器が混入したものであるが、**317**はＴ14にみられた国分寺建立以前と考えられる溝から出土したものである。

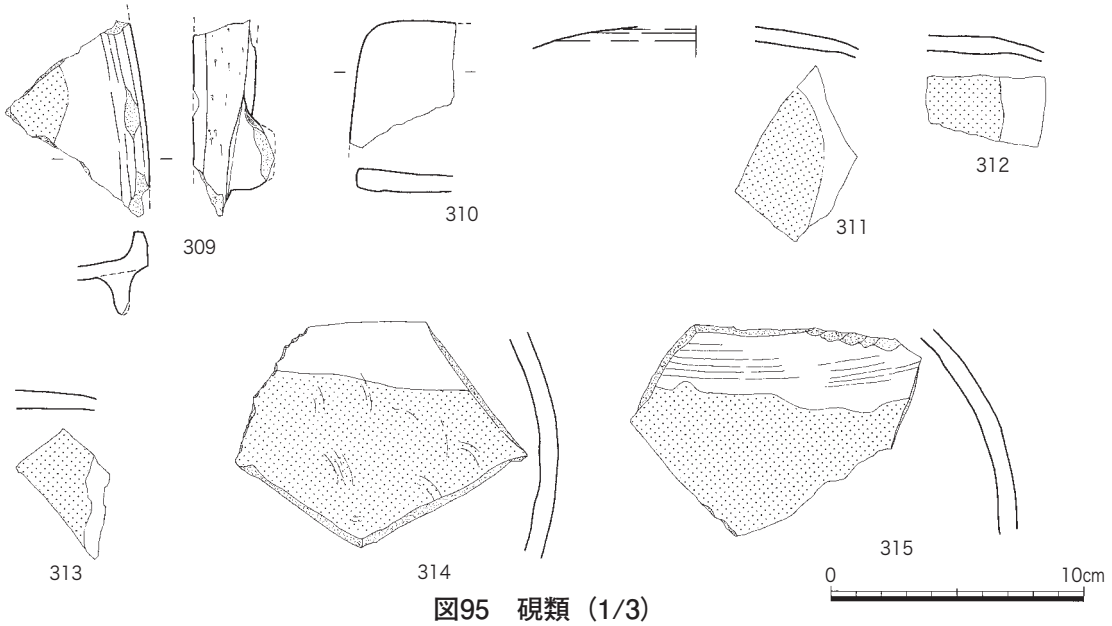


図95　硯類（1/3）

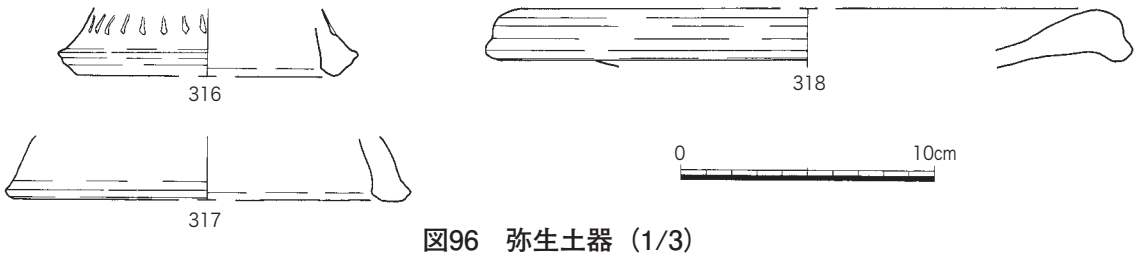


図96　弥生土器（1/3）

第３節　その他の遺物

（１）鍛冶・鋳造関連遺物（図 97、図版 22 － 7）

第５章第３節において、本遺跡の寺院内金属製品生産についてまとめるが、このたびの調査では僧房より北部や西面回廊から合計３基の炉が検出され、炉やその周囲などから鍛冶・鋳造関連遺物が出土している。これらの遺物について、蛍光Ｘ線分析を依頼し、生産された金属の材質を調べる参考とした[(1)]。なお、この分析値は表面分析の数値であって、定量的ではないが、生産された金属製品の材質を調査するには有効であるので、以下の遺物の説明の中で記載する。

319～**321**は鞴の羽口である。**319**はＴ27溝14から出土したもので、最大厚2.5cm を測り、黒色のガラス質滓が外面に付着している。**320**は先端部片で黒色のガラス質滓･黄橙色の付着物が認められる。

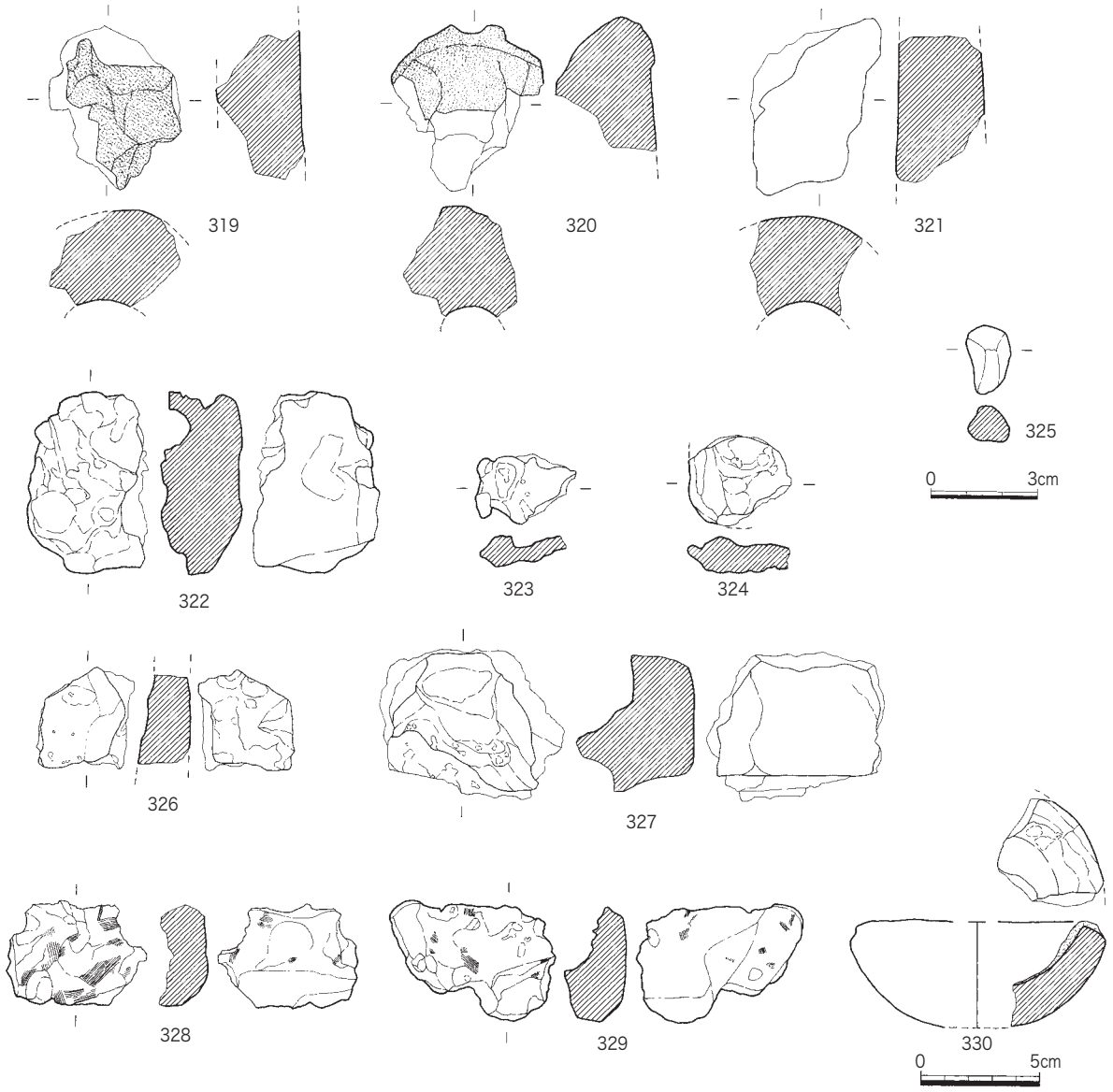


図97　鍛冶・鋳造関連遺物（1/2・1/3）

320・321はＴ28の包含層から出土した。いずれも小型で鍛冶炉に伴う羽口とみられる。

322～324は鍛冶滓で、**322･323**がＴ27溝14から、**324**はＴ27溝15から出土した。これらの分析値は、Cu０％・Fe25.04～79.51％と圧倒的に鉄の比率が高い。

325は銅滴で、直接遺構に伴わないがＴ27から出土した。長さ1.9cm、幅1.2cm、厚さ1.0cm である。表面には緑青が認められ、分析値も Cu22.34％・Fe5.37％と銅の比率が高い。

326･327は炉壁で、Ｔ27の炉２から出土したものである。**326**の内面は黒色を呈し、**327**も内面黒、赤黒色を呈し外面には粘土帯のつなぎ目痕跡がある。分析値は Cu4.21～17.25％・Pb1.56～32.43％・Fe7.68～11.73％であり、銅や鉛の割合が比較的高く、鋳銅に関わる炉壁と考えられる。

328・329はＴ28土壙７から出土したもので、表面に緑青や炭が認められ、鋳銅に関係する遺物とみられる。Cu15.62～40.30％・Pb0.08～12.36％・Fe6.53～9.95％という分析値で、銅の比率が高い。

330は、Ｔ28溝17から出土した坩堝である。外径10.8cm、内径9.0cm を測る。内面と口縁部には、緑青、付着物、気泡がみられ、銅の鋳造に関わる遺物である。

出土傾向として、Ｔ28では隣接する土壙７と溝17から銅の鋳造に関連する遺物がみられる。Ｔ27炉２からは鋳銅のための炉壁、その周辺から銅滴が出土し、また、Ｔ27溝14・15からは鍛冶滓がみられたことから、銅製品および鉄製品の生産が窺える。

（２）金属製品（図98、図版22－６）

図化した金属製品は、銅製品**331**～**333**、鉄製品**334**～**336**である。

331は、遺構に伴っていないがＴ21包含層から出土した銅製品で、残存長5.4cm、残存幅4.8cm、最大厚1.4cm、重量99.95g を測る。平坦面と膨らんだ面があり、平坦面には鍍金が施されている。また、

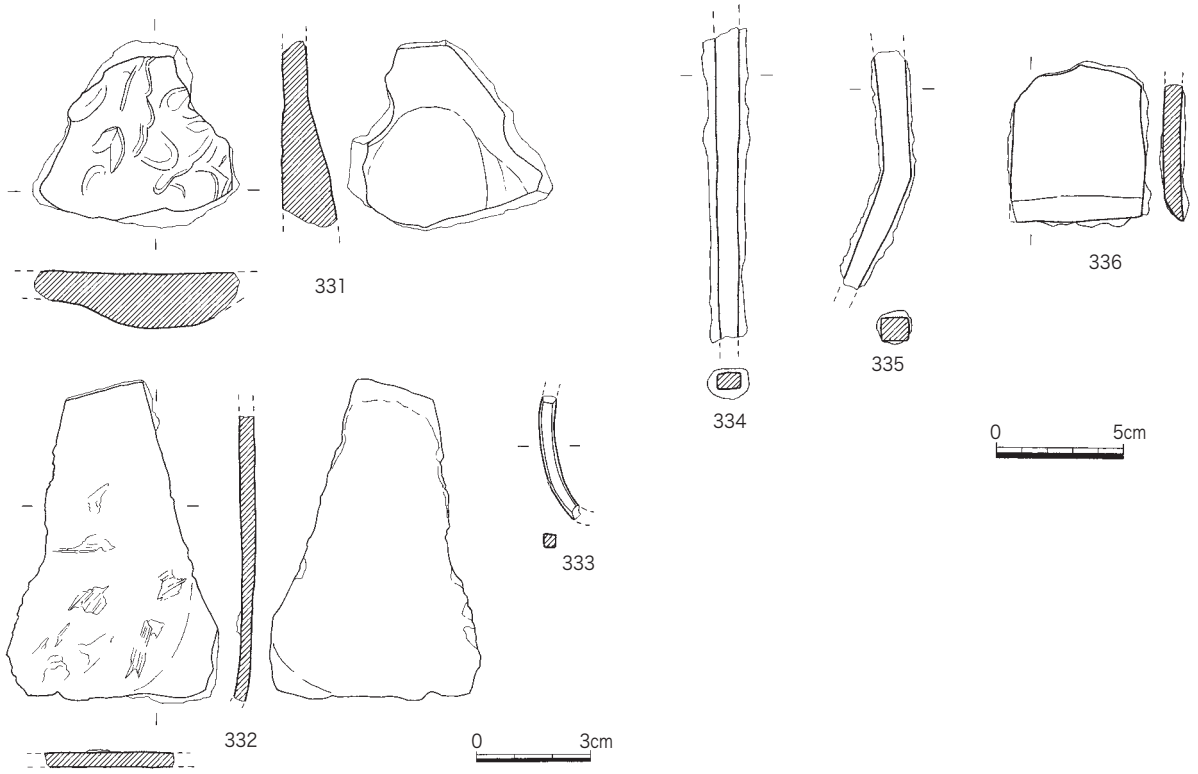


図98　銅製品・鉄製品（1/2・1/3）

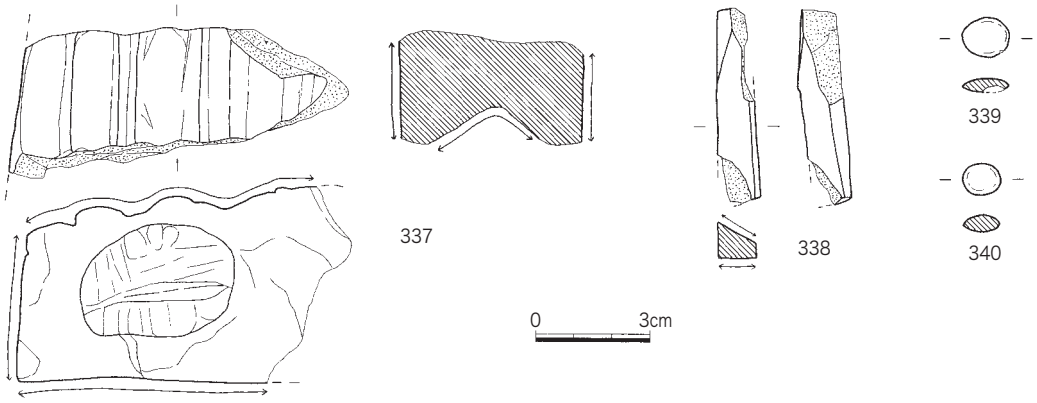


図99　石製品（1/2）

表面には凹凸が認められる。鍍金された製品であるので、仏像等の一部の可能性がある。

332は、Ｔ21溝８から出土した、最大厚0.4cm の板状の銅製品である。最大長8.4cm、最大幅5.4cm、重量62.23g を測る。一方の面に繊維質の付着物がみられる。

333は残存長3.3cm のリング状の銅製品である。断面は一辺0.35mm の方形を呈し、ねじれが認められる。佐波理製品の一部であろうか。

334はＴ26土壙４から、**335**はＴ21から出土した鉄釘である。**336**は、片刃の鉄製工具と考えられるもので、最大幅5.3cm、最大厚７mm を測る。

（３）石製品（図99）

石製品は少なく、砥石**337**・**338**、碁石状の石**339**・**340**が出土した。

337はＴ27の水田客土から出土したもので、一面に筋状に磨耗した面がみられ、破面以外は使用された痕跡が残る。破面も一部で、円形状に研ぎ面として使用している。石材は流紋岩であり、粗い砂粒がみられることから粗砥として用いられたと考えられる。**338**はＴ34溝27から出土したもので、細長い形状を呈し流紋岩製である。微粒がみられ、仕上げ砥石として使用されたと考えられる。

339・**340**は長径1.0～1.2cm の碁石状を呈している。**339**はＴ26礎石９の抜き取り穴から出土し、泥岩製である。**340**はＴ34溝29から出土し、チャート製である。

註

（１）鍛冶・鋳造関連遺物の蛍光Ｘ線分析（非破壊）は、白石純氏に依頼した。

第５章　総括

第１節　伽藍配置の復元

（１）僧房

『備国１』で述べているとおり、僧房は昭和49年度調査区および備国１Ｔ７・８の調査だけでは詳細な規模の推定を行うには不明な点が少なくないが、改めてこれまで提示した復元案を以下にまとめてみる。

まず、創建時の僧房建物として、備国１Ｔ８の礎石80・85が建物東面となる「礎石74・80・83～85ほかで構成される礎石建ち建物」を想定しており、基壇北側には雨落ち溝15、基壇南側には雨落ち溝16が設けられたと考えた。梁行は２間もしくは３間、梁行柱間は10尺（2.97m）もしくは11尺（3.27m）等間、桁行柱間は10尺（2.97m）等間と推定した。

ここまでの調査段階では僧房西半の情報がなかったが、およそ『備国１』で想定した僧房主軸を挟んでＴ８の礎石80・85からなる建物東面と正対称の位置に建物西面が存在したと考えていた。また、この建物の東側で「礎石86・87およびそれ以東に続く別棟の礎石建ち建物」の存在を想定し、両建物が同一基壇上に造られていることから、同時併存していた可能性があるとした。

これらの建物は創建後９世紀後半頃に廃絶したと考え、その後「Ｐ－17ほかで構成される掘立柱建物」に建替えられたと想定した。さらに、Ｔ７西端でみられた「礎石75・76・78・81・82ほかで構成される礎石建ち建物」に建替えられ、最低２回の礎石建ち建物の建築を推定した。規模は柱間桁行８尺（2.38m）、梁行２間で柱間梁行10尺（2.97m）等間と想定した。この建物の最終的な廃絶時期は明確でないが、古代末まで存続していたと考えた。

今回の報告に該当する地点は僧房西端の範囲を広く含んでおり、建物や基壇・溝を検討する上で有益な情報を得ることができた。第５次調査のＴ25や第６次調査のＴ31・32・34の調査成果によって、Ｔ32の礎石13とＴ34の礎石16が建物西面にあたり、Ｔ25の礎石４～８やＴ32の礎石12･13が南側柱の礎石、Ｔ31の礎石11やＴ34の礎石16が北側柱の礎石となる可能性が高いことが明らかとなった。建物西側から推定される規模は梁行２間、梁行柱間は10尺（2.97m）等間、桁行柱間は10尺（2.97m）等間である。

また、基壇北側にはＴ31の溝18やＴ34の溝28で構成する溝、基壇南側にはＴ25の調査区南辺下がりやＴ31の溝23、Ｔ32の溝24で構成する溝が認められ、加えて、備国１Ｔ７・８の雨落ち溝16につながり、それぞれがこの建物の付属する雨落ち溝と想定できた。また、これらの雨落ち溝とＴ32の溝25とＴ34の溝27は１条につながっており、溝によって基壇西端を矩形に囲っていたと推測した。

先述の「礎石74・80・83～85ほかで構成される礎石建ち建物」との関係では、未調査範囲もあるものの桁行柱間はすべて10尺（2.97m）等間であり、また、桁･梁方向ともに想定にねじれもないことから、これらは創建時に建てられた同一の僧房建物の可能性が高いと考えられる。しかし、その場合、相模国分寺跡の僧房建物の復元例のような梁行２間の小規模部屋であったと感じさせる。

ただし、建物が１棟建ちでＴ32の礎石13とＴ34の礎石16を建物西端とし、従前の復元案のとおりＴ

８の礎石80･85を建物東端で、『備国１』で示した僧房主軸がＴ７の礎石75と81を通ると仮定した場合、この僧房主軸から僧房西端までが13間、僧房東端までが９間と東西非対称の位置関係となる。そこで、僧房西端の調査成果が有効であることを前提として、建物の東西端がこの主軸から東西正対称の位置にあったと仮定するならば、僧房東端がさらに４間分東に存在したとの想定が可能と思われる。

この場合、「礎石86・87およびそれ以東に続く別棟の礎石建ち建物」としたＴ８の礎石86・87も、礎石80から礎石86まで、また礎石85から礎石87までに礎石が確認されなかったものの、それぞれ桁行３間、桁行柱間が10尺（2.97m）等間と推定でき、また、桁・梁方向ともに想定にねじれもないことから、この僧房建物の礎石の一部として考えても差し支えないと思われる。

つまり、「礎石74・80・83～85ほかで構成される礎石建ち建物」と「礎石86・87およびそれ以東に続く別棟の礎石建ち建物」は別の建物ではなく、同一僧房建物の可能性が高いと考えられる。その場合、礎石86・87は先に仮定した僧房主軸から12間東の位置となり、この僧房主軸から13間東側となる僧房建物の東端は、旧農道および南北に延びる用･排水路のため未調査となっている場所付近が想定される。

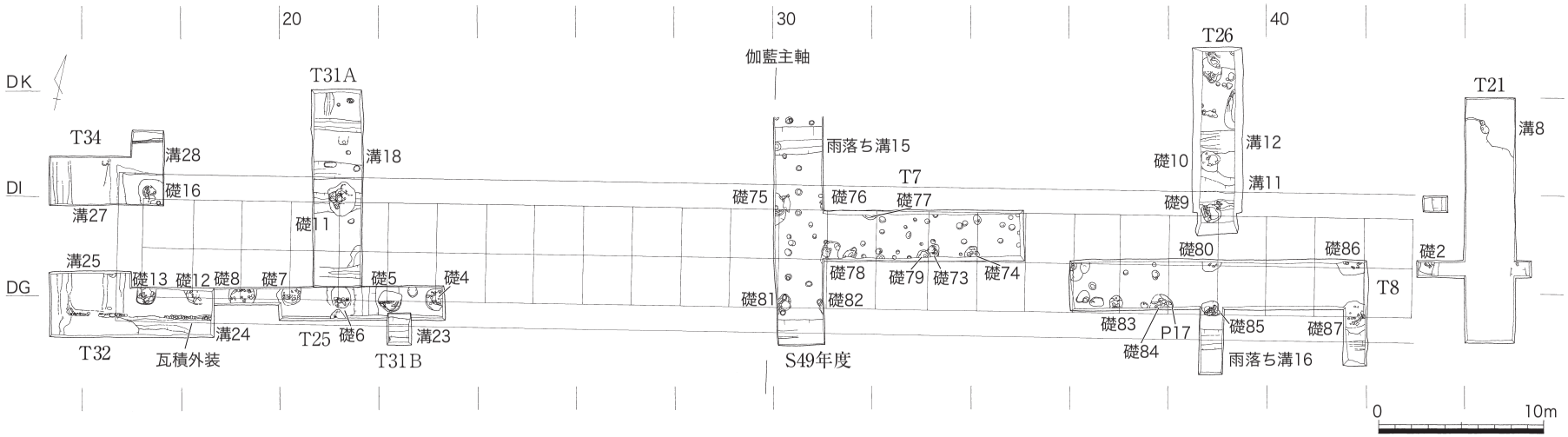
現状において、この用・排水路を境に僧房基壇範囲より東側の田面のレベルが一段低くなっていることは示唆に富む。また、僧房北側の雨落ち溝に取り付いていた排水路が、時間的に踏襲されうるか不明であるが、この用･排水路に先行したと推定される水路といえるならば、興味深い状況といえる。

加えて、後出とされた「礎石75・76・78・81・82ほかで構成される礎石建ち建物」について、再検討が必要と考える。例えば、礎石75として「礎石」と「礎石抜き取り穴」が検出されているが、本来両者は別遺構として取り扱うほうが妥当であり、「礎石」設置までの時間的な問題を考慮しなければならない。つまり、「各礎石」の礎石は柱間桁行８尺（2.38m）、梁行２間で柱間梁行10尺（2.97m）等間と想定されうる建物を構成していると思われるが、創建時の僧房建物を想定するためには「礎石抜き取り穴」のほうを評価すべきと考えている。その場合は、Ｔ７の礎石75・81（厳密には「礎石抜き取り穴」）はやはり僧房主軸が通る位置に存在したといえ、その僧房主軸の１間東にＴ７の礎石76・78・82（厳密には「礎石抜き取り穴」）が位置すると見てよいと思われる。

以上のことから、この報告段階で推定される創建期の僧房規模をまとめると、僧房建物の柱間は26間×２間であり、桁行は260尺（77.22m）、桁行寸法は10尺×26間等間である。梁行は20尺（5.94m）、梁行寸法は10尺×２間等間である。軒の出は南北側５尺（1.49m）である。僧房の基壇寸法は桁行（東西）方向で270尺（80.19m）、梁行（南北）方向で30尺（8.91m）である。この前提としては、僧房は『備国１』で復元した僧房主軸から東西正対称に１棟建ちで造営されたと仮定している。ただし、棟割規模や構造、また馬道の存否などについては検討を要する。

一方、今回の報告で今後検討すべき事項もある。第４次調査のＴ21で検出された礎石２は、建物南面にあたる礎石86から東に柱間14尺（4.16m）の位置にある。これについては、ここまで想定してきている創建期の僧房建物の礎石とは別の性格をもつものと考えたい。『備国１』で想定し、今回評価の見直しを行った「礎石86･87およびそれ以東に続く別棟の礎石建ち建物」と関係するとして、規模が１間×１間以上、柱間は14尺（4.16m）の建物の可能性もなくはないが、溝８との関係もあり現段階では肯首しがたい。

また、第５次調査のＴ26からは、礎石９と礎石10を梁行方向に２基検出した。このうち、礎石10がこの僧房建物に伴う遺構であるか検討を要する。つまり、礎石９を北側柱の礎石と考えれば梁行２間、雨落ち溝は溝11と想定されるが、礎石10を僧房北側柱の礎石と考えると梁行３間、雨落ち溝は溝12となる。現段階では僧房西端の調査成果が有効であることを前提にすれば、礎石９を北側柱の礎石と考



※　図の桁行・梁行柱間は10尺等間、軒の出は南北側５尺である。

※　図中の「礎」は礎石の略称である。

図100　僧房復元図（1/400）

え、梁行は２間であった可能性が高い方をとる事にしたい。

基壇外装についてはこれまでの堂塔の調査から外装材の出土がないことから、木製の基壇外装をその候補として想定していた。第６次調査のＴ32の僧房基壇の南側で瓦積外装を確認したが、これをもって他の基壇もそうであったと説明できる痕跡は見出してはいない。また使用された瓦は創建期のものと思われるが、これをもって創建時に存在したのか、創建瓦を二次的に転用されたのか判然としない。これも僧房建物と関連付けながら検討すべき点といえる。

（２）回廊

『備国１』の所見のとおり、回廊は複廊式であり、中門から講堂にとりつき、回廊内の伽藍中軸上に金堂のみを置く配置をとっていると考えている。また、梁行寸法は四方位面すべて９尺（2.67m）等間であると推定している。付属施設として、備国１Ｔ５では西面回廊の雨落ち溝７・８を、Ｔ６では東面回廊の雨落ち溝９をそれぞれ検出している。桁行寸法については、北面回廊の桁行柱間が、角２間×９尺と講堂取り付き部を除き３間×10尺（2.97m）、また、南面回廊の桁行柱間は角２間×９尺と中門取り付き部を除き５間×11尺と復元想定している。

一方、東・西面回廊の桁行柱間は、『備国１』で述べているとおり、等間隔柱間割とは異なる柱間割の方法が用いられていたと考えている。今回調査を行った西面回廊の桁行柱間のうち、備国１Ｔ５で確認された礎石50とそれを南北にはさむ位置にある第６次調査のＴ33で確認された礎石14と礎石15の関係から、この桁行柱間が12尺（3.56m）であることが明らかになった。

『備国１』で提示した復元案では、東・西面回廊の棟通り心々は301尺（89.40m）であり、南北隅の桁行柱間がそれぞれ９尺であると推定しているが、仮にその間が12尺等間隔柱間割であるとすると、整数値では割り切れない。これについては、三河国分尼寺跡の異なる尺を混在させる可能性や興福寺のように小門の位置と規模を決定したのちにその南北を均等に割る均等柱間割の可能性などが想定されるが、現段階の情報だけでは説明できない。いずれにしても今回の調査でも異なる尺を混在する柱間割の可能性の指摘でとどめておきたい。

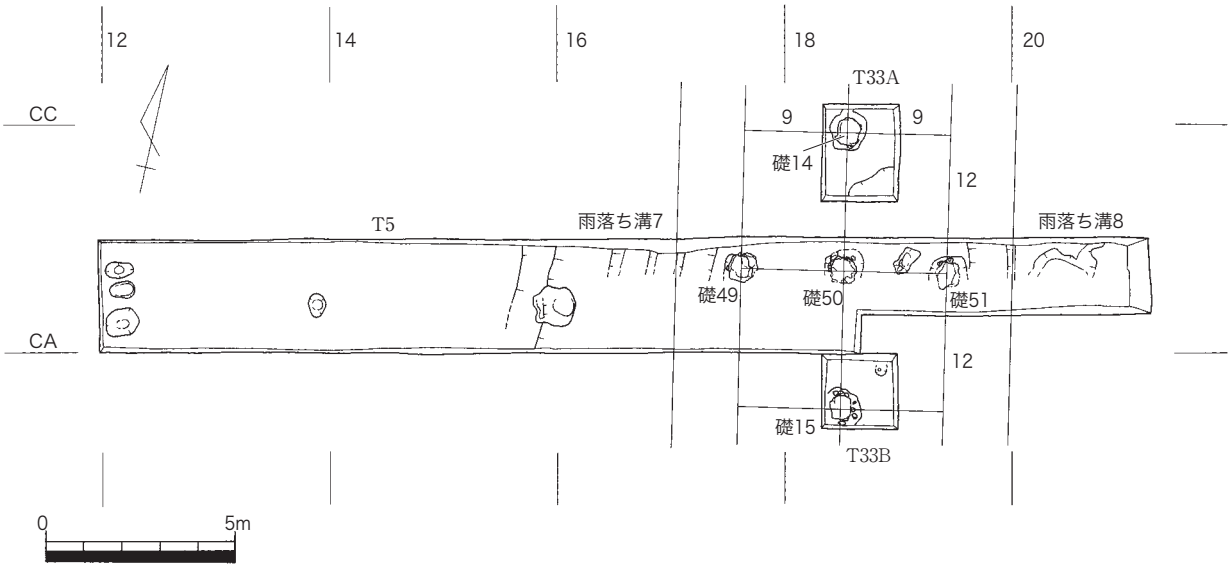


図101　回廊復元図（1/200）

（３）北門・北面築地

『備国１』の所見で想定された北面築地および外溝を手掛かりに、寺域主軸線上付近に設定した第４次調査のＴ20・23で、北門の北側柱の礎石と考えられる礎石１が確認された。礎石１の残存状況は長軸90cm、短軸76cm を測る礎石の抜き取り穴での確認であり、これにより北門は礎石建ち建物であっ

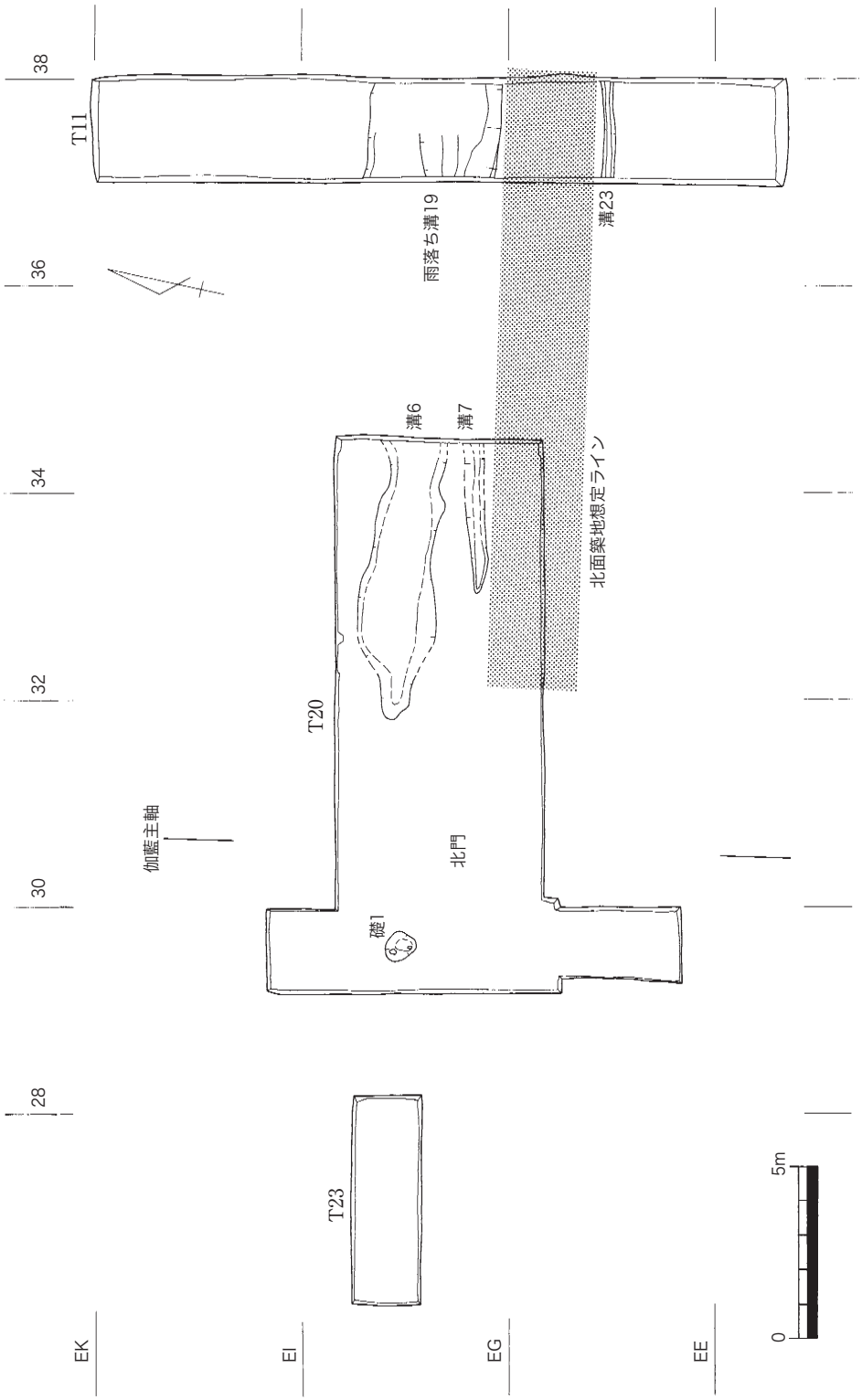


図102　北門・北面築地復元図（1/200）

たと推定される。しかし、そのほかの礎石や基壇の痕跡は、耕作土や床土を除去するとすぐに遺構面に達するほどの後世の水田耕作による深い削平を受けていたため確認できず、詳細な構造は不明である。

また、Ｔ23で関係遺構が確認できなかったのは、寺域中軸付近から西側方向に原地形そのものが高くなっていくことや『備国１』で述べているように、昭和49年度の復元主軸に対して、寺域中軸線（主要伽藍造営軸）の振れがN- １°48′49″-E と算出されているので、北門遺構はT20西半が中心位置となり、西方のT23では北門に関係する遺構が確認されなかったと推測される。

一方、北面築地に関係する遺構として、Ｔ20で検出された溝６が、備国１Ｔ11・13で北面築地の外溝として確認された雨落ち溝19とつながることが明らかとなった。溝７も本来同一の雨落ち溝の可能性がある。現状でＴ20の中央付近から西方が確認できないため、北門付近の状況は判然としない。なお、雨落ち溝19は寺域内でみられた各溝より規模が大きいことから、北方の山麓斜面から流入してくる雨水等を受けて、寺域内へ浸入するのを防ぐ役目や北面築地に並行して延びていたと考えられる外周道路の側溝として、機能していたのではないかと思われる。北面築地の内溝としては、備国１Ｔ13の雨落ち溝20やＴ11の溝23などがその可能性が高いと考えられる。ただし、T11の溝23は後世の水田造作に伴うものとして評価もしており、積極的に内溝であると比定することもできない状況にある。

北面築地塀は削平により既に失われていたが、第４次調査のＴ20の溝６底面中央付近から南側、トレンチのほぼ中央で幅1.3～2.4ｍの黄色土が帯状に東西に延びており、これが北面築地塀もしくはそれに関する痕跡ではないかと想定している。この黄色土が築地塀の版築土であれば、築地塀自体この範囲以南に所在していたことが推定される。これは、Ｔ13において雨落ち溝19と20の間隔が、上面で約2.5～2.7ｍ、底面で約2.95～3.2ｍを測り、Ｔ11で雨落ち溝19の南側肩部から溝23の段差までの距離が、上面で3.08ｍ、底面で4.3ｍであることから、この間に築地塀が存在していたと推定した『備国１』の所見と矛盾するものではない。また、Ｔ11の雨落ち溝19の南肩に幅50cm の帯状に平瓦等が集中している状況も、この南側に瓦葺の築地塀が所在していたことを裏付ける。

第３章で触れているとおり、礎石１や溝６付近の地形の状況からは、北門は本遺跡で確認している南門と中門のような桁行５間×梁行２間の大規模なものでなく、八脚門といった桁行３間×梁行２間以下の規模を想定してよいと考えられる。

（４）金堂

第４次調査のＴ22では、金堂の南西隅廂の側柱にあたる礎石３が確認された。礎石３の据え付け掘り方も、他と同様に金堂基壇の版築層を掘削して設けられていた。

すでに『備国１』で触れているが、金堂建物の規模は礎石の配置などから、桁行７間（11・12・14・14・14・12・11尺）×梁行４間（11・12・12・11尺）を想定している。また、礎石３からの基壇の出は、14尺（4.16ｍ）と考えており、基壇規模は116尺（34.45ｍ）×74尺（21.98ｍ）と推定している。基壇に掘り込み地業は認められず、上面は大きく削平を受けているものの、高さ約37cm が残存している。地山を削り出し後、それより上位は薄層となる版築がなされていた。なお、基壇外装の痕跡は認められなかった。

（５）まとめ

本報告は昭和49年度の調査成果や『備国１』の所見と基本的なところでは齟齬は生じていないと考えている。そうした中で、僧房の建物規模がある程度推定可能となったことや基壇の一部で瓦積外装が認

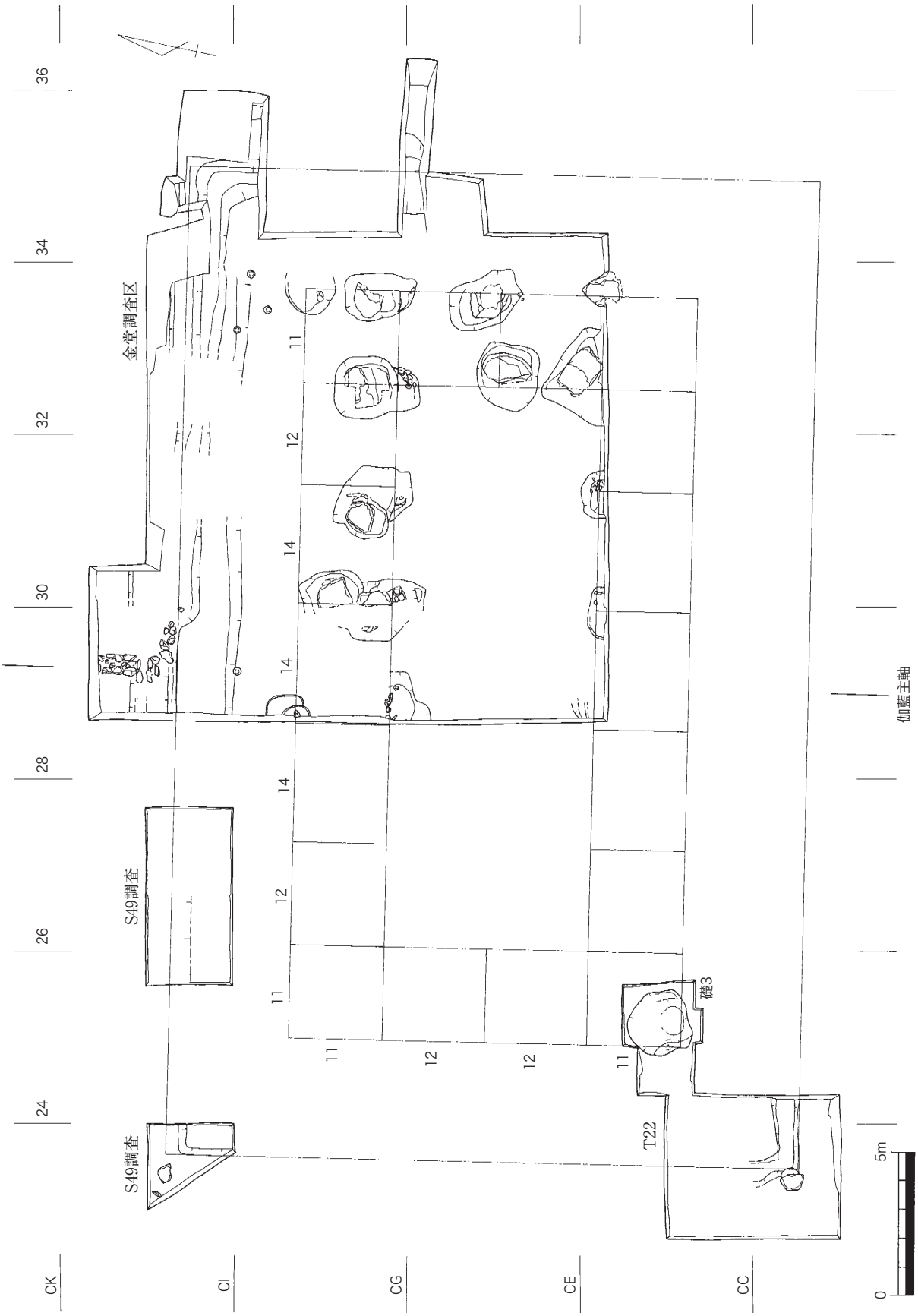


図103　金堂復元図（1/200）

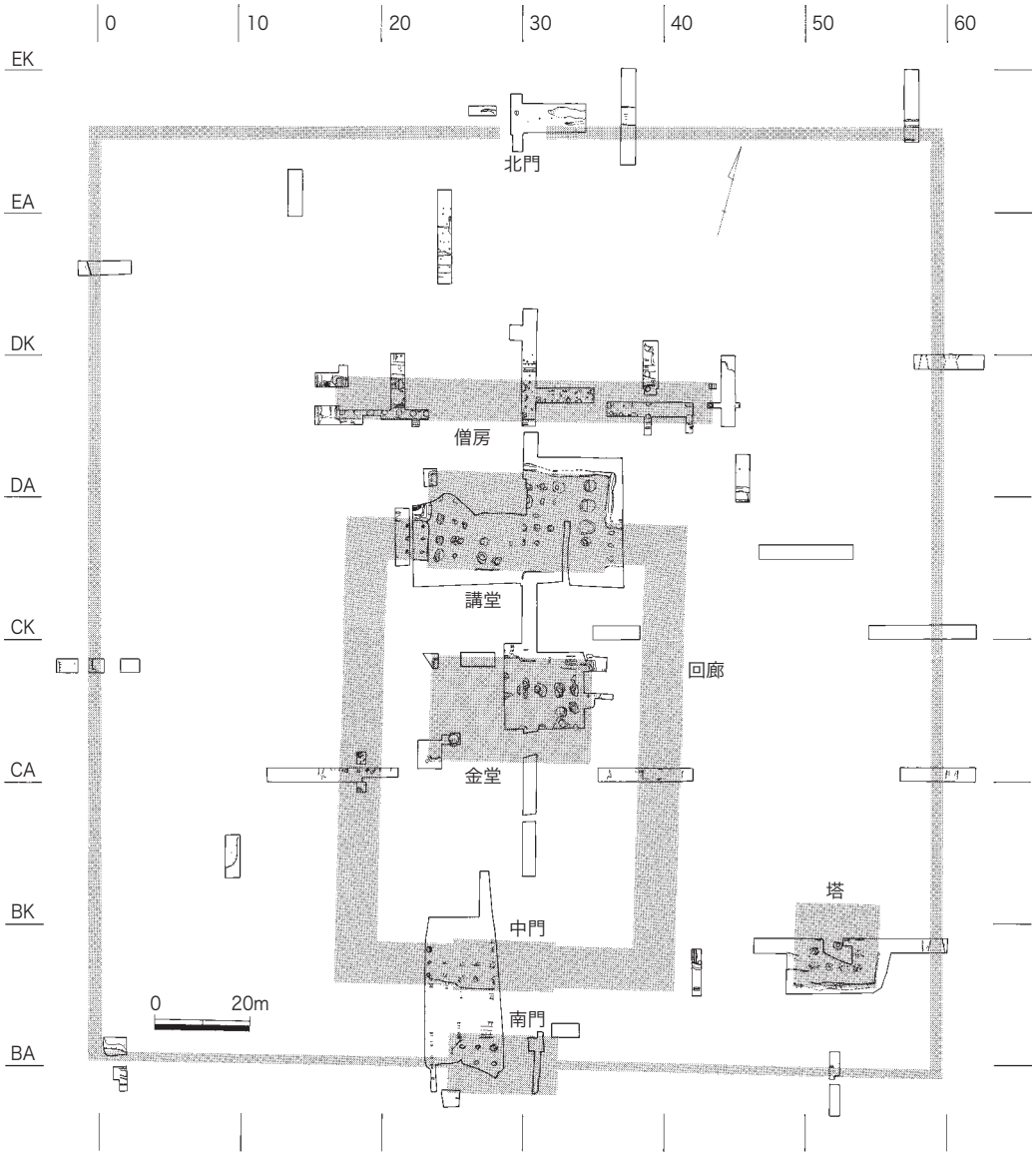


図104　伽藍配置復元図（1/1,600）

められたこと、西面回廊の一部が桁行柱間12尺（3.56m）であったこと、北門が礎石建ち建物で、内外溝が伴う瓦葺きの版築築地塀があったことなどが明らかになったこと、また後述するように寺院の維持運営に関わる金属生産に関わる炉や生産物などが検出されたことなどが、第４～６次調査の主な成果といえる。

一方、Ｔ24・27・28・30を設定して伽藍内の食堂、鐘楼、経蔵等の諸施設についての配置の解明を試みたものの、結果として判明できなかったことはトレンチ調査の限界といえるかもしれない。加えて、僧房建物が１棟建ちか複数棟建ちかあるいは周辺に別の建物が存在した可能性がないか、馬道が設けられていないか、僧房主軸と伽藍主軸の関係はどうか、また、東西回廊の桁行柱間から想定される小門や金堂から回廊にむかって取り付く軒廊の有無など、さらに構造や規模に正確を期すためには僧房や回廊付近の補足調査によって解明が必要と思われる。平成21年度より備前国分寺跡の史跡整備を塔地区から着手している。今回の発掘調査の成果を整備事業に活かして、備前国分寺の活用を図ることが今後の課題と考えている。

第２節　出土土器について

寺域北部の遺構で比較的まとまって出土した古代の土器について、ここで整理してみたい。

対象とする土器は、北面築地外溝と考えられるＴ20溝６・７とＴ27で検出した東西方向の溝14から出土した須恵器・土師器である。北面築地外溝に伴う土器については、第１～３次調査における備国１雨落ち溝19やカマド１周辺、東面築地外溝の備国１雨落ち溝17周辺で同時期の土器が出土しており、若干の検討を行っている（有賀2009）。なお、備国１雨落ち溝19とＴ20溝６は同一の溝と想定している。Ｔ27溝14からは、それよりも新しい段階と考えられる土器が出土している。

（１）８世紀中葉～後葉の土器

Ｔ20の溝６・７からは、同時期の範疇に収まると考えられる須恵器や土師器が出土した。また、Ｔ20の遺構に伴わない土器についても同時期と想定可能なため、遺構出土のものと併せて、その構成や特徴などから検討してみたい。

須恵器は、杯Ｂ・杯Ｂ蓋・杯Ａ・皿・盤・壺などで構成されている。

【杯Ｂ】７点が出土している。法量の計測できるものをみてみると、口径14.0～15.0cm、器高3.6～4.4cmの範囲に入るものが３点ある（**119・120・133**）。これらの径高指数は25.0～29.3とややばらつきがあるが、『備国１』において法量から第Ⅰ群に分類したものとみられる。その他に、器高6.1cmを測るやや大型のものがある（**122**）。

【杯Ｂ蓋】12点が出土しているが、口径がわかるものは少ない。口径は14.6cm（**138**）と18.4cm（**131**）を測るものが確認できる。口径14.6cmのものは、杯Ｂの第Ⅰ群と組み合う。

形態については、縁部が屈曲して段をなし、端部が下方へ折れるＡ形態と縁部が屈曲せず頂部からの丸みを有したまま端部が下方へ折れるＢ形態の両方が認められる。Ａ形態が７点（**111～115・138・139**）、Ｂ形態が４点（**116・117・130・131**）である。つまみの形状は、中央部がやや突出する擬宝珠形のもの（**138・140**）と円形で碁石状を呈するもの（**139**）がある。

【杯Ａ】**141**の１点のみで、破片のため全形がよくわからない。

【皿】皿は高台の付く皿Ｂ（**134・143**）と高台の付かない皿Ａ（**142**）がある。皿Ｂは特徴的に白色を呈する。皿Ａは口縁部内面に段を有している。

【盤】盤は２点が出土し（**123・124**）、いずれも平底で、**123**は把手の付くものである。

【壺】**137**は高台が付くが、頸部および口縁部が残存していない。

土師器は、器種構成として杯（**129**）を除くと、甕が占めている。

【杯】１点出土し、底部が残存していない。口縁部は薄くつくられている。

【甕】口縁端部内側を拡張し上方にのびるもの（**125･127･128**）と端部外側に外湾するもの（**126･145**）が認められる。口縁部内面にヨコハケ、胴部外面にタテハケが施され、胴部内面には指オサエがみられる。

以上のように、個々の器種の特徴や器種構成についてみると、『備国１』で検討したＴ11雨落ち溝19を中心とした土器群と同じ傾向にある。甕類を除く杯・皿類がほぼ須恵器で占められており、出土数の比較的多い杯Ｂ、杯Ｂ蓋の法量も共通している。杯Ｂ蓋にＡ・Ｂ両形態が混在することや、つまみの形態も同種類が存在することも同じである。

したがって、備前地域の他遺跡と比較して『備国1』で想定したとおり、北面築地外溝を中心としたＴ20出土の土器は８世紀中葉～後葉に位置付けられるものと考えられる。

（２）８世紀末～９世紀前葉の土器

Ｔ27溝14からは須恵器や土師器がみられ、特に土師器皿は内外面丹塗りで口縁部が屈曲し外反するものがまとまって出土しているなど、同じ時期に属すものが一定程度認められるため、ここで検討する。

須恵器は、杯Ａ・杯Ｂ・杯Ｂ蓋・皿・甕がみられる。

【杯Ａ】２点が出土しているが、法量の確認できる188は口径13.2cm、器高4.1cm で器高が高く、底部はヘラ切りである。

【杯Ｂ】３点が出土している。190･191は、口縁部が残存せず肉厚なため他の器種とも考えられるが、杯Ｂと判断している。高台の貼り付け位置について、底部と体部の屈曲部近くに付くことが指摘される。

【杯Ｂ蓋】５点が出土し、口縁部付近の形状はすべてＡ形態と認められる。

【皿】187は破片であるが、口縁端部が外湾している。

【甕】口縁端部が内側へ拡張した形状を呈する。

土師器は、杯Ａ・皿・椀・甕と器種不明のものがみられる。

【杯Ａ】４点を図化し、法量は口径11.6～12.2cm、器高3.1～3.2cm の範囲に収まる。198のみが外面に丹塗りを施しているが、その他は施されていない。底部調整については、195が周縁ヘラ切りで中心部は押圧が認められる。

【皿】５点が出土し、丹塗りと口縁部の状況から大きく２分類できる。４点が内外面に丹塗りが認められ、口縁部が外反し（199～202）、１点は丹塗りが施されず、口縁部は体部からそのまま屈曲せずのびる（203）。丹塗りのない203は、口縁部を除いて外面にヘラケズリが施されており、製作技法も異なる。畿内の小型食器類にみられるｃ手法の系統をもつため、在地系というよりは畿内系の可能性が考えられる。

【椀】高台が付くものである。全形のわかる204は、復元口径16.8cm、器高6.4cm を測る。

【甕】口縁部の形状については、端部内側を上方にのばすもの（211・212）と端部外側に弱く外反するもの（209・210）がある。210～212は口縁部内面をヨコハケで調整され、211・212はそのまま胴部内面にもヨコハケが施される。胴部内面にはナデや指オサエが認められ、外面はタテハケである。

以上、溝14出土の土器を概観してきたが、全体の構成として杯・皿類に須恵器だけでなく土師器の割合が高いことが指摘し得る。須恵器では杯Ｂが底部と体部の屈曲部により近いところに高台が付くという、８世紀末以降の形態を呈している。また、須恵器杯Ｂ蓋はＡ形態のみでＢ形態はみられない。土師器においては、内外面丹塗りの口縁部が屈曲し外半する皿がみられる。土師器皿203にみられた外面ヘラケズリの技法は畿内で平城宮Ⅳ～Ⅴ期から長岡京期＝平安京Ⅰ期中およびⅠ期新にかけて盛行することから、大きく８世紀後葉～９世紀前葉の時期幅にあたる（小森1992）。

このような器種構成や形態の特徴は、前述した８世紀中葉～後葉に位置づけたＴ20出土の土器より明らかに新相を呈するため、８世紀末～９世紀前葉の時期を想定しておきたい。

引用・参考文献

有賀祐史2009「古代の土器について」『備前国分寺跡』赤磐市文化財調査報告第３集　赤磐市教育委員会

小森俊寛1992「概説」『古代の土器１　都城の土器集成』古代の土器研究会

第３節　寺域内における金属製品生産について

第４～６次調査は、主に回廊内の中心的な儀礼空間外に位置する僧房以北に設定した調査区が多く、一部の調査区において鉄製品や銅製品の生産に関わる遺構・遺物を検出している。

近年、国分寺をはじめとする寺院遺跡の大規模で広範な発掘調査が進展する中で、寺院空間についての研究、議論が盛んに行われるようになってきた。中でも、寺院の維持運営に関わる鋳銅、鍛冶工房の確認によって、寺院付属の金属製品生産工房について迫るような調査事例がみられる。

ここでは、調査で確認された金属製品生産についてまとめ、寺域の空間利用について考察したい(1)。

（１）本遺跡の金属製品生産の状況

第１～３次調査成果を含めると、金属製品生産に関わる遺構･遺物は、ⅰ）僧房より北の寺域北部、ⅱ）回廊外の寺域東部、ⅲ）回廊上の３地区から検出されている。

（ⅰ）寺域北部

銅の鋳造に関連するものとして、Ｔ27北半に炉２が所在する。炉からは炉壁２点が出土し、円形に浅く掘り窪められた範囲は赤色化していた。同一の調査区内の包含層から銅滴が出土している。

鉄製品にかかる鍛冶関連遺物については、Ｔ27で検出した溝14・15からは鞴羽口、鍛冶滓が出土した。付近での鍛冶作業後に廃棄されたものが堆積したと考えられる。Ｔ26の僧房北側では鍛冶炉と思われる炉１を検出している。

僧房から北面築地間の施設の状況については不明であるが、奈良時代後半～平安時代前半までを中心とした遺物を含む東西溝が２条、Ｔ11からは奈良時代後半に属するカマド状遺構が確認されている。また、平安時代後半以降に掘立柱建物がみられる。したがって、寺域北部は基壇建物が配置されていたというよりは、時期は明瞭でないが寺院の維持運営に関わる諸施設や、一部で銅および鉄製品の生産に関わる工房が営まれていたと考えられる。

（ⅱ）寺域東部

銅の鋳造に関連するものとして、Ｔ17の東面築地の外溝である備国１雨落ち溝17およびその東に広がる包含層から多量の溶解炉壁、羽口、銅粒などが見つかっている。時期は奈良時代後半と考えられるもので、付近で銅製品の鋳造が行われた状況が判明している。また、僧房の南東に位置するＴ28には、鋳銅関連遺物と炭層が見られた土壙７、緑青の付着した坩堝が出土した溝17が所在し、鋳銅が付近で行われたと考えられる。土壙７・溝17は出土した土器から、９世紀代に属すと考えられる。

現状において、寺域東部では僧房南東で銅製品の生産に関わる工房の所在が推定される。また、東面築地付近で、同じく銅製品の鋳造が行われている。

（ⅲ）回廊

講堂を挟んで北面回廊の東側で１基、西側で４基の炉が検出されている。また、西面回廊でも２基の炉が確認されている。検出状況からは、回廊の特定の一部だけを使用しているのではなく、回廊の各所に設けられたことがわかる。時期を示す遺物は少ないが、備国１炉１から出土している土師器皿は、11～12世紀代に属すと考えられ、北面回廊が焼失する12世紀半ば～12世紀後半以前の平安時代後期に操業していた可能性があり、回廊が機能していた段階に基壇上に設けられたものである。さらに、

炉がどういった材質の金属製品を生産していたのかは不明であるが、回廊上で何らかの金属製品の生産活動が行われていたようである。

以上、本遺跡の寺域北部および東部、中心伽藍においては回廊で金属製品生産の様相が認められた。金属製品は銅ならびに鉄製品と想定される。時期としては、備国１雨落ち溝17の堆積土に含まれた銅鋳造関連遺物は、奈良時代後半の土器と共伴し、創建から比較的早い段階での埋没が想定されるため、国分寺創建もしくは創建後の早い段階の操業と考えたい。北部のＴ27溝14･15や東部のＴ28土壙７や溝17も、平安時代前半までの土器が中心であり、平安時代前半までの操業後、廃棄されたものが出土したと判断しておきたい。回廊上の複数の炉は、共伴遺物に乏しく明確ではないが、前述のように大きく平安時代後半の操業を想定しておく。したがって、これらの金属製品生産は、寺院の維持のため、寺院が機能している間に施設営繕のために設けられたものである。狭い範囲の調査のため、寺域北部および東部のこれらの工房施設が「院」として区画された空間において行われていたかどうかはわからない。

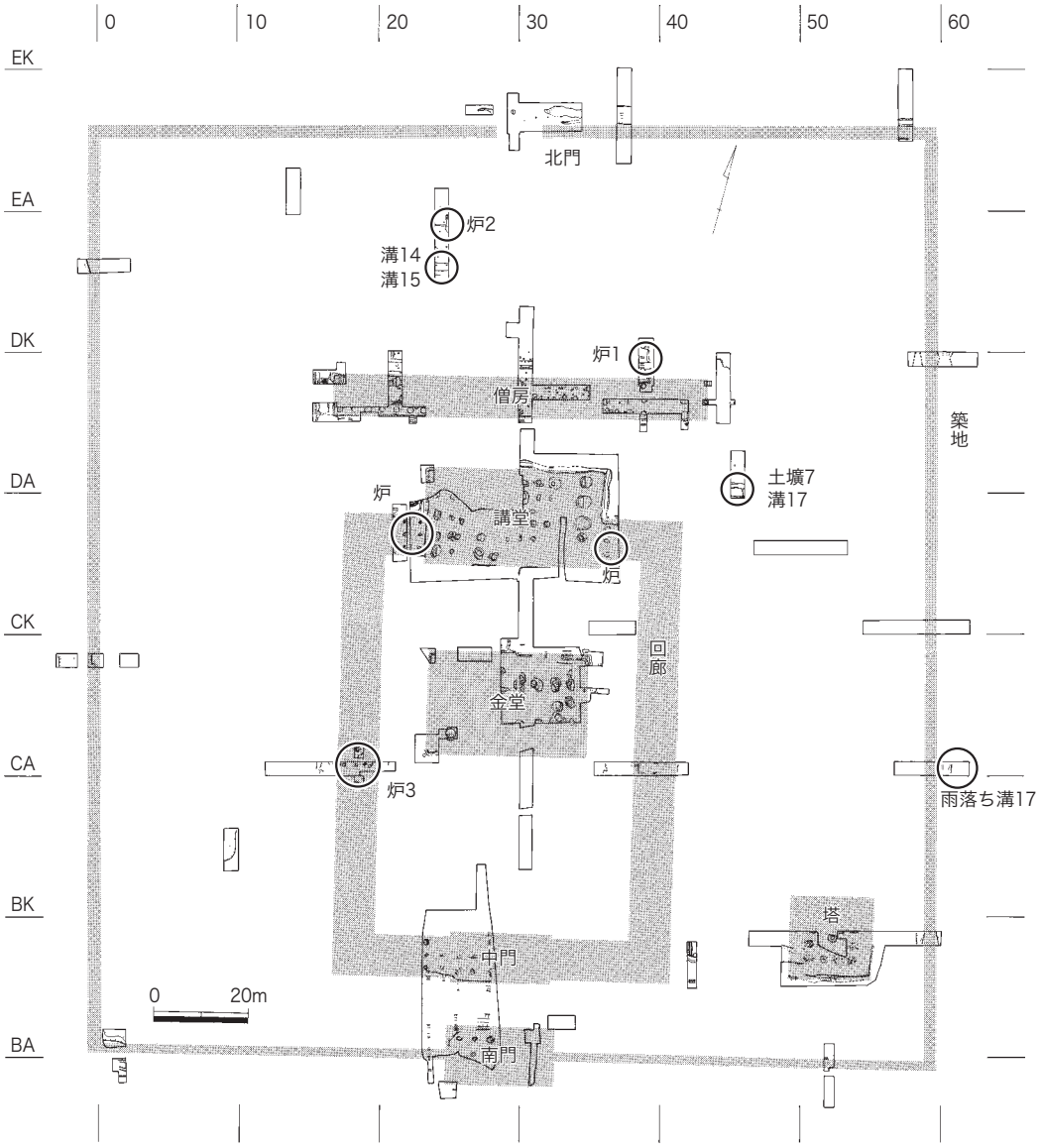


図105　鍛冶・鋳銅関連の遺構（1/1,600）

（２）各地の事例と本遺跡の寺院空間

寺院付属の金属関係工房については、杉山洋によって寺域内から出土した金属生産に関わる遺物や遺構の検出例が取り上げられ、総括的に検討されている（杉山1983）。「国分寺や国分尼寺は、地方における最も大規模で整備された古代寺院として、金属加工をはじめとする各種の工房を付属していた。」と推定し、銅滓や銅滓の付着した鞴羽口、坩堝の出土例が比較的多く見出せることから、寺院においては仏像・仏具のような銅製品の需要が多かったとしている。

また、寺域内での工房の立地について、「金堂・塔など主要堂塔のある寺域中心部に存在するものと、寺域の周辺部に存在するものとがある。」とし、とりわけ寺域中心部の回廊に立地することを「今日の感覚からすると奇異に感じられるが、ある時期に回廊の空間を利用して工房が営まれていたのである。」と述べている。検出例として、法隆寺西院西面回廊や大宰府政庁跡回廊西南隅が挙げられているが、岡山県瀬戸内市服部廃寺においても、回廊上で14基の鍛冶炉群を確認し、銅片や炉底滓に緑青がみられたので、製銅を想定している（杉山他1997）。さらに、鳥取県倉吉市大御堂廃寺では、僧房周辺と西面回廊周辺で炉跡７基を確認している（眞田他2001）。したがって、本遺跡の回廊上で複数の炉を検出したことと共通しており、寺院の中で回廊は金属製品生産の場として利用されていたことになる。

さらに、杉山は金属関係工房が寺域北部および東部に置かれていたことを指摘している。杉山の論文に詳しいので参照いただきたいが、近年の調査においても検出例がある。但馬国分寺跡では、寺域東端の土壙から溶銅が付着した坩堝や鞴羽口が出土し、この周辺に銅製品の製作工房を想定している（前岡2009）。また、奈良県明日香村の川原寺寺域北限の調査において、寺域北辺で冶金関連工房が発見されており、寺域北部に工房が所在する事例として評価される（松村他2004）。本遺跡の寺域北部および東部では、散在的ではあるが、金属製品生産に関わる遺構を検出しているので、規模の大小は別として、これらの事例と同様と判断される。

さて、関東の大規模な国分寺等には「伽藍地」とその外側にある「寺院地」といった空間区分が認められる[(2)]。そして、寺院地の中に寺務を担当した施設や、営繕に関わった施設、畑や花畑などの施設が想定されている[(3)]。

本遺跡の場合、金属製品の生産に関わる遺構・遺物の検出が、基本的に築地塀に囲まれた伽藍地（寺域）内の回廊および北部、東部で見つかっていることと、南門前面に古代山陽道が設けられ、寺域外東には両宮山古墳、北西は傾斜地となる地形条件から「伽藍地＝寺院地」、つまり南門から派生する築地塀で囲まれた寺域内で寺院空間が完結する可能性が考えられる。例えば、広島県東広島市の安芸国分寺跡では、寺域内の僧房の北東に二面庇の大形建物を検出し、墨書土器の出土から国師院の起居を想定している。寺域内、東面回廊外の東側に、国分寺の維持管理施設が集中しており（妹尾2006）、寺域内において各種の維持運営施設の配置を確認した事例である。

一方で、寺域外において調査が行われていないので正確性を欠くが、寺域外の北部および西部は奈良～室町時代の散布地として遺跡地図に掲載されており、備前国分寺に関わる寺院地となる可能性はある。

このたびの調査において金属製品生産に関連する遺構・遺物を比較的多く確認したため、ここで金属製品生産工房を中心として寺域の空間利用の一端について考えてきた。しかしながら、これまで主

要堂塔の配置・規模・構造の解明に重点を置いた調査を行ってきており、金属製品生産に関連する工房の所在を想定する以外に、寺院の維持運営施設については未把握である。主要堂塔以外の維持運営施設や寺域外の調査検討は今後の課題としたい。

註

（１）ここでいう寺域は、南門に発する築地塀で囲繞された区画をいう。

（２）南門から発した築地塀で金堂・講堂などの主要建物を区画した空間を伽藍地、それより外周の区画を寺院地としている。これまでの備前国分寺跡の調査においては「伽藍地＝寺域」と認識して「寺域」を呼称している。

（３）関東古瓦研究会編1998『聖武天皇と国分寺－在地から見た関東国分寺の造営－』雄山閣出版などを参照。

引用・参考文献

杉山一雄他1997『服部廃寺』長船町埋蔵文化財調査報告２　長船町教育委員会

杉山洋1983「寺院付属の金属関係工房」『佛教藝術』148号

眞田廣幸他2001『史跡大御堂廃寺跡発掘調査報告書』倉吉市文化財調査報告107　倉吉市教育委員会

妹尾周三2006「安芸国分寺の伽藍配置と変遷」『月刊考古学ジャーナル』545　㈱ニューサイエンス社

前岡孝彰2009『但馬国府・国分寺館年報』第３号　豊岡市教育委員会　但馬国府・国分寺館

松村恵司他2004『川原寺寺域北限の調査－飛鳥藤原第119-5次発掘調査報告－』独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所

山路直充2001「国分寺における寺院地と伽藍地（上）」『古代』第110号　早稲田大学考古学会

第４節　礎石石材について

本遺跡の堂塔には、様々な遺存状況ではあるが、礎石が良好に残っている。現地表面に露出している塔心礎をはじめ、金堂・講堂には落とし込まれたり、抜き取られたりした礎石、南門や北・西面回廊には原位置を保ったままで礎石を検出している。

本節では、2009年10月13日に実施した岡山大学理学部准教授鈴木茂之氏による石材鑑定（肉眼観察）結果をもとに、礎石に使用された石材について報告する。

表３　礎石に使用された石材

堂塔（調査区）	礎石名	石材	備考
金堂	備国１礎石15	流紋岩	
講堂	備国１礎石24-a	流紋岩	
	備国１礎石29	流紋岩	
	備国１礎石38	流紋岩	
西面回廊（Ｔ33）	礎石14	流紋岩	
	礎石15	流紋岩	
塔	備国１礎石91	花崗岩	心礎
	心礎南東	花崗岩	

表３のとおり、金堂・講堂・西面回廊の礎石は流紋岩を、塔の礎石は花崗岩を用いている。すべての礎石の石材鑑定を行ったわけではなく、塔の心礎南東にある石材は原位置を保つものでなく、塔の礎石でない可能性もある。しかしながら、現状から考えると、塔のみが花崗岩を、塔以外の堂宇では流紋岩を使用していた蓋然性が高い。

塔のみで花崗岩、他の堂宇で流紋岩を礎石に使用していることは、いかなる理由によるものであろうか。

岡山県地質図によると、流紋岩ならびに花崗岩は遺跡付近で採取される石材である。流紋岩は、遺跡の南西にある通称「甲岩」やさらに南西の龍ノ口山北東麓で認められ、花崗岩は遺跡の北方で採取される。河内や大和における塔心礎の石種の報告において、石種と採石地には地域性があることを指摘し、近くで採石できる石材を使用していることを確認している（奥田1995）。また、同じ寺院でも同じ場所から石材が運ばれていない例もあり、「石材が産する近い距離で方々から求めていたことが伺える」と考えている。さらに、四国の国分寺跡の塔心礎の石種の報告においても、奈良時代に造営された国分寺の心礎にはその地域で石材となるような自然石が使用されていることが指摘されている（奥田2006）。

岡山県内の寺院跡の礎石石材を概観すると、塔心礎では岡山市幡多廃寺、笠岡市関戸廃寺において花崗岩を使用しており、他の建物の礎石でも岡山市賞田廃寺、瀬戸内市服部廃寺において花崗岩を使用している。このため、花崗岩は礎石の使用石材としてこの石材を豊富に産出する岡山県南部におい

て一般的であったことがわかる[1]。

以上をふまえると、奥田尚の報告のように、遺跡に比較的近い場所で産出する花崗岩ならびに流紋岩を本遺跡の造営においても区別なく使用したと推定することができる。

一方で、肉眼では流紋岩と花崗岩は含まれる鉱物の差異によって、区別が可能であるといえる。本遺跡と同様に礎石石材が堂塔で異なる例として、関戸廃寺では、前述のとおり塔心礎は花崗岩製であるが、東方建物の礎石は流紋岩製である。花崗岩製の塔心礎については、「当廃寺では珍しい」と述べている。塔心礎に関しては心柱を支え、元来仏舎利の安置場所であるため、特別な配慮がなされたことも想定されよう。

したがって、能動、受動に関わらず塔のみ花崗岩が使用された可能性は十分考えられる。これまで、塔の軒瓦は古い様相と新しい様相が混在し、また、塔基壇下には瓦を包含する備国１溝19が設けられており、その竣工が遅れた可能性が指摘されている。礎石石材においても、塔の固有性が認められることは興味深く、造営順序をめぐって石材が変化した可能性が想起される。

現状では、塔のみが花崗岩を、塔以外の堂宇では流紋岩を使用していた原因を確定することは困難であった。単に近郊で採れる両石種の石材を変えただけか、もしくは造営順序の違いによって生じたものであろうか。礎石石材の採取は、堂塔の造営の基礎となるもので、寺院造営手法や建築資材の調達・流通を探る一つの手がかりになるものである[2]。

註

（１）堂塔に使用された石材には基壇外装や根石、階段などもあるが、本節では礎石石材のみを対象としている。なお、本遺跡ではこれまで石材による基壇外装は確認されていない。

（２）香川県火山産の白色凝灰岩は、賞田廃寺の東塔と西塔の壇上積基壇外装に使用されており、その他畿内の寺院にも化粧石として重用されて流通していた（遠藤2005）。このように特定石材の流通が確認されているものもある。

引用・参考文献

安東康宏・岩崎仁司1997『関戸廃寺』笠岡市教育委員会

池田浩他1997『服部廃寺』長船町埋蔵文化財調査報告２　長船町教育委員会

遠藤亮2005「古代「壇上積基壇」に使われた讃岐の凝灰岩」『史跡賞田廃寺跡』岡山市教育委員会

扇崎由他2005『史跡賞田廃寺跡』岡山市教育委員会

奥田尚1995「塔心礎の石種―古代河内・大和の寺院を中心として―」『古代学研究』131古代学研究会

奥田尚2006「四国の国分寺跡の心礎の石種」『古代学研究』172古代学研究会

出宮徳尚1975『幡多廃寺発掘調査報告』岡山市教育委員会

表４－１　瓦類観察表

章	図番号	掲載番号	器種	出土調査区	遺構	計測値（cm）			調整	型式・分類	特徴	備考
						長さ	幅	厚さ				
3	52	1	丸瓦	T32	瓦積基壇	(20.7)	(11.4)	1.8	凸：ナデ　凹：布目			外装Ａ
		2				(18.8)	(10.0)	1.4	凸：縄目のちナデ 凹：布目			玉縁部欠損、外装Ａ
		3				(12.9)	(11.5)	2.0	凸：縄目のちナデ 凹：布目			外装Ａ
		4				(13.7)	(8.5)	2.0	凸：縄目のちナデ 凹：布目、糸切り痕			外装Ａ
		5				(19.3)	(8.3)	1.4	凸：縄目のちナデ 凹：布目、糸切り痕			外装Ａ
		6				(18.0)	(8.8)	1.8	凸：縄目のちナデ 凹：布目			外装Ａ
	53	7	丸瓦	T32	瓦積基壇	(14.9)	(9.9)	2.7	凸：ナデ 凹：布目、糸切り痕			玉縁部欠損、外装Ａ
		8				(16.0)	(7.8)	1.7	凸：ナデ　凹：布目			玉縁部欠損、外装Ａ
		9				(14.4)	(10.7)	1.3	凸：縄目のちナデ 凹：布目			外装Ａ
	54	10	平瓦	T32	瓦積基壇	(14.4)	(17.3)	2.0	凸：縄目 凹：糸切り痕			外装Ａ
		11				(13.1)	(14.0)	2.0	凸：縄目 凹：布目のちナデ			外装Ａ
		12				(13.2)	(14.8)	2.1	凸：縄目 凹：布目のちナデ			外装Ａ
		13				(14.9)	(12.8)	2.3	凸：縄目　凹：ナデ			端部なし、外装Ａ
		14				(11.7)	(14.9)	2.6	凸:縄目　凹:布目のちナデ、糸切り痕			外装Ａ
		15				(13.6)	(7.7)	2.7	凸：縄目　凹：布目			外装Ａ
	55	16	平瓦	T32	瓦積基壇	(15.4)	(14.7)	2.5	凸：縄目　凹：布目			外装Ａ
		17				(13.4)	(19.1)	2.2	凸：縄目　凹：布目			外装Ａ
		18				(13.1)	(14.1)	2.0	凸：縄目　凹：布目			外装Ａ
		19				(19.0)	(13.8)	2.3	凸：縄目　凹：布目			外装Ａ
		20				(14.3)	(14.2)	2.3	凸：縄目 凹：布目　部分的にナデ			外装Ａ
4	60	21	軒丸瓦	T28	－				瓦当裏面下部：ケズリのちナデ	1式	笵型痕跡	
		22		T21	溝8				瓦当裏面下部：ナデ	1式	笵型痕跡、円形圧痕	
		23		T14	－				瓦当裏面上部：指頭押圧	1式	円形圧痕	
		24		T32	－					1式		
		25		T33A	－					1式		
		26		T25	－					1式	笵型痕跡	
		27		T1A	溝１				瓦当裏面：ナデ	1式		
		28		T31	－					1式		
		29			－					1式		
		30		T27	－					1式		
	61	31	軒丸瓦	T31	溝21					1式	軸に平行線のち左下がり斜線	刻み凸：有 凹：無
		32		T21	－						軸に平行線のち左下がり斜線	刻み凸：有 凹：無
		33		T32	－				丸瓦部凹：布目		格子	刻み凸：有 凹：無
		34		T31B	溝23				丸瓦部凹：布目		右下がりのち左下がり斜線	刻み凸：有 凹：無
		35		T21	溝8						左下がりのち右下がり斜線	刻み凸：有 凹：有
		36		T26	－				平行刻み		やや斜めの直線、刻みが深い	刻み凸：有 凹：有
		37		T32	－				丸瓦部凹：布目		右下がりのち左下がり斜線	刻み凸：有 凹：無
		38		T32	－							上部に凸刻み転写
	62	39	軒丸瓦	T14	－					6式	蓮弁が圏線と接する 間弁三角形	
		40		T26	－					10式	周縁低く狭い 間弁三角形	
		41		T20	－					21式		
		42		T22	礎石3					24式		
		43		T32	－					29式		

表４－２　瓦類観察表

章	図番号	掲載番号	器種	出土調査区	遺構	計測値（cm）			調整	型式・分類	特徴	備考
						長さ	幅	厚さ				
4	64	44	軒平瓦	T32	瓦積基壇				凸：縄目　凹：布目	1B 式		外装 B
		45		T32	－				凸：縄目　凹：布目	1B 式	笵の木目多く残る	
	65	46	軒平瓦	T32	溝26				凸：縄目　凹：布目	1B 式	笵の木目残る	
		47			溝24					1B 式		
		48								1B 式		
		49			瓦積基壇				凸：縄目 凹：布目、糸切り痕	1B 式		外装 B
		50		T33B	－				凸：縄目　凹：布目	1B 式		
	66	51	軒平瓦	T22	礎石3					2B 式	瓦当面に平行の条線入る	
		52		T32	－					4式		
		53		T26	－				凸：糸切り痕	4式	周縁切り取り	
		54			－					5式		
		55			溝13					5式		
		56		T33B	－				凸：縄目　凹：布目	新規		
		57		T26	溝12				凸：縄目		赤色顔料付着	
	67	58	丸瓦	T34	溝29	35.4	14.0 [15.2]		凸：縄目のちヨコナデ消し 凹：布目	玉縁式		完形
		59		T1	溝1	(21.6)	13.5		凸：縄目のちヨコナデ消し 凹：布目	玉縁式		
	68	60	丸瓦	T22	－	(20.0)	14.4		凸：縄目のちヨコナデ消し 凹：布目、糸切り痕	玉縁式		
		61		T33B	－	(15.5)	12.7		凸：縄目のちヨコナデ消し 凹：布目	玉縁式		
		62		T27	溝14	(20.4)	－	－	凸：縄目のちヨコナデ消し 凹：布目	玉縁式		横線あり
		63		T33A	－	(29.9)	－	－	凸：縄目のちヨコナデ消し 凹：布目	玉縁式		
	69	64	丸瓦	T33A	－	(23.7)	－	－	凸：縄目のちヨコナデ消し 凹：布目、糸切り痕	玉縁式		
		65		T24	－	(10.7)	－	－	凸：縄目のちヨコナデ消し 凹：布目、糸切り痕	玉縁式		
		66		T22	－	(5.6)	－	－	凸：ナデ　凹：糸切り痕	玉縁式		玉縁部と丸瓦部の段差小さい
		67		T24	－	(13.8)	－	－	凸：縄目のちナデ消し			中世
	70	68	平瓦	T33A	－	36.9	26.8 [29.7]		凸:縄目　広狭端二分で叩き、７回叩き 凹：布目、糸切り痕	縄目		完形
		69			－	37.4	(25.4)		凸：縄目　広狭端二分で叩き 凹：布目、糸切り痕	縄目		
	71	70	平瓦	T27	溝14	34.6	24.2		凸：縄目 凹：布目、糸切り痕	縄目	広端部に条線	
		71		T32	溝25	37.5	[27.2]		凸：縄目　７回程叩き 凹：布目、糸切り痕	縄目		
	72	72	平瓦	T33A	－	35.4	(24.0)		凸：縄目　６～７回叩き 凹：布目、糸切り痕	縄目		
		73			－	37.4	(17.1)		凸：縄目 凹：布目、糸切り痕	縄目		
	73	74	平瓦	T33B	－	(22.9)	25.9		凸：縄目 凹：布目、糸切り痕	縄目		
		75			－	37.8	(16.2)		凸：縄目　広狭端二分で叩き 凹：布目、糸切り痕	縄目		
	74	76	平瓦	T28	－	(12.5)	(10.7)		凸：縦方向格子　縦1.5～1.7 横0.7 凹：布目のちナデ消し	格子 A		
		77			－	(9.8)	(14.2)		凸：縦方向格子　縦1.5～1.7 横0.7　凹：布目	格子A		
		78		T22	礎石3	(9.3)	(8.0)		凸：縦方向格子　縦1.2横0.6 凹：布目	格子B		
		79		T32	－	(10.1)	(11.8)		凸：一辺0.9cm 方形格子 凹：布目	格子C		
		80		T32	溝25	(10.7)	(18.2)		凸：横方向格子　横1.2～1.5 縦1.0 凹：布目、糸切り痕	格子D		
		81		T33A	－	(20.6)	(15.8)		凸：横方向格子　横1.2縦1.0 凹：布目、糸切り痕	格子D		

表４－３　瓦類観察表

章	図番号	掲載番号	器種	出土調査区	遺構	計測値（cm）			調整	型式・分類	特徴	備考
						長さ	幅	厚さ				
4	75	82	平瓦	T33A	－	(10.1)	(18.3)		凸：縦方向格子　縦2.5横1.5 凹：布目のちナデ	格子Ｅ		
		83			－	(10.9)	(9.2)		凸：縦方向格子　縦2.5横1.5 凹：布目	格子Ｅ		
		84		T32	溝26	(22.8)	(13.7)		凸：横方向格子　横2.0縦1.5 凹：布目、糸切り痕	格子Ｆ		
		85		T25	礎石6	(14.8)	(12.8)		凸：横方向格子　横2.0～2.5 凹：布目	格子Ｆ		
		86		T28	－	(13.8)	(10.4)		凸：横方向格子　横2.5 凹：布目、糸切り痕	格子Ｆ		
		87		T32	－	(15.0)	(12.6)		凸：縦方向格子　縦5.0程度 凹：不明	格子Ｇ		
	76	88	平瓦	T33B	－	(22.6)	23.4		凸：横方向格子　凹：不明	格子Ｈ		
		89		T33	－	(10.4)	(8.5)		凸：横方向格子　横1.0縦0.4～0.5 凹：布目のちナデ消し	格子Ｉ		
		90		T33B	－	(9.0)	(8.5)		凸：糸切り痕　凹：糸切り痕	未調整		
		91		T28	－	(11.9)	(8.0)		凸：縦方向ナデ 凹：横方向ナデ	ナデ		中世
	77	92	隅木蓋瓦	T32	－	(20.2)	(13.6)	2.4	凸：無文叩き　凹：布目		三角形切り込み	
		93			瓦積基壇	(13.8)	(10.4)	2.4	凹：布目		三角形切り込み	外装Ｂ
		94				(10.6)	(11.3)	2.6	凹：布目			外装Ｂ
		95	隅切瓦	T32	瓦積基壇	(16.0)	(13.0)	2.0	凸：縄目叩き 凹：布目のちナデ		端面に植物等の条線	外装Ｂ
	78	96	鬼瓦	T33B	－	(9.4)	(11.3)	3.2				
	79	97	平瓦	T32	瓦積基壇	33.6	(17.9)	2.7	凸:縄目　凹:布目のちナデ、指頭、糸切り痕		文字「上」	外装Ｂ
		98		T22	－				凸：縄目 凹：布目のちナデ		文字「｜」	
		99			－				凸：縄目 凹：布目のちナデ		文字「｜」	
		100			礎石3				凸：縄目 凹：布目のちナデ		文字「｜」	
		101			－				凸：縄目 凹：布目のちナデ		文字「一」	
		102		T21	－				凸：縄目 凹：布目のちナデ		文字「八」	
		103		T26	－				凸：縄目　凹：布目		文字「｜」？	
	80	104	塼	T33A	－	27.5	22.1	5.5			色調：にぶい黄橙	
		105			－	27.6	(21.1)	5.1			色調：灰黄	
		106		T32	溝24	(22.6)	(10.7)	5.0			色調：橙	
		107		T33A	－	(12.2)	(10.3)	5.0			色調：浅黄	
		108		T32	瓦積基壇	(15.5)	(11.3)	5.8			色調：灰白	外装Ｂ

※丸瓦幅は筒部玉縁側、［　］内数値は筒部下端で計測
※平瓦幅は狭端部、［　］内数値は広端部で計測

表５－１　土器観察表

章	図番号	掲載番号	出土調査区	遺構・土層名	種別	器種	計測値（cm） 口径	底径	器高	形態・手法の特徴など	備考
4	81	109	T1A	溝1	須恵器	杯Ｂ	19.8	13.0	5.7	高台：逆台形	径高指数28.8
		110	T14	土壙1	土師器	甕	24.8		(22.4)	胴部外面：ハケメ 胴部内面下部：指オサエ	
	82	111	T20	溝6	須恵器	杯Ｂ蓋	14.0		(1.5)		
		112				杯Ｂ蓋	14.4		(1.0)		
		113				杯Ｂ蓋	16.4		(1.6)		
		114				杯Ｂ蓋					
		115				杯Ｂ蓋					
		116				杯Ｂ蓋					
		117				杯Ｂ蓋					
		118				杯Ｂ		9.6	(2.8)	高台端面：凹形	
		119				杯Ｂ	14.4	10.5	3.6	高台：長方形	径高指数25.0
		120				杯Ｂ	14.0	10.0	4.0		白色 径高指数28.6
		121				杯Ｂ		12.4	(4.5)	高台：長方形 or 弱い逆台形 高台端面：凹形	
		122				杯Ｂ	16.0	11.4	6.1	高台：長方形	
		123				盤			5.8	口縁端部：ほぼ平坦	把手欠損
		124				盤			(3.4)		白色
		125			土師器	甕				胴部外面：ハケメ（縦方向） 胴部内面：下部指オサエ 口縁端部：上方に拡張	
		126				甕				胴部外面：ハケメ（縦方向） 口縁端部：外面下方へ拡張	
		127				甕				口縁部：内面にヨコハケ 口縁端部：上方に拡張	
		128				甕				口縁部内面：ヨコハケ 口縁端部：上方に拡張	
		129				杯					
	83	130	T20	溝7	須恵器	杯Ｂ蓋	(16.4)		(1.7)		
		131				杯Ｂ蓋	18.4		(2.2)		
		132				杯Ｂ	15.6	(11.4)	4.4	高台：長方形	径高指数28.2
		133				杯Ｂ	15.0	10.6	4.4	内面中央：「×」のヘラガキ 高台：逆台形～長方形	径高指数29.3
		134				皿Ｂ			(1.9)		白色
		135				杯？					
		136				壺？			(3.7)		
		137				壺			(11.0)		
		138		－	須恵器	杯Ｂ蓋	14.6		1.9	つまみ：擬宝珠形で中心突出　径2.3	
		139		－		杯Ｂ蓋			(3.7)	つまみ：円形碁石状　径2.2	
		140		－		杯Ｂ蓋			(1.8)	つまみ：擬宝珠形で中心突出　径2.6	
		141		－		杯Ａ		10.0	(2.8)		白色
		142		－		皿		(22.0)	2.0	口縁端部：内面に段	
		143		－		皿Ｂ			(1.9)		白色
		144		－		蓋？			(1.6)		
		145		－	土師器	甕				口縁端部：外面下方へ拡張	
	84	146	T21	溝8	土師器	杯Ａ	10.6	8.3	2.6		
		147			吉備系土師質土器	椀		5.0	(2.6)		
		148				椀			(1.8)		
		149				椀			(3.1)		
		150		－	土師器	皿	8.2	6.1	1.3		
		151		－		椀			(2.4)	吉備系土師質土器椀？	
		152		－	吉備系土師質土器	椀			(1.9)		
		153		－		椀					
		154		－		椀					
		155		－	須恵質土器	椀	14.8	6.0	5.1	底部：糸切り　重ね焼痕跡	
		156		－		椀					
		157		－		椀				底部：糸切り	
		158		－	須恵器	平瓶				一部自然釉付着	
	85	159	T23	－	須恵器	杯Ｂ蓋	16.0				
		160		－		杯Ｂ		10.6	(2.2)		
		161		－		杯？			(4.3)		
	86	162	T26	－	土師器	椀	12.4	6.6	4.5		
		163		礎石10		皿	9.2	6.4	1.6		
		164		溝12		椀 or 杯			(4.1)		
		165		土壙4	土師器	杯Ａ			(3.1)		
		166				杯Ａ			(2.7)		
		167				皿	8.3	7.6	1.1	底部：ヘラ切り	
		168		－	土師器	椀			(4.6)		
		169		－		椀		7.6	(2.0)		

表５－２　土器観察表

章	図番号	掲載番号	出土調査区	遺構・土層名	種別	器種	計測値（cm）			形態・手法の特徴など	備考
							口径	底径	器高		
4	86	170	T26	－	土師器	椀		8.0	(2.4)		
		171		－		椀		7.4	(1.4)		
		172		－		皿	8.4		1.7	底部：板状工具痕	
		173		－		皿	8.6	6.8	(1.5)		
		174		－		皿	9.2	7.3	1.0		
		175		－		杯	10.4		(2.8)		
		176		－		杯 A			2.4		
		177		－		甕			(3.5)	口縁部外面に煤付着 胴部外面：ハケメ	
		178		－	須恵器	杯 B 蓋	15.4		(2.0)		
		179		－		杯 B		9.0	(1.2)	高台：長方形	
		180		－		杯 A ？		8.6	(0.9)		
	87	181	T27	溝14	須恵器	杯 B 蓋			(2.0)	つまみ：中央が突出　径2.4	
		182				杯 B 蓋			(1.3)		
		183				杯 B 蓋	15.2		(1.4)		
		184				杯 B 蓋			(1.2)		
		185				杯 B 蓋			(1.7)		
		186				杯 B			(2.0)		
		187				皿			(1.3)	口縁端部：やや外側に拡張	
		188				杯 A	13.2	8.2	4.1	重ね焼痕跡	
		189				杯			3.0		
		190				杯 B		7.8	(4.5)		
		191				杯 B		8.9	(7.3)		
		192				甕				胴部内面：同心円文 胴部外面：格子叩き 口縁端部：内側に拡張	
		193				甕				胴部内面：同心円文 胴部外面：格子叩き	
		194				甕				内面：同心円文 外面：格子叩き	
	88	195	T27	溝14	土師器	杯 A	12.2	7.2	3.1	底部：周縁ヘラ切り	
		196				杯 A	12.2	8.0	3.2		
		197				杯 A	11.6	7.2	3.2		
		198				杯 A			(2.6)	外面：丹塗り	
		199				皿	11.4	9.9	1.1	内外面：丹塗り　口縁外反	
		200				皿	13.3	10.4	1.6	内外面：丹塗り　口縁外湾 底部：指頭押圧	
		201				皿	14.8		1.8	内外面：丹塗り　口縁外湾	
		202				皿	13.6	11.4	1.5	内外面：丹塗り　口縁やや外反	
		203				皿	15.6	13.8	1.5	底～体部：ヘラケズリ	
		204				椀	16.8	8.0	6.4		
		205				椀		8.0	(3.7)	外面：丹塗り	
		206				椀		8.0	(3.4)		
		207				？				口縁「く」の字状に屈曲	
		208				壺？	20.6		(2.9)	口縁端部：やや内外方へ拡張 口縁に煤付着	
		209				甕			(3.9)	胴部外面：タテハケ	
		210				甕	27.6		(7.8)	口縁内面：ヨコハケ 内面胴部：ナデ　外面：タテハケ	
		211				甕			(10.7)	内面：ヨコハケ・ナデ 胴部外面：タテハケ	
		212				甕			(5.0)	内面：ヨコハケ 胴部外面：タテハケ	
	89	213	T27	溝15	須恵器	杯 B 蓋			(0.9)		
		214				杯 B 蓋			(1.4)		
		215				托状椀					
		216				甕				内面：同心円文　外面：平行叩き	
		217			土師器	椀？					
		218		－	須恵器	杯 B 蓋			(1.4)		
		219		－		杯 B 蓋			(0.8)	つまみ：円形碁石状　径2.0	
	89	220	T27	－	須恵器	杯 B			(1.0)		
		221		－		杯 B		8.6	(2.3)		
		222		－		杯 B?			(1.2)		
		223		－		皿 B?			(1.4)		
		224		－	土師器	椀？			(2.8)	高台端部が内側へ折れ返る	
		225		－		皿	9.8		1.7	口縁やや外反　226と同一個体か	
		226		－		皿	10.4		1.7	口縁やや外反　225と同一個体か	
		227		柱穴列5 P－19		皿	7.6		1.7		
		228		－	吉備系土師質土器	椀			(2.7)		

表５－３　土器観察表

章	図番号	掲載番号	出土調査区	遺構・土層名	種別	器種	計測値（cm） 口径	底径	器高	形態・手法の特徴など	備考
4	89	229	T27	－	土師器	甕			(1.8)		
	90	230	T28	溝16	土師器	杯 A	12.4	8.6	2.7		
		231				椀			(2.3)		
		232		溝17	土師器	皿	11.6	8.6	1.4	口縁部：やや外反　内外面：丹塗り	
		233				皿	16.4	13.8	2.0	口縁部：やや外反	
		234			須恵器	杯 B 蓋	12.8		1.4	つまみ：なし	
		235				杯 B			(1.0)	高台：長方形	
		236				杯			(2.8)	重ね焼痕跡	
		237		土壙7	須恵器	杯 A	10.8	7.0	3.2		径高指数29.6
		238		－	須恵器	杯 B 蓋			(0.9)		
		239		－		杯 B 蓋			(0.7)		
		240		－		杯 B 蓋			(0.9)		
		241		－		杯 B 蓋			(1.7)		
		242		－		皿？			(1.6)		
		243		－		皿？			(2.3)	口縁端部：平坦	
		244		－		杯 B			(2.1)	体部と底部の屈曲部に高台がつく 高台：逆台形	
		245		－		壺？			(3.2)		
		246		－		平瓶			(1.2)	平瓶のふさぎ口	
		247		－	土師器	甕			(5.4)	内面：ヨコハケ　外面：タテハケ 口縁端部：内外に拡張	
		248		－	土師器	鍋			(9.9)		
		249		－	土師器	甕？				内外面ハケメ	
		250	T31	礎石11	須恵器	杯 A	13.0		3.5		
		251		溝18	須恵器	杯 B 蓋			(1.4)	つまみ：中央が突出　径2.4	
		252				杯 B 蓋			(1.2)		
		253		－	須恵器	壺			(7.7)	肩部に台形の突帯貼付け	
		254	T31B	溝23	須恵器	平瓶				木の葉文	把手部
	91	255	T32	礎石13	須恵器	杯 B			(1.2)		
		256		溝24	須恵器	壺			(2.7)		
		257			土師器	杯 A			(2.0)		
		258		溝25	須恵器	杯 B 蓋			(1.0)		
		259				壺		9.6	(1.3)	貼付け高台 高台内面端部が拡張	
		260			土師器	杯？		8.4	(0.9)	底部：ヘラ切り	
		261				杯 B 蓋			(1.2)		
		262		土壙12	土師器	杯 A		10.0	(2.0)		
		263				杯 A	12.6	8.4	3.2	底部：ヘラ切り	
		264		－	土師器	杯 A	13.0	8.1	2.7	外面：丹塗り	
		265		－	須恵質土器	椀	15.4		(4.4)		
		266		－	須恵器	杯 B 蓋	16.6		(1.5)		
		267		－		杯 B			(2.2)		
		268		－		杯 B 蓋			(1.1)		
		269		－		甕			(6.2)	肩部内面：同心円文 口縁端部が内側へ拡張	
		270		－	土師器	カマド			(8.1)	タテハケ	
		271	T33A	－	土師器	杯 A	13.2	7.6	2.9		
		272		－		杯			(1.3)		
		273	T34	溝27	須恵器	杯 B 蓋			(1.2)	つまみ：扁平　径1.9	
		274			土師器	杯 B 蓋			(1.7)	つまみ：中心突出　径2.6	
		275				杯 A	13.6	7.0	3.5		
		276		溝28	須恵器	杯 B 蓋			(1.1)		
		277		溝29	土師器	椀		8.0	(1.8)		
		278			須恵器	壺？			(1.0)	高杯の脚か蓋の可能性も？	
		279				皿			(2.5)	高台剥落している可能性あり	
		280		溝30	須恵器	杯 B 蓋			(2.3)	つまみ：中央が突出　径3.0	
		281				杯 B 蓋			(1.1)		
		282				壺		7.0	(1.6)	外面自然釉　高台底面使用による磨耗	
		283		－	須恵器	壺			(4.7)		
	92	284	T21	－	緑釉陶器	椀 or 皿			(1.4)	高台剥落　素地軟陶	長門産の可能性
		285		－		椀			(1.4)	素地硬陶	京都周辺産
		286	T26	溝11	緑釉陶器	皿	15.0	7.0	2.9	素地軟陶　輪高台	京都周辺産
		287		－		椀		5.0	(1.5)	素地硬陶　有段輪高台	近江産
		288	T31	－	緑釉陶器	椀 or 皿			(2.7)	素地硬陶　内面線刻	京都周辺産
		289	T21	－	緑釉陶器	皿 or 椀			(1.8)		近江産
		290		－		皿			(1.2)	素地硬陶	京都周辺産
		291	T34	溝30	緑釉陶器	手付瓶 or 平瓶				素地軟陶	京都 or 東海
		292	T21	－	灰釉陶器	椀					
		293	T26	－	灰釉陶器	段皿			(1.3)	高台剥離　内面のみ施釉	
		294	T28	－	灰釉陶器	段皿		8.2	(2.1)	内面のみ施釉	黒笹14型式

表５－４　土器観察表

章	図番号	掲載番号	出土調査区	遺構・土層名	種別	器種	計測値（cm）			形態・手法の特徴など	備考
							口径	底径	器高		
4	93	295	T27	柱穴列5 P－19	白磁	碗			(4.7)	口縁部：玉縁	Ⅳ類
		296		－	白磁	碗			(3.0)	口縁部：玉縁	Ⅳ類
		297	T21	－	白磁	碗			(1.5)	口縁部：玉縁	
		298		－		碗			(1.7)	口縁部：玉縁	Ⅱ類
		299	T20	－	白磁	碗				純白	華北系
		300	T30	－	青磁	碗			(1.7)		龍泉窯系
		301	T31	－	青磁	碗			(2.3)	鎬蓮弁文	龍泉窯系
		302	T32	－	青磁	碗			(3.2)	蓮弁文	龍泉窯系
	94	303	T20	－	須恵器	擂鉢				オロシメあり 口縁部内側：内方へ拡張	
		304	T28	－	備前焼	擂鉢			(5.2)		
		305	T30	－	瓦質土器	火鉢			(3.3)		
		306	T32	－	備前焼	灯明皿	8.6	6.6	1.0		
		307	T20	溝7	染付	碗			(2.7)		
		308	T28	－		碗？			(1.7)		
	95	309	T26	溝12	陶硯	風字硯				脚部あり	
		310		－	須恵器	転用硯（蓋）				隅丸方形に整形	
		311	T27	溝14	須恵器	転用硯（蓋）					
		312		溝15	須恵器	転用硯（蓋）					
		313	T28	－	須恵器	転用硯（蓋）					
		314	T32	－	須恵器	転用硯（甕）					
		315	T34	礎石16	須恵器	転用硯（甕）					
	96	316	T20	溝6	弥生土器	高杯			(2.7)		
		317	T14	溝4	弥生土器	器台？			(2.6)		
		318	T32	－	弥生土器	壺			(2.3)		

表６　鍛冶・鋳造関連遺物観察表

章	図番号	掲載番号	出土調査区	遺構名	器種	計測値(cm)			備考
						最大長	最大幅	最大厚	
4	97	319	T27	溝14	羽口	(4.1)	(3.7)	2.5	
		320	T28	－	羽口	(4.7)	(4.3)	2.7	
		321		－	羽口	(5.0)	(3.7)	2.4	
		322	T27	溝14	鍛冶滓	(7.7)	(5.1)	3.4	
		323			鍛冶滓	(2.9)	(4.2)	0.8	
		324		溝15	鍛冶滓	(3.8)	(4.3)	1.5	
		325		－	銅滴	1.9	1.2	1.0	
		326		炉2	炉壁	(4.2)	(4.0)	2.2	
		327			炉壁	(6.2)	(7.7)	5.0	
		328	T28	土壙7	銅滓？	(4.1)	(5.8)	1.8	
		329			銅滓？	(5.0)	(7.0)	2.6	
		330		溝17	坩堝				外径10.8　内径9.0

表７　金属製品観察表

章	図番号	掲載番号	出土調査区	遺構名	器種	計測値(cm)			重量（g）	材質	備考
						最大長	最大幅	最大厚			
4	98	331	T21	－	不明	(5.4)	(4.8)	1.4	99.95	銅	片面鍍金
		332		溝8	不明	(8.4)	(5.4)	0.4	62.23	銅	板状
		333	T25	－	不明	(3.3)	3.5		1.83	銅	リング状
		334	T26	土壙4	鉄釘	(12.0)	0.9	0.7	40.41	鉄	
		335	T21	－	鉄釘	(9.4)	1.1	1.1	39.09	鉄	屈曲
		336		－	不明	(6.1)	5.3	0.7	88.38	鉄	片刃

表８　石製品観察表

章	図番号	掲載番号	出土調査区	遺構名	器種	計測値(cm)			材質	備考
						最大長	最大幅	最大厚		
4	99	337	T27	－	砥石	(9.0)	(3.9)	5.1	流紋岩	
		338	T34	溝27	砥石	5.1	1.2	1.0	流紋岩	
		339	T26	礎石9	不明	1.2	1.1	0.3	泥岩	碁石状
		340	T34	溝29	不明	1.0	0.8	0.4	チャート	碁石状

表９　新旧遺構名称対照表

調査区	遺構名	旧遺構名	種別
T20	礎石1	№4抜き跡	北門
T21	礎石2	根石1	僧房
T22	礎石3	抜取穴	金堂廂側柱
T25	礎石4	№7抜き跡	僧房
T25	礎石5	№4抜き跡	僧房
T25	礎石6	№3抜き跡	僧房
T25	礎石7	№2抜き跡	僧房
T25	礎石8	№9抜き跡	僧房
T26	礎石9	抜き跡	僧房
T26	礎石10	№1土壙	僧房
T31	礎石11	№5抜き跡	僧房
T32	礎石12	№1抜き跡	僧房
T32	礎石13	№4抜き跡	僧房
T33	礎石14	A 礎石	西面回廊
T33	礎石15	B 礎石	西面回廊
T34	礎石16	№4抜き跡	僧房
T32	瓦積基壇	№5瓦積基壇	僧房
T1	溝1	№1溝	
T14	溝2	№5溝	
T14	溝3	№1溝	
T14	溝4	№2溝	
T14	溝5	№3溝	
T20	溝6	№3溝	北面築地外溝
T20	溝7	№2溝	
T21	溝8	№4溝	僧房東雨落ち溝
T23	溝9	№1溝	
T25	溝10	№1溝	
T26	溝11	№3雨落ち溝	僧房北雨落ち溝？
T26	溝12	№2溝	僧房北雨落ち溝？
T26	溝13	№4溝	
T27	溝14	№2溝	
T27	溝15	№3溝	
T28	溝16	№1溝	
T28	溝17	№2落ち	
T31	溝18	№1溝	僧房北雨落ち溝
T31	溝19	№2溝	
T31	溝20	№3溝	
T31	溝21	№10溝	
T31	溝22		
T31	溝23	T31B	僧房南雨落ち溝
T32	溝24	僧房南雨落ち溝	僧房南雨落ち溝

調査区	遺構名	旧遺構名	種別
T32	溝25	№2溝	僧房西雨落ち溝
T32	溝26	№3溝	
T34	溝27	№2溝	僧房西雨落ち溝
T34	溝28	№5溝	僧房北雨落ち溝
T34	溝29	№3溝	
T34	溝30	№1溝	
T14	土壙1	№4土壙	
T25	土壙2	№5土壙	
T25	土壙3	№6土壙	
T26	土壙4	№5土壙	
T26	土壙5	№6土壙	
T26	土壙6	№7土壙	
T28	土壙7	№3土壙	
T31	土壙8	№11土壙	
T31	土壙9	№6炉	
T31	土壙10	№7炉	
T31	土壙11	№9炉	
T32	土壙12	基壇南西落ち	
T26	炉1	P－1・P－2	
T27	炉2	№4土壙	
T33	炉3	B 焼土壙	
T20	P－1	P－1	
T20	P－2	P－2	
T20	P－3	P－3	
T20	P－4	P－4	
T26	P－5	P－3	
T26	P－6	P－4西	
T26	P－7	P－4中	
T26	P－8	P－4東	
T27	柱穴列1 P－9	P－1	
T27	柱穴列1 P－10	P－2	
T27	柱穴列2 P－11	P－3	
T27	柱穴列2 P－12	P－4	
T27	柱穴列3 P－13	P－11	
T27	柱穴列3 P－14	P－13	
T27	柱穴列3 P－15	P－15	
T27	柱穴列4 P－16	P－10	
T27	柱穴列4 P－17	P－12	
T27	柱穴列4 P－18	P－14	
T27	柱穴列5 P－19	P－7	
T27	柱穴列5 P－20	P－8	

１　遺跡遠景（北が上）（白破線は寺域）

２　遺跡全景（南西から）

図版２

１　Ｔ１溝１（南西から）

２　Ｔ14全景（南から）

３　Ｔ14土壙１土器出土状況（西から）

４　Ｔ14溝２断面（東から）

１　Ｔ20全景（東から）

２　Ｔ20溝６（南東から）

３　Ｔ20北門礎石１（西から）

４　Ｔ20溝６断面（北西から）

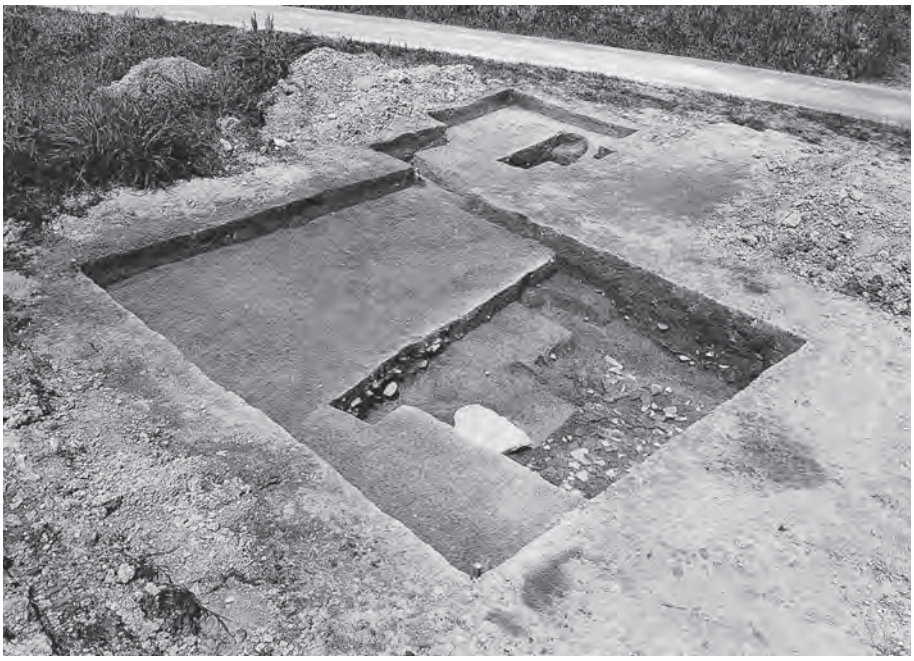
５　Ｔ23全景（南西から）

図版４

１　Ｔ21全景（南東から）

２　Ｔ21溝８断面（南東から）

３　Ｔ21礎石２（南から）



１　Ｔ22全景（南西から）

２　Ｔ22金堂基壇南西隅
（南から）

３　Ｔ22金堂礎石３
（南から）

図版６

１　Ｔ25全景（南東から）

２　Ｔ25全景（東から）

３　Ｔ25僧房礎石５（南東から）

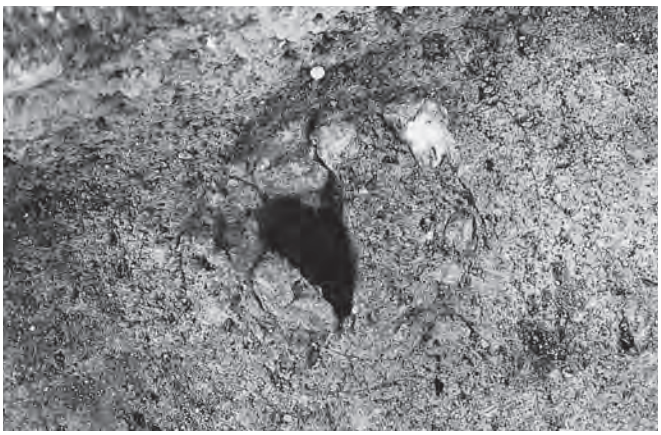
４　Ｔ25僧房礎石６（南から）

１　Ｔ26南半（南東から）

２　Ｔ26溝12（北東から）

３　Ｔ26僧房礎石９（北西から）

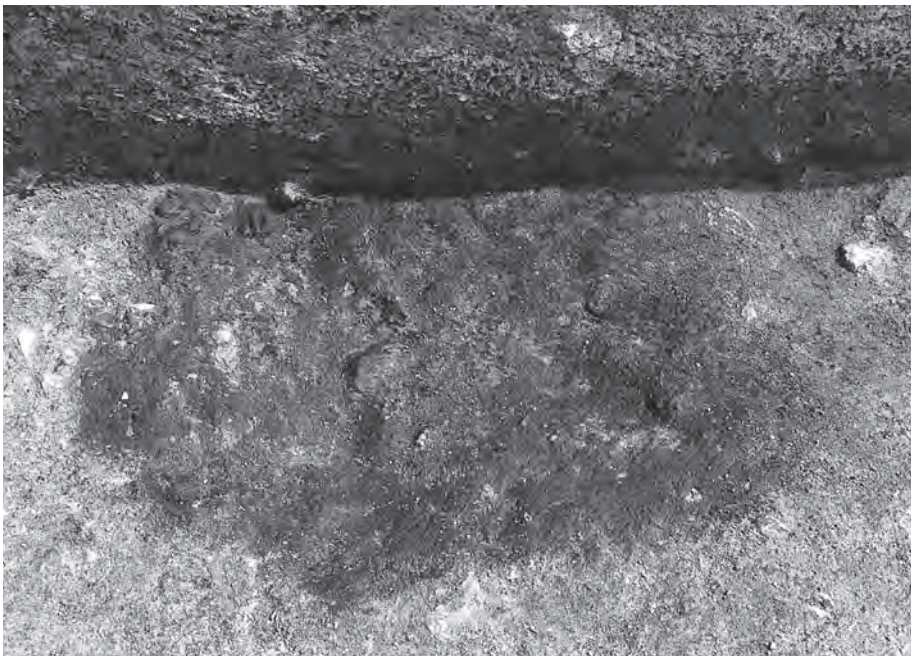
４　Ｔ26僧房礎石10（南東から）



５　Ｔ26炉１（東から）

１　Ｔ27全景（南東から）

２　Ｔ27溝14
柱穴列１・２
（南東から）



３　Ｔ27炉２（西から）

１　Ｔ28南半（北西から）

２　Ｔ28土壙７（南西から）

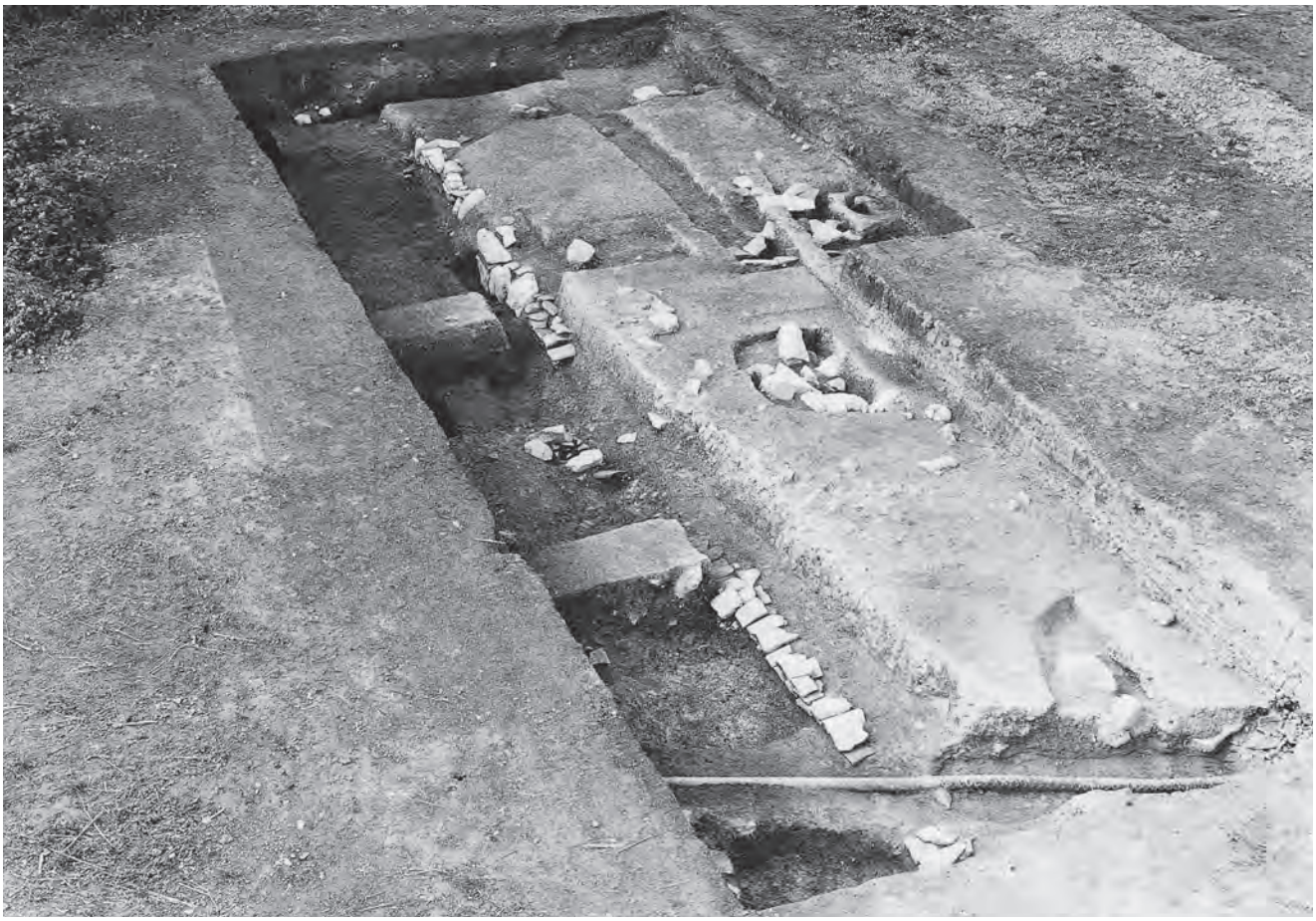
３　Ｔ30全景（東から）

1　T31A全景（南東から）

2　T31A礎石11（西から）

3　T31B僧房基壇南端（南から）

4　T31A溝21瓦出土状況（南から）



1　Ｔ32全景（南東から）

2　Ｔ32全景（南から）

3　Ｔ32瓦積基壇　外装B（南西から）

1　Ｔ32瓦積基壇　外装Ｂ
（南西から）

2　Ｔ32瓦積基壇　外装Ｂ
（南西から）

3　Ｔ32瓦積基壇　外装B
軒平瓦（南から）

1　Ｔ32瓦積基壇　外装Ａ（南東から）

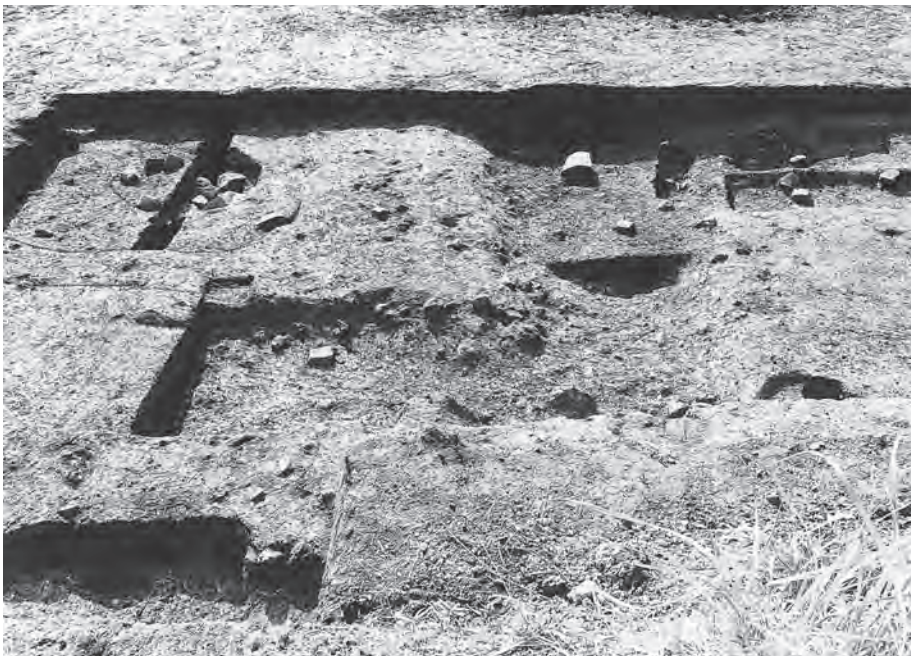
2　Ｔ33全景（東から）

3　Ｔ33Ｂ礎石15（東から）

4　Ｔ33Ａ礎石14（東から）

1　Ｔ33Ａ瓦類出土状況
（東から）

2　Ｔ34全景（南東から）



3　Ｔ34僧房基壇北西隅
（北から）

1　軒丸瓦１式（瓦当裏面はケズリ後ナデ、側面に笵型痕跡）

2　軒丸瓦１式（瓦当裏面上部は指頭押圧、側面下端に円形圧痕）

3　軒丸瓦６式

4　軒丸瓦10式

5　軒丸瓦21式

6　軒丸瓦24式

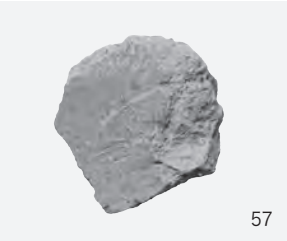
7　軒丸瓦29式

8　軒丸瓦丸瓦部先端の刻み

9　軒平瓦２Ｂ式

10　軒平瓦４式

11　軒平瓦５式



12　赤色顔料付着瓦

1　軒平瓦１Ｂ式

2　軒平瓦１Ｂ式

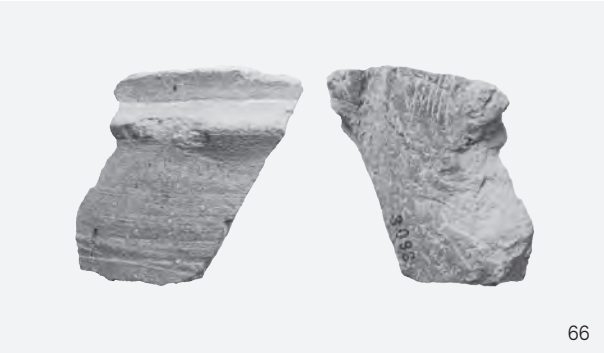
3　軒平瓦４式

4　軒平瓦（新規の型式）

5　丸瓦（創建期）

6　丸瓦（創建期）

7　丸瓦（創建期）

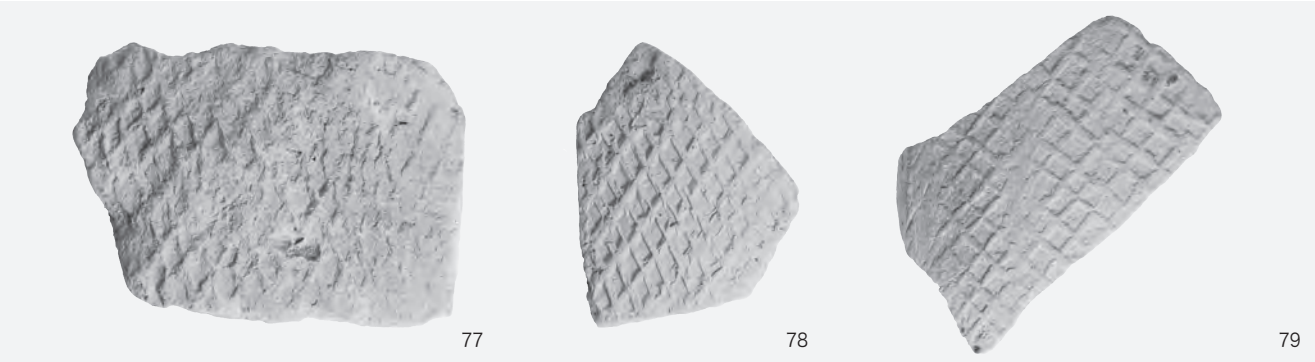


8　丸瓦（丸瓦部と玉縁部の段差が小さい）

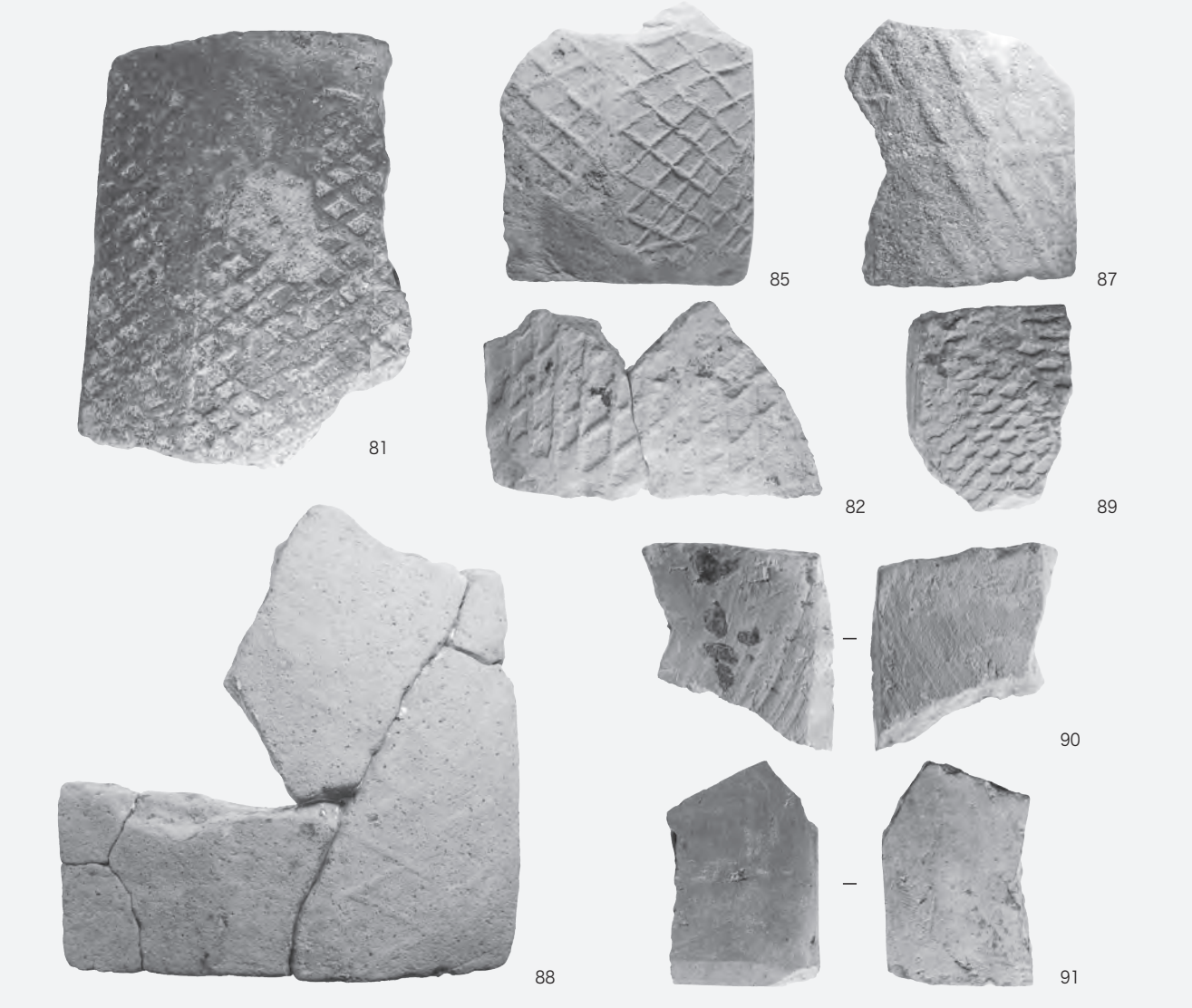
9　丸瓦（中世）

1　平瓦（凸面縄目叩き）

2　平瓦（凸面縄目叩き）



3　平瓦（凸面格子叩き）

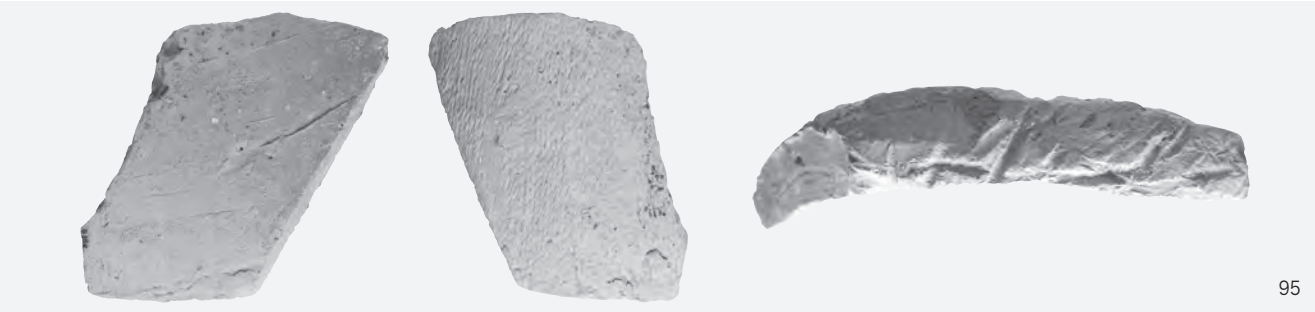


1　平瓦（凸面格子叩き・未調整・ナデ調整）

2　隅木蓋瓦

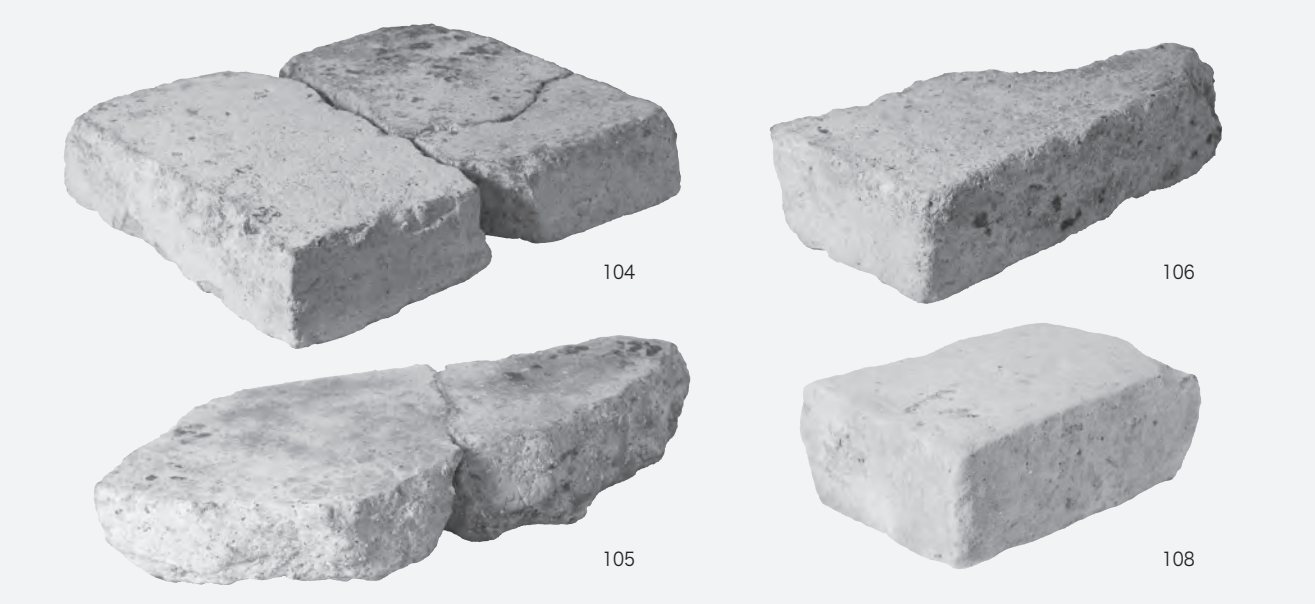
3　隅木蓋瓦

4　鬼瓦



5　隅切瓦（端面に植物系条線の圧痕）

1　文字瓦



2　塼

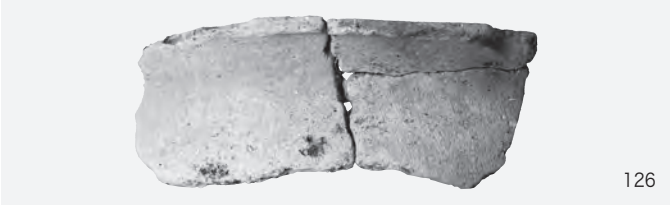
3　土器

138

139

137

110


126

146

155

162

172

183

190

188

191

195

196

197

199

200

201

1　土器

203

204

205

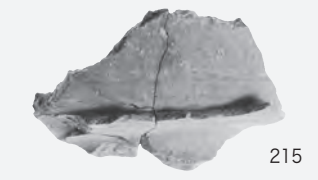
206

207

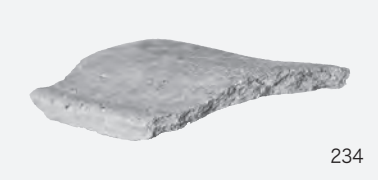
208

210

211


215

237


234

263

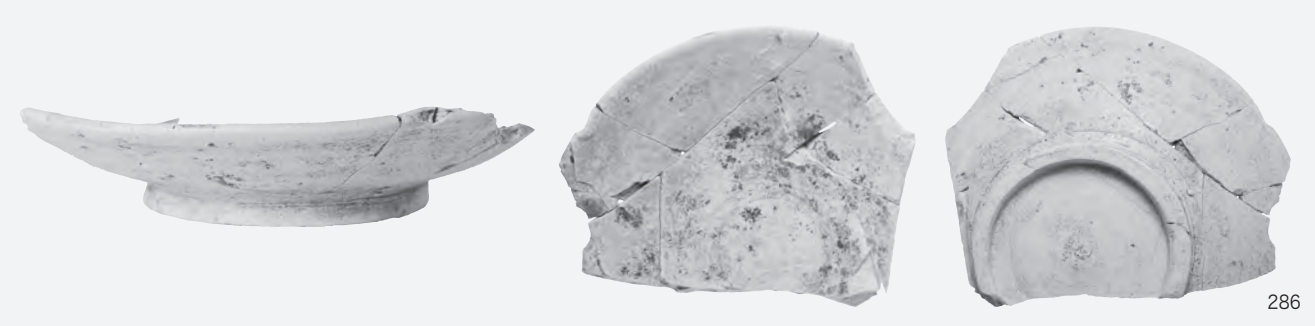
271

253

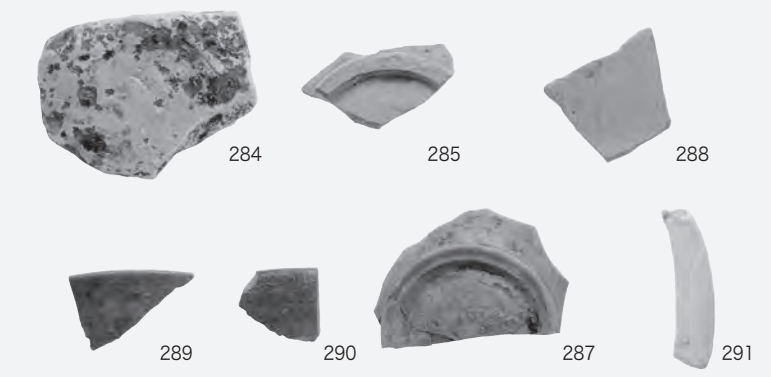
269

275

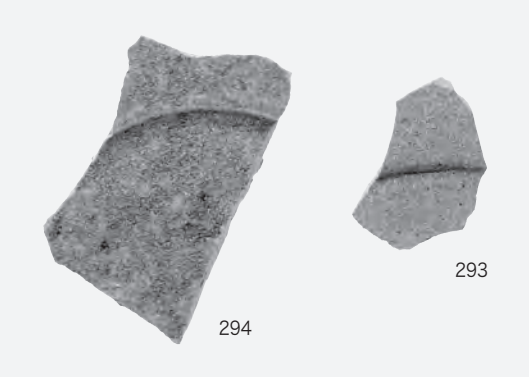
1　土器


286

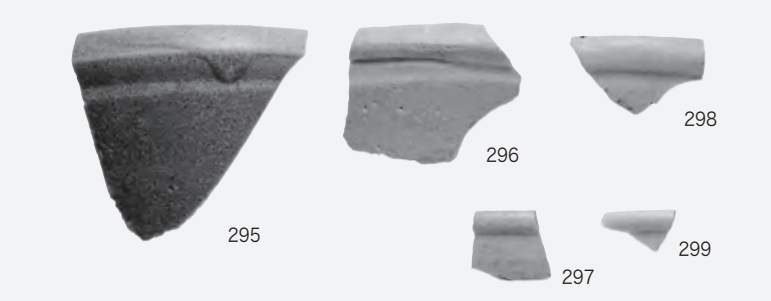
2　緑釉陶器



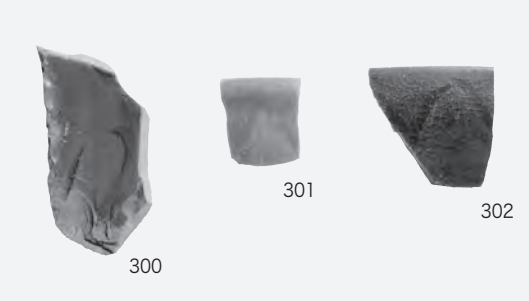
1　緑釉陶器



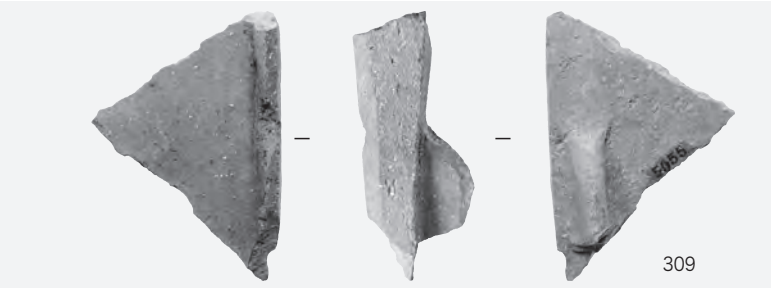
2　灰釉陶器



3　白磁

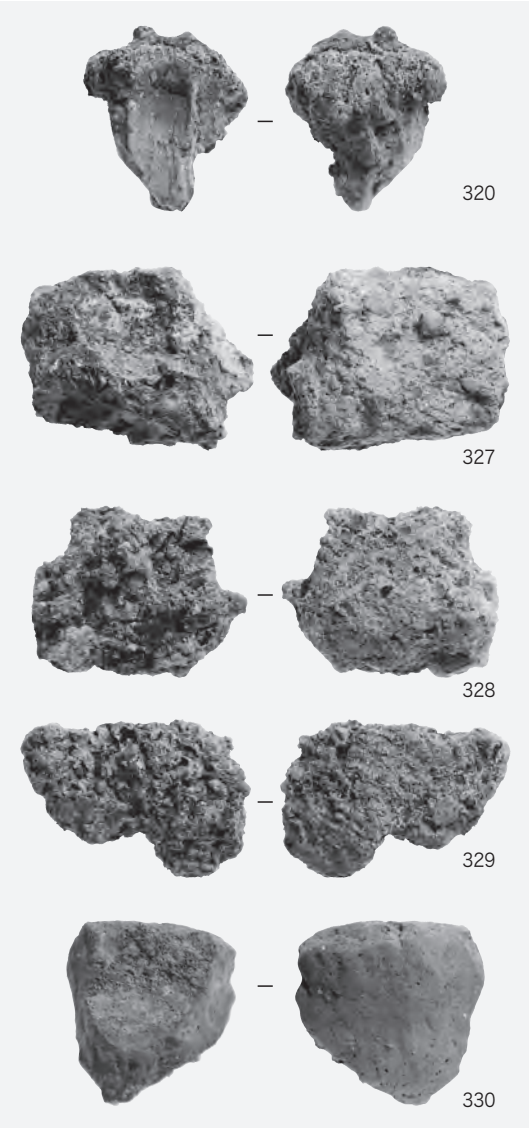


4　青磁



5　陶硯

6　銅製品



7　鍛冶・鋳造関連遺物

報告書抄録

ふりがな	びぜんこくぶんじあと
書名	備前国分寺跡２
副書名	第４～６次調査
巻次	
シリーズ名	赤磐市文化財調査報告
シリーズ番号	５
編著者名	有賀祐史、澤山孝之、畑地ひとみ
編集・発行機関	赤磐市教育委員会
所在地	〒709-0816　岡山県赤磐市下市337　TEL086-955-0710
発行年月日	2011年2月28日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
びぜんこくぶんじあと 備前国分寺跡	おかやまけん 岡山県 あかいわし 赤磐市 まや 馬屋1048 ほか	33213	223	34° 44′ 19″	133° 59′ 59″	2006.06.13 ～ 2006.09.08 2007.09.05 ～ 2007.11.05 2008.09.22 ～ 2008.12.11	288.88 147.36 167	史跡整備事業に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
備前国分寺跡	寺院	奈良時代 平安時代 中・近世	僧房、回廊、北門・北面築地、金堂など	軒瓦、丸瓦、平瓦、道具瓦、塼、須恵器、土師器、土製品、石製品、金属製品、炉壁ほか	鍍金した銅製品

要約	僧房建物と基壇の規模が推定される情報が得られ、基壇の一部では瓦積外装が確認された。東・西面回廊は小門の存在や異なる尺が混在する柱間割の可能性が想定された。北門は礎石建ち建物で、北面に外溝を伴う築地塀の痕跡を確認した。寺域北部および東部では、金属生産に関わる炉や生産物などが検出され、寺院の維持運営に関わる施設の存在が想起された。

赤磐市文化財調査報告　第５集

備前国分寺跡２
―第４～６次調査―

平成23年２月27日　印刷
平成23年２月28日　発行

編集・発行　岡山県赤磐市教育委員会
岡山県赤磐市下市337

印　　刷　山陽印刷株式会社
岡山県岡山市北区富吉3098-1